

2013（平成 25）年度博士号学位取得論文

指導教授 コヴリーギン，エフゲニー・B.

「フルシチョフ期ソ連における「ヒューマニズム」イデオロギーの形成」  
ーフルシチョフ期ソヴィエト人文・社会科学における新動向の知識社会学的分析ー

**‘The Formation of ‘Humanism’ Ideology in the Soviet Academic Community  
in the Khrushchev Era’**

法学研究科法律学専攻

藤井 陽一

## 目次

### 「フルシチョフ期ソ連における「ヒューマニズム」イデオロギーの形成」 ーフルシチョフ期ソヴィエト人文・社会科学における新動向の知識社会学的分析ー

#### 序章

後期ソヴィエト人文・社会科学史研究に寄せて  
ソ連におけるイデオロギーとしての「ヒューマニズム」とは  
当論文の視角としての MSRP 理論とそのソ連学術史への援用  
当論文の射程と構成  
先行研究の限界と当論文の意義

#### 第1章：ソヴィエト人文・社会科学史における「60年代人」とは

第1節：「60年代人」一般の定義と彼等の自己形成の社会的背景  
第2節：「60年代人」の一派「プラハ派」と「アンドロポフ顧問団」  
第3節：ソヴィエト哲学界における「60年代人」  
まとめ

#### 第2章：ソヴィエト倫理学

序論  
第1節：ソヴィエト倫理学の年代学  
第2節：1960年代初頭までのソヴィエト倫理学の基礎付け  
第3節：1960年代前半におけるソヴィエト倫理学の動向  
おわりに

#### 第3章：ソヴィエト意識論

序論  
第1節：1950年代における意識論の基礎付け  
第2節：第21回党大会から第22回党大会までの意識論  
第3節：第22回党大会でのフルシチョフ報告と新しい党綱領の意義  
第4節：第22回党大会後の1960年代前半における意識論の展開  
おわりに

#### 第4章：民衆の役割論と人格論

序論  
第1節：前史としての大衆の役割論  
第2節：1950年代後半における人格論の登場と展開  
第3節：1960年代前半における人格論の発展  
まとめ、及び、その後のソヴィエト人格論の展開

結語、及び、「フルシチョフ後」の展開

## 序章

### 後期ソヴィエト人文・社会科学史研究に寄せて

ソヴィエト共産党第一書記ニキータ・フルシチョフがソ連共産党第 20 回党大会（1956）での秘密報告でヨシフ・スターリンの個人崇拝を批判してから約半世紀が経つ 2000 年代半ば頃から世界的規模で、1950 年代半ばから 60 年代半ばにかけての時期（「フルシチョフ期」）に関する総合的な研究が進められている。ソヴィエト思想史の研究に関して言えば、国外では主に、ヨセフ・マリア・ボヘンスキーによって設立されたフリブール大学（スイス）の東欧研究所（the Institute of East-European Studies at the University of Fribourg）、学術雑誌『ソヴィエト思想研究』（Studies in Soviet Thought）、及び、“Sovietica” シリーズによって為されてきた。

また、ロシア本国でも近年 1950 年代以降のソヴィエト哲学史や社会学史を再考する著作が次々と刊行されている。具体例を挙げれば、1999 年に 2 巻本として出版された論集『哲学は終わらない』（«Философия не кончается»）で、序論での編集者の言葉によれば、20 世紀の 20 年代から 80 年代にかけての「自国の哲学を初めて真摯に客観的に分析する試み」が為されたのを皮切りに、「20 世紀後半のロシア哲学」（«Философия России второй половины XX века»）というシリーズが РОССПЭН(ROSSPEN)出版社から刊行されている。これは主に通称「60 年代人」（шестидесятники）、あるいは「第 20 回党大会の子供達」と呼ばれる人々の中の哲学者達の著作を再評価しようという企画である。これまでにエwald・イリエンコフ、メラブ・ママルダシュヴィリ、イワン・フロロフ等の著名なソヴィエト哲学者達の研究業績を分析し、彼らが辿った思想形成の軌跡を跡付けることを試みた数々の書籍が出版されている。また、社会学の分野でもポスト・スターリン時代のソヴィエト社会学と権力側の関係についての資料『社会学と権力』（«Социология и власть», Сб. 1: 1997, Сб. 2: 2001）が出版されている。更に、所謂「60 年代人」の研究者達による、または、彼等についての回想録も出版されている。こうして、20 世紀後半のソヴィエト人文・社会科学史を研究する為の環境が今日資料面で整備されつつある。

しかしながら、所謂「60 年代人」に関する先行研究では、所謂「反体制派」の人々の動向に重点を置く傾向が強く、ボリス・エリツィン政権で外務大臣及び首相を歴任したエフゲニー・プリマコフが著作『クレムリンの 5000 日 プリマコフ政治外交秘録』の中で言及している「体制内異端派」（«внутрисистемные диссиденты»）<sup>1</sup>に注目した研究は余りされてこなかった。

また、日本国内のソヴィエト科学アカデミー史の研究は、理系の分野では、論集『“科学の参謀本部” —ロシア／ソ連邦／ロシア科学アカデミーの総合的研究—』が出版されたりしているが(2011～2012)、人文・社会科学史の分野では管見の限り、同様の先行研究は 2011 年に歴史学において立石洋子によって『国民統合と歴史学：スターリン期ソ連における『国民史』論争』が出版されただけである。ソ連崩壊から約 20 年を経た今日だからこそソヴィエト人文・社会科学史を客観的に分析することが可能であると著者は考え、当論文では所謂「60 年代人」と呼ばれる人々の内、人文・社会科学に従事した研究者達とその上の世代

の知識継承関係を世代や精神的領域での競争といった知識社会学の観点からの分析を試みる。その際に重要なディスコースとして当論文で取り上げるのが、フルシチョフ期に公式イデオロギーとなった後、ゴルバチョフ期に新思考の説明原理として再び命を吹き込まれた、イデオロギーとしての「ヒューマニズム」である。

### ソ連におけるイデオロギーとしての「ヒューマニズム」とは

当論文が考察の主な対象とするイデオロギーとしての「ヒューマニズム」が公式的にソヴィエト共産党のイデオロギーの一角となったのは1961年10月に開催された第22回党大会においてであった。1953年9月に第一書記となり、クレムリン内で次第に権力基盤を固めていき、1958年には閣僚会議議長（首相に相当）を兼任して揺るぎなき地位を得たニキータ・フルシチョフは、この大会での報告の中で綱領草案は、真の共産主義的ヒューマニズムの文書であると述べ<sup>2</sup>、また、綱領草案討議の総括では採択された綱領を「平和とヒューマニズムの偉大な憲章<sup>3</sup>」と表現した。その後彼はこの新綱領を基にして新憲法草案の起草に着手し、1964年には計八編から成る憲法草案が完成した。しかし、それから間もなくフルシチョフは失脚し、彼を襲ったレオニード・ブレジネフ新書記長によって憲法草案は10年以上の長きにわたって放置され、フルシチョフ期を象徴するイデオロギーであった「ヒューマニズム」は新指導部によって形骸化された。

尤も、ヒューマニズムという語がソヴィエト・イデオロギーの内容の詳細を決定する役割を負わされているソヴィエト哲学の文献に初登場するのはスターリン期である。ポーランド出身でスイスのフリブール大学教授であるヨセフ・ボヘンスキーは著書『共産主義と人間』の中で、「ヒューマニズム」という語は1935年5月2日のスターリン演説に示されたものを指していると指摘する<sup>4</sup>。この演説は赤軍陸大卒業生に対してスターリンが行った講演で、「最も貴重な資本 - 人間」という題でその後流布された。この演説でスターリンは幹部候補生達に対して「世にあるあらゆる貴重な資本の中でも、最も貴重且つ決定的な資本は、詰まる所人間であり、幹部であることを悟らねばならない<sup>5</sup>」と述べ、個人を最も価値ある資本、つまり、目的に対する一つ的手段と位置付けている。すなわち、エマニュエル・カントの「人間を手段としてのみ扱うことなく、常に同時に目的それ自体として扱うべし<sup>6</sup>」という定言命法とは相反して、スターリンにとっては、人間は目的を達成する為の手段であって、各人が目的そのものとは看做されていないのであり、この様な人間理解は人間に対する尊敬というヒューマニズムの思想とは本来相容れないと解されるのが自然である。それでもスターリン期のソヴィエト哲学界では彼のこの発言が所謂「社会主義的ヒューマニズム」の象徴的言辞として引用されていた<sup>7</sup>。

そもそもイタリア・ルネサンスに端を発するヒューマニズムは歴史上の各局面において様々に解釈されてきたものの、「人間を何か他のものよりも優先する」という意義において一貫性を保ってきた。人間以外の何を人間に対置させ、人間を本位とするかによって立場が異なり解釈が人によって異なってくる。ルネサンス時代のヒューマニズムは神中心主義と対立する概念として人間本位主義として解釈でき、20世紀後半においてはマルクス＝レーニン主義を弾劾する欧米マルクス主義者達は資本主義と並行してスターリニズムに対立する概念としてヒューマニズムを解釈する。また、カール・バルト等の神学者達がヒューマニズムに反対する理由はこの概念が人間を神よりも優位に置くが故であり、これに対してキリスト教社

会主義者達はこの点に留意して、人間を神以外の事・物 (“*Sache*“) や理念、制度等に対置し、人間をこれらよりも優位に置いている。更に、ボヘンスキーは前述した著書の中で、ヒューマニズムを「人間に特別な重点を置き、従って人間に特殊な尊厳を認める教えのことである<sup>8)</sup>と定義している。

それでは、フルシチョフ政権下では「ヒューマニズム」はどの様に定義されていたのであろうか。第 22 回党大会後の 1963 年に出版された辞書では「人間の尊厳への敬意、人々の福祉への配慮、彼等の全面的発達、人間にとって好条件の社会生活の環境整備を表す諸見解の総体<sup>9)</sup>と定義されている。つまり、ソヴィエト哲学界が従来の見解を放棄して世界的な思潮に合流したのがフルシチョフ期であると言える。

フルシチョフ期の「ヒューマニズム」イデオロギーは、その推進者であったフルシチョフが失脚させられた後彼を襲ったブレジネフ指導部によって事実上無視されていたが、ソヴィエト哲学界ではそれにもかかわらず依然としてイデオロギーとして機能し続け、約四半世紀後の「第 20 回党大会の子供」であるミハイル・ゴルバチョフが指導者になり、彼が「60 年代人」達を自身の顧問としたことで「説明原理」として実質的に復活することとなった。1987 年 11 月 12 日書記長は政治局会議で十月革命 70 周年記念式典を総括して次の様に述べた。「ある段階で少し下ろされてしまった旗、社会主義の最高の価値として人道的目標を優先する旗を、我々は再びしっかりと手に取った。ペレストロイカの中心に置かれているのは人間である。(中略) 人間を、人間自身の為に全てのプロセスに参加させる必要がある<sup>10)</sup>。この発言をフルシチョフの第 22 回党大会での報告での以下の、マキシム・ゴーリキーの『どん底』の中の「サチンの哲学<sup>11)</sup>」を髣髴とさせる発言とを比較すれば、ゴルバチョフがこの先達の指導者の夢想的理想の継承者であることが明白である。「共産主義のモットーは、「全てを人間の為に、全てを人間の幸福の為に」である。そして、国民により、国民の幸せの為に建設される共産主義のもとでは、人間という言葉はかつて無い程誇らしげに響くことであろう<sup>12)</sup>。後にゴルバチョフのイデオロギー担当補佐官として<sup>13)</sup>「新しい(真の)ヒューマニズム」<sup>14)</sup>を「新思考」を象徴するイデオロギーとして内外に宣伝することとなる哲学者フロロフが監修し、1980 年に出版された哲学辞書には「人権」という言葉や、「個人としての価値」といった言葉が定義の冒頭に挿入されている<sup>15)</sup>。

2011 年 3 月にモスクワにあるゴルバチョフ基金の建物内のホールで「ゴルバチョフの世代：国家の営みにおける 60 年代人達」という題目で会議が開催された。この席でロシア連邦議会連邦院機関情報分析局長のピョートル・アナトリエヴィチ・フェドーソフ(1951 年生)は「60 年代人」を、「第 20 回党大会後、ヒューマニズムへと向かう変化を欲していたとともにその必要性を様々な形で表明した人々である」と評価した。また彼は、「1960 年代の諸条件下でこの希求は、彼らが性格形成し成育した時期であるスターリン時代後期の慣例に当然にそして決定的に抗するものであった」と付け加えた<sup>16)</sup>。彼の見解に従えば、ゴルバチョフの諸改革を担った所謂「第 20 回党大会の子供達」にとって「ヒューマニズム」とは反スターリン主義であり、彼等はその精神を体現した人々であったと言える。

このイデオロギーとしての「ヒューマニズム」は 1990 年代後半以降のロシア連邦における世俗ヒューマニズム運動の一つであるロシア・ヒューマニスト協会(Российское гуманистическое общество)の活動によって継承されている。このヒューマニスト協会が

定期的に発行している雑誌『良識』（«Здоровый смысл»）に掲載された一つの論文にここで注目してみよう。フォードル・ツァンカイシーとエフゲニー・プレハーノフの共著である「哲学的人間学の問題としてのヒューマニズム」と題されたこの論文はソ連でのヒューマニズム論の系譜を描出しており、思想史の観点から興味深いものである。彼等によれば、20世紀後半以降ソ連の哲学文献ではマルクスの『経済学批判要綱』や『経済学・哲学草稿』といった未発表原稿の公刊と共に、ヒューマニズムをテーマとした著作が少しずつ表れるようになるのだが、これは後に所謂「60年代人」と呼ばれることとなる若い世代のマルクス主義研究者達が学術的活動に参加するようになった時期と符合する。この若い世代はこういったマルクスの草稿の中に真のヒューマニズムとしてのマルクス主義解釈の為の基盤を見出したのである。この新解釈のもう一つの源泉はジャン＝ポール・サルトルに代表されるマルクス主義的実存主義であった。この様な初期マルクスを重視する倫理的、実存主義的傾向の増大に対して、1965年、フランスのマルクス主義者、ルイ・アルテュセールは所謂「理論的反ヒューマニズム」なるものを以て異議を唱えたわけだが、その同じ年に、エーリッヒ・フロムによって企画され、編まれた東西のヒューマニスティックな社会主義者達の論集である『社会主義ヒューマニズム』が出版された。ツァンカイシーとプレハーノフによるこの論文を読む限りでは、当時の若いソ連人マルクス主義研究者達の間では、心理学の社会学化を図る、所謂フロイト左派のエーリッヒ・フロムに代表される、1844年の『パリ草稿』に基づいたマルクスの哲学的人間学解釈路線がより魅力的であった様である<sup>17</sup>。

1989年に出版されたイワン・フロロフの著作集『人間とヒューマニズムについて』に目を通してみれば、彼は既に1973年に『哲学の諸問題』誌に投稿した論文の中で、アルテュセールに反対して弁証法的唯物論の観点からマルクス主義はヒューマニズムであると主張している。また他の個所ではフロムやヘルベルト・マルクーゼの著作を主にドイツ語か英語で読解してこれらに肯定的に言及している箇所が多いことに気が付く。こうしたマルクス主義的ヒューマニズムの観点からマルクス主義と社会心理学等その他の分野とを結合するという課題を、所謂「60年代人」の一人であるフロロフもまた自分のものとして受け止め、彼なりに哲学と生物学の融合という形でこれに取り組んだ成果が、彼の1980年代以降の労作の数々の中に散見されるのである。

更に、2007年に出た『21世紀初頭ロシア語詳解辞典』では、「ヒューマニズムとは、全人類価値に基づき、社会、政治、宗教、等といった生活環境の中での個人の自由を擁護する見地の体系」と定義付けられている<sup>18</sup>。

こうして新生ロシアに至るまで継承されてきたイデオロギーとしての「ヒューマニズム」はその起源を遡ればフルシチョフ期に辿りつくのであり、まさにこの時期に形成されたわけである。英国共産主義者ジャック・リンジーは、国際的な共産党理論誌である『平和と社会主義の諸問題』誌に掲載された論文「レーニンとヒューマニズム」の中でレーニンの思想と行為の中にヒューマニズムの概念を探し出そうと努めた。確かに、レーニンは社会主義を単に「生産の効果を増大させる方法」としてだけではなく、「全面的に発達させられた人間存在を作る唯一の方法」としても述べている<sup>19</sup>。この英国人はレーニンを、1917年の十月革命の成功を通じて社会主義や十分に人間的な制度の可能性、道徳性を体現した人間として表現し<sup>20</sup>、レーニン主義とヒューマニズムとを結び付けようとし、「レーニン主義ヒューマニズム」

という新用語まで案出した<sup>21</sup>。この論文は、フルシチョフ期においてソ連共産党のみならず西欧の共産党にとっても「レーニンへの回帰」と「ヒューマニズム」とが重要なイデオロギーであり、この二つを結びつけることが当面の課題であったことを示している。

しばしばゴルバチョフ期の「新思考」政策は脱イデオロギー化と評されるが、果たしてそうであったらうか。確かに、マルクス＝レーニン主義イデオロギーからの国政の解放と捉えれば、そう言えるであろう。だがもし、以上論じてきた様に、「ヒューマニズム」をフルシチョフ期に形成されたソヴィエト・イデオロギーの一つと看做せば、1980年代後半の諸政策はまさにこの「ヒューマニズム」イデオロギーの内容を部分的に改変したものであり、単なるイデオロギーの取り替えと言えるのではないか。ここで「イデオロギー」という用語をいかに解釈するかがこの後の議論の展開にとって不可避な問題となる。これまでこの用語の様々な定義付けが行われてきたが、テリー・イーグルトンによれば、イデオロギー理論は認識論的思想と社会学的思想という大きな二つの伝統に分類され得る。前者はヘーゲルやマルクスから、ジェルジ・ルカーチ、後期のマルクス主義思想家に至る中心的系譜において、関心の対象は、認識の真偽に関わる観念の問題であり、イデオロギーは専らイリュージョン、歪曲、神秘化として捉えられてきた。これに対し、後者は、認識論的というよりは社会学的であって、観念が現実と照応するか否かという問題よりも、観念が社会生活において果たす機能の方に関心を寄せてきた<sup>22</sup>。ゴルバチョフと彼の補佐官達が何故彼らの政策策定、及び、遂行を正当化する為に知的に一貫性があり合理的に防御し得る新しい信条を前面に押し出す必要があったのかという理由を説明する為には、イデオロギー理論の社会学的伝統の方を採用するのが適切であろう。

この意味において、「イデオロギーは思想を社会的梃子に転換するものである<sup>23</sup>」というダニエル・ベルの記述は「新思考」として知られたソ連の新しい公的イデオロギーのケースに当てはまる。加えて、彼はイデオロギーを二種類に分類したが、それによれば、一つは古い19世紀のもので、普遍主義的、ヒューマニズム的で、知識人によって形成された。もう一つはアジアやアフリカの新しい大衆イデオロギーであり、偏狭で、道具的性格を持ち、政治指導者によって創出される<sup>24</sup>。ゴルバチョフの主張やイデオロギー形成過程を考慮に入れば、ゴルバチョフ期のソ連の「ヒューマニズム」イデオロギーは明らかに前者に属する。すなわち、ソヴィエト連邦では、ベルの予言に反して、「イデオロギーの終焉」の代わりに前世紀のイデオロギーの復古が生じたのであった。

### 当論文の視角としての MSRP 理論とそのソ連学術史への援用

ソヴィエト外交政策の研究者であるロバート・レグヴォルドは 1988 年にソヴィエト連邦で生じていたダイナミックな地殻変動に関して次の様なコメントをしている。「変わるべきものは思考である。本当の革命は最終的には概念的である。(中略) 行動による革命の前に概念の革命が来る<sup>25</sup>」。もしそうだとすれば、その様な「概念上の革命」はイデオロギーを形成するインテリゲンツィヤの間でいつ、どの様にして起こったのだろうか、また、何故起こり得たのか。この疑問に対する答えのヒントを与えてくれるのが、フロロフの監修の下、哲学者達によって高等教育での学習者向けに執筆され、1989 年に出版された教科書『哲学入門』(«Введение в философию»)である。この国では党＝国家のイデオロギーの役割を果たしている

哲学のいかなる教科書の出版も国事であったことを鑑みれば、この教科書は 1918 年の党綱領の普及版として執筆され、ソヴィエト・ロシア初期に幅広い読者を得た政治的著作である、ニコライ・ブハーリンの『共産主義の ABC』に相当すると言える。この『入門』は 19 章から成っており<sup>26</sup>「未来」と題された最後の章は「グローバル問題と新思考」という節を含んでいる。これがこの教科書の全体像である<sup>27</sup>。2003 年に出版された第三版<sup>28</sup>ではスターリン死後のソヴィエト政治とイデオロギーの歴史が以下の三つの時代に時期区分されている：

1. 1950s 年代後半から 1960 年代末まで：「雪解け」期で、哲学を含めて国中に全ての精神生活が復活した。教条主義の批判が推奨され、時として規定のイデオロギー的枠から外れた研究が為された；
2. 1960 年代末から 1985 年まで：「プラハの春」が鎮圧され、イデオロギー闘争が激化し、修正主義批判へ比重がシフトする；スターリニズムのイデオロギー上の復興が試みられ、イデオロギー上の検閲が強化される一方で、社会理論と哲学の分野では人権、少なくとも、創造性と自己表現と関係のある自由の権利が提唱され、また、他方では反体制派が登場した；
3. 1985 年から 1991 年まで：民主主義とヒューマニズムの諸原則に則ったソヴィエト体制のペレストロイカ；イデオロギー上の闘争、憲法上のソ連共産党の社会における指導的役割の自発的放棄；マルクス＝レーニン主義の公的イデオロギーとしての地位の喪失；その後、社会・政治的革命、ソ連の崩壊、経済改革の表明がロシアのエリート層によって実施された。

ソヴィエト・イデオロギー史のこの時期区分は全てのソヴィエト研究者達にとってありきたりのものであろうが、ロシアの哲学者達が外国のソヴィエト研究者達と同じ歴史認識を共有していることを知ることは有意義である。

このフロロフ版『ABC』によれば、1950 年代後半から、特に 1960 年代に「人類学的転換」が生じた、つまり、ソヴィエト哲学は人間、及び、人間の諸問題に取り組み始めたのである。この教科書の著者達は 1959 年にロシア語による「若きマルクス」の全著作が初めて公刊されたことがこのアプローチを強化したことを指摘している。ソヴィエト学術史に関する近年の議論では、科学史の用語である「パラダイム」を用いて理論史を説明するのが流行となってきた。オーストラリアのソヴィエト研究者ロジャー・D・マークウィックは、トーマス・クーンのパラダイム・シフトの概念を援用して内的な力学とより大きな社会力学を把握しようと試みた。日本のソ連・ロシア研究者である岩下明裕氏も同様にこの概念を用いることの積極的意義を著書の中で挙げた<sup>29</sup>。確かに、クーンのパラダイム論はその著作の題名が示す通り、旧パラダイムから新パラダイムへの移行を説明するのに適しているのに対し、同じ科学史家のイムレ・ラカトシュが提唱した「科学的研究プログラムの方法論」(The methodology of scientific research programmes: MSRP)が変則性に対する耐久性を説明するうえでパラダイム理論よりも優れている様に思われる。パラダイムと科学的研究プログラムとを比較すれば、ラカトシュはあるパラダイムを守る為に科学者たちがどの様に試行錯誤するかを示したのに対して、クーンは「通常科学<sup>30</sup>」と呼ぶところのもの内部構造を明確に示した。加えて、MSRP は複数主義の立場から、同時に存在する複数のパラダイム間の競争という外在的観点を導入している点においても優れていると思われる。岩下氏は同書の中で、「「パラダ

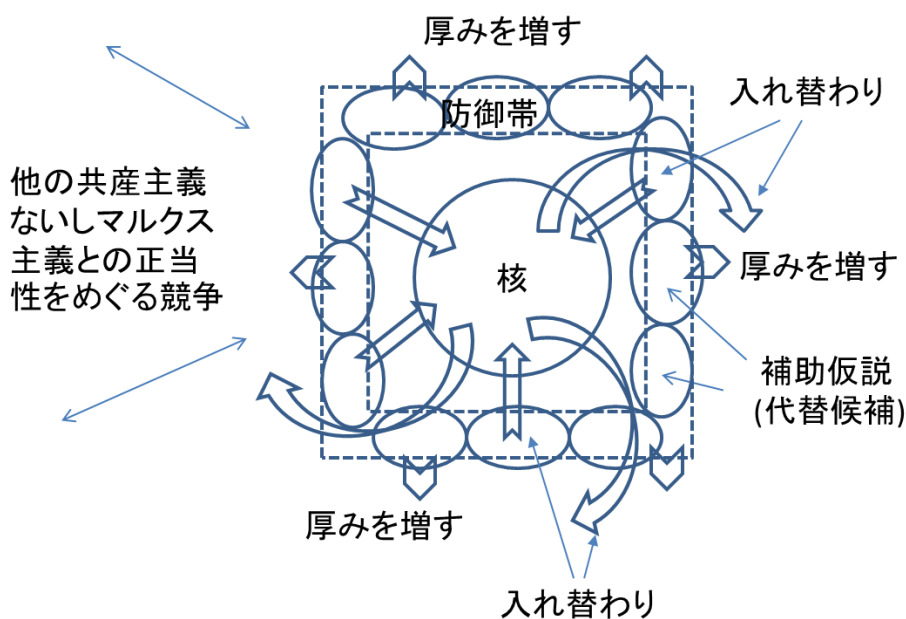


イム」を構成する個々の理論の読み替えや「変容」が進行していた」ことを、「水面下」での「理論変容」の様相<sup>31</sup>と表現しているが、国際関係論はさておき、人文・社会科学史においては、もし既存の理論と次に出現することとなる理論との**継続性**を多少とも意識するならば、ラカトシュのMSRPが適切である。

このMSRP理論の要点は次の通りである。この理論の分析の対象は、単一の理論ではなく、構成単位が通常著しい連続性によって結びついている理論系列(a series of theories)であり、このまとまりを研究プログラムと呼ぶ。この理論系列は「理論系列の中で一貫して守られる部分」と「理論系列の中で修正される部分」とに区分される。前者を「堅い核(Hard Core)」、後者を「防御帯(Protective Belt)」と呼ぶ。中心に「堅い核」があり、その周囲に「補助仮説(auxiliary hypotheses)」によって形成されている「防御帯」が張り巡らされ、部分的に修正・廃棄・拡張されながら、段々厚みを増していく<sup>32</sup>。ラカトシュによれば、自然科学のみならず、マルクス主義もフロイト主義も、全て研究プログラムであり、その「堅い核」によって特徴づけられている<sup>33</sup>、と断言している故、自然科学の用語をそれ以外の分野に応用すべきでないという自然科学者側からの批判はMSRPには当たらない。

科学史家の高橋憲一氏は、理論系列の中で一貫して守られてきた部分は事後的にしか規定しようがない故に、ラカトシュの議論は歴史的に逆立ちしている、と指摘したうえで、次の様にこの研究プログラム論の修正を提起する。すなわち、「堅い核」に代えて「柔らかい核」を想定すべきである。他の後続理論との関係で核の一部が入れ替わり得るばかりでなく、同一理論の内部でも「防御帯」との関係で「核」は可変的であると想定すべきであり、「柔らかい核」が「堅くなっていく」過程にこそ理論展開のダイナミクスがある<sup>34</sup>。この修正されたMSRPのイメージを当論文では下図の様に図式化した。

MSRPの核と防御帯のイメージ図



この様にして修正された MSRP をソヴィエト人文・社会科学学術史に援用した場合、スターリンの死（1953 年）から、フルシチョフが、新しい基本方針の一つとして、「ヒューマニズム」を採択される綱領の中に盛り込むことを報告した第 22 回党大会（1961 年）までの期間がまさに「柔らかい核が堅くなっていく過程」に該当すると言える。ダニエル・ベルはこの期間におけるソ連におけるイデオロギーの変化をこの視点から分析している。「体制にとって主要なイデオロギー問題は過去との連続性と現在への現実的志向性とを達成するために、信条の中心的核を維持し、挑戦を受ける時には、それを上手く再定義づけることである。ソ連邦では、核心的教義が次第に内部からの攻撃に晒されており、体制が所与の教義を維持できるかどうか、重要部分を上手く修正できるかどうか」等が、「決定的問題なのである<sup>35</sup>。」ソヴィエト・インテリゲンツィヤ、就中、第 20 回党大会（1956）でのフルシチョフの秘密報告とアナスタス・ミコヤンの公開の場でのスターリン批判に誘発されたソヴィエト哲学者達は、スターリンの地に堕ちたドグマの替わりとなる、マルクス＝レーニン主義の諸原則の、梅本克己の表現を借りれば、「空隙を補填する<sup>36</sup>」適切な補助仮説として、非スターリン的「ヒューマニズム」をイデオロギーの一部とすべく努めた。

それでは、防御されるべき核はそれまでどのような要素で構成されていたのだろうか。レーニンは 1913 年に論文「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成要素」の中で、マルクス主義は唯物論、剰余価値学説、階級闘争の三つの構成部分から成るというテーゼを打ち出した<sup>37</sup>。この最後の階級闘争に関する社会主義学説にレーニンは暴力革命論を加えたのだが、第 20 回党大会で、プロレタリアートの権力獲得の手段としての暴力革命の絶対性がミコヤンの報告の中で斥けられ、「社会主義への移行の平和的な道の現実の可能性」が公式に認められた<sup>38</sup>。また、スターリン時代に唯物史観の典拠となった『ソ連共産党（ボリシェヴィキ）歴史小教程』（1939）の学術的正当性が同報告の中で疑問視された<sup>39</sup>。こうして、「核」の一部が廃棄され、その代わりとなるイデオロギーとして、代替候補であった「ヒューマニズム」が核の一部として取り込まれたのである。

## 当論文の射程と構成

第 20 回党大会後、核の一部を成す史的唯物論から（「マルクス主義」）社会学<sup>40</sup>と倫理学が派生してくることとなった。社会学の分野では早くも 1956 年 3 月にフォードル・ブルラツキー（1927 -）とゲオルギー・シャフナザーロフ（1924 - 2001）の共著による論文「社会科学と生活」で、かつてブルジョアジーの理論として完膚なきまでに批判されていた社会学的研究の必要性が説かれた<sup>41</sup>。フランスのソ連哲学史家であるルネ・ザパタはソ連でのこの時期における倫理学の勃興について次の様に分析している。「人間主義的動向の出現、若きマルクス、乃至、初期マルクスの著作の公刊、共産主義建設における「精神的、乃至、霊的」要素の重要性の強調といったことが、第 20 回党大会以降、一連の哲学者達に首尾一貫した道徳理論を入念に構築することへと導いた。この作業は 1955 年にアレクサンドル・シシュキン(1902 - 1977)の著作『共産主義道徳の原理』、ヴァシリー・トゥガリノフ(1898 - 1978)の『生活の価値と文化の価値』の公刊によって、その第一歩を踏み出した<sup>42</sup>」。また、1950 年代から民衆の役割論が論壇に登場し始めた。この新動向と並行する形で社会的意識と社会的存在との関係に関する著作が相次いで発表され始めた。1957 年には心理学者兼哲学者のセ

ルゲイ・ルビンシュテイン(1889-1960)による名著『存在と意識』が出版され、東欧圏でも人気を博した。1959年に臨時に開催された第21回党大会では、共産主義への移行には高度な意識水準が必要とされ、共産主義社会建設の為にプロレタリア道徳の発展が必要であると同時に、人間の個性の全面的発達が重視される旨の報告がフルシチョフによって為された<sup>43</sup>。

この様な流れの中で、防護される核自体の構成要素の内、プロレタリア独裁が放棄されることが第22回党大会で報告された。その代わりにヒューマニズムが新しく採択される党綱領<sup>44</sup>の中で謳われることとなった<sup>45</sup>。かくして、1950年代後半以降、謂わば、「フルシチョフ＝ミコヤン体制」による支持と後援を得て、創意工夫を重ねて、防御帯との関係で可変的な核の周囲を廻るヒューマニズムの防御帯を形成すべく、補助仮説を練り上げたり創造したりさえする、という新しい学術的方向性が「第20回党大会の子供達」の上の世代によって実際に形作られていったのである。ハンガリーの知識社会学者、カール・マンハイムは「世代の問題」という著作の中で、「ある新しい世代動向の最も本質的な萌芽が既存の古い世代に所属し、その内部でなお孤立している個々人(すなわち先駆者)によって最初展開され実践に移されるということは、極めてしばしば起こる事態である<sup>46</sup>」と述べたが、まさに1950年代から1960年代初頭のソヴィエト人文・社会科学界における新旧世代間においてもこの事が該当すると言える。

従って、当論文は、イデオロギー史の観点から、スターリン期にアンドレイ・ジダーノフから批判された哲学者ゲオルギー・アレクサンドロフ(1908-1961)がゲオルギー・マレンコフ首相によって文化相に任命された1954年3月から、フルシチョフが失脚するまでの年月を「フルシチョフ期」と呼び、この約十年の間に、第22回党大会で採択された新しい党綱領の中で、「ヒューマニズム」という新たに核的教義となった理論系列の構成単位の一部である倫理学、人格論、及び、意識論が、旧世代から後にペレストロイカを担うこととなる新世代へと継承され、発展されていく過程を、各哲学者の見解を紹介しながら、明らかにすることを中心的課題とするものである。確かに、フルシチョフ期の「ヒューマニズム」の理論系列の構成単位として他に民主主義論等があるが、それらの検証は今後の課題とし、当論文では倫理学、人格論、意識論に限定して検証していく。

当論文ではまず、「ヒューマニズム」イデオロギーの担い手となった、所謂「60年代人」とはどのような社会的条件の下で、いかなる思想信条、及び、知識を形成していった人々なのかを明らかにしようと試みる。然る後にソヴィエト哲学界における倫理学、意識論、人格論において、各理論が旧世代によってマルクス＝レーニン主義の補助仮説として形成されて学術的方向性として示され、その補助仮説が旧世代ないし新世代によって修正を受けながらも次第に確立していくことで、非スターリン化政策による核の要素の部分的入れ替えによって一旦「柔らかくなった核」が再び堅くなっていき、また防御帯も厚みを増していく過程を個別に分析する。

### 先行研究の限界と当論文の意義

これまでも国内外のソヴィエト人文・社会科学界の新動向に関する研究はソ連がまだ存在していた頃は活気があった。国内では中野徹三によるフルシチョフ期のソヴィエト・マルクス主義の新動向の展開の紹介<sup>47</sup>、国外では体制内改革者達の主張を詳細に分析したロナル

ド・ヒルによる『ソ連の政治改革』、ソヴィエト哲学史に若干触れているザパタの『ロシア・ソヴィエト哲学史』、ソヴィエト思想の研究に関しては、前述した様に、学術雑誌『ソヴィエト思想研究』（*Studies in Soviet Thought*）、及び、“Sovietica”シリーズによって為されてきた。しかしながら、ソヴィエト人文・社会科学史に関する研究では倫理学、人格論、等々分野毎の研究は為されてきたが、それらを理論系列として総合した視点や、世代間の知識の継承、更には他の共産主義ないしマルクス主義との正当性をめぐる競争という外在的観点といった知識社会学というプリズムを通しての研究は、管見の限り、いまだ為されていない。また、近年はゴルバチョフ、並びに、彼の側近達に関する研究は、前述した様に、ブラウンやイングリッシュによって為されてきたが、これらは人物伝的色彩が強く、学術史・イデオロギー史的側面の分析に関しては表層的であることは免れない。更に、前述した様に、所謂「60年代人」に関する先行研究では、所謂「反体制派」の人々の動向に重点を置く傾向が強く、「体制内異端派」に注目した研究は余りされてこなかったという経緯がある。また、日本での後期ソヴィエト学術史研究の状況はと言えば、自然科学分野は近年手がけられ始めたが、人文・社会科学の分野では殆ど手付かずの状態であり、先行研究は殆ど無いに等しい。

フルシチョフ期ソ連において、スターリン時代以降マルクス＝レーニン主義という一貫して守られてきた理論系列の一部が放棄されて、人間そのものを目的として尊重するという非スターリン的「ヒューマニズム」イデオロギーの理論系列の一部、すなわち、倫理学、意識論、及び、人格論が守られるべき理論系列として代入される過程を、知識社会学を用いつつ、検証することによって、この時代の理論変容、及び、展開をよりダイナミックに、立体的に叙述することができる筈である。その際に、近年ロシアで相次いで刊行されているソヴィエト哲学を再考した諸文献を踏まえることによって、今日においてこの研究が持つ意義がより高まることを著者は期待する。

<sup>1</sup> Примаков, Евгений М., *Годы в большой политике*, М.: Совершенно секретно, 1999, стр. 12, 14.

<sup>2</sup> ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課『ソビエト連邦共産党の綱領について ソ連共産党第22回大会でのエヌ・エス・フルシチョフ同志の報告』ソビエト社会主義共和国連邦大使館、1961年、25頁。

<sup>3</sup> 同上、149頁。

<sup>4</sup> ボヘンスキー（小林 珍雄 訳）『共産主義と人間』京都：ヴェリタス書院、1956年、64頁。

<sup>5</sup> Сталин И.В., Речь в Кремлевском дворце на выпуске академиков Красной Армии, *Сочинения*, Т. 14. М.: Издательство “Писатель”, 1997, стр. 62.

<sup>6</sup> カント・エマニュエル（宇都宮芳明 訳注）『道徳形而上学の基礎付け』以文社、1989年、129、142頁。

<sup>7</sup> 例えば、1951年に教科参考書として出版された『史的唯物論』でもスターリンのこの発言が、「社会主義的イデオロギーの基本的性格、ソヴィエト人の精神的風貌」の特徴である社会主義的ヒューマニズムを表現するものとして紹介されている。また、スターリンが死去した翌年の1954年に出版された『哲学辞典』第4増補訂正版でもなお「ヒューマニズム」の項目で「社会主義社会では、最も貴重な資本は人間である」という叙述がされている。ローゼンタリ・エム、ユージン・ペ監修、ソ同盟科学院哲学研究編集（ソヴェト研究者協会 訳）『哲学辞典』岩崎書店、1956年、387頁。

<sup>8</sup> ボヘンスキー、前掲書、63頁。

<sup>9</sup> Под ред. Розенталя М. М. и П. Ф. Юдина, *Философский словарь*, М.: Политиздат, 1963.

<sup>10</sup> В Политбюро ЦК КПСС: По записям Анатолия Черняева, Вадима Медведева, Георгия Шахназарова (1985-1991), Москва, 2008, стр. 270. 日本語訳はチェルニャーエフ、アナトーリー・S（中澤孝之 訳）『ゴルバチョフと運命をともにした2000日』潮出版社、1994年、133頁を参照した。

<sup>11</sup> 「人間は、何事にも自分で勘定をつけていく、だから、人間は自由なんだ！人間—これは真実だ！（中略）人間は尊敬しなくちゃならねえよ。憐れむべきものじゃねえ...憐れんだりして安っぽくしちゃならねえ...尊敬しなくちゃならねえんだ！（中略）働け？何の為に？胃の腑をいっぺえにする為にか？（哄笑する）俺はな、腹一ぺえ食うことばかりにあくせくしてやがる人間は、いつも軽蔑しているんだ。大切なことはそんなことじゃねえやい、（中略）人間はもっと上のものなんだ！人間は膨れた胃袋なんかよりずっと高尚なものなんだ！」

ゴーリキイ（中村 白葉 訳）『どん底』第4幕、岩波文庫、1997年、149-150頁。

- 12 『ソビエト連邦共産党の綱領について ソ連共産党第 22 回大会でのエヌ・エス・フルシチョフ同志の報告』、85 頁。
- 13 ゴルバチョフは回想録の中で、フロロフのそれまでのルイセンコ主義との闘い、及び、プラハに本部がある『平和と社会主義の諸問題』誌での勤務経験を評価して、彼をイデオロギー担当顧問に登用した、と回想している。参照：Горбачёв, Михаил С., *Жизнь и реформы*, кн. 1, М.: Новости, 1995. Гл. 10. Больше света: Гласность\_Пресса выходит из-под контроля, [http://www.gorby.ru/gorbachev/zhizn\\_i\\_reformy1/page\\_12/](http://www.gorby.ru/gorbachev/zhizn_i_reformy1/page_12/) (2012/10/24)
- 14 フロロフにとってヒューマニズムの問題とは人類の運命の問題であった。彼は、「ラッセル=アインシュタイン宣言」を理念的拠り所とし、グローバル問題の解決等、全人類共通の利益を何よりも優先させることを基本的価値と看做した。参照：Корсаков С.Н., Развитие комплексного исследования человека в трудах И.Т. Фролова, Иван Тимофеевич Фролов, под. ред. Лекторского В.А., М.: РОССПЭН, 2010.
- 15 Ред. Фролова, И.Т., *Философский словарь*, М.: Изд-во политической лит-ры, 1980.
- 16 Федосов, П.А., Конференция «Поколение Горбачева: шестидесятники в жизни страны» [http://www.gorby.ru/activity/conference/show\\_844/view\\_27393/](http://www.gorby.ru/activity/conference/show_844/view_27393/) (2012/06/27)
- 17 Цанн-Кай-си, Фёдор, Евгений Плеханов, «Гуманизм как философско-антропологическая проблема», *Здоровый смысл*, Лето 2005, №.3 (36): [http://www.atheismru.narod.ru/humanism/journal/36/tsang\\_plekh.htm](http://www.atheismru.narod.ru/humanism/journal/36/tsang_plekh.htm) (2008/06/28)
- 18 Под ред. Скляревской, Г. Н., *Толковый словарь русского языка начала XXI века. Актуальная лексика*, М.: Эксмо, 2007.
- 19 ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所編 (マルクス=レーニン主義研究所訳) 『レーニン全集』第 21 巻、大月書店、60 頁。
- 20 Lindsay Jack, «Lenin and Humanism», *World Marxist Review*, Vol. 3., No. 7, July 1960, p. 32.
- 21 *Ibid.* p. 34.
- 22 Eagleton Terry, *Ideology: an introduction*, Verso, 1991, pp. 2-3. 日本語訳はイーグルトン・テリー (大橋洋一訳) 『イデオロギーとは何か』平凡社、1996 年を参照した。
- 23 Bell Daniel, *The Endo of Ideology : on the exhaustion of political ideas in the fifties*, Free Press of Glencoe, 1960, p. 370. 日本語訳はベル・ダニエル (岡田 直之 訳) 『イデオロギーの終焉 ～1950 年代における政治思想の枯渇について～』東京創元新社、1969 年、259 頁を参照した。
- 24 *Ibid.*, p. 373. 日本語訳は同上 263 頁を参照した。しかし、旧ユーゴスラヴィアの紛争はこの新しいナショナリズム・イデオロギーがアジア・アフリカの地域に限定されず、欧州でも機能することを立証した。
- 25 Legvold, Robert, “The Revolution in Soviet Foreign Policy”, *Foreign Affairs*, 1988/1989, Vol. 68, pp. 82-83.
- 26 この書籍の構成は次の様になっている：第 1 章 – 哲学の対象；第 2 章 – 哲学の根本問題と哲学の主な思潮；第 3 章 – 哲学の起源と歴史的諸類型；第 4 章 – 哲学の革命的クーデターたる弁証法的唯物論の起源；第 5 章 – 20 世紀の非マルクス主義哲学；第 6 章 – 存在；第 7 章 – 物質；第 8 章 – 発展；第 9 章 – 自然；第 10 章 – 人間；第 11 章 – 実践；第 12 章 – 意識；第 13 章 – 知識；第 14 章 – 科学；第 15 章 – 社会；第 16 章 – 進歩；第 17 章 – 文化；第 18 章 – 人格；第 19 章 – 未来；終わりに – 現代哲学における新しい諸問題と新しい議論。
- 27 Ignatow Assen, *Perestrojka der philosophie?*, *Studies in Soviet Thought*, 40, 1990, pp. 9 – 10.
- 28 この教科書の初版と第二版は入手不可能であった。フロロフは 1999 年に死去したにもかかわらず、彼の名が編集長として記されている。
- 29 「第一に、「パラダイム」が様々な「思考」の土台を意味し論者たちに議論の方向性を与えるという意義を持っている限り、対外関係をめぐる理論的諸相を分析する本書の方法論と親和性が高いという点」。「第二に、「パラダイム」概念の持つ「革命」的現象に対する説明の説得力の高さ」。岩下 明裕『「ソビエト外交パラダイム」の研究』国際書院、1999 年、11-12 頁。
- 30 特定の科学者集団が一定期間、一定の過去の科学的業績を受け入れ、それを基礎として進行させる研究 トーマス・クーン『科学革命の構造』12 頁。
- 31 岩下 明裕『「ソビエト外交パラダイム」の研究』15-16 頁。
- 32 高橋 憲一「科学史家にとってリサーチ・プログラム論とは何か」『比較社会文化』第 5 巻、1999 年、28-29 頁。
- 33 ラカトシュ・イムレ (村上陽一郎、井山弘幸、小林博司、横山輝雄 共訳) 『方法の擁護』新曜社、1986 年、8, 70-71 頁。
- 34 高橋「科学史家にとってリサーチ・プログラム論とは何か」、35-36 頁。
- 35 ベル『イデオロギーの終焉 – 1950 年代における政治思想の枯渇について – 』、215-216 頁。
- 36 「マルクス主義者がヒューマニストとして立つのは実践の立場においてであって、その場合の実存的支柱が理論からは省略されている」が故に、その空隙を補填しようという企図はどうしても起こってくる。梅本 克己『唯物史観と道徳』こぶし書房、1995 年、34 – 35 頁。
- 37 『レーニン全集』第 19 巻、3 – 8 頁。
- 38 *XX съезд Коммунистической партии Советского Союза Стенографический отчет I*, М.: Гос. изд-во полит. лит-ры, 1956. стр. 312 – 318.
- 39 *Там же*, стр. 325.
- 40 1958 年に科学アカデミー準会員 Ю.П. Францьефを議長としてソヴィエト社会学会が創立された。

---

<sup>41</sup> エフ・ブルラツキー、ゲー・シャフナザーロフ「社会科学と生活」『思想』No. 385 (1956.7)、104-114 頁。  
ゲオルギー・シャフナザーロフは回想録の中でこの時のことを次の様に追憶している。「第 20 回党大会の後間もなく私とブルラツキーとは、このリベラルな時流を利用しようと決断し、我々の行政機構がやり残した個所を明らかにする、その当時としては十分に刺激の強い論文を執筆した。」

Шахназаров, Георгий, *С вожжами и без них*, М.: Вагрис, 2001, стр. 86.

<sup>42</sup> ザパタ・ルネ (原田佳彦 訳) 『ロシア・ソヴィエト哲学史』白水社、143 頁。

<sup>43</sup> フルシチョフはこの報告の中で次の様に述べている。「共産主義へ移行する為には、(中略) 社会の全ての市民の、高度意識水準もまた必要である。(中略) 自由な人間の一切の優れた道徳的な諸特徴が完全に開花する、最も公正で、完全な社会、共産主義に到達する為には、我々は今から、未来の人間を育成しなければならない。ソビエト人のうちに共産主義的徳性を発展させなければならない。(中略) 社会主義は別の道徳 – 協力と集団主義、友情と相互援助の道徳を主張している。ここでは人民の共通の幸福についての配慮、人間が互いに敵ではなく、兄弟であり、友である様な集団の諸条件のもとでの、人間の個性の全面的な発展についての配慮が、何よりも先ず重視されている」。日本語訳は以下を参照した：日本共産党中央委員会宣伝教育部 訳編『ソ連邦共産党第二一回大会：第一分冊』合同出版社、1959 年、70-71 頁。

<sup>44</sup> この綱領の執筆者の一人が「60 年代人」を代表する一人で、社会学者兼政治学者のフョードル・ブルラツキー (1927 年 -) である。

<sup>45</sup> ヒューマニズムという言葉自体は既にミコヤンが第 20 回党大会での報告の中で戦争可避論の文脈の中で「ソヴィエト人民のヒューマニズム」という表現で使っているが、党の公式方針としてはこの第 22 回党大会が最初である。

<sup>46</sup> マンハイム・カール (石川康子他 訳) 「世代の問題」『マンハイム全集 3』潮出版社、1976 年、202 頁。

<sup>47</sup> 中野徹三「ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義」『スラヴ研究』第 5 号、1961 年、33-49 頁。

\* この章の一部は"Acta Slavica Iaponica" (スラブ研究センター) Vol. 33 (2013) に掲載された拙稿"What Was Shestidesiatnichestvo for Soviet Philosophers?" (pp. 79 – 92) を和訳したものである。

## 第1章：ソヴィエト人文・社会科学史における「60年代人」とは\*

2006年3月に、1956年3月に開かれた第20回党大会でのフルシチョフ秘密報告50周年を記念して、所謂「60年代人」の会合が、経済学者エフゲニー・ヤシン（1934年生まれ）が会長を務める財団「リベラル・ミッション」によってモスクワのタガンカ劇場で主宰された。劇場のホールには200人以上の人々が集まり、参加者達はヨセフ・スターリンの死と個人崇拜の暴露の後に各個人として何が変わったのかを明らかにしようとした。作家ヴァシリー・アクシヨーフ（1932–2009）、経済学者・社会学者タチヤーナ・ザスラフスカヤ（1927年生まれ）、経済学者ガヴリール・ポポフ（1936年生まれ）等といった面々が出席した<sup>1</sup>。

それから5年後の2011年3月に、序章で紹介した様に、モスクワにあるゴルバチョフ基金の会議ホールで「ゴルバチョフ世代：国の営みにおける60年代人」と題したシンポジウムが開催された。主だった「60年代人」の話し手は歴史家のユーリー・アフアナシエフ（1934–2012）、ザスラフスカヤ、ヤシン、モスクワ・ヘルシンキ・グループのリュドミーラ・アレクセーヴァ（1927年生まれ）、社会学者ヴラディーミル・ヤドフ（1929年生まれ）、人権活動家セルゲイ・コヴァリョフ（1930年生まれ）、といった面々であった<sup>2</sup>。

経済学者のヴィクトル・シェイニス（1931年生まれ）は「60年代人」の個人形成の背景として、大祖国戦争（1941–1945）、第20回党大会（1956）、及び、「雪解け」を挙げた。彼は、「雪解け」とペレストロイカとの間には20年近い空白期間がある故に、後者は前者の直接的な継続であるという見解を斥ける一方で、ペレストロイカはイデオロギー的には「雪解け」の場合の様に処女地で始まったのではなく、前もって準備された土壌の上で始まった、と主張した<sup>3</sup>。

この「60年代人」という集合名詞はそもそも1860年代の社会問題に関して名を上げていたロシア人の思想家達を指す集合名詞として用いられたものである。アレクサンドル2世治世下、ニコライ・チェルヌシシェフスキーやニコライ・ドブロリューボフに代表される19世紀の「60年代の人々」は、スタンケーヴィッチ・サークルやペトラシエフスキー・サークルといった「40年代の人々」とはあらゆる点で異なる「新しい人間」の代表者達であると考え、彼らの哲学的見解として唯物論や常識的な合理主義を主張した。彼等は「理性」や「人間性」といった概念を有力な手段として社会制度や伝統や偏見に反対して闘った故に、後に「ロシアの啓蒙主義者達」という名を与えられた<sup>4</sup>。

一世紀を経て批評家達、及び、後にソ連の改革者となる人々を定義する言葉としてこの言葉が再登場した。初出は文芸評論家のスタニスラフ・ラサーディンが青年向け文芸雑誌『Юность』（若者、青春）に1960年に寄稿した、その名も「Шестидесятники」と題打った論文であった。彼は1935年にモスクワで生まれ、モスクワ国立大学哲学部を1958年に卒業し、出版社『若き親衛隊』に勤めた後、1959年にブラート・オクジャワ<sup>5</sup>と共に『文学新聞』へと移った。『若き同時代人に関する書籍』という副題を持つこの論文は、1.トラクター運転手エディック、2.「あなた方の侵害の企てに対する無関心」（«Индифферент ваших посягательств»）、3.真実の教育、4.結論という、4部構成になっている。第1章では、ヤロスラフ・スメリャーコフの『全き恋』（«Строгая любовь»）という1956年に発表された詩について、第2章はアクシヨ

一ノフの小説『同期生』(«Коллеги»)(1960年)について、第3章は詩人ボリス・スルツキーの詩を冒頭に、アレクサンドル・フメリクの戯曲『我が友、ユーリカ』(«Друг мой, Колька»)を紹介しつつ、形式主義について論じている<sup>6</sup>。ここに紹介された文芸作品の中でこの時期の「60年代人」の特徴を的確に描写しているのが『同期生』である。登場人物は次の様に自問自答する。「我々の世代とはどの様なものであろうか。(中略)我々都市の若者は、全世界に対し皮肉を込めて接し、ジャズやスポーツや、おしゃれで派手やかな装飾品を愛したりするけれども、ごまかしたり、人の良心に付け入ったり、卑劣な振る舞いをしたり、寄生したりはしない<sup>7</sup>。」

20世紀の「60年代人」のもう一つの表現である「第20回党大会の子供達」もまた後年、ソヴィエト連邦で1956年から1960年代初頭にかけて反スターリン主義の見解を形成した世代を表すものとしてしばしば用いられる。

この章では、先ず、ゴルバチョフ期のイデオロギーの刷新、所謂「新思考」(*новое мышление*)を1960年代あるいは70年代から準備し、1980年代後半の諸改革の実現を様々な形で支え、牽引した所謂「60年代人」(*шестидесятники: shestidesyatniki*)、あるいは「第20回党大会の子供達」と呼称される人々全体を取り上げ、彼らは一般的にいかなる環境の下で彼等の世界観を築きあげたのか、また、「60年代人」はどう定義されるべきなのか、を社会学者カール・マンハイムの世代論を以って、フルシチョフ期における彼等の自己形成、及び、思考形成過程を検証していく。就中、ゴルバチョフの側近としてペレストロイカやグラスノスチの中心的な牽引役となり、「ヒューマニズム」をマルクス＝レーニン主義に替わってソヴィエト・イデオロギーのより中心的な核とする為にその理論系列の再編成を担った、「プラハ派」、及び、「アンドロポフ顧問団」と呼ばれる人々に焦点を当てて、日本では余り知られていないこれらのグループを「60年代人」の中で位置付けることを課題とする。

然る後に、ソヴィエト哲学界における「60年代人」について同様に考察し、序論で紹介した、ロシアで20世紀末から出版され始めたソヴィエト哲学史に関する諸著作を主に参考にしながら、「60年代人」の哲学者達にとってフルシチョフ期とは、並びに、*shestidesyatnichestvo* (*шестидесятничество*) とは何だったのかを明らかにしながら、彼らがその時期にイデオロギーとしての「ヒューマニズム」をどの様に解釈し直し、それをソヴィエト・マルクス主義の理論系列の核の新しい構成部分として鍛え、その防御帯を形成していったのかを明らかにしたい。

## 第1節：「60年代人」一般の定義と彼らの自己形成の社会的背景

米国のソ連研究者、ロバート・D・イングリッシュは、「第20回党大会の子供達」としてしばしば言及される改革派の知識人仲間の中で共有されている問題意識として反スターリン主義以外の点が余り理解されていないことを指摘したうえで、彼らが個人的ないし職業的な絆で結ばれており、改革派の歴史学者、経済学者、哲学者、自然科学者、政策決定者、並びに、共産党政治局職員達の間での学問上ないし職業上の繋がりが強かったこと、加えて、1968年という困難な年の後に明確な社会的アイデンティティーを育み、所謂「新西欧派」を強固にしたのは個人的な職業上の縁故と共に彼らの間で共有された信念であったことに言及した<sup>8</sup>。

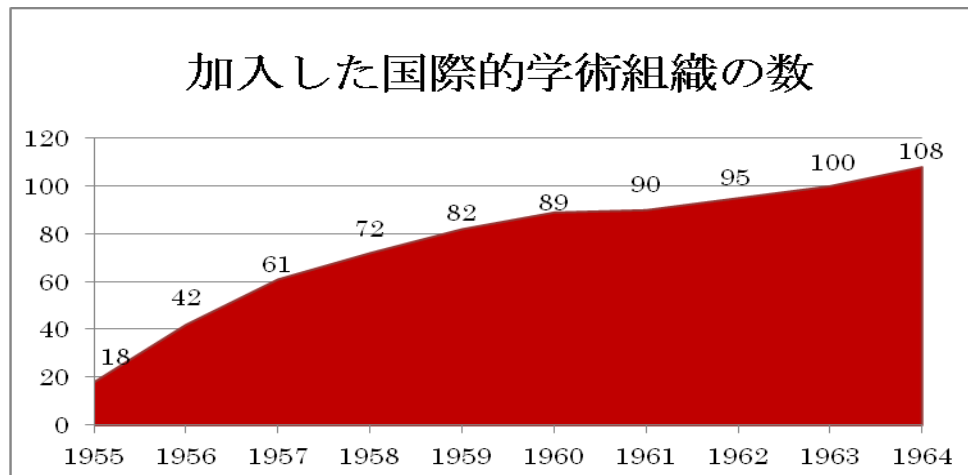
従って、この節では、「60年代人」(*shestidesyatniki*)を形成した社会環境を検証することによって、彼等の自己形成過程を跡付けるとともに、「60年代人」を定義付け、更に、*shestidesyatnichestvo* とは何だったのか、どう日本語に訳すべきなのかを明らかにしたい。



## a) 「60 年代人」を形成した社会環境

それでは、彼等はいかなる社会環境の下に置かれていたのでしょうか。まず、研究環境が彼等の上の世代によって整備された。例えば、自然科学の分野においては、後に 1978 年にノーベル物理学賞を受賞することとなるピョートル・カピッツァ (1894-1984) はラヴレンティエー・ベリヤ逮捕後の 1953 年 9 月から 1958 年 10 月にかけてフルンチョフに 5 回手紙を送り、研究環境の改善を訴えた<sup>9</sup>。また、経済学者のアヌシャヴァン・アルズマニヤン (1904-1965) は、彼の夫人がミコヤンの夫人と姉妹であるという姻戚関係を利用して、スターリン時代に閉鎖された、ブダペスト出身の経済学者エフゲニー・ヴァルガ (1879 - 1964) が所長を務めていた世界経済研究所を世界経済・国際関係研究所(ИМЭМО)として復活させ、初代所長として前身の研究所に在籍していた研究者達を呼び戻したと同時に、若い専門家達を研究者として招き入れた<sup>10</sup>。加えて、「体制内異端派」を育成した人物としてプリマコフやソ連研究者達が挙げているのが、アレクセイ・ルミヤンツェフ (1905-1993) である。彼は、1950 年代半ばから 1960 年代半ばにかけて、党理論機関誌『コムニスト』、『平和と社会主義の諸問題』誌<sup>11</sup>の初代編集長、党中央委員会機関紙『プラヴダ』紙の編集長を歴任した。『プラヴダ』紙の編集長であった時分には、彼の周囲には後の「ペレストロイカの設計者」、アレクサンドル・ヤコヴレフ (1923-2005) 等の「党内民主主義者」と呼ばれる人達による小さなグループができた<sup>12</sup>。またプラハに本部がある『平和と社会主義の諸問題』誌<sup>13</sup>は彼のもとで「異端センター」と化し<sup>14</sup>、そこで編集委員として勤務した人々の内の幾ばくかの人々は後に所謂「プラハ派」として、主に 1970 年代から 1980 年代にかけて、来るべきゴルバチョフ期の内政及び外交政策の理論的基礎を築いていくこととなるのである。

マンハイムは「経験の層化」(独語で„*Erlebnisschichtung*“)の現象に注目して次の様にこれを説明している。「人々が年代的に同時期に生まれているという事実によって彼等が同一の事件や生活内容に参加し、しかも同一の様式を取って層化した意識を携えて、それらに参加する可能性を持つことこそが、類似の状態を生み出すのである<sup>15</sup>」。これを 1950 年代半ばから 60 年代前半にかけてのソヴィエト学界に当てはめれば、上述した人的ネットワークの他に外部世界へのソ連の開放がソヴィエト学界全体に知的刷新を与えたことを指摘すべきだろう。ソ連研究者ロナルド・J・ヒルによれば、ソ連の学者は西側の思想に接する大きな機会に恵まれ、ソヴィエト研究機関は、外国の類似の研究機関と書籍や雑誌を交換し、西側の文献を購入する適度の資金を持っていた。また西側諸国との文化交流を通じて若干の社会学者は長期間西側の研究機関で過ごし、西側の学者と共に仕事をし、資料を購入し、図書館を利用していた<sup>16</sup>。加えて、ソ連科学アカデミー会員が加入した国際学術組織の数は 1955 年から 1964 年にかけて以下の表が示す通り増加の一途を辿った<sup>17</sup>。



(出典：РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Ед. хр. 208.)

学术界に留まらず当時の青年層全体にも外部世界へのソ連の開放は大きな影響を与えた。その中でもとりわけ重要な出来事として、1957年7月から8月にかけて2週間にわたってモスクワで開催された第6回世界青年学生祭<sup>18</sup>が挙げられるであろう。祭りの準備と実行の為に設立されたソヴェト準備委員会と国際準備委員会は、ソ連共産党中央委員会の決定に従って、9月からモスクワで国際準備委員会の機関紙『フェスティバル』を多言語（露語、英語、仏語、独語、スペイン語）で発行するつもりでいた。この両委員会の編集部には最大600人が働き、その内約100人が外国人で占めることになっていたが<sup>19</sup>、結果的にこの企画は実現しなかった。

#### b) 「60年代人」一般の定義

それでは、「60年代人」とはどのような人々と定義され得るのだろうか。時代が降り、この「60年代人」という言葉が次第にある特定の世代を意味するものとして使われ始めたことを受けて、ラサーディンは「この論文は全人生の中で最も愚かなものかもしれない。世代としての「60年代人」はフィクションであり、幻影であり、ついでに言えば、現在の根拠の無い使い古された言葉としてはかくも便利なものはないであろう。「60年代人」とは時代の偽名である。(中略)一般論として言えば、父子間の衝突は無かった。人々は年齢に関係なく一致団結していた<sup>20</sup>」と、1995年に行われた『文学新聞』のインタビューに答えている。また、彼は別の所でも、「「60年代人」という概念は揺れ動いていて、ナンセンスであり、のっけから世代としての意味合いは無かった<sup>21</sup>」と述べ、世代としての「60年代人」という言葉を使うことに対して繰り返し強い不快感を表している<sup>22</sup>。

しかしだからと言って、ある世代を意味する言葉として実際に使われている現状を無視するわけにはいかない。一般に、言葉というものは時として、それを最初に世界に向けて発した者の意図を離れて、独自の意義を獲得することがままたり、「60年代人」の場合もそうなのではないか、と思われる。ロシア語詳解辞典(БТС)によれば、「Шестидесятник»（「60年代人」:単数形）とは、「ソ連において20世紀60年代に国家の民主化への志向を表明したインテリゲンツィヤの代表<sup>23</sup>」である。この定義はこの用語がある世代を意味するものとして一般に用いられている現状を反映していないうえに、彼らが最も活躍したのはゴルバチョフ期であることに触れていない。当論文の冒頭で紹介したように、今日彼らが国内外で研究者やマス・メディアに取り上げられているのは、まさに彼らが1980年代後半における民主化において多大な役割を果

たした故であることを鑑みれば、この辞典による定義付けは不十分である。他方、21世紀初頭ロシア語詳解辞典では、「自由思想、創造的な大胆さ、人権の擁護を目標とする、等といった点に特徴づけられる世界観を1950年代末から1960年代初頭にかけての「雪解け」の時期に形成した人物」と定義づけており<sup>24</sup>、彼らがどのような思想を「雪解け」期に形成したかについて前者より詳しく叙述しているものの、彼らがその後果たした役割についてはやはり説明を欠く。

この「世代」という観点から「60年代人」をカテゴリー化したものとして、ここでは次の二人による定義付けを挙げる。あるソ連研究者は、新しいインテリゲンツィヤ、「第20回党大会の子供達」といったリベラルな世代を意味する言葉<sup>25</sup>として紹介し、また別の研究者は、より具体的に、「1956年という重要な転換点で10代後半から30代前半の、前の世代よりもより良い教育を受けた若い世代で、1956年から1960年代の間にソ連で反スターリン主義的な政治的見解を形成した政治的世代を表現する「第20回党大会の子供達」の別の表現<sup>26</sup>」として定義する。実際、哲学者フロロフは自身が属する世代を「第20回党大会の子供達」と呼び、「我々は皆一つの世代に属し、第20回党大会の頃に自己を形成した。第20回党大会の力はかなり早い内に使い果たされた、と多くの者は言うが、そうではない。この力は我々の内部に残っているのである」と述べている<sup>27</sup>。

以上の「60年代人」という用語に対する様々な態度や見方、彼等の生年を総括すれば、この用語は、1920年代半ばから1930年代半ばの間に出生した人々の中でも、1950年代半ばから1960年代にかけて反スターリン主義的な見解を形成し、(社会主義的)民主主義を信念として共有するインテリゲンツィヤ<sup>28</sup>を意味する、と言える。

### c) *Shestidesyatnichestvo* とは何か

ロシア語詳解辞典でのこの用語の次の項目«шестидесятиничество» (*Shestidesyanichestvo*) へと目を移せば、口語として「20世紀60年代のソ連において国家の民主化への志向を表明するインテリゲンツィヤのイデオロギイ及び諸見解の総体<sup>29</sup>」と定義付けられている。

これに対し、ロシアの社会学者アルカディー・サカロフは、この用語を次の様に更に詳しく定義する。「*Shestidesyanichestvo* とは、ソヴィエト全体主義に対する初めての合法的で控えめな反抗である。この抵抗は、最初はソヴィエト体制の全面否定から生じたのではなく、レーニンの規範、本当の共産主義的倫理に対する、悪意ある卑劣で愚かな背信による違反を痛烈に非難するものであった。若き「60年代人」は自分達を父の世代の事業の本当の継承者であると看做していたのであって、芝居じみたフロントの乱<sup>30</sup>の域を超えなかったのである。しかし、1968年8月にソヴィエト軍の戦車が「プラハの春」を圧殺した後は共産主義イデオロギイの批判的再考が始まった<sup>31</sup>」。要するに、「レーニンに帰れ」というフルシチョフ指導部のスローガンを当時の「60年代人」は反全体主義体制内改革運動という形で自分達のものとして受け入れたのだ、とサカロフは解釈する。

スイスのロシア研究者、マリナ・ペウノヴァは、マンハイムの世代論に基づいて、この難解な用語を、同様の価値観と行動パターンとを共有する人々を統合させる「社会変化の動因」である、と解釈し、これは「プラハの春」の終焉とともに幕を閉じたものの、ゴルバチョフ期の諸改革の理念的根源の一端として刻み込まれていたと考える<sup>32</sup>。

また、「60 年代人」自身はこの用語をどう解釈しているかと言えば、上述したシンポジウム「ゴルバチョフの世代」で「60 年代人」の一人、経済学者シェイニスは、この用語を幅広い社会的現象だと述べた。また、ソヴィエト・ロシア倫理学者アブドゥスラム・グセイノフ（1939 年生まれ）は、「60 年代人」の哲学者ネリー・モトロシロヴァ（1934 年生まれ）の著作集への序論に、*shetidesyanichestvo* に人々と価値観との総体であると同時に、疑い無く歴史的規模の運動であった、という定義付けを与えている<sup>33</sup>。

当節では、フランスの 19 世紀末から 20 世紀初頭の社会学者、エミール・デュルケームの用語「集合意識」(*la conscience collective*)<sup>34</sup>を援用して（彼は集合意識は世代毎に変わったりはしないと述べているが、著者は一世代のみに共有される時限的集合意識は存在し得ると考える）、以上の諸見解を総括して、*shetidesyatnichestvo* を「60 年代人」によって醸成され、共有された集合意識、つまり、彼等の共同体を統合する力として作用した「ヒューマニズム」等といった信念や道徳的態度であると同時に、その意識が 1950 年代後半以降もたらした知的運動であると定義し、「60 年代人の集合意識・知的運動」と訳す。

## 第 2 節：「60 年代人」の一派「プラハ派」と「アンドロポフ顧問団」

次に、この「60 年代人」のカテゴリーを更に明確化する為にこの世代の中でも「ネオ西欧派」の二つの重要なグループに注目したい。まだペレストロイカが進行中だった頃に、塩川伸明氏は、「ペレストロイカ政策」の一環たるグラスノスチによってもたらされた「ペレストロイカ現象」の思想的側面に注目し、ソ連の主要思想潮流の一つとして抬頭してきた「ネオ西欧派」主導による「西側的原理」の受容がこの「現象」を生じさせており、現代における西欧派とスラヴ派の対抗関係は、実は '60 - 70 年代にその直接の背景がある、と当時のソ連政治思想の状況を分析した<sup>35</sup>。前述した様に、この西欧派の「60 年代人」には「プラハ派」という、『平和と社会主義の諸問題』誌での体験を共有するグループがあった。

### a) 『平和と社会主義の諸問題』誌創刊の経緯

先ず、この雑誌が創刊されるに至った経緯を述べると、共産党・労働者党情報局（コムンフォルム）廃止の決定が 1956 年 3 月になされた後、ソヴィエト指導部は、中国共産党が 1957 年 10 月末にクレムリン宛に、共産党・労働者党の会議をモスクワで開催するよう圧力をかける電報を送ってくるまでは、コムンフォルムの代替組織について議論していなかった<sup>36</sup>。クレムリンは国外でのイメージの向上の必要性を認識し、1957 年にソ連の国外でのプロパガンダの改善を目指した議論を繰り返し行った。第一に、中国の大国としての急速な抬頭が社会主義陣営におけるソヴィエト連邦の覇者としての地位、及び、ソヴィエト・マルクス＝レーニン主義の正当性を脅かすようになったこと、第二に、反共産主義者達による批判とプロパガンダを論破する為に様々な国々からの共産主義者達との議論を通じてマルクス＝レーニン主義を洗練させる必要があることから、ソヴィエト指導部は自国の首都ではなく、チェコスロバキアの首都プラハに本部を構える国際的雑誌を創刊することを決定した。

この雑誌の刊行の目的と背景とは創刊号で次の様に説明されている。本誌はその目的を全ての平和を愛し民主主義的な勢力の統一を強化し、共産主義、社会主義諸政党間の接触と協力が

発展するのを助けること、及び、全ての国々の進歩的労働者達を敬い、人々の間の友好と協力の原則を謳うプロレタリア国際主義の諸原則の広報に見る。この雑誌は本年3月にプラハで開催された共産主義諸政党の代表者会議に参加した共産党、労働者党の中央委員会による共同出版物である<sup>37</sup>。

同時にこの雑誌の委員会が言及した同誌の課題は「ブルジョア・イデオロギー、何よりも今日の状況下において共産主義運動に対する主たる脅威である修正主義のいかなる語句に対しても闘う」ことである<sup>38</sup>。このことは、この雑誌の主たる目的の一つはこの雑誌の大口のオーナーであるソ連共産党のドクトリン、すなわち、マルクス＝レーニン主義に対するいかなる反対も潰し、マルクスとエンゲルスの諸著作の解釈において主導権を握ることにあり、抬頭してきた中国からのイデオロギー上の挑戦を意識したものであることを意味している。すなわち、序章でMSRPの核と防御帯のイメージ図で示した様に、他の共産主義、ないし、マルクス主義との競争の激化という状況に対処する為に理論系列の防御帯を厚くするというのがこの雑誌に課された任務であった。加えて、「NATOの首脳陣が取っている核戦争をしかけるという明快な進路」というフレーズから、当時ソ連と米国との間には核兵器の貯蔵量で大きな開きがあったが故の米国との核戦争に対する恐怖、及び、米政府が核兵器の実際の使用を思いとどまるように圧力をかける為に、平和と反核運動において覇権を握る狙いがソヴィエト指導部にあったことが読み取れる。

こうして、1958年に平和と社会主義の為の闘争を目的とする重要な国際的共産主義雑誌がソ連共産党によって決定的な資金援助を受けてプラハで創刊された。『平和と社会主義の諸問題』と名付けられたこの雑誌は月刊で、400人以上から成る編集部はそのおよそ半数をソヴィエト市民が占め、社会主義諸国だけでなく、資本主義諸国でも、更には「第三世界」でも出版され、その言語数は41ヶ国語にのぼり、全世界で55万部という売れ行きを見せた<sup>39</sup>。

現代東欧・ロシア史と政治の専門家であるロバート D. イングリッシュ<sup>40</sup>によれば、ソ連共産党中央委員会から緩く管理されているこの「国際的」雑誌は、絶対的命令であったスターリンのかつてのコミンフォルムのものに代わって、国際的な共産党・社会党の今は許されている多様性を反映させた新しい機関として公的に設置された<sup>41</sup>。具体的に言えば、この雑誌はソ連共産党中央委員会の国際部によって管理されていた。

## b) 雑誌の主なスタッフ、及び、彼等を「プラハ派」として育成した環境

1964年まではウクライナ出身の経済学者・社会学者で、「コムニスト」誌編集長をそれまで3年間務めていたアレクセイ・ルミャンツェフが初代編集長を務めた。彼は自分の許に才能ある若き哲学者、歴史家、政治学者等を集めた。その人物達のうちで著名な人物を以下アルファベット順に列挙する。

- エフゲニー・アムバルツォフ (1929 – 2010) : 歴史学博士。1973年から社会主義世界システム経済研究所 (ИЭМСС) 政治・イデオロギー部主任。
- エドワルド・アラブ＝オグリ (1925 – 2001) : ジャーナリスト、人口研究者。
- ゲオルギー・アルパートフ (1923 – 2010) : アメリカ研究所 (後にアメリカ・カナダ研究所 (ИСКАН) と改称) の創設者であり、初代所長。

- ボリス・グルシン（1927–2007）：社会学者、ジャーナリスト。1960年、コムソモール機関紙（日刊）の『コムソモルスカヤ・プラヴダ』附属研究所としてソ連初の世論研究所 ИОМ «КП»を設立した。
- ヴァディム・ザグラディン（1927–2006）：1964年から1988年までソ連共産党中央委員会国際部に務め、副部長、部長に昇格。1988年からゴルバチョフ書記長の補佐官。
- ニコライ・イノゼムツェフ（1921–1982）：後に科学アカデミー世界経済・国際関係研究所所長（ИМЭМО）となる。
- ユーリー・キャリアキン（1930–2011）：文芸評論家、特にドストエフスキー研究。
- ヴラディーミル・ルキーン（1937–）：リベラル政党「ヤブロコ」の創設メンバー。
- メラブ・ママルダシュヴィリ（1930–1990）：哲学者。
- アナトリー・チェルニャーエフ（1921–）：1961年から1986年までソ連共産党中央委員会国際部に務め1970年から副部長、その後ミハイル・ゴルバチョフ書記長・初代大統領の国際問題担当補佐官となる。
- ゲオルギー・シャフナザーロフ（1924–2001）：社会学・政治学者であるとともに、ユートピア小説作家。ゴルバチョフ書記長・初代大統領の東欧・国内問題担当補佐官。

スラヴ学で著名な英国の研究者アーチャー・ブラウンはこの雑誌を「プラハの修正主義学校」と彼の著作『ゴルバチョフ・ファクター』で呼んでいた<sup>42</sup>。この「学校」の卒業者達の多くはその後ミハイル・ゴルバチョフソ連共産党書記長の補佐官や、学術研究所の所長、あるいは、雑誌の編集長となったりした。そういった人々の中の一人であるシャフナザーロフはプラハでの彼の月日とその後のモスクワでの生活を振り返って次の様に述べた。「西側の有力な共産党、特にイタリアとフランスは既に一種のユーロコムニズムへのアプローチを始めていたが、依然としてソ連共産党との協力に感謝し、我々を彼等の信念の方へと改心させる希望を捨てていなかった。この書類鞆にはベルリンゲール、マルシェ、カリロ、その他の書記長達の記事で一杯だった。既に1960年代前半に我々自分達自身を「問題児」と呼び、ソ連共産党中央委員会の建物の3階、つまり国際部と社会主義諸国共産党・労働者党連絡部に出没していた<sup>43</sup>。

また、アカデミー会員ゲオルギー・アルバートフは、回想録の中でプラハでの勤務環境について、編集長ルミャンツェフが創造的で「自由な」雰囲気にしてくれていたおかげで、自由な思考のオアシスだったと回想している<sup>44</sup>。

近年では、キャリアキンがこの雑誌編集部での印象と外国の「修正主義者達」との会話を回想して次の様に述べている。「プラハでの雑誌『平和と社会主義の諸問題』誌の編集局では、確かにこれはソ連共産党中央委員会の支部ではあったが、「危険な」イタリアの修正主義者達やほどほどに「進歩的」なフランスから、「第三世界」のネアンデルタールの無教養な共産党指導者達まで最も多種多様な共産党指導者達が勢揃いしていた。国際出版機関を再活性化させるという目的を持って、ソ連共産党中央委員会メンバーのルミャンツェフは編集長の資格で送り込まれてきた。彼は信義と自由な信念の持ち主だが、彼の「自由主義」は既にイタリアや英国、部分的にはフランスの共産主義者達にとっては既に「因習的」だった。彼は「人間の顔をした社会主義」の支持者だったし、試みは常に成功だったとは言えないが、社会主義の下での経済法則の発展理論に人間的な要素を持ち込もうと試みた。これが「ルミャンツェフ村」と我々が名付けた「修正主義の外国の心臓部」なのさ。私はモスクワ国立大学哲学部を卒業したての若い

男で、『ソ連史』という雑誌の編集部で若干の経験があるだけだった<sup>45</sup>」。

こうして、若手のソヴィエト哲学者や社会学者、ジャーナリスト達が、比較的反リベラルな編集長の許で、欧米の共産主義者達の理論に感化されていき、「体制内異論派」と化していった。R. D. イングリッシュは前述した著書の中で「プラハの修正主義学校」の卒業生達を「プラハ派」と名付けた<sup>46</sup>。下の表はこの「プラハ派」の主だった人々がフルシチョフ期の間この雑誌の編集部勤務していた時期を示したものである。

	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
アムバルツォモフ		●	●	●	●	●	
アラブ - オグリ	●	●	●	●	●	●	●
アルバートフ			●	●	●	●	
グルシン					●	●	●
ザグラディン			●	●	●	●	●
キャリアキン			●	●	●	●	●
ママルダシュヴィリ				●	●	●	●
フロロフ					●	●	●
チェルニャーエフ	●	●	●	●			
シャフナザーロフ					●	●	

駐ハンガリー・ソ連大使としてハンガリー動乱（1956）に対処した後、中央委員会書記に就任したユーリー・アンドロポフ（1914 - 1984）は、自分の顧問グループとしてこの「プラハ派」を主に登用した<sup>47</sup>。この「アンドロポフ顧問団」は「プラハ派」の他に、ブルラツキー、アレクサンドル・ボーヴィン（ジャーナリスト；1930-2004）、ニコライ・シシュリン（党中央委員会プロパガンダ局副長）、オレグ・ボゴモロフ（経済学者；1927年生まれ）等で構成され、ブルラツキーがこの顧問団の団長を任されていた。党中央委員会内の保守派の画策によるアンドロポフの KGB 議長就任（1967年）とともにこの顧問団は解散を余儀なくされたが、ブレジネフ死去後彼が書記長に就任すると再びその多くが彼の周囲に呼び戻され、爾後アンドロポフと同郷で、彼が自分の後継者と目したゴルバチョフの顧問団となった。

#### c) 当誌で展開された「60年代人」による「ヒューマニズム」論の内容

では、当誌にフルシチョフ期に掲載された、コヴァリョフ<sup>48</sup>とキャリアキンの二人の「60年代人」による「ヒューマニズム」論を見ていくこととする。彼等の論文が当誌に掲載された当時、1960年代初頭以降共産主義諸国と資本主義陣営双方において、新しく出版された初期マルクスの著作、就中、マルクスがパリで1844年に執筆した『経済学・哲学草稿』の研究が集中的に行われていた。このマルクス主義ヒューマニズムの潮流は、ソ連において1961年に党第一書記フルシチョフが第22回党大会において、スターリンの非人道性に対する批判を進展させ、ソヴィエト文学と芸術とに「新しい人間」形成の役割を担わせ、「ヒューマニズム」を党のイデオロギーの重要な一部として位置付けたことによって、一層勢い付いた。他方、第20回党大会以降も個人崇拜を正当化し続けていた、毛沢東率いる中国共産党がソ連の「ヒューマ

ニズム」路線を修正主義として糾弾したが故に、ソ連共産党は「ヒューマニズム」イデオロギーを真のマルクス主義として正当化する必要に迫られていた、という国際的な背景があった。コヴァリョフとキャリアキンの二人はこの正当性を巡る中国共産党との理論競争に加わったのである。

それ故、コヴァリョフの論文の前半は、ソ連共産党の新綱領を攻撃する中国のプロパガンダへの応酬、及び、「ヒューマニズム」が階級闘争、並びに、「自由・平等・博愛」に置き換わる理念であるという主張にあてられている。彼は先ず、「ヒューマニズム」概念が初期マルクスによる共産主義の定義に由来するものであり、マルクスは「共産主義とヒューマニズムとを合一する考えをより詳細に敷衍した、ということの説明した。それから彼は、「全てを人間の為に、人間の利益の為に」というスローガンを掲げる共産主義の真の人道主義的目標を掲げる、ソ連共産党の新綱領の重要性を強調した。彼は続けて次の様に新綱領を弁護する。「綱領は共産主義の理念が全ての者の為の平和、労働、自由、平等、友愛、並びに、幸福を宣告するものである<sup>49</sup>。」

彼は次に中国共産党の反ヒューマニズムの見解を次の様に論難した。「共産主義のヒューマニズムの本質を否定することはマルクス＝レーニン主義テーゼのまさに肝心要、即ち、労働者階級の解放、及び、あらゆる形式の抑圧からの人間の解放を、拒絶することである<sup>50</sup>。」彼は、「共産主義の目的の人間性は、所与の歴史的条件の中で有り得べき最も人間的方法でその実現に向かって働くことを前提としている」と強調した<sup>51</sup>。しかしながら彼は、中国のスターリン主義者達に、具体的にどの点において、ヒューマニズムにこそ真の本質がある所の正統派マルクス主義から彼等の主張が逸脱しているのかを、教示することはできなかった。

文芸評論家のキャリアキンもまた、個人崇拝の排除を推し進めるとともにヒューマニズムと人格の全面的発達を訴える、ソ連共産党の新路線を拒絶する中国共産党の否定的立場を弾劾した。この目的を達成する為、彼は個人崇拝がいかなる結果を招くかを描出したアレクサンドル・ソルジェーニツィンの処女作『イワン・デニーソヴィッチの一日』を紹介した。

1962年に出版されたこのセンセーショナルな反スターリン主義短編小説は、来るべき真の共産主義社会の建設を担う「新しいソヴィエト人」を育成する為に、文学と芸術とを生活におけるヒューマニズムの実現化、並びに、人格の全面的発達の為の手段として利用するという、党第一書記フルシチョフの政策に一致したものであった。この作品は作者自身の強制労働収容所での実体験に基づいたものであり、彼はそこに1945年に収容され、1958年にフルシチョフの政策によって社会復帰することができた。

キャリアキンは、個人崇拝は反動的現象であると断言するとともに、個人崇拝の反動的本質が、その「思想」と手法とを暴き出したソルジェーニツィンの著作の動機となっており、またその本質が毛主義者とその支持者達という、個人崇拝を擁護する闘士達によって植え付けられている、と述べ<sup>52</sup>、精神状態としての個人礼賛はその本質からしてアンチ・ヒューマニズムであると主張する。また彼は、「共産主義のヒューマニズムの諸原則は遠い未来に実行されるものではなく、今日遂行されるべきものであるが、その諸原則は決して達成されないだろう<sup>53</sup>」と、中国共産党を非難した。

この論文は反スターリン主義短編小説を全世界で紹介した点で価値が有るかもしれないが、序文に彼の「第3世界」の人々に対する侮蔑に満ちた叙述があり、これは彼自身がヒューマニズムの本質を理解していないことを序実に示しており、この様な人種差別主義者が中国共産党



の反ヒューマニズムの見解をいかに舌鋒鋭く批判しようとも、説得力に欠ける事は自明である。

この様に、中国共産党を非難し、ソ連共産党の「ヒューマニズム」イデオロギーを弁護する論陣が当誌に張られたものの、彼等の議論のレベルは所詮彼等の自己満足と自己欺瞞とに終始する程度の標準でしかなく、理論系列の防御帯を形成する程の高度に学術的な理論構築の標準にまでは到底到達できておらず、正当性を巡る競争に勝つに十分な論証能力を彼らは持ち合わせていなかった。そこで、次の節では、イデオロギー生成・発展の場であったソヴィエト哲学界において「60年代人」達がいかに自己の見解を形成していったのか、その軌跡を跡付ける。

### 第3節：ソヴィエト哲学界における「60年代人」

それでは、フルシチョフ期にソヴィエト哲学界での「60年代人」達はどのような社会的・学術的環境の中で自己形成し、世界観を築いていったのか、彼等の回想を参考にして考察していくとともに、彼らとその時期にイデオロギーとしての「ヒューマニズム」をどの様に解釈し直し、それをソヴィエト・マルクス主義の理論系列の核の新しい構成部分として鍛え、その防御帯を形成していったのかを明らかにしたい。

冒頭で紹介したシンポジウム「ゴルバチョフ世代：国の営みにおける60年代人」での発言者の一人、哲学研究所の教授ヴァディム・メジューエフ（1933年生まれ）<sup>54</sup>は、「60年代人」は第20回党大会後の雪解け期に到来した精神の最も顕著な表現者達としてロシア史に足跡を残した人々であると彼らを賞賛した。この哲学者は、西欧で「60年代人」に類似する人々は、既存体制に反抗する学生達ではなく、寧ろ、スターリン主義の遺物から自由な、社会主義の民主主義的なモデルを模索するユーロ・コミュニスト達であったと主張する。だとすれば、社会学者ソコロフによる、若き「60年代人」は「フロンドの乱」の域を超えなかった、という指摘は正しいであろう。また、メジューエフは、フルシチョフ期の雪解けを社会及びイデオロギーにおけるスターリンという麻薬からの解放の時期と解釈するとともに、体制と意識の非スターリン化とは社会主義やマルクス主義と断絶することではなく、逆に、それらの真の意味や内容を突き抜けるという課題を己に課すというものであったと回顧する。更に彼は、ゴルバチョフが権力の座に就いたことは「60年代人」の勝利を意味し、ペレストロイカへの着手は長引いた「停滞」を潜り抜けた「60年代人」の理念の大勝利であったと、「60年代人」にとってのペレストロイカの意義を述べた<sup>55</sup>。

倫理学者グセイノフは「60年代人」について次の様な発言をしている。「彼等は確かに法的地位を享受し、活動の公的に実践された形式で以って勤務していたが、それにもかかわらず、ソヴィエト体制初期においてブルジョア専門家達が置かれていた状況を思い起こさせる様な、殆ど隠すことができない程の疑いの目で見られていた<sup>56</sup>」。彼によれば、*shestidesyatnichestvo*（「60年代人の集合意識・知的運動」）は1960年前後に表面化し、1990年代初頭までに同国の知的、精神的雰囲気を決めるに当たり決定的に重要であり、人文科学では見解や自己認識において、党员や党の協力者達に代表される社会の公的な層とは異なるとともに、また、反体制活動家達に代表される社会的反対派とも異なっていた。何故なら、彼等の肉体は前者のグループの側にあったが、心は後者の人々とともにあったからだ、と言うのである<sup>57</sup>。グセイノフの「60年代人」、及び、「60年代人の集合意識・知的運動」に関する見地は前述したプリマコフが言う所の「体制内異端派」に近似している。

ここでマンハイムが旧世代から次世代への文化の継承と発展をどう捉えていたかを知っておくことは意義があるであろう。彼は次の様に述べている：「世代が継起している社会は、原則として、文化の創造と蓄積が同じ諸個人によって遂行されず、「新しい年齢集団」が絶えず出現しているという事実によって、第一に特徴付けられている。この事は、先ず、文化が蓄積された文化遺産に新たに接触していく人々によって発展せしめられることを意味する<sup>58</sup>」。他の箇所では彼は、最も若い世代と最も年老いた世代との間の、相異なる体験の層化の結果生じる軋轢を緩衝する役割を果たす世代として「中間的世代」（独語で„Zwischengenerationen“）の存在を指摘している<sup>59</sup>。この用語「中間的世代」を1950年代のソ連社会に適用するとすれば、どの年齢集団が最も適切であろうか。「60年代人」に属するソヴィエト・ロシア哲学者サドフスキーが1950年代から1960年代にかけて現役であった哲学者達を次の三つの年齢集団に区分した：1) 殆ど奇跡的に生き残った、早くも1920年代から30年代にかけて既に研究に従事し始めた少数の老年層の哲学者達；2) 1920年代に生まれ大祖国戦争に出征し、戦争直前ないし直後に大学で学業を修了した世代、；最後に、3) 1940年代末から50年代にかけて哲学部で大学生、大学院生、もしくは講師だった世代<sup>60</sup>。しかし、この類別では二番目と三番目の双方に重複する人々、つまり、1920年代に生まれ、大祖国戦争に従軍し、帰国後大学院に入学したり講師になったりした人々を類別できなくなる。そこで、当論文では1900年代末～20年代初頭出生で、30年代から40年代にかけて既に研究活動に従事していた人々を一つの年齢集団として類別し、この第二世代をマンハイムが意味する所の「中間的世代」と呼ぶ。例えば、エヴァルド・イリエニコフ（1924 - 1979）とともに史的唯物論に関してモスクワ国立大学で一つの学派を形成していたアレクサンドル・ジノヴィエフ（1922 - 2006）がこの世代に含まれると考える（尤も、個人差があるので、1920年代前半出生の人々を機械的に分類することはしない）。

この二人の「中間的世代」が主催した論理学サークルでの議論に、グルシンやママルダシュヴィリといった、「60年代人」の哲学者達が参加し、従来の教条主義的見解とは異なる自己の見解を形成していった。とは言っても、第2次世界戦争後の1940年代末から1950年代初頭にかけての時期はまだ、大学内であろうとも言論の自由があったわけではなく、ソヴィエト・ロシアの哲学者ヴァディム・ニコラエヴィチ・サドフスキー（1934年生まれ）は、マルクス＝レーニン主義の古典的著者、すなわち、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンが絶対的権威であり、公式プロパガンダに反することは殆ど口に出すことはできず、共産主義イデオロギーの反啓蒙主義がピークに達していた、と振り返る<sup>61</sup>。当時モスクワ大学哲学部の学生であったグルシンは、彼が在学していた最初の3年の内に彼の同級生が4人逮捕された、と回想した<sup>62</sup>。加えて、サドフスキーは、スターリン死後でさえ、モスクワ大学哲学部では哲学上の「修正主義者」達に対する報復措置が旧来のスターリン主義的規範に則って取られていた、と証言している<sup>63</sup>。他方、イングリッシュは、第20回党大会以前には既に戦後世代はヴァレンティン・アスムス<sup>64</sup>、コンスタンティン・バクラゼ<sup>65</sup>、ボニファティ・ケドロフ<sup>66</sup>といった、革命以前の伝統的な教育を受けており、且つ、スターリンによる『ソ連共産党小史』の粗野な図式を拒否する、非教条主義的な考えの持ち主である第一世代によって勇気づけられていた、とみる<sup>67</sup>。また、ポーランド出身で、スイスのフリブール大学のソヴィエト哲学研究者、イノセンツ・ボヘンスキーは、当時の主要傾向を分析し、「反動主義的」、「ヘーゲル主義的」、「アリストテレス的」の3グループに分類した。彼は「アリストテレス的」哲学者達を「新し

い技術的な思考において、反動主義的な無意味やヘーゲル主義よりも遥かに良い」と評価し、このグループに属する者達の代表として、上述した3人とジノヴィエフの名を挙げている<sup>68</sup>。

以上を考え合わせれば、こうした新しい考え方は当局による逮捕や報復の危険性を伴っていたものの、新世代の哲学者達は旧世代の数人の哲学者達によって励まされつつ、精力的に議論を闘わせていたのである。

スターリンの死去後、スターリンの言説に依拠しない「ヒューマニズム」路線を敷いた人物は「中間的世代」の女性哲学者、マリヤ・ペトロシヤン<sup>69</sup>であった。スターリン時代にフォイエルバッハ研究を積んできた彼女が「マルクス主義とヒューマニズム<sup>70</sup>」という論文を1955年に『哲学の諸問題』誌に寄稿した。この論文の中で彼女は、先ず、ルネッサンス以降のヒューマニズムの歴史的役割について論じ、例えば、イマニュエル・カントの道德格率、すなわち、「人間を手段と看做すことなく目的と看做せ」を、社会主義社会でのヒューマニズムの原則として掲げている<sup>71</sup>。また、ソ連憲法で保障されている男女平等、並びに、市民間の権利の平等の遵守が社会主義社会における個人（личность）の発達にとって重要な条件であると主張した<sup>72</sup>。最後に、初期マルクスの著作に依拠して、社会主義ヒューマニズムの理論的基礎たるマルクス＝レーニン主義こそが人間の個性を全面的かつ均整のとれた発展をもたらす真のヒューマニズムであると主張している<sup>73</sup>。こうして、新規の「ヒューマニズム」の理論系列が「中間的世代」の女性哲学者によって創出され、それを構成していた補助仮説は人格（личность）論と倫理学であり、しかもその典拠は古典哲学と初期マルクスであった。

序章でも述べた様に、その翌年に開催された第20回党大会で、それまでマルクス＝レーニン主義の理論系列の核の一構成要素であったレーニンの暴力革命論については、プロレタリアートの権力獲得の手段としての暴力革命の絶対性がミコヤンの報告の中で斥けられ、「社会主義への移行の平和的な道の現実の可能性」が公式に認められた。また、同報告の中で、スターリン主義的唯物史観の典拠となっている『党小史』の学術的正当性が疑問視された。その後更に、核の構成要素の内、プロレタリア独裁が第22回党大会で放棄され、その代わりに「ヒューマニズム」が新しく採択される党綱領の中で謳われることとなった。フルシチョフ指導部による、意識、道德、人格の全面的発達といった、「ヒューマニズム」イデオロギーの重視路線という公的後援を得て、第20回党大会以降の脱スターリン化政策によって柔らかくなった核を取り巻く防御帯が厚みを増していったのである。

ソヴィエト・ロシア哲学者ヴラディスラフ・レクトルスキー（1932年生まれ）は、1960年代初頭、哲学の分野においてマルクスの思想の科学的・ヒューマニズム的解釈の理念に真剣に向き合う一つの世代が出現した、と回想する。また、彼によれば、ソヴィエト心理学者セルゲイ・ルビンシュテイン（1889-1960）が（当時ソヴィエト論壇では「ブルジョア的」と看做されていた）哲学的人類学的概念、特に、人間の意識の存在論の概念を発展させた<sup>74</sup>。後に詳述するが、ソヴィエト意識論はソヴィエト心理学界の寄与によって理論としての水準を高めた。

ソヴィエト哲学界では哲学の優良な、且つ、大半の部分として倫理学が現われてきた、と地方の哲学者達は回想しており<sup>75</sup>、またこのことをフランスのロシア・ソ連哲学史研究者であるルネ・ザパタもソ連でのこの時期における倫理学の勃興について次の様に分析している。「人間主義的動向の出現、若きマルクス、乃至、初期マルクスの著作の公刊、共産主義建設における「精神的、乃至、靈的」要素の重要性の強調といったことが、第20回党大会以降、一連の哲

学者達に首尾一貫した道徳理論を入念に構築することへと導いた。この作業は 1955 年に A.F. シンシュキン (1902 – 1977) の著作『共産主義道徳の原理』と V.P. トゥガリノフ (1898 – 1978) の『生活の価値と文化の価値』の公刊によって、その第一歩を踏み出した<sup>76</sup>。」1959 年に臨時に開催された第 21 回党大会では、共産主義社会建設の為にプロレタリア道徳の発展が必要である旨の報告がフルシチョフによって為された。

この「雪解け」期に形成されたもう一つの分野が哲学史であり、これによって特にマルクス＝レーニン主義倫理学は、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』といった、古代ギリシャの倫理学から 19 世紀のヘーゲル哲学等に至る諸外国の倫理学、及び、帝政期ロシアの道徳論によって補填されたのであった。スターリン期に「ブルジョア」の烙印を押されていたこれらの非マルクス主義思想に従事するに際して、描写、哲学史の注釈、及び、哲学的解釈と再構成という三つの課題が有ったと、あるソヴィエト思想研究家は指摘する<sup>77</sup>。

マンハイムは自己の世代論を展開させる前にディルタイの世代の現象に関する結論を紹介している。「世代の継起のみが重要なのではなく、その同時的共存 (“Gleichzeitigkeit”) の現象もまた、単なる年代学的意義以上に深い意味をここでは持つ。同時代に生まれた諸個人はその最大の間形成期に、あるいはその後にも、社会的且つ政治的な状況からも、また同じく彼等に強い印象を与える精神的文化の側からも、共通の著しい影響を被る。これら様々の影響が統一的であるからこそ、彼等是一个の世代、一个の同時代性を構成するのである<sup>78</sup>」。そこで、所謂「60 年代人」が当時どの様な人的環境下で研究に従事していたかを示す為、モスクワ国立大学哲学部で 1950 年代前半に開かれていた勉強会について紹介する。その当時同大学の大学生達と大学院生達は「モスクワ論理学サークル」(後に「モスクワ方法論サークル」と改名する)という勉強会を開いていた。このサークルはグルシン、ズィノヴィエフ、ママルダシュヴィリ、並びに、ゲオルギー・シチェルドヴィツキー (1929 – 1994) らによって 1952 年に組織された。ソヴィエト・ロシア宗教哲学者でバプティズム研究を専門とするレフ・ミトローヒン (1930 – 2005) は、彼等はレーニンの、「もしマルクスが『論理学』を後世に遺さなかったとしても、彼は資本論の論理を遺したのであって、これをこの問題において十分に活用するべきである」という有名な言葉に言及しつつ、弁証法や論理学の特別な諸概念を提案したり、発展させたりしていた、と回想した<sup>79</sup>。この様にして、「60 年代人」の哲学者達は内輪のサークルでの議論を通じて影響を及ぼし合い、自分達独自の世界観を形成していったのである。

外国の哲学者達との直接的な関係について言えば、第 1 節で紹介した、1957 年にモスクワで開催された第 6 回世界青年学生祭はソヴィエト哲学界にもその痕跡を残した。『哲学の諸問題』誌 1957 年第六号にはこの祭典の催し物の一つとして行われた哲学ゼミナールの模様が報告されている。この記事によれば、8 月 6 日から 7 日にかけてモスクワ大学の講義室で「社会生活の諸現象の科学的予見可能性について」というテーマでゼミが行われ、19 の代表団 32 名がこれに積極的に参加した。冒頭に、モスクワ大学教授テオドール・オイゼルマン (1914 年生まれ) が、この問題を審議するに当たって、社会の発展の客観的法則と科学的予見の可能性についてのマルクス主義的見解を報告した<sup>80</sup>。

討議では先ず、科学的予見性の具体的内容についての問題が活発な議論を呼んだ。ソ連代表として発言したのは社会哲学者ユーリ・ザモシュキン (1927 – 1993)、哲学者兼社会学者で後に所謂「プラハ派」となるアラブ＝オグリ、並びに、社会学者ニーナ・ナウーモヴァ (1930 –

2002)であった。これらの参加者達は社会主義諸国出身者のみならず、仏、伊、西独等といった資本主義諸国からの若者達の、歴史における偶然性と必然性について等といった多様な見解を学ぶことができたのであり、西側の参加者達もまたこの機会にソ連の若手哲学者達がアーノルド・トインビーの方法論や英国の哲学者ラッセルの見解に通暁していることを知ることができた。

では何故、これらのソ連の若手哲学者達はこの時点で既に諸外国の思想に精通していたのであろうか。ナウモーフアを例に挙げれば、彼女は1949年にモスクワ国立大学哲学部に入学し1954年に卒業している。彼女と同期の哲学者や社会学者に、『若きマルクス』という大著を1968年に出版したニコライ・ラピン(1931年生まれ)、ママルダシュヴィリ<sup>81</sup>、ソ連で論理学の確立と後進の養成に多大な貢献をしたヴラディーミル・スミルノフ(1931 - 1996)等がおり、また同僚にはイリエンコフ、グルシン、社会学者ユーリー・ダヴィドフ(1929年生まれ)といった面々がいた。ナウモーフアはこの様な人的環境の中で、社会学学会議長のユーリー・フランツェフ(1903 - 1969)の指導のもと、社会学における個人の問題等の研究に取り組んだ。「20世紀ロシアの哲学者」シリーズの一つとして2006年に出版された、彼女の著作を収集した書籍の著者紹介の箇所、「1960年代に刊行され始めた彼女の著作は既にその後「60年代人」という名称を与えられることとなる本国の学術界において特記されるべきものであった<sup>82</sup>」と彼女の業績に対して賛辞が送られている。彼女の外国思想に関する博識は、「雪解け」という社会的・政治的状況、及び、欧州共産主義に詳しいフランツェフ指導教官<sup>83</sup>という旧世代からの知識継承とともに、こうした同世代からの影響がもたらした知的結晶である。

## まとめ

以上見てきた様に、数多くの「第20回党大会の子供達」の形成と抬頭はソヴィエト第一世代と「中間的世代」のサポートと指導のみならず、同世代間の相互の学術的刺激にも大きく負っていると言える。また、ソヴィエト哲学界は「雪解け」期の脱スターリン化路線に則って、それまでのスターリンの言説に依拠した「ヒューマニズム」解釈から、初期のマルクスや国内外の古典に基づいた解釈へと舵を切った。当論文では、次章以降でこの新「ヒューマニズム」理論系列が、倫理学や人格論、更には意識論という補助仮説によって構成され、フルシチョフ期にこれらは順次、核の一部となっていくことになることを順次論証していく。

<sup>1</sup> *Шестидесятники призывают покончить с культом личности и безличности (фоторепортаж):*  
<http://www.regnum.ru/news/600597.html> (2008/08/05)

<sup>2</sup> Конференция «Поколение Горбачева: шестидесятники в жизни страны»:  
[http://www.gorby.ru/activity/conference/show\\_844/](http://www.gorby.ru/activity/conference/show_844/) (2011/05/29)

<sup>3</sup> Шейнис, В.Л., Конференция «Поколение Горбачева: шестидесятники в жизни страны»  
[http://www.gorby.ru/activity/conference/show\\_844/view\\_27386/](http://www.gorby.ru/activity/conference/show_844/view_27386/) (2012/06/27)

<sup>4</sup> ヴァリツキ・А. (今井 義夫 訳)『ロシア社会思想とスラヴ主義』未来社、1979年、42頁。

また、高田和夫氏は『ロシア帝国論』の中で「60年代」を「クリミア戦争が終わった1856年からモスクワ大学生カラコゾフによるツァーリ暗殺未遂事件が発生した1866年までの十年間を指し、「諸改革、社会運動、地方(地域)各地の反乱、世論の急進化等が次々に生起したためぐるしい時代であり、「全体を通してみれば世の中はリベラルな雰囲気溢れ」ていたと描写した。

高田和夫『ロシア帝国論 - 19世紀ロシアの国家・民族・歴史』平凡社、2012年、314頁。

<sup>5</sup> ОКУДЖАВА Булат Шалвович (1924 - 1997) : オクジャワはグルジア人の父親とアルメニア人の母親との間にモスクワで生まれた。1937年両親が逮捕され、父親は銃殺され、母親は強制収容所に送還されて55年に釈放された。1940年トビリシにいる親戚の許へ移住。1942年志願兵となり、訓練後北カフカスの前線へ。この頃

作曲を始める。戦後トビリシ国立大学へ入学。卒業後農村で教師となる。1956年カールガにて『若きレーニン主義者』紙で働き始める。1959年モスクワに戻り、出版社『若き親衛隊』編集部、その後『文学新聞』詩部長として勤務する傍ら、ギターで作曲し始める。1961年ハリコフで初めて公式の歌の夜会開催。1962年ソ連作家同盟に入会。

<sup>6</sup> Рассадин, Станислав, «Шестидесятники – книги о молодом современнике», *Юность*, № 12, 1960, стр. 58-62.

<sup>7</sup> Там же, стр. 59.

<sup>8</sup> English, Robert D., *Russia and the Idea of the West*, N.Y.: Columbia University Press, 2000, p.83.

<sup>9</sup> Капица, П.Л., «Пять писем Н.С. Хрущеву», *Знамя*, № 5, 1989 г.

<http://vivovoco.rsl.ru/VV/PAPERS/KAPITZA/NIKITA.HTM> (2009/09/26)

<sup>10</sup> プリマコフ・エフゲニー (鈴木康雄 訳)『クレムリンの5000日 プリマコフ政治外交秘録』, NTT 出版, 2002年, 28-29頁。

<sup>11</sup> ソ連共産党中央委員会が組織し、各国共産党代表が編集委員会を構成し、プラハに本部があった。

<sup>12</sup> Markwick, Roger D., *Rewriting History in Soviet Russia : the politics of revisionist historiography*, N.Y.: Palgrave 2001, p. 200.

<sup>13</sup> インドの詩人、思想家であるラビンドラナート・タゴール (1861 – 1941) の名を取ってタクロヴァ (Thakurova) と名付けられた通りにある建物に本部を置き、1958年9月に多言語雑誌として出発した。

<sup>14</sup> プリマコフ、前掲書、24-25頁。

また、R.イングリッシュは、ここで勤務した人とのインタビューに基づいて、このセンターを「創造的思考のオアシス」と形容している。English, R.D., *Ibid*, p.71.

<sup>15</sup> Mannheim, *Ibid*, p. 297. 日本語訳は、マンハイム『マンハイム全集』3、185頁を参照した。

<sup>16</sup> ヒル、ロナルド・J (菊井禮次 訳)『ソ連の政治改革』, 世界思想社, 1984年, 177頁。

<sup>17</sup> Иванов, К.В., «Наука после Сталина: Реформа академии 1954-1961 гг.», *Науковедение*, № 1., 2000 г.:

<http://vivovoco.rsl.ru/VV/PAPERS/HISTORY/POST.HTM> (2008/07/28)

<sup>18</sup> この祭典は国際学生連盟と世界民主主義青年同盟が合同で開催している国際的な祭りであり、第1回は1947年にチェコで開催された。第6回大会は、参加国は131カ国、総勢約3万4千人の参加者を集め、過去最大の規模で開催された。1955年に作曲されたロシア歌曲『モスクワ郊外の夕べ』が第1位を獲得する優勝曲となった。

<sup>19</sup> Призрачная газета «Фестиваль» при VI всемирном фестивале молодежи и студентов в 1957 г. в Москве.

РГАНИ Фонд №5 Опись № 28 Дл. № 28 Дл. № 454.

<sup>20</sup> Рассадин, Станислав, «ПРОФЕССИЯ – РАССАДИН. Беседа с обозревателем «Литературной газеты» Славой Тарощиной», *Литературная газета*, 1 марта 1995 г.:

<http://nashaulitsa.narod.ru/Rassadin-Taroschina.htm> (2009/9/29)

<sup>21</sup> Рассадин, Станислав, «ВРЕМЯ СТИХОВ И ВРЕМЯ ПОЭТОВ», *Арион*, № 4, 1996:

<http://magazines.russ.ru/arion/1996/4/rassad1.html> (2009/9/29)

<sup>22</sup> 「1953年にスターリンが死去し、'56年に第20回党大会でフルシチョフがスターリンの個人崇拜を批判し、我々は'50年代に自己を形成したのだから「60年代人」ではなく、「50年代人」と呼ぶべきだ。'60年代には既にエフトゥシェンコは最初の詩を発表していたのだから。」という見解がこの世代の批評家から出されている。Линчевский, Игорь, Интервью со Львом Аннинским, «Настоящий талант должен раздражать»:

<http://www.ozon.ru/context/detail/id/200612> (2008/08/13)

<sup>23</sup> Большой толковый словарь русского языка, Санкт-Петербург : Норинт, 1998., Шестидесятник.

<sup>24</sup> Толковый словарь русского языка начала XXI века, Москва : Эксмо, 2007., Шестидесятник.

<sup>25</sup> English, Robert D., *Russia and the Idea of the West*, Columbia University Press, N.Y., 2000., pp. 108, 280n146.

<sup>26</sup> Brown, Archie, *The Gorbachev Factor*, Oxford, Oxford University Press, 1997, p. 40.

<sup>27</sup> Гаримберти, Паоло, «Дети XX съезда», Академик Иван Тимофеевич Фролов, очерки. воспоминания. материалы., М.: Наука, 2001., стр. 341.

<sup>28</sup> 2006年に刊行された『ロシア語詳解辞典』では「内面的には教養が高く、職業では知的労働に従事している、教育を受けた人々で構成されている社会集団 (グループ)」と定義されている。参照：Интеллигенция, *БТС*.

<sup>29</sup> Шестидесятничество, *Большой толковый словарь русского языка*.

<sup>30</sup> フランスで17世紀に起きた貴族による反乱。« La Fronde » (1648-1653)

<sup>31</sup> Соколов, Аркадий, «Демифологизация русской интеллигенции», *Нева*, 2007, № 8, стр. 179.

<sup>32</sup> Reunova, Maria, From dissidents to collaborations: the resurgence and demise of the Russian critical intelligentsia since 1968, *Studies of East European Thought*, Vol. 60, Issue 3, 2008, pp. 234 – 235.

<sup>33</sup> Гусейнов, А. А., Н. В. Мотрошилова и философы-шестидесятники, Мотрошилова, Нелли В., *Работы разных лет*. М., 2005. <http://guseinov.ru/publ/motrosh.html> (2010/11/1).

<sup>34</sup> デュルケームは次の様に述べている。「同じ社会の成員達の平均に共通な諸信念と諸感情の総体は、固有の生命を持つ一定の体系を形成する。これを集合意識または共同意識 (*la conscience collective ou commune*) と呼ぶことができる。勿論、それはただ一つの機関を基体 (*substrat*) として持っているわけではない。それは、定義によって、社会の全範囲に広く分散している。にもかかわらず、それは自らを明確な一実在たらしめる諸特質を持っている。実際、それは諸個人が置かれている個別的な諸条件とは無縁である。個人は過ぎ去るが、集合意識は残る。」参照：E. デュルケーム (田原音和 訳)『社会分業論』復刻版、青木書店, 2007年, 80 – 81頁。

<sup>35</sup> 塩川伸明「現代ソ連の思想状況 – ネオ西欧派とネオ・スラヴ派」『ソ連研究』第9号 (1989年10月)、27 – 28頁。

<sup>36</sup> *Президиум ЦК КПСС. 1954-1964*, № 137, Протокол № 122<sup>a</sup>., Заседание 2 ноября 1957 г., стр. 279.

- <sup>37</sup> “From the Editorial Board”, *World Marxist Review*, Vol. 1, September 1958, No. 1, p. 6.
- <sup>38</sup> *Ibid.* p. 5.
- <sup>39</sup> “Evolution in Europe; With Nonreaders Gone, Marxism's Journal Fails”, *The New York Times*, 3 July, 1990:  
<http://query.nytimes.com/gst/fullpage.html?res=9C0CEFD9143EF930A35754C0A966958260>
- <sup>40</sup> Assistant Professor in the School of International Relations at the University of Southern California
- <sup>41</sup> English, Robert D., *Russia and the Idea of the West: Gorbachev, Intellectuals, and the End of the Cold War*, 2000, p. 264.
- <sup>42</sup> Brown, Archie, *The Gorbachev Factor*, Oxford, 1996, p. 99.
- <sup>43</sup> Шахназаров, Георгий, *С вождями и без них*, М.: 2001, стр. 85-86.
- <sup>44</sup> Арбагов, Георгий, *Человек СИСТЕМЫ*, М.: 2002, стр. 122.
- <sup>45</sup> Карякин, Юрий, Перемена убеждений, *Знамя*, 2007, № 11:  
<http://magazines.russ.ru/znamia/2007/11/ka2-pr.html>
- <sup>46</sup> English, Robert D., *op.cit.*, p. 72.
- <sup>47</sup> プリマコフ『クレムリンの5000日 プリマコフ政治外交秘録』、25頁。
- <sup>48</sup> КОВАЛЁВ Сергей Адамович (1930) : コヴァリョフはウクライナのスムィ州で鉄道員の家庭に生まれた。1932年彼の家族はモスクワ郊外へ移住。1954年モスクワ国立大学生物学部を卒業。1964年蛙の心臓の心筋についての学位論文をパスし、博士候補となった。1950年代半ばから社会活動に参加し始め、ルイセンコ学説に反対する闘争に参加。
- <sup>49</sup> Kovalev S., Communist Humanism and Revolutionary Coercion, *World Marxist Review*, Vol. 7, 1964, No. 5, p. 35.
- <sup>50</sup> *Ibid.*, p. 35.
- <sup>51</sup> *Ibid.*, p. 36.
- <sup>52</sup> Karyakin, Y., An Episode in the Battle of Ideas, *World Marxist Review*, Vol. 7, 1964, No. 9, p. 76.
- <sup>53</sup> *Ibid.*, p. 83.
- <sup>54</sup> МЕЖУЕВ Вадим Михайлович (1933) : メジューエフは1956年にモスクワ国立大学哲学部を卒業。1964年にソ連科学アカデミー哲学研究所の大学院課程を終了。1957年から1961年までモスクワ国立大学出版編集員として勤務。1962年から哲学研究所で勤務。
- <sup>55</sup> Межуев, В.М., Конференция «Поколение Горбачева: шестидесятники в жизни страны»  
[http://www.gorby.ru/activity/conference/show\\_844/view\\_27384/](http://www.gorby.ru/activity/conference/show_844/view_27384/) (2012/06/27)
- <sup>56</sup> Гусейнов, А. А., «Н.В. Мотрошилова и философы-шестидесятники»:  
<http://guseinov.ru/publ/motrosh.html> (2010/11/01)
- <sup>57</sup> *Ibid.*
- <sup>58</sup> Mannheim, Karl, “The Problem of Generations”, *Essays on the Sociology of Knowledge*, Routledge & K. Paul, London, 1952, p. 293.
- <sup>59</sup> *Ibid.*, p. 301.
- <sup>60</sup> Садовский В. Н., Философия в Москве в 50-е и 60-е годы, *Философия не кончается... Из истории отечественной философии. XX век. 1960-80 годы*. М., 1998. стр. 15-16.
- <sup>61</sup> *Там же*, стр. 16.
- <sup>62</sup> «Мы все время вели войны за свой предмет», *Relga*, (№ 2 [92] 11.05.2004) :  
<http://www.relga.ru/Environ/WebObjects/tgu-www.woa/wa/Main?textid=97&level1=main&level2=articles>  
(2012/09/28).
- <sup>63</sup> Садовский, *Там же*, стр. 28.
- <sup>64</sup> АСМУС Валентин Фердинадович (1894 – 1975) : Асмусはキエフに生まれ、1919年にキエフ国民大学歴史・文献学学部を卒業。1927年モスクワで哲学史の講義をし始める。専門は哲学史(就中、F. ベーコン、R. デカルト、B. Де. スピノザ、I. カント)、論理学、美学、並びに、文化理論。
- <sup>65</sup> БАКРАДЗЕ Константин Спиридонович (1898 – 1970) : バクラゼはグルジアに生まれ、1922年にトビリシ国立大学哲学部を卒業。専門は哲学史(就中、I. カント、J. G. フィヒテ、F. W. J. von シェリング)、論理学。
- <sup>66</sup> КЕДРОВ Бонифатий Михайлович (1903 – 1985) : ケドロフはヤロスラヴリに生まれ、15歳の時ボルシェヴィキに入党し、『プラヴダ』紙書記局に勤務。内戦に参加。1922年モスクワ大学化学部に入学。1931年から32年まで赤色教授哲学・自然科学大学の聴講生。1932年から35年までソ連科学アカデミー一般・非組織科学大学大学院生。博士候補論文『ヒップスのパラドックスについて』の審査をパス。1935年から37年まで党中央委員会科学部門教官。1936年から38年モスクワ国立大学化学部で化学史を講義。1938年から39年までヤロスラヴリのタイヤ工場に化学者として勤務。1939年から41年までソ連科学アカデミー哲学研究所の上級研究員。大祖国戦争に従軍。1945年から49年まで哲学研究所自然科学の哲学的諸問題部門主任、副学長。1946年博士論文の審査をパスし、博士号取得し、1958年まで党中央委員会付属社会科学アカデミー弁証法的・史的唯物論講座教授。1955年から58年までソ連科学アカデミー自然科学・技術史大学上級研究員。1958年から62年まで哲学研究所弁証法的唯物論部門主任。1960年ソ連科学アカデミー準会員に選出される。
- <sup>67</sup> English, *op. cit.*, p. 87. 次の資料も参照されたし : Serebriany, Sergei, On the ‘Soviet Paradigm’ (Remarks of an Indologist), *Studies in East European Thought*, 2005, p. 106.
- <sup>68</sup> Bochenski, I.M., *Der sowjetrussische dialektische Materialismus [DIAMAT]*, Dritte Auflage 1960, Francke Verlag Bern, 1960. S. 163.
- <sup>69</sup> ПЕТРОСЯН Мария Исаковна (1911 – 1971) : ペトロシヤンはナゴルノ・カラバフで生まれ、バクーで高等教育を受けた後、モスクワ哲学・文学・芸術大学(МИФЛИ)大学院哲学部で教育を受け、1937年にフォイエルバッハの哲学に関する博士候補論文審査をパス。1964年『ヒューマニズム』という単著を出版し、この業績によって翌年哲学の博士号を取得。

<sup>70</sup> Петросян, М.И., Марксизм и гуманизм, *Вопросы философии*, № 3., 1955, стр. 45–58.

<sup>71</sup> Там же, стр. 53.

<sup>72</sup> Там же, стр. 54.

<sup>73</sup> Там же, стр. 57-58.

<sup>74</sup> Лекторский В.А., Предисловие, *Философия не кончается...*, стр. 3 – 5.

心理学者 K.S. アブルハノヴァ＝スラヴスカヤはルビンシュテインによる影響力のある三つの著作を挙げた：『存在と意識』(1957), 『思考とその研究方法について』(1958), 「諸原則と心理学の発展方法について」(1959)。加えて、重要な哲学的著作「人間と世界」(1973)。参照：Абульханова-Славская К.С., Проблемы методологии науки и философской антропологии в контексте парадигмы субъекта С.Л. Рубинштейна, *Там же*, стр. 329.

<sup>75</sup> Киселев, В.П., Гл. 18, Прошло полвека, *Философия в российской провинции*, Под ред. А.А. Касьяна, Наука, 2003, стр. 257

<sup>76</sup> ザパタ, ルネ (原田佳彦 訳) 『ロシア・ソヴィエト哲学史』 白水社、143 頁。

<sup>77</sup> van der Zweerde, Evert, Die Rolle der Philosophiegeschichte im „neuen philosophischen Denken“ in der UdSSR, *Soviet Studies in Thought*; No. 40, SS. 57 – 58.

<sup>78</sup> Mannheim, op. cit., p. 282. 日本語訳は、マンハイム「世代の問題」(石川康子他 訳) 『マンハイム全集』 3、潮出版社、1976 年、158 頁を参照した。

<sup>79</sup> Митрохин, Л.Н., Докладная записка 74, *Философия не кончается...*, стр. 123.

<sup>80</sup> Игитханян М. Х., Н. В. Новиков, На философском семинаре VI Всемирного фестиваля молодежи и студентов, *Вопросы философии*, № 6, 1957, стр. 198 – 202.

<sup>81</sup> 彼の妻ニーナとゴルバチョフの妻、ライサとはモスクワ国立大学哲学部のクラスメートで、共に 1953 年に卒業した。Нина Мамардашвили, Раиса Горбачева: *штрихи к портрету*, Новая Газета, № 103, 18, сент., 2009. <http://www.novayagazeta.ru/data/2009/103/16.html> (19.09.2009).

<sup>82</sup> Наумова, Н.Ф. *Философия и социология личности*, М.: «КАНОН» РООИ «Реабилитация», 2006.

<sup>83</sup> 1961 年に彼の編集によってイタリア共産党とフランス共産党それぞれの 40 年の歴史を紹介、分析した書籍が出版された。参照：Ред. кол. Францев Ю.П., В.М. Хвостов, Г.Д. Обичкин, *40 лет итальянской коммунистической партии*, М.: ВПШ и АОН при ЦК КПСС, 1961// Ред. кол. Францев Ю.П., В.М. Хвостов, Г.Д. Обичкин, *40 лет Французской коммунистической партии*, М.: ВПШ и АОН при ЦК КПСС, 1961.

また彼は 1964 年から死去する前年の 68 年までプラハで『平和と社会主義の諸問題』誌の編集長を務めた。



\* この章は『ロシア・東欧研究』誌第 39 号（2010 年版）に掲載された拙稿「ポスト・スターリン期におけるソヴィエト倫理学の変容について」（pp. 57-69）を若干書き直したものである。

## 第 2 章：ソヴィエト倫理学\*

### 序論

1987 年、ペレストロイカ的设计者と言われたアレクサンドル・ヤコヴレフは、ペレストロイカに求められているのは、経済と政治の分野だけでなく、精神的発展の状態・傾向・展望にかかわるどの分野 - 文化と教育、社会科学とモラル、文学と芸術 - においても創造的・目的志向的建設の行動である、と述べた<sup>1</sup>。1990 年にはソ連哲学界上の有力誌『哲学の諸問題』で「ペレストロイカと道徳」というテーマで討論が為された際に、倫理学者アブドゥスラム・グセイノフもまた、経済革命や政治革命と並行して、道徳革命が必要であると主張した<sup>2</sup>。他の参加者、社会学者兼宗教哲学者レフ・ミトローヒンは、道徳は上部構造に属するという従来のマルクス・レーニン主義のテーゼに異議を唱え、道徳は人間社会の基本的原理と結びついており、道徳を階級やある社会的グループの利益と結びつくように変質させることはできない、と主張した<sup>3</sup>。このミトローヒンの道徳理解は明らかに、倫理はプロレタリアートの階級闘争の利益に従属しているというレーニンのドクトリンと一線を画している。

この様に、ソヴィエト倫理学の概念はソ連末期にマルクス・レーニン主義的理解から非マルクス主義的理解へと大きく変容したのである。またこのことから、表面的には、ソヴィエト倫理学はソ連末期になってマルクス・レーニン主義に基づいた理論的体系的綱領を実質的に放棄して、その他の、彼らの目から見てより優れていると思われる倫理学解釈体系を引き継いだと理解できるかもしれないが、その傾向は既に兆候として以前からあったという可能性も十分に考えられる。この章での課題は 1960 年初頭前後のソ連倫理学に焦点を当てることによってこの精神的潮流の原点を検証することである。何故ならば、ソ連ではフルシチョフ期に倫理学は史的唯物論の一部門から独立して一つの学問体系として登壇したからである。この検証に当たって、MSRP、及び、カール・マンハイムの世代論を参考に、世代間の知識の継承ないし断絶・変容の過程を分析することによって、ソヴィエト倫理学をより大局的に且つ動的に観察することができる筈である。

### 第 1 節：ソヴィエト倫理学の年代学 — ロシア倫理学者達による時期区分の試み

管見の限り、ソ連及びロシアの倫理学を年代学的に考察した先行研究は先に述べたグセイノフとロシアの倫理学者ヴラディーミル・ナザーロフ<sup>4</sup>の二者によるもののみである。そこで、この章では、この二人のロシア人倫理学者達によるロシア倫理学史の時期区分を紹介し、両者を比較することによって、ソ連倫理学がその歴史上いつ重要な局面を迎え、それがどの世代の誰によって担われたのかを明らかにすることを目標とする。

#### (1) グセイノフによるソヴィエト倫理学史の時期区分の試み

1991 年 7 月にソヴィエト倫理学者グセイノフ<sup>5</sup>は、ソ連の 70 年以上に亘るイデオロギー史の中で少なくとも 4 つの異なる道徳規範のモデル、つまり、道徳規範が持つ異なるイメージ、並びに、社会における役割が存在し、それを究明することができると述べ、ソ連倫理学史を以下

の様に四つの段階に分類し、それぞれを次の様に特徴づけた。

- 1) 十月革命後の約 10 年間：道徳に対するニヒリズム・アナーキズム；
- 2) 1920 年代末～30 年代初頭から 1950 年代半ばまで：教育学あるいは政治的イデオロギーとしてのみ存在する；
- 3) 1960 年代初頭から 1970 年代半ばまで：『共産主義建設者の道徳的規範』を含む党の新綱領採択を契機として新しい道徳理論の展開を迎える；
- 4) 1970 年代末以降：道徳における新思考の登壇<sup>6</sup>。

この分類では、1950 年代後半、つまり、スターリン死後数年間が空白となっている。

2000 年に彼は『倫理学におけるマルクス主義の伝統』という本を出版し、その中で 60 年代初頭をソ連における倫理学の分水嶺と位置付けた。彼によれば、この時期に同国では初めて倫理学が大学で履修する学問分野として登場し、一つの特化した専門的な研究対象となった。これは 1961 年に開催された第 22 回党大会で『共産主義建設者の道徳的規範』を含む新しい党綱領が採択されたことと直接的に関係がある<sup>7</sup>、と彼は指摘するが、思想史としてその採択に至るまでの思潮の描写が欠けている。

更に、2003 年に、彼の監修の下で『倫理学史』という教科書が編まれた際には、大雑把に、20 年代半ばから 40 年代までを教訓的な時期、50 年代から 60 年代までを道徳的啓蒙期、最後に 70 年代と 80 年代が学問として独立を遂げた時期として時期区分している<sup>8</sup>。これは直接グセイノフの手による分類ではないと言えなくもないが、彼の以前の時期区分とは多少異なっており、特に 1950 年代から 1960 年代にかけての時期をいかに特徴づけるか、彼自身、判断が揺れているのではないかと推察される。故に、この数年間のソヴィエト倫理学の動向を検証する必要がある。

## (2) ナザーロフによる 20 世紀ロシア倫理学史の時期区分の試み

ナザーロフは、2000 年から 2003 年にかけて、亡命ロシア人による倫理学をも含む 20 世紀のロシア倫理学史を次の様に体系的に時期区分した。

- 1) 1900～1922：謂わば「百家争鳴」期；
- 2) 1920 年代半ば～1950 年代半ば：亡命ロシア倫理学とマルクス主義倫理学との「分裂」期；
- 3) 1960 年代初頭～1980 年代末：ソヴィエト倫理学期；
- 4) 1990 年代初頭～：ロシア倫理学期<sup>9</sup>

グセイノフが 1991 年に行った時期区分と比較すれば、1920 年代を 1922 年までとそれ以後とに明確に区分している点、及び、60 年代から 80 年代を一つの時期としてまとめている点が全く異なっているが、これは、ソ連時代のみならず 20 世紀全体を鳥瞰し、革命以前、及び、亡命ロシア倫理学をも視野に入れた結果、グセイノフによる区分の様に 1920 年代末の前後、及び、1970 年代後半を以って異なる時期に分類する意義を十分に見いだせなかった所以であると思われる。他方、両者の共通点に注意を向ければ、いずれも 1960 年代初頭を倫理学史における分水嶺として位置付けていることが分かる。つまり、両者が共通の認識をする程、ロシア・ソヴィエト倫理学はこの時期に何らかの大きな変革を迎えたと言っても過言ではないであろう。次章では、1960 年代より前の動向の詳細を観察することによって、果たして本当に 1960 年代にその様な大きな転換が倫理学に生じたのか、もし生じたのだとすればそれは何故か、及び、1960 年代初頭を境としてその前後の連続性の有無を、知識社会学の観点から検証したい。

## 第2節：1960年代初頭までのソヴィエト倫理学の基礎付け

この章では、先ず、十月革命後から1950年代にかけてソ連において倫理学がどの様に認知されていたのかを検証し、次に、グセイノフによる時期区分では空白となっていた50年代後半には何がソヴィエト倫理学に起こったのかを追及する。

### (1) 十月革命後から1930年代までのソ連における道徳観

革命直後の当時の一般的な風潮を、ソヴィエト作家イリヤ・エレンブルグは、1920年には誠実さや、高潔さ、民衆愛といったものは不要なものであるという風に考えていた青年男女が多かった、と後に回想録『人間・歳月・生活』第2部の中で述懐している<sup>10</sup>。また、レーニンも1920年に開かれた第3回コムソモール大会で、「我々には自分の道徳が無いという風に考えている者がしばしばいる。」と述べた。彼は共産主義道徳というものが存在することを強調し、従来道徳・倫理との違いを示した。後者は、神の掟と大差ない、観念論的な、超人間的・超階級的な概念から引き出されてきた倫理であり、共産主義社会では否定されるべきものである。それに対して、共産主義倫理は、全くプロレタリアートの階級闘争の利益に従属している倫理であり、あらゆる搾取や小所有に対抗して、勤労者を団結させるこの闘争に役立つものであり、その基礎にあるものは、共産主義を強化し完成する為の闘争である<sup>11</sup>。

レーニンは、共産主義者は永遠の倫理を信じない、と前述の大会で明言したが、アナトリー・ルナチャルスキーはその頃から既に古典、特に、カントによる道徳論の見直しを提唱していた。『道徳と自由』（1923年）と題した論文の中で彼は、新しい道徳体系を構築する必要に迫られた際には、客観的な道徳と全人類的な道徳とを比較検証する必要がある、その時にはカントがかつて提示しようと試みた確固たる基礎が参考になることを助言した<sup>12</sup>。後に、1963年から1967年にかけて彼の著作集8巻が出版されるなどした、1950年代後半から1960年代にかけてわき起こった謂わば「ルナチャルスキー・ルネサンス」とでも言うべきルナチャルスキー再評価の精神運動の高まりを鑑みれば、彼の道徳観が1950年代から1960年代にかけての道徳論に何らかの影響を及ぼした可能性は否定できないのではないと思われる。

もう一人ソ連倫理学史において重要な役割を果たした人物として教育学者のアントン・マカレンコが挙げられる。前章でも軽く触れたが、グセイノフは、1991年版の時期区分の第2期の特徴として、教育学あるいは政治的イデオロギーとしてのみ倫理学が存在したと述べる際に、マカレンコの著作がこの時期の倫理学を理解するに当たり最適な印象を提供すると述べている<sup>13</sup>。これは以下の点において正しい。すなわち、マカレンコの『共産主義的倫理について』（1939年）という、晩年の高い評価を受けていた時期に書かれた論文の中で彼は、「宗教的土壌の上に成長した」古い倫理体系が「行為のかなり広範な潮流を左右して」おり、特に「勤労者達の意識の中へ植え込まれた」キリスト教道徳はこの意識の中で「行動の規範を作り出し」、なお依然として「強い生活力」を発揮しているにも拘らず、この「過去の遺物との闘い」に必要な「新しい倫理体系」はいまだに未完成であり、また「新しい道徳的伝統の研究が不十分」であり、「整然たる・実際に実現できる・全一的な道徳体系」が必要とされていると主張した<sup>14</sup>。また、集団主義の立場から、「自分の功德だけを思い煩っている」古いモラルを「徹頭徹尾、個人主義的」と批判し、若い世代を、マルクスの『ゴータ綱領批判』の中のテーゼ「各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」の意義を理解できる、自分の利益と共同の利益とを調和的

に結合させた人間に育てられる様な集団主義的倫理の必要性を説いた<sup>15</sup>。この様な問題意識や目標は後の1950年代から1960年代にかけての、グセイノフ監修教科書『倫理学史』の表現を借りれば、「道徳啓蒙期」において、教育学者兼倫理学者のアレクサンドル・シシュキン<sup>16</sup>(1902 - 1977)によるソ連初の道徳教科書『共産主義道徳の基礎』(1955年)、『マルクス主義倫理学の基礎』(1961年)の中で説かれている教義の中核を成している。

ただし、マカレンコとシシュキンとの間に見解の相違点があるとすれば、それは、マカレンコは、「歴史上にかつて存在した全ての道徳法典を、遙か後ろに、決定的に、引き離し、過去の遺物を壊滅させる様な、説得力と魅力ある共産主義的倫理が必要であると主張した<sup>17</sup>のに対し、シシュキンは、前掲の著書とは別の倫理学に関する著作の中で、倫理学の諸問題を究明する分野での重大な欠陥として倫理学説史の研究の立ち遅れを指摘し、過去の先進的な倫理学思想の歴史を研究することの重要性を強調した点である。シシュキンは次の様に述べている。「共産主義道徳は未来の全人類の道徳である。それは、過去の先進的な倫理学体系や道徳規範の中にあつた肯定的内容を発展させないわけにはいかない。従つて、共産主義道徳は、幾世紀にも亘つて既に存在している、人間の共同生活の不可欠な諸準則をも尊重する<sup>18</sup>。」換言すれば、マカレンコは過去の倫理学との決別、断絶を説くのに対し、シシュキンは過去の倫理学との継承性を重要視する、という様に、両者は過去の倫理学に対する評価において見解を全く異にするのである。

また、マカレンコの教育学的信念である「人間に対する最大の要求と人間に対する最大の尊敬」という主要命題<sup>19</sup>、及び、マクシム・ゴーリキーの『どん底』の中の「サチンの哲学<sup>20</sup>」に符合する、人間に対する尊敬というヒューマニズムの思想はカントの「人間を手段と看做すこと無く、常に目的と看做せ」という有名な格率とのセットで書かれている。この人間への無条件の尊敬というアイデアはその後ソ連倫理学が展開していく中で重要な位置を占めることとなる。

## (2) 1950年代におけるソヴィエト倫理学の基礎付け

前章で述べた様に、グセイノフによる1991年での時期区分では1950年代後半が第2期と第3期の間の空白期間となつてると同時に、来たるべき1960年代初頭というロシア・ソ連倫理學史上大転換を迎える直前の移行期に当たる。この節では、1950年代に起こつた出来事を追つてこの10年間に前半と後半に分けることの意義を問いつつ、何故1960年代にソヴィエト倫理学がその様な変容を遂げたのかを探りたい。

この1950年代の幕開けと共にソヴィエト倫理学にとって重要な著作が発表された。それは、スターリンによる『マルクス主義と言語学の諸問題』である。この論文は言語学が主要なテーマではあるが、スターリンは、この中で、単に国家だけに止まらず道徳を含む上部構造一般が土台にもたらず能動的な機能についての見解を出した<sup>21</sup>。このスターリン・テーゼにソヴィエト倫理学者達は研究に着手する口実を見出したのである。

実際に、その翌年には、ピョートル・シャリヤ<sup>22</sup>がこのスターリンの見解をベースに『共産主義モラル』という著作を出版した。興味深いことに、マルクス主義歪曲の形態の一つとしてカント派修正主義達のマルクス主義のカントの道徳学説による補足を挙げてはいるものの、マルクス主義には道徳もゆかりもないと考えたドイツのマルクス主義理論家カール・カウツキーに対する露骨な批判に比べれば、殆ど何の批判も為されていない。また、「モラルの特性は、(中略)常に内的衝動の形で現れるという点にある<sup>23</sup>」とも述べているが、まさにこれは「自分の

意志の格率が普遍的なそれになるように行為すべし」という純粹に内的な「要請」に従うことによって自由の根拠が認められる、というカントの考えに近似しているように思われる。加えて、彼は「生産的労働を含む人間の全ての種類の活動は、彼の肉体力と精神力との自由な創造的遊戯となるであろう。この様にして人間の生活は、その美を完全に發揮するであろう<sup>24</sup>」とも述べているが、これはまさにフリードリッヒ・シラーによるカント美学を発展させた著作『人間の美的教育について』を彷彿とさせる。更には、著書の一章丸ごと（第8章）が「現代ブルジョア道徳間の批判」の題目の下、カール・バルトやフランスの哲学者ジャック・マリタンといったキリスト教諸派の新しい動き、デューイ等のプラグマティズム、フロイド主義、実存主義、「右派」社会主義等といった、外国の道徳観の広汎で詳細な紹介に割かれている。

ところが、シャリヤはこの本を出版した翌年にミングレル事件で首謀者の一人として逮捕された。スターリンの死後釈放され名誉回復したが、1930年代後半以降ラヴレンティ・ベリヤの側近であったが故に、ベリヤの失脚に伴って再逮捕され、10年の禁固刑を受けた。彼のこの著作は国外ではヘルベルト・マルクーゼやユージン・カメンからによってソ連倫理学の好例として分析の対象となったが、ソ連・ロシア国内では現在に至るまで全く言及されていないので、当論文ではこれ以上言及しない。

マルクス主義倫理学に関する著作で、その後のソ連倫理学界に何らかの寄与をした著作が世に出たのは、スターリン死後の1954年のことであった。執筆者は、現在は性科学者として著名なイーゴリ・コーン<sup>25</sup>で、題名は『マルクス主義倫理学と義務の問題』であった。彼はこの論文の中で、ルナチャルスキーやカントが他律性をいかに解釈しているかを読者に紹介した。また、その他にもキリスト教道徳、功利主義、ラッセル、あるいは、チェルヌイシェフスキーの「理性的エゴイズム」といった、国外あるいは帝政時代のロシア・インテリゲンツィヤの考えを批判を通じて紹介している。ただ、この論文の最大の狙いは、「義務意識、責任感に欠ける」若人の出現は、共産党員の「子煩悩の父母が子供に規律を教えず」に奔放にさせていることに起因していることを指摘し、家庭における「意志的規律の教育」の必要性を説くことであったと思われる<sup>26</sup>。彼によれば、若い世代の間でのこういった義務意識の希薄化や責任感の欠如等は1950年代半ばにおいて社会問題化しており、既に何度かこの問題について何人かが論文を投稿していた様であり、共産主義道徳規範の明文化が求められていたと見ていいであろう。

地方の大学で倫理学に長年携わってきた、あるロシア倫理学者は当時の状況について次の様に回想している。「わたしが1950年代初頭にゴーリキー教育大学の大学院に進学した頃は沢山の哲学者がいたにもかかわらず、倫理学や道徳の理論的諸問題に取り組んでいる人物は誰ひとりとしていなかったし、倫理学をテーマにした卓越な著書を少しなりとも思い出すことができない。誰も倫理学を講じていなかったし、家族から国家・党まで誰も倫理学の問題について思案していた様子は無かった様に思える<sup>27</sup>。」この様に、地方の大学ではまだ全く倫理学の研究が行われていなかったのが、その当時の状況であった様である。

こうした社会的要請を受けてか、1955年には、前述した、シシュキンによるソ連初の道徳教科書が出版された。教育学者であった彼は、既に1938年からカントやドゥニ・ディドロ、ジャン・ジャック・ルソーの教育学に関する研究成果を公表してきており、教育学と倫理学の双方の視座に立ち、教育の現場での道徳の教授に即した実践的な内容となっている。この教科書で特徴的なのは、当時の愛国主義的な時代的背景もあって、外国の古典よりも寧ろ自国の先駆者であるチェルヌイシェフスキーの著作中の道徳に関する箇所への言及が多いことである。この

所謂「60年代人」の著作『何をなすべきか』を紐解きながら、普遍的利益を自らの利益と看做し、普遍的利益への奉仕を自己犠牲としてではなく、利己の行為として選び取ることができる人間像を提示している<sup>28</sup>。

チェルヌイシェフスキーの道德観に着目した他の著作に、『哲学の諸問題』誌に掲載された、ヴィクトル・クロチコフ（1924年生まれ）の論文「エル・フォイエルバッハとエヌ・ゲ・チェルヌイシェフスキーの倫理観における類似と相違」（1957年）がある。この論文の内容に関して特筆すべき点は、フォイエルバッハからチェルヌイシェフスキーへと受け継がれた道德的姿勢として人間的個性の自由の擁護を挙げ、ありとあらゆる自由の保障が個性の発展にとって不可欠であることを読者に訴えると共に、フォイエルバッハよりもチェルヌイシェフスキーの方に高い評価を与える根拠として、彼の道德理論の中心に立つ人物像として自己の人間的尊厳を擁護し得る人間を提示したことを挙げている点にある<sup>29</sup>。まさにこの2点が1960年代の精神的潮流の重要な要素であることを鑑みれば、この論文の持つ意義は大きいと言えよう。

上述した二人のソヴィエト倫理学者達と違って、中間的世代のヴァシーリー・ソコロフ<sup>30</sup>は寧ろ国外の古典への回帰に重点を置いた。時代が前後するが、彼は1955年に『スピノザの倫理的及び社会的見解』という論文の中で、「スピノザの倫理的理論は、道德的基準の源泉としての神を否定した所の最初のブルジョア倫理学体系の一つであった」と述べ、ベネディクト・スピノザが唯物論に基づいて倫理学論を展開したことを称賛した。また、彼は、スピノザの形而上学的観念である「人間本生」を擁護しつつ、それを自由や民主性と関連付け、スピノザの政治理論を紹介した<sup>31</sup>。歴史を紐解けば、ロシアでは、革命の前後でスピノザに対する公的評価が逆転するという現象が起きた。1897年から1917年までの間にスピノザの著作が8,000部出版されたのに対し、革命後の1917年から1938年までの間に55,200部も出版された。量のみならず内容も、革命前は汎神論が知識人の間で幅広く浸透していたが故に概して批判的・否定的なものが多かったが、革命後は逆に唯物論的側面が評価されて肯定的なものへと一変した。特に、1927年はスピノザ没後250年ということもあり、ソヴィエト出版界ではスピノザ関連の本や論文が数多く出版され、特に機械論者とデボーリン派の発言力が増大した。しかし、1929年には機械論者、31年にはデボーリン派が当局から「メンシェヴィキの観念論者」の烙印を押されて論壇から姿を消した<sup>32</sup>という経緯がある。このソコロフによる学術性の高い論文によってソ連哲学界にスピノザの倫理学が復活したと言ってもいいであろう。スピノザ研究はその後、ソコロフと同世代のヤコヴ・ミルネル＝イリーニン<sup>33</sup>やエヴァルド・イリエニコフらによって進展していくこととなる。

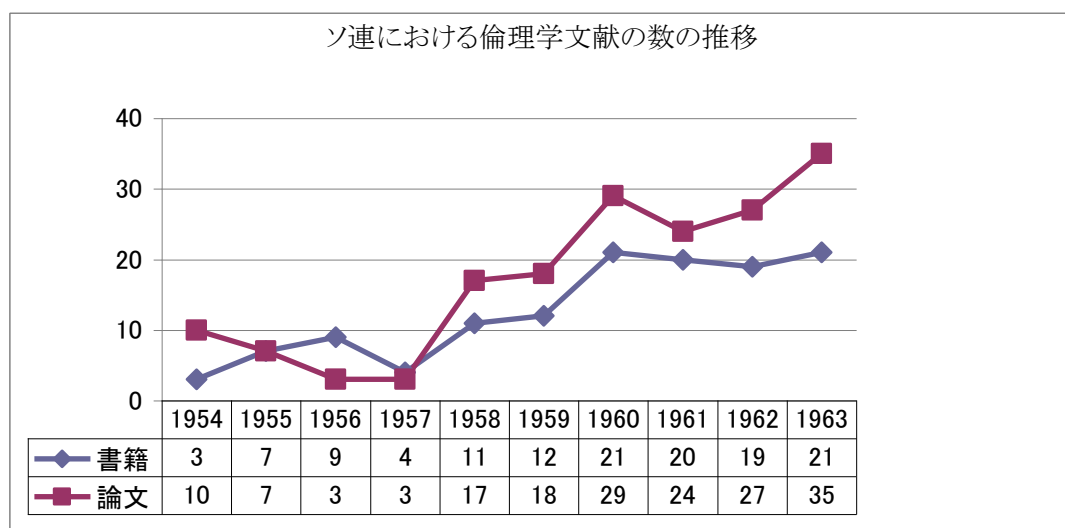
ナザーロフによれば、同年(55年)にミルネル＝イリーニンも『倫理学、または人間本性の真理の諸原則』と題した著書を執筆した。この著書の中で彼は、スピノザの定理と証明の形式を模倣しつつ良心を全人類的に性格付け、十の人間本性の真理の諸原則を提示した<sup>34</sup>。彼はこの原稿を出版社に渡したものの、出版禁止処分を受けていた為、出版社との闘争に8年を費やした揚句、60部限定という条件付きで1963年になってようやく出版にこぎつけた<sup>35</sup>。彼はこの著書によって一躍有名になり、この著書は1967年に論集『マルクス主義倫理学の今日的諸問題』<sup>36</sup>に彼のもう一つの論文「倫理学は義務に関する科学」<sup>37</sup>とともに再掲載された。

ところで、1958年から59年にかけて、ソ連の教育制度は全面的に大改革を加えられることとなるが、そのきっかけとなったのは、58年4月に開かれた全連邦コムソモール第13回大会におけるフルシチョフ演説であり、その中で彼は、肉体労働を敬遠し、「白い手」の職業に子供

のみならず親までもが憧れる風潮を批判した<sup>38</sup>。「全国的な議論」を経て、その翌年、1959年1月から2月にかけて第21回党大会が開催され、そこで学校と実生活との結び付きを強化していく、という党の道徳指針が示された<sup>39</sup>。

このフルシチョフ報告を受けて、翌月には早速レニングラード大学でマルクス・レーニン主義倫理学の諸問題に関する会議が開催され、『大学・専門学校の為の「マルクス主義倫理学原理」課程の教授要目草案』に関する討議が、ソ連邦高等教育省と、シシュキンが主任を務めるソ連邦科学アカデミー哲学研究所委員会のイニシアティブの下に行われ、そのテーマと時間配分が決められた<sup>40</sup>。また、倫理学の研究に当たっては教育学並びに心理学との提携が不可欠であるとの認識で一致を見た<sup>41</sup>。

この会議の結果を受けて、翌年の1960年にはモスクワ大学とレニングラード大学哲学部では倫理学の講座が新しく開設されることとなり、「マルクス・レーニン主義の基礎」というコースが導入された<sup>42</sup>。また、この1960年から『哲学の諸問題』誌においてそれまで史的唯物論の領域に含まれていた倫理学と無神論が「マルクス・レーニン主義の倫理学と科学無神論」という一つの新しい区分として独立を果たすに至った。



上の表はスターリン死去の翌年からフルシチョフが失脚する1964年の前年までに出版された倫理学の文献数を表したものである<sup>43</sup>。1958年以降倫理学の文献数が飛躍的に増加していったこと、及び、第21回、並びに、第22回党大会が開催された年はいずれも低調であることと1960年代前半は書籍の数が横ばいであることがこの表から見て取れる。

他方で、国外に目を転ずれば、1953年から東ドイツで出版されていた哲学雑誌『ドイツ哲学雑誌』(„Deutsche Zeitschrift für Philosophie“)で、1957年から倫理学に関する論文が掲載されるようになった。「新しい倫理学における人間学の意義について」という題名の論文を発表してその口火を切ったのが、日本にも哲学的人間学論に関する著作等が紹介されているルーマニアの哲学者、コンスタンチン・I・グリアンである<sup>44</sup>。

こうして、1950年代末にはソ連国内では党の指導の下、1960年代におけるソヴィエト倫理学が大きく進展を見せる下地が着々と作られていたのであり、党指導部と当時倫理学に携わっていた社会哲学の研究者達の多くが、謂わば、シンクロナイズして、ソヴィエト倫理学の基礎付けに着手していたのであり、また国外の社会主義圏でもほぼ時を同じくして、倫理学に関する研究が始まっていたのである。こうして、倫理学は1950年代末から理論系列の中の一つの独立

した補助仮説として着実にその厚みを増していったのである。次では、この 1950 年代の趨勢を受けて 1960 年代で大きな飛躍を遂げることとなる倫理学の展開を検証する。

### 第 3 節：1960 年代前半におけるソヴィエト倫理学の動向

ここでは、ソヴィエト倫理学がどの様に発展、乃至、変遷していき、倫理学研究の主な対象はどの様に推移していったのか、あるいは、拡がりを持つに至ったのか、また、それは主に誰によって担われたのかを検証することによって、ソ連における倫理学の思潮の変容を明らかにしたい。

ソヴィエト倫理学は、第 22 回党大会で採択された新しい党綱領の一部を成す、次の 12 項目にわたる道德規範を以って 1960 年代を迎えることとなる。

1. 共産主義の事業への忠誠心、社会主義祖国及び社会主義諸国への愛情
2. 社会の福祉の為の良心的労働、すなわち、働かざるものは食うべからざるの原則
3. 社会的財産を保持し、増大させる為の各人の配慮
4. 社会的義務に関する高度の自覚、社会的利益の侵害に対する不寛容。
5. 集団主義と同志的相互援助、すなわち一人はみんなの為に、皆は一人の為にという原則<sup>45</sup>。
6. 人々の間の人道的関係と相互尊重、人は人に対して、友人であり、同志であり、兄弟であるという原則。
7. 社会生活及び私生活における誠実と正義、道徳的な純潔、率直及び謙譲。
8. 家庭内における相互の尊敬、子供の教育に対する配慮。
9. 不正、徒食、不誠実、出世主義、食欲に対する不寛容。
10. ソヴィエト連邦諸民族の親和と友愛、民族的及び人種的反目に対する不寛容。
11. 共産主義、平和の事業及び民族の自由の敵に対する不寛容。
12. 全ての国の勤労者、全ての国民との兄弟的連帯。

この 12 項目を一読して思い出されるのは、作家イリヤ・エレンブルグの回想録『人間・歲月・生活』第 6 部「おわりに」の中の以下の件である。「フランスの学校では、教会の国家からの分離後、新しい科目 - 「道徳」が制定された。十戒はラフォンテーヌの寓話の助けを借りて面目を一新し、刑法の条文はユーゴーからの引用で飾られていた<sup>46</sup>。」つまり、ソ連の道德規範制定の背景、及び、内容はフランスのそれに近似している、ということである。ソ連では、十戒や山上の垂訓の倫理がマルクス・レーニン主義や、アレクサンドル・デュマの『三銃士』、幾多の内外の古典等から借用によって多分に脚色されて復活したと言っても過言ではあるまい<sup>47</sup>。と言うのも、社会主義は近代社会におけるキリスト教倫理へのなし崩し的な背理に対する批判という性格を持っているからであり、この道德規範はこの性格が前面に出たケースということができるからである。宗教が果たす機能を著者が分析するに、主に次の 3 つに分類され得ると考える。つまり、1) 様々な自然現象の説明と自然への懇願、2) 心の平安の維持、3) 道徳的規範の維持である。更に、社会体制と或る宗教あるいは宗派が結びついた場合には、4) その体制の正統化という機能をも果たすようになる。ソ連ではこの第 4 番目の機能は十月革命によって停止させられたが、上述したソヴィエト道德規範が示す様に、3 番目の機能故に宗教はマルクス・レーニン主義的にカモフラージュされた形でソ連社会に呼び戻されたわけである。ついでに言えば、2 番目の機能も精神的ないし靈的要素の重要性の強調という形で後にソヴィ



エト哲学界に復帰することとなる。

ソヴィエト倫理学者達にはこういった道徳的規範、倫理的基準、道徳上の戒めが党指導部から所与のものとして与えられた。彼らは先ず主に倫理学のカテゴリーについて議論を闘わせ始めた。例えば、1960年にはドゥロブニツキーの「マルクス主義倫理学における義務のカテゴリーに関する問題」が、翌年にはアルハンゲリスキーの「倫理学のカテゴリーの本質」が発表され、1965年にそれまでのカテゴリー論争を総括した、ハルチェフによる論文「倫理学のカテゴリーに関する議論の成果」が発表された。確かに、グセイノフが回想している様に、「ソヴィエト倫理学は公的イデオロギーによって決定されていたし、決定要因として他に数多くあったとしても、やはり常に決定的力があつたのは公式のそれであつた<sup>48</sup>」かもしれないが、官制イデオロギーの下、ある統一見解に収斂されることはなかつた。あるロシア倫理学者によれば、カテゴリー論争においてはソヴィエト倫理学者を次の三つのグループに分けることができる。第一は、慣れ親しんでいる史的唯物論を分析手段として用い続けようとするグループ、第二は、「新しい」カテゴリーの詳細且つ深い研究によって倫理学の発展を願うグループ、第三は、道徳の特性、その構造、そして、社会における実行の方法とに分類することによって、哲学的倫理学と倫理学の対象の理論的定義の形成を徐々に図るグループである<sup>49</sup>。

また、現代「ブルジョア」道徳概念への批判にしても、その批判の仕方によって倫理学者達を二つのグループに分類することができる。一つは、教条主義者達、もう一つはドゥロブニツキーやクララ・シュヴァルツマン(1918 - )らに代表される、20世紀の英米の優れた倫理学や、現代の外国の倫理学上の諸概念について優秀な分析を重ねていったグループである<sup>50</sup>。

ナザーロフは前述した時期区分の試みの中で、この1960年代を含む第3期を、倫理学の形成及び体系化の過程でのカントの諸原則への隠れた回帰（「倫理学におけるカント批判主義」現象）と特徴づけているが<sup>51</sup>、その様な一般化には疑問がある。確かに、例えば、シシュキンが党の意向を受けた仕事をする傍ら、カントへの回帰の道の露払いの役割をも果たしてきたし<sup>52</sup>、ドゥロブニツキーの様な次世代もカント研究に進んだ。しかし、既述した様に、主だったソ連倫理学者達はカントのみならず、スピノザやヘーゲル等といった古典や現代の外国の倫理学を研究していた。カントへの回帰の道を用意したシシュキン自身、ソ連では新分野である価値論を倫理学に積極的に取り入れた。要するに、1960年代にソヴィエト倫理学で生じていたのは、カントを含む欧米の多種多様な道徳法則によってマルクス主義の空隙を補填しようという試みであつたのである。

## おわりに

以上見てきた様に、1950年代から60年代にかけてのソ連倫理学界においてシシュキン等の革命世代とミルネル＝イリーニン等の、（マンハイムの用語を用いれば）「中間的世代」（1910年代～20年代初頭出生）が、次世代である、所謂20世紀の「60年代人」（例えば、グセイノフやドゥロブニツキー）、にとつて研究の基礎となる土台をつくつた。また、この革命世代や中間的世代はカントやスピノザ等といった、全人類的で形而上学的な古典への回帰、あるいは同時代の新思潮を参照するという方向付けを与えたのである。次世代の「60年代人」の多くは先達の路線を踏襲し、旧世代と共にマルクス主義の空隙を他の思想潮流で以つて補填することによってソヴィエト倫理学に多様性と重厚性を与えていったのであるが、彼らの間でどの思想潮流と調和させるかで見解が一致することはなかつた。

<sup>1</sup> ヤコヴレフ・ア「ソヴェト社会の新しい質的状态の達成と社会科学」『世界経済と国際関係』国際関係研究所訳編、第80集、1988、7頁。

<sup>2</sup> «Перестройка и нравственность» (Материалы «Круглого стола»), Вопросы философии, 1990, №.7, стр. 3 – 7.

<sup>3</sup> *Ibid.*, стр. 23.

<sup>4</sup> Назаров, Владимир Николаевич (1952 –) : ナザーロフは1975年にМГУ哲学部を卒業。1978年よりトゥーラ教育大学で教鞭をとっている。

<sup>5</sup> Гусейнов, Абдуслам Абдулкеримович (1939 –) : グセイノフは1961年にМГУ哲学部を卒業し、倫理学に関する著作を多数出している。1982年よりМГУ教授で、倫理学講座主任を務める。

<sup>6</sup> Gusejnov, Abduslam, „Zur Geschichte und aktuellen Situation der Ethik in der Sowjetunion“, Studies in Soviet Thought, Vol. 42, No. 1, 1991, pp. 195 – 206.

<sup>7</sup> Гусейнов, А.А., *Марксистские традиции в этике. 2000.*

<http://filosof.historic.ru/books/item/f00/s01/z0001048/st000.shtml> (2009/11/07)

<sup>8</sup> Гусейнов, А.А., *История этических учений: Учебник.*, Москва: Гардарики, 2003., стр. 861.

<sup>9</sup> Назаров, В.Н., «Опыт хронологии русской этики XX в.: первый период (1900-1922)», Этическая мысль. – Ежегодник, М.: ИФ РАН. 2000., стр. 109-110.

<sup>10</sup> Эленбург・イリヤ (木村浩 訳) 『人間・歳月・生活 第2部』, 朝日新聞社、1962年、157頁。

<sup>11</sup> 『レーニン全集』第31巻、大月書店、1959年、288–292頁。

<sup>12</sup> Луначарский А., «Мораль и свобода».

<http://magister.msk.ru/library/politica/lunachar/lunaa008.htm> (2009/11/07)

<sup>13</sup> Gusejnov, Abduslam, „Zur Geschichte und aktuellen Situation der Ethik in der Sowjetunion“, p. 201.

<sup>14</sup> 『マカレンコ全集 第6巻』明治図書、1965年、431–438頁。

<sup>15</sup> 同上。

<sup>16</sup> Шишкин Александр Федрович (1902 – 1977) : シシュキン は1921年にペトログラード校外教育大学に入学し、26年に卒業してから32年まで同大学で教鞭をとるとともに、28年から32年までレニングラード教育大学大学院で教育を受ける。1932年にヴォログダ教育大学の学長に就任し、哲学講座の主任教授代行を務める。1949年から1977年までモスクワ国立国際関係大学で哲学講座主任教授を務める。倫理学に関する著作を多数刊行した。

<sup>17</sup> 同上。

<sup>18</sup> シシュキン・ア・エフ「共産主義の建設とマルクス主義倫理学の若干の諸問題」『現代ソヴェト哲学 第5集』合同出版、1960年、161頁。

<sup>19</sup> 岩崎正吾氏によれば、彼のポルタワ高等師範学校での就学中に校長ア・カ・ボルニンから借用したものである。

<sup>20</sup> 「人間は、何事にも自分で勘定をつけていく、だから、人間は自由なんだ！人間—これは真実だ！（中略）人間は尊敬しなくちゃならねえよ。憐れむべきものじゃねえ…憐れんだりして安っぽくしちゃならねえ…尊敬しなくちゃならねえんだ！（中略）働け？何の為に？胃の腑を一ぺえにする為にか？（哄笑する）俺はな、腹一ぺえにする食うことばかりにあくせくしてやがる人間は、いつも軽蔑しているんだ。大切なことはそんなことじゃねいやい、（中略）人間はもっと上のものなんだ！人間は膨れた胃袋なんかよりずっと高尚なものなんだ！」

ゴリキイ (中村白葉 訳) 『どん底』第4幕、岩波文庫、1997年、149–150頁。

<sup>21</sup> 「ひとたびこの世に出現すると上部構造は極めて大きな能動的な力となり、自分の土台の形成と強化とに能動的に協力し、新しい体制が古い土台と古い階級を滅ぼし清算するのを助ける為にあらゆる手段を取る。」スターリン・ヨシフ (石堂清倫 訳) 「マルクス主義と言語学の諸問題」『弁証法的唯物論と史的唯物論:他二篇』、大月書店、1953年、567頁。

<sup>22</sup> ШАРИЯ Пётр Афанасьевич (1902 – 1983) : シャリヤはアブハジアのスフミ区の農村で貧農の家庭に生まれた。1918年まで村で働いた後1919年から20年にかけてスフミ市にある教師養成神学校で学ぶ。1920年ロシア共産党に入党。同年退学した後スフミ区の農村の学校に教師として勤務。21年から22年にかけてガリ市で政治的キャリアを積む。22年から23年にかけてトビリシ国立大学で学ぶ。24年から25年にかけてクルプスカヤ共産主義教育アカデミー (АКВ) で学ぶ。1925年からモスクワの複数の高等教育施設でマルクス＝レーニン主義の講師を務める。1931年グルジアに帰郷し、トビリシ国立大学で哲学史、弁証法的唯物論の教授、講座主任等を務める。1934年から党の仕事に移り、プロパガンダや扇動に従事。ラヴレンティ・ベリヤの側近となり、1938年内務人民委員部 (НКВД) 中央機関に入る。1943年から48年にかけてグルジア党中央委員会プロパガンダ・扇動担当書記。1948年から1952年にかけてトビリシ国立大学哲学部教授。1952年2月逮捕。1953年3月釈放。4月名誉回復し、人民委員会第一副議長補佐 (議長はベリヤ) に就任。6月再逮捕され、10年の刑を宣告される。1963年に釈放された後、トビリシでグルジア科学アカデミーに勤務。2012年に名誉回復。

<sup>23</sup> シャリア・ペ・ア (園部四郎 訳) 『共産主義モラル』筑摩書房、1952年、49頁。

<sup>24</sup> 同上、199頁。

<sup>25</sup> КОН Игорь Семёнович (1928 – 2011) : コーンはレニングラードに生まれ、1947年にゲルツェン教育大学歴史学部を卒業し、1950年に大学院を修了。1950年から52年までヴォログラード教育大学、1953年から56年までレニングラード化学・薬学大学、56年から67年までレニングラード国立大学に勤務。

<sup>26</sup> Кон, И. С., *Марксистская этика и проблема долга, Вопросы философии, №. 3, 1954.*

<sup>27</sup> Киселев В. П., гл. 12. этика, *Философия в российской провинции: Нижний Новгород: XX век* (под ред. Касьяна А.А.), 2003, стр. 181-2.

<sup>28</sup> Шишкин, А. Ф. *Основы коммунистической морали*, Москва, Госполитиздат, 1955, стр. 68-69.

<sup>29</sup> クロチコフ・ヴェ・エム (多和田栄治 抄訳) 「エル・フォイエエルバッハとエヌ・ゲ・チェルヌイシェフスキーの倫理観における類似と相違」『ソヴェト哲学 第4集』合同出版、1959年、238-239頁。

<sup>30</sup> СОКОЛОВ Василий Васильевич(1919-) : ソコロフは大祖国戦争に従軍し、1943年にモスクワ大学哲学部を卒業した後同大学大学院を1946年に修了。1950年より同大学哲学部外国哲学史講座の教授。

<sup>31</sup> ソコロフ、ヴェ・ヴェ「スピノザの倫理的および社会学的見解」(笠井忠訳)『現代ソヴェト哲学 1956年版』大月書店、188-197頁。

<sup>32</sup> Kline, George L., *Spinoza in Soviet philosophy : a series of essays, selected and translated, and with an introduction*, London, 1952, pp. 1-2.

<sup>33</sup> МИЛЬНЕР-ИРИНИН Яков Абрамович (1911-1989) : ミルネル=イリーニンはキエフ州に生まれ、1932年から35年まで工学・数学学部で学ぶ。1933年から哲学大学共産主義アカデミーで「スピノザの哲学」をテーマに選んで勉強する傍ら(35年迄)、体育高等学校で弁証法的唯物論と史的唯物論を教授する(36年迄)。36年末から43年まで党中央委員会付属出版所(Партиздат)哲学編集部主任。大祖国戦争ではモスクワ十月革命労働者大隊の一員としてトゥーラ州にて防衛労働に参加。1943年モスクワ大学哲学部で博士候補論文『ベネディクト・スピノザ』の審査をパス。1943年から48年までソ連科学アカデミー哲学研究所上級研究員。博士論文『スピノザの実体(субстанция)概念』を準備。1947年アレクサンドロフの著書に関する会議に参加して哲学研究所の哲学の状況を批判し、同研究所から解任される。1949年にはウラル国立大学哲学講座主任の職も失う。その後およそ15年間生活の糧が無く、学術的著作の出版も完全に不可能となる。1963年に60部限定の条件付きで彼が1931年に書き始めた著作が出版される。1964年からナウカ出版所編集部に勤務。1968年に再び出版禁止処分を受ける。

<sup>34</sup> а) 良心の原則, б) 自己改善の原則, в) 善の原則, г) 公共財産の原則, д) 勤労の原則, е) 自由の原則, ж) 崇高さの原則, з) 感謝の原則, и) 知恵の原則, к) 行為の原則。

Мильнер-Иринин, Я. А., *Этика, или принципы истинной человечности. Актуальные проблемы марксистской этики*, Ред. Г.Д. Бандзеладзе. - Тбилиси : Изд-во Тбил. ун-та, 1967., стр. 255.

フランスの露・ソ連哲学史研究者、ルネ・ザパタは自著の中で「I・A・ミルネル=イリーニンの論文は、文字通り(カントへの帰還)ということによって成立している。そこには、カントの《定言的命令》と酷似した十個の倫理原則が定式化されている」と述べているが、当該論文を読む限り、それは寧ろスピノザの倫理学、中でも『エチカ』の定理の形式に酷似している。

参照：ザパタ・ルネ(原田佳彦 訳)『ロシア・ソヴィエト哲学史』、1997年、144頁。

<sup>35</sup> Назаров, Опыт хронологии русской этики XX в.: второй период (1923-1959), *Этическая мысль. – Ежегодник*, М.: ИФ РАН. 2001., стр. 188.

<sup>36</sup> Мильнер-Иринин, *op. cit.*, стр. 253-302.

<sup>37</sup> Этика – наука о должном, стр. 15-58.

<sup>38</sup> 「(前略) 青年男女の中には工場やコルホーズ(集団農場)の作業に就くことを喜ばず、そうすることを自分自身に対する侮辱であると考えている者がある。子供達だけでなく、その両親の中にも労働に対して、蔑視的な態度を取る者がいる。わが社会主義体制のもとで、この様な状態に、これ以上妥協することができようか。教育と生産労働を直結する方向で教育制度を根本的に立て直さなければならない。」

<sup>39</sup> 「自由な人間の一切の優れた道徳的な諸特徴が完全に開花する、最も公正で、完全な社会、共産主義に到達する為には、我々は今から、未来の人間を育成しなければならない。ソヴィエト人の内に共産主義的特性を發展させなければならない。その基礎となるものは共産主義に対する献身とその敵に対する非妥協的な態度、社会的義務に対する自覚、社会の富を作り出す労働への積極的な参加、人間の共同生活における主要な規範の自発的遵守、同志的な相互援助、誠実で信頼できること、社会秩序の破壊者に対する憎しみである。(中略)『学校と実生活の結び付きの強化、我が国の国民教育制度の一層の発展について』という共産党中央委員会とソヴィエト政府のテーゼは、ソヴィエト連邦最高ソヴィエトで承認され、この問題について重要な決定がなされた。

(中略) 授業を実生活、生産、実地の共産主義建設と固く結び付けることは、学校で科学の基礎を教える根幹とならなければならないし、若い世代を共産主義的特性の気魄で育てる基礎とならなければならない。」

日本共産党中央委員会宣伝教育部訳編『ソ連邦共産党第二回大会』合同出版社、1959年。70-77頁。

40

テーマ1 : 科学としてのマルクス主義倫理学 (2時間)

テーマ2 : 社会的意識の形態としての道徳 (2時間)

テーマ3 : 自由と必然性並びに共産主義道徳の規準についての問題 (2時間)

テーマ4 : 人類の道徳的進歩の最高段階である共産主義的道徳 (2時間)

テーマ5 : 共産主義的道徳の原理 (6時間)

テーマ6 : 共産主義的道徳のカテゴリー (2時間)

テーマ7 : 道徳的諸性質と共産主義の為に闘う闘士の性格の特徴 (2時間)

テーマ8 : 社会主義社会の生活様式と家族の道徳の特徴 (4時間)

テーマ9 : 共産主義道徳の精神に拠る勤労者教育の諸問題 (6時間)

テーマ10 : 現代ブルジョア倫理学=哲学体系の批判 (4時間)

<sup>41</sup> エフィモフ、ヴェ・テ、(林礼二訳)「マルクス=レーニン主義倫理学の諸問題に関する学術会議」『現代ソヴェト哲学 第五集』、162-168 ページ。 / 「大学・専門学校の為の「マルクス主義倫理学原理」課程の教授要目草案」、同上、168-179頁。

- <sup>42</sup> Назаров, Опыт хронологии русской этики XX в.: третий период (1960-1990), *Этическая мысль*. Вып. 4 – Ежегодник, Москва: ИФ РАН. 2003, стр. 186.
- <sup>43</sup> ソヴィエト倫理学研究者リチャード・T・ジョージが論文で記した数値を基にしたものである。  
De George, Richard T., Bibliography of Soviet Ethics, *Studies in Soviet Thought*, III, 1, pp. 83-84.; Soviet Ethics and Soviet Society, *Studies in Soviet Thought* IV, 3 (September 1964), pp. 206, 215.
- <sup>44</sup> Gulian, C.J., Über den Sinn der Menschenkenntnis in der neuen Ethik, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 5. 1957. S. 40-49
- <sup>45</sup> アレクサンドル・デュマ作『三銃士』に登場するこの文句はレーニンが既に 1920 年に「モスクワ＝カザン 鉄道における最初の土曜労働から全露 5 月 1 日土曜労働まで」で引用し、「我々はこれから、「全ての者は一人の為に、一人の者は全ての者の為に」と考える習慣を意識の中に植え付け、大衆の日常家事の中にこの格言を植え付ける為に働くであろう」と述べた。参照：レーニン『全集』第 25 巻、第 3 版、256 頁。
- <sup>46</sup> エレンブルグ (木村浩 訳)『人間・歳月・生活 第 6 部』、朝日新聞社、1968 年、574 頁。
- <sup>47</sup> 党の新綱領作成チームの一人であったフォードル・ブルラツキーは、モスクワ郊外にあるゴリキーの元別荘で綱領作成グループの副長、エリザール・イリイチ・クスコフ (Елизар Ильич Кусков) のもとでこの道徳規範を作成した際に、自分がモーゼの十戒やキリストに由来する必要性を説き、共産主義イデオロギーに意識的に宗教的要素を加えた、とインタビューに答えたが、真偽は定かでない。参照：Судьба дала мне шанс (Беседа глав. ред. журнала “Российский адвокат” Р. А. Звягельского с Ф. М. Бурлацким), *Российский адвокат*, № 5, 2007.: <http://gra.ros-adv.ru/magazine.php?m=60&a=3> (2012-12-18)
- <sup>48</sup> Gusejnov, „Zur Geschichte und aktuellen Situation der Ethik in der Sowjetunion“, pp. 195 – 196.
- <sup>49</sup> Апресян, Р. Г., Три понятия морали Абдулама Гусуйнова, *Российская философия продолжается : из XX века в XXI*, под редакцией, Б.И. Пружинина, Москва, 2010, стр. 262-263.
- <sup>50</sup> Бондаренко, Л. И., Перов, Ю. И., Марксистская этика в СССР, *Русская и европейская философия: пути схождения*, [http://www.anthropology.ru/texts/perov\\_v/ruseur\\_01.html](http://www.anthropology.ru/texts/perov_v/ruseur_01.html) (2010/11/18)
- <sup>51</sup> Назаров, Опыт хронологии русской этики XX в.: первый период (1900-1922), стр. 110.
- <sup>52</sup> 例えば、ヴラディミール・ブリュムキン (1931 – 1990) は論文「人間の価値 (尊厳)」の中で、「「あなたが人々からその様に扱われたいと欲する様に、あなたはその人々を扱いなさい」という様な、所謂「黄金律」には、宗教的及びブルジョア的なモラルに、一手販売権を与える様な、いかなる根拠もない。(中略) この規則は、我々の社会で、それに従ってそれぞれの人間が自分の行為を点検する諸規則の中の一つとして役立ち得るし、また、役立つべきである。」と、かなり勇気を必要とする様な記述をしているが、その最後にシシュキンの著作から参照したことが付記されている。  
ブリュムキン・ヴェ・ア (西牟田、笠井 訳)「人間の価値 (尊厳)」、ソ連科学アカデミー哲学研究所編『社会主義と個人』勁草書房、1970 年、315 – 316 頁。

## 第3章：ソヴィエト意識論

### 序論

意識は 1954 年に出版された『哲学事典』では「客観的实在の反映の最高の形態であって、人間に固有なもの」であり、「人間の脳髄と呼ばれる、特に複雑な物質の塊の機能である」と冒頭で定義付けされている<sup>1</sup>。それから約十年後の 1963 年に刊行された哲学辞書でも冒頭に同じ定義が為されているが、後半の、レーニンの『唯物論と経験批判論』からの引用箇所は削除されている<sup>2</sup>。ミハイル・ゴルバチョフ書記長の許で補佐官や、『コムニスト』誌、並びに、『プラウダ』紙の編集長を歴任した所謂「60 年代人」の一人、イワン・フロロフ(Иван Т. Фролов)の監修による『哲学辞書』第 4 版(1980)でも意識の定義は 1963 年版のままである。

1989 年にフロロフの監修の許編纂された高等教育機関用の教科書『哲学入門』(*Введение в философию*)が出版された。その第 11 章で展開された意識論の内容を、ケルン大学のアッセン・イグナトフはその翌年に批評して、1958 年に出版された哲学教科書『マルクス主義哲学の基礎』(*Основы Марксистской философии*)のそれを殆ど踏襲したものに過ぎず、唯一の変化は自己意識に関する記述が特別扱いされており、そこでは、存在と意識という従来の二項対立の図式が疑問視されているという点だけであったと総括している<sup>3</sup>。すなわち、1950 年代のソヴィエト意識論の中核はソ連末期に生じたイデオロギー上の変革後もなお存続し続けたのである。

しかし、同じフロロフの監修による『哲学辞書』第 8 版(2009)では、冒頭の定義に「人々の社会的・歴史的活動の普遍的諸形式を媒介した、世界、並びに、自分自身への自分の関係の仕方<sup>4</sup>」という定義が追記されている。

マルクス哲学研究家田畑稔氏は、マルクスとエンゲルスの共著である『ドイツ・イデオロギー』における意識の端初規定をマルクスの加筆箇所をベースに定式化して、「自分を取り囲んでいるものに対する自分の関係が自分自身に対して関係として現存する (Für ihm selbst existiert sein Verhältnis zu seiner Umgebung als Verhältnis.) というあり方が意識である<sup>5</sup>」というのがマルクスの見解だと主張している。この田畑氏の主張は、『経済学哲学草稿』、『ドイツ・イデオロギー』、並びに、『資本論』でのマルクスによる意識規定を重視し、『経済学批判』序説でのマルクスの規定を軽視した結果として導き出された結論である。第 8 版『哲学辞書』(2009)で追記されている定義が、田畑氏が主張するところのマルクスの見解に近似しているということは、ロシア哲学界主流の意識解釈が、マルクスの『経済学批判』序説での定義から派生したマルクス＝レーニン主義のそれから『ドイツ・イデオロギー』執筆時のマルクスの定義へとソ連崩壊から 20 年近く経てから部分的に修正されたことを意味している<sup>6</sup>。

それでは、そもそもフルシチョフ期に補助仮説から核心的教義の一部へと組み込まれた、「ヒューマニズム」という理論系列の構成単位の一つとなった意識論は、どの様な人々によって形成され、発展していったのであろうか。1959 年には第 21 回党大会で党第一書記ニキータ・フルシチョフによって国民の旧態依然たる意識の変革の重要性が指摘された。1961 年に開催された第 22 回党大会で採択された新しい党綱領は、共産主義社会建設を担う新しい人間を育成することを党のその後の課題と定め、その中の一つとして、社会主義意識の育成を挙げ

ている。その後、『哲学の諸問題』誌に掲載された巻頭論文では意識育成という任務を遂行するうえでの理論的基礎付けが哲学者達に今後の重要課題として提示した。以上のことから著者は、意識論は、フルシチョフ指導部のもとで公式にイデオロギーの一部となった、「ヒューマニズム」という核心的教義の理論系列の一構成単位として組み込まれていき、その理論の発展が哲学者達に課題として提示された、とみる。

この章では、フルシチョフ期にソヴィエト哲学者達が、「ヒューマニズム」という核心的教義の理論系列の一構成単位として組み込まれていった意識論を形成し方向付けていく過程を、MSRP 理論の観点から検証することを通じて、明らかにすることを課題とする。

## 第 1 節：1950 年代における意識論の基礎付け

1989 年の哲学教科書と殆ど内容的に変わらない 1958 年の哲学教科書『マルクス主義哲学の基礎』で展開されている意識論は、そもそもの様な思想的動向の中で、主にどの世代によって形成されたのであろうか。本節では、フルシチョフ期の哲学者達は、どの様な思想的動向の環境の中で各自の意識に関する思考を形成していったのか、何故意識を重視したのか、どの方向に議論を導いていったのかを、世代論の観点から世代間の知的継承関係を明らかにしながら、検証する。

### (1) 第 20 回共産党大会（1956）までのソヴィエト意識論

1955 年 4 月はレーニン生誕 85 周年を契機に「レーニンへの回帰」ムードが高まる中で、哲学界では彼の『唯物論と経験批判論』及び『哲学ノート』への関心が高まった<sup>7</sup>。レーニンは前者の中で、ボグダーノフによるマルクスの『経済学批判』序文（「人間の意識が各人の存在を規定するのではなく、逆に各人の社会的存在こそが各々の意識を規定する」）の理解に対して批判した文脈の中で、社会的存在と社会的意識とを同一視すべきでない<sup>8</sup>と述べ、社会的意識は社会的存在の反映であり、社会的存在は社会的意識から独立していると主張した。加えて彼は、「史的唯物論は、社会的存在を人類の社会的意識から独立したものと認める。意識は、どんな場合でも、存在の反映、せいぜい近似的に正しい（適切な、理想的に正確な）その反映に過ぎない<sup>8</sup>」と、意識と存在との関係を史的唯物論の観点から定式化した。レーニンはその後『哲学ノート』の中のヘーゲルの『論理学』の摘要に「人間の意識は客観的世界を反映するだけではなく、それを創造し<sup>9</sup>」と書き込み、以前の自身の反映論を修正し、存在に対する意識の能動的な機能を認めた。

スターリンは、晩年の 1950 年に「マルクス主義と言語学の諸問題」と題した論文の中で、道徳等の社会的意識を含む上部構造一般が土台にもたらず能動的な機能についての見解を出した<sup>10</sup>。その年の 11 月に公開された哲学教科書『史的唯物論』（コンスタンティノフ監修）では、土台と上部構造の関係に関する記述の中で、「社会の上部構造は社会の土台の結果であり反映であるが、ひとたび発生すると、自ら能動的な力となり、これを生み出した経済的土台に反作用を及ぼす<sup>11</sup>」という見解が導き出され、その土台と上部構造との新しい関係付けが存在と意識との関係に適用され、「社会的存在に対する社会的意識の反作用」というテーゼが提示された<sup>12</sup>。この「社会的存在に対する社会的意識の反作用」というテーゼは 1956 年のスターリン個人崇拜批判後も哲学界で公式見解として継承され続け、それを理論的根拠として意識の主体性の重要性がフルシチョフ期に議論されることとなった。

レーニン、著書『何をなすべきか』で、資本主義社会における雇主との闘争の中での労働運動の意識性と自然発生性との関係について叙述した箇所、有名な階級意識外部注入論<sup>13</sup>を展開した。この見解に則り、社会的意識を社会的存在から立ち遅れているプロレタリアートに注入するのが共産党の役割と看做されていた<sup>14</sup>。従って、1936年にソ連で制定された、通称「スターリン憲法」第126条<sup>15</sup>で、同国における共産党の指導的役割が法的に規定された。

『哲学の諸問題』誌で初めて意識に関する論述は、読者からの、社会発展における意識性と自然発生性との相互関係が社会主義のもとではどの様になるか、等といった質問に対する回答という形で、1956年第1号に掲載された。この質問に回答したのは、前年の『コムニスト』誌（№3）に民衆の役割論に関する論文が掲載されたグリゴリー・グレーゼルマンである。彼は読者に対する回答の中で、レーニンのこの意識注入論を回避して、エンゲルスの『自然弁証法』の序論から、社会発展における意識性と自然発生性の本質を次の様に解釈した。すなわち、意識性は、人々が前もって立てた目的に照応して、計画的に実現することであり、自然発生性は、これとは逆に、「人々の活動の結果が、彼等が立てた目的に照応しない時に起こる。」この後で、グレーゼルマンは、人々の「社会の発展においては、意識性を個人的意識の観点ではなく、社会的意識の観点から見なければならない」こと、「歴史においては意識性にもまた自然発生性にも、様々の程度がある」こと等を指摘する。彼はこの意識性に関する論文の中でも人民の創造性やイニシアティブを重要視し、官僚主義的な中央集権化をソヴィエト社会から廃絶する必要性を訴えることを忘れない。彼は、まだ資本主義の旧弊から解放されていない社会主義「社会の発展における自然発生性から意識性への移行」にとって、前衛党としての共産党の指導のみならず、「大衆の意識的活動、創造的イニシアティブ」が必要不可欠であることを繰り返し主張するのである<sup>16</sup>。

## (2) 第20回共産党大会後1950年代後半の哲学界での意識論の基礎付け

第20回党大会以前にもこうした大衆の役割論の観点から意識に関する議論はあったが、党大会後に、倫理学と同様、意識論もまた意識のカテゴリーに関する議論からその端緒が開かれた。この党大会が開かれた1956年に、旧世代に属するヴァシリー・トゥガリノフ<sup>17</sup>は諸々の概念の範疇について論述した自著の中で、意識と思考とは全質料の性質（*свойство*）である、と意識を定義付けている<sup>18</sup>。意識の属性（*атрибутивность*）を認めることはその超越を否定して、内在を認めることを意味している。レーニンは、『哲学ノート』の「ヘーゲルの著書『論理学』の摘要」の中で、人間の意識を自然に対して外的なものであると看做しているが、トゥガリノフのこの存在論的主張はレーニンの見解への不同意を意味している。

『哲学の諸問題』誌に初めて意識、就中、社会的意識に関する論考が登壇したのが、ヴラディ斯拉フ・ケルレ<sup>19</sup>とマトヴェイ・コヴァリゾン<sup>20</sup>の二人による共著「史的唯物論のカテゴリー」と題する論文であった。この中間的世代の二人は、1950年代後半以降、意識論に関する著作を共著の形で定期的に発表し続けていくこととなる<sup>21</sup>。

上述の論文の中で二人は、社会的存在と社会的意識との関係性を史的唯物論から導き出す為に、先ず、歴史過程の特殊性を反映しているか否かに弁証法的唯物論のカテゴリーと史的唯物論のカテゴリーとの間に差異を見出した上で、史的唯物論によって意識等のカテゴリーを具体化し、社会的存在と社会的意識との関係を解明する為に、それらが本来属する所の弁証法的唯物論のカテゴリーを社会生活に押し広げることを提唱する<sup>22</sup>。次に、彼等は、社会的意識とイ

デオロギーとを同一視する見解に対して反論すると共に、社会的意識はイデオロギーを含むというこの両者間の包含関係を主張し、前者の内容はある一定の階級の利害を表現するイデーを超越したものであると述べる<sup>23</sup>。こうして予め予防線を張ってから、この執筆者達は、当時流布していた史的唯物論＝社会学という見地から、社会的存在と社会的意識というカテゴリーの関係の社会学的解明に着手し、社会的存在がどの様にして社会的意識を生み出し、これを規定するかを示すことを、その後のソヴィエト学界における一般社会学の課題として提示したのである<sup>24</sup>。

この論文と同じ号に旧世代の教育学者兼倫理学者のアレクサンドル・シシュキンによる「共産主義道徳の理論の幾つかの問題」という題の論文が掲載されている。この中で彼は道徳を芸術・科学等といった社会的意識の諸形態の一つと捉え、その他のあらゆる形態と同じ様に、道徳は人間の社会的存在を反映していると述べている<sup>25</sup>。先ず初めにこう規定することによって、彼は「特別な科学」である倫理学の対象として道徳を研究する正当性と必要性を説く。また、彼は意識と良心との関係について次の様に述べる。「良心は、人間が、他の人々や社会（階級）に対して自分の行動についての道徳的責任を意識すること、他の人々や自分の民族（階級）や人類に対して責任を意識することである<sup>26</sup>」。彼による意識と良心との関係付けは倫理学の分野においてその後の道徳意識の研究の基礎付けとなっただけでなく、ソヴィエト哲学者メラブ・ママルダシュヴィリ<sup>27</sup>にも引き継がれた<sup>28</sup>。

その次の第5号には、ソヴィエト科学アカデミー経済学・哲学・法学部会の総会で、中間的世代のミハイル・イオフチュク（1908－1990）による社会思想史の研究プランに関する報告が掲載された。プレハーノフがロシアにおけるマルクス主義思想において果たした役割に関する研究と著作の出版の必要性を力説したこの報告の中で、彼もまた、凡ゆる社会意識形態の発展の合法則性に関する問題に関する研究の不在とその必要性を訴えた<sup>29</sup>。

1958年の年頭には旧世代のヴァシリー・トゥガリノフ<sup>30</sup>による、グレーゼルマンが指摘した意識の発展の段階性を具体化する論文が『哲学の諸問題』誌に掲載された。彼は、レーニンが『「人民の友」とは何か』の中で社会における人々の意識の二つの水準、二つの段階をはっきり区別したと、先ず自分の見解の正当性を強調してから、勤労者の階級的意識をその本性によって、社会的・政治的に意識ある人々と、政治に無関心であったり、意識が低い人々との二段階に区別する必要性を訴える<sup>31</sup>。

1959年にはケルレとコヴァリゾンのコンビは社会的意識の諸形態に関する著書『社会的意識の諸形態』を出版した<sup>32</sup>。（この書籍は日本では入手できないので、代わりにここでは1963年に出版された小冊子版『社会的意識とその諸形態』の内容を検証する。）この書はマルクスが『経済学批判』の序言で言及した社会的意識の諸形態に関してある程度詳述した点において意識論に寄与した。

この二人はイデオロギーの諸形態として政治的見解、法意識、及び、道徳的意識を挙げ、また、非客観的知識であり倒錯した意識として、宗教をイデオロギー形態の一つに数える。反対に、客観的知識として彼等が挙げるのが、政治的、道徳的、美的、哲学的見解である<sup>33</sup>。

この著者達は、社会が共産主義へ移行するとともに、社会的意識の内容のみならずその形態にも質的变化が生じることに注意を喚起し<sup>34</sup>、社会的意識の諸形態を論ずることの重要性を訴える。社会的意識は人々の社会的存在の所産であり、反映であるというマルクス＝レーニン主義的公式見解を念頭に置いて、彼等は先ず反映の形態について論じ、「科学と哲学は論理的観



念、法則、理論の形態における客体、道德、芸術、宗教を反映する」という反映の形態における相互の関係について述べたうえで<sup>35</sup>、論述を社会的意識の諸形態間の関係へと進める。

ケルレとコヴァリゾンによれば、社会的意識の諸形態間の基本的な相違は相対的なものであり、且つ、「倫理学は道德的意識の一部であると同時に、道德に関する哲学と科学の一分野でもあり、美学は特別な科学であるとともに哲学の一分野でもある」、といった様に、意識の諸形態は相互に入り込んでいる<sup>36</sup>。この二人はこうした社会的意識の相互関係を明らかにした上で、次に、社会的意識の諸形態と政治的イデオロギーとの間の影響関係に言及する。政治的イデオロギーは法律や法意識だけではなく、その他の、道德や哲学、宗教といった上部構造の諸要素にも影響を及ぼし、政治は社会科学の内容に著しい影響を及ぼすといった、政治的イデオロギーからその他への影響のみならず、科学や哲学といった意識の諸形態の側からも政治的イデオロギーに影響を及ぼす、という逆の作用もあることを指摘した。更に、一般に任意の段階の社会的意識の各形態は他の全ての形態に影響を及ぼし、その形態自体もまたそれ以外の諸形態からの影響を被る、という諸形態間の関係性についても彼等は論説を披露した<sup>37</sup>。

その後このコンビは、法意識、道德意識、宗教的意識、哲学意識等といった社会的意識の各形態について、プロパガンダ活動に従事する共産党分子が一般大衆の聴衆を前に共産主義的啓蒙活動をする為の手引書という形式で解説を進めていく。彼等は、プロレタリアの日常意識はプロレタリアートの利害と資本家の利害の決定的対立の科学的意識にまで高められることはあり得ないと述べるが<sup>38</sup>、こういった立場は、勤労者側の自発的な意識の発展の可能性を否定したレーニンの意識外部注入論そのままであり、この二人組が党に忠実なイデオログとして意識論の論議に参加していることが明らかである。

尤も、他方で、この二人組は、社会的意識と並んで個人的意識も存在することを認め、社会的意識との関係についても言及した。彼等は、個人的意識と社会的意識とは弁証法的統一の中で存在し、この両者は不可分であると述べつつ、前者は後者の単なる一部ではなく、個人の精神世界であり、それは共通の時代や階級、国家、及び、個人的な生活環境の影響下で形成されると主張する<sup>39</sup>。個人的意識の存在を認めるこの見解は、後述する様に、後に 1958 年に出版される哲学教科書に掲載され、公式見解となる。

この様に、ソヴィエト哲学界では 1950 年代後半には既に（社会的）意識に関する研究が旧世代によって着実に進められつつあり、それは同時にソヴィエト意識論の枠を拡張させた。

### (3) セルゲイ・ルビンシュテインによる心理学的観点からの意識論

こうした哲学界での意識論の基礎付け・方向付け作業が第 20 回党大会直後からあったものの、社会的意識の分析に偏り過ぎるきらいがあった。この理論の発展にとって大きな役割を果たしたのは心理学者で旧世代に属するセルゲイ・ルビンシュテイン<sup>40</sup>（1889 – 1960）であった。彼が晩年に著した『存在と意識』（1957）はその後のソヴィエト哲学界における意識論の礎となった。翌年に『哲学の諸問題』誌上に掲載されたこの著作の書評では「哲学的教養の水準の高いことが、この本の良い面での特徴である。マルクス＝レーニン主義哲学の諸命題が、引用の形式ではなく、考察と議論の自己の論理において表現されている<sup>41</sup>」という評価が為されている。

心理学の分野では既に 1930 年代半ばにその創始者の一人であるレフ・ヴィゴツキー（1896 – 1934）によって、高度に複雑な人間に特有な形式の意識的活動の因果論的説明に対して唯物

論的、決定論的にアプローチすることを保障するという課題に関する基本的命題が出されていた。その命題とは「人間の非常に高度な形式の意識生活を説明する為には、有機体の粋を超え、その意識的活動、「カテゴリー的」行動の源泉を、大脳の奥底にではなく、精神の奥底にでもなく、外的な生活条件、先ず第一に、社会生活の外的諸条件、人間の存在の社会・歴史的諸形式に求めなければならないという点に在る。」同世代の心理学者アレクサンドル・ルリヤ(1902-1970)はこの定式を「心理学の対象は、内的な世界そのものではなく、外の世界の内の世界への反映、換言すれば、人間と現実との能動的な相互作用である」と解釈する<sup>42</sup>。ヴィゴツキーにせよ、ルリヤにせよ、あるいは彼等の同僚であったアレクセイ・レオンティエフ(1903-1979)にせよ、このトリオの研究対象は言語と意識との関係に留まっており、その分野は哲学にまでは及ばなかった。その点がルビンシュテインとこの三人の心理学者達と大きく異なる点であり、彼がソヴィエト哲学界の中で現在に至るまで巨星たる所以である。

先ずは心理学者としての見地から、彼は人間による環境的世界の意識化の過程を中心的な心理学的問題として洞察するが、この著作が優れている点は寧ろ、英米で主流となっている言語形式の分析に焦点を合わせた分析哲学と、欧州大陸で主流となっている人間の実存や経験に焦点を合わせた哲学の双方を取り入れて分析・総合している点である。確かに、1954年に刊行された前述の『哲学辞書』での意識の項目にも意識とこの双方、すなわち、言語並びに存在との関係に関する少なからぬ記述がある<sup>43</sup>。また、それは『ドイツ・イデオロギー』<sup>44</sup>での叙述<sup>45</sup>に基づいている。しかし、ルビンシュテインによる論述はマルクスとエンゲルスによる素人的な思いつきを学術的なレベルに引き上げた考証である。

彼は、一方で、意識発生の必要条件としての言語を分析して、意識化を「言葉の内に客観化されており社会的に仕上げられた社会的知識を媒介として、客観的実在を反映すること」と定義し、その様に社会的に蓄積された知識が意識の軸であると指摘すると共に、言語を社会的な個体としての人間の意識の社会的形態と位置づける<sup>46</sup>。また他方では、彼は意識の発生と形成過程を人間という存在の形態、人々の生活における無意識的な体験からの世界と自己自身に対する反省の選別、及び、社会的に組織された活動、労働における直接的な体験といったプリズムを通してその説明を試みる。

彼は、意識の発生を、意識的動作、意識的行動の発生であり、意識的行動、意識的活動とは人間の生存の特殊な様式であると解釈し<sup>47</sup>、この意識の生成と道徳的意識とを関連付けて、意識の生成は人間という新しい存在形態の生成と結びついており、この新しい形態の主観は、自己本来の個々別々の生存という限界を超えて、世界、他の人々への自己の関係を理解し、自己の生活を義務に従わせ、全ての為したこと、及び、手抜きしたこと責任を負い、自己の前に課題を提起することができる<sup>48</sup>、と述べる。

意識と存在との関係について、彼はデカルトの立場とロックの立場とを対比させ、その本質的差異を主に「生得」観念に対する彼らの態度の中に見出し、後者が生得観念を否定したことによって、前者と異なり、「心理的なものを感覚又は反省の過程と看做すという、すぐれて機能的な態度への道を切り開いた」とし<sup>49</sup>、その後の実験心理学へのロックの貢献を高く評価する。また彼は、フッサールの現象学的存在論を批判してその欠点を次の様に指摘する。「経験的(心理学的)態度と区別された、意識と存在の問題に対する哲学的(現象学的)態度の第一の前提は、フッサールによれば、世界が括弧に入れられる(*unter Klammern gesetzt*)ということが為されるや否や、世界は意識にとって「世界」の意味に、すなわち、意識によって「定

められる」あるものに転化してしまう<sup>50</sup>。こうした彼の所謂「ブルジョア」意識論の紹介と分析は当時のソヴィエト哲学界にとって、ある意味で貴重な情報源である。

加えて彼は、自己意識についても触れ<sup>51</sup>、「人間は、その行為の動機になっている自己の体験を自覚した後には、それを自覚しなかった人とは違った行為をする、という点にこそ、自己意識、自己観察の行為の客観的存在がある。そして自己観察そのものにおいて、真理的なものの存在はその所与を体験している主観に帰着しない<sup>52</sup>」、と主張して、心理的なものの主観性と客観性に関する内観説に反論し、その対論である反映論を擁護する。

彼は更に、自由と決定論が両立可能であり、自由であることの反対は強制や強要であると考えた立場から、人間の自由は、自分の行動の路線を自ら決定し、この路線と両立し得ない凡ゆる解決を斥ける、という可能性の内にある<sup>53</sup>、と自由を解釈する。彼は、サルトルの自由理解は凡ゆるものからの自由や何ものにも拘束されないということではなく、自分に無理に押し付けられるものを拒むだけに過ぎないという点で消極的であると批判する。他方でルビンシュテインは、「凡ゆる否定は何らかの主張を潜在的に含んで」おり、「たといそれが何であっても、何ものにかに反対する凡ゆる闘争は、究極的には、何ものかを目指す闘争に変わり、またその様な闘争として解明される<sup>54</sup>」と、婉曲的・消極的にサルトルの自由理解に賛同する。

また一方で彼は、上述した可能性は強制に敵対しており、この「実在的な面でその可能性を擁護しなければならないのは、(中略)あらゆる種類の人間の奴隷化及びそのあらゆる手段との闘争によってである」と述べると共に、「人間の内的自由は、強制が支配しているという諸条件のもとでは、容易に幻想に転化する<sup>55</sup>」とその危険性を訴える。また別の箇所では、人間は「禁止と強制の枷をはめようと常にしている、盲目的で粗野な力からの自己の自由を守らなければならない<sup>56</sup>」とも述べる。

彼はこの自由論の展開の中で自由と必然性との関係について言及し、自由とは「意識化された必然性」であると主張する命題に賛同し、人間の自由は絶対的ではなく、客観的必然性の枠内にあるのであって、この必然性を知ることが自由の条件である、と説く<sup>57</sup>。

最後に彼は倫理的見地から、人間の自由な意識的行動と道徳的責任との関係についての考えを展開させる。彼によれば、まだ実在化されていない現実、(具体例を挙げれば、締切までに原稿を遅れずに提出するといったこと)が、それによって現実が実在化される場所の諸行動を決定する(上に挙げた例の場合、連日ひねもす執筆に従事するといった行動を決定する)。通常の依存関係のこの転倒が、意識の中心的な現象であり、この決定の内には、決意が含まれている。行動は主観に依存しており、主観によって規定されているからこそ、ある人によって遂行される行動がその人を表す指標であり得るのであり、人間は自分の行動に対して責任がある。ただし、振る舞いを評価するに当たっては、「客観的に結果として起こったことの中から予見されることのできたことからだけ、出発するのが正当である<sup>58</sup>」と述べて、彼は主観的企図と行動の客観的成果との止揚を図る。この考えは『ドイツ・イデオロギー』における「意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定していく<sup>59</sup>」という、一方的な関係の逆もまた真であること、つまり、意識が生活を規定していくこともあるのであって、この双方が相互に規定し合う、ということの意味しており、1950年代初頭以降の新テーゼを踏襲している。

この著作の書評者はこの書物が存在と意識の諸問題のあらゆる内容を完全に含んではおらず、また、もっと簡潔に叙述できた筈であることを指摘している<sup>60</sup>。だが、心理学を専門とし、哲学の素養もあるルビンシュテインによって心理学的現象と哲学的問題とが初めて本格的に

融合されたことはその後のソヴィエト意識論の発展にとって重要な一歩であり、上述の欠点を補って余りあるものがあった。実際、この著作はソヴィエト哲学者や社会学者達によって各々の論証の論拠として少なからず引用されている。

#### (4) 哲学教科書『マルクス主義哲学の基礎』における社会的意識論

1958年にソヴィエト科学アカデミー哲学研究所から新たに哲学教科書『マルクス主義哲学の基礎』が刊行された。この教科書での意識論の特徴を検証する為に、1951年にコンスタンティノフの監修の下で出版された哲学教科書『史的唯物論』での意識論と比較していきたい。

まず指摘しておくべきことは、『史的唯物論』ではその題名通り、史的唯物論のみを対象としているので、意識に関する叙述は社会的意識に関するものであるのに対し、『マルクス主義哲学の基礎』は弁証法的唯物論と史的唯物論との二部構造になっている為、前者の部で物質と意識との関係に関して一つの章が設けられている（ここでは、レーニンの『唯物論と経験批判論』、及び、心理学者セチェノフとパヴロフの著作に基づいて、詳細に述べられている）。従ってここでは、後者の史的唯物論の部についてのみ前者と比較することとする。

まず注目すべきは、スターリンとプレハーノフの著作からの引用の有無であろう。例えば、社会的心理に関する叙述の箇所を比較すれば、スターリンの「共産党第16回大会に対する中央委員会政治報告」でのそれへの言及の代わりに、階級の社会的心理、その階級で優位を占めている気分を知ることの必要性を訴える為に、プレハーノフが、社会的心理を理解せずしては、「文学・芸術・哲学、その他の歴史で一步たりとも進むことができない」と述べたことを紹介しており<sup>61</sup>、このことはプレハーノフがそれまでの様に「歴史上の個人の役割論」に留まらず、完全に復権したことを意味している。

もう一つ差異を挙げるならば、それは新版では、個人的 (*индивидуальное*) 意識について、「個人的意識 (個人: *личность* の意識) と社会的意識とをブルジョア社会学がやっている様に分断することはできないのは明らかである<sup>62</sup>」と予め断りながらも、言及しているという点である。新教科書では先ず個人的意識を、「社会の中で一定の階級と結びついて生活している個人の意識であり、それ故に、その本質・思想的 content において、それは社会的・階級的意識の表現である」、と定義している。「個人の意識的特殊性」が生じる理由として、各々の生活の具体的諸条件や、教育的、政治的、並びにイデオロギー的影響が挙げられている。また、同じ階級の人々が、特殊な点・細かい点に亘っては、社会的現実を同じ様には体験しておらず、異なった仕方で歴史的出来事に反応するということが、周知の事実として語られている。最後に、個人的意識の特殊性を無視した場合の弊害として、あれこれの個人が自己の階級との葛藤に陥っている場合に、この個人の思考や行動の仕方の内に在る、多くのものを説明できない、ということが挙げられている<sup>63</sup>。

今度は両者の共通点を挙げれば、意識が社会的存在から立ち遅れることもあり得るとともに、逆に、意識が社会的存在の変化を促進することもあり得る、という見解である。差異が有るとすれば、その叙述がされている文脈の違いである。

この様に、新旧を比較すれば、1958年版にはプレハーノフの完全な復権や個人的意識の認知といった、ある程度の変化・進展が見受けられ、スターリン没後の数年間に生じた意識論の進展が教科書に反映されていることが窺える。

## 第2節：第21回党大会から第22回党大会までの意識論

その翌年の1月下旬から2月初頭にかけて第21回党大会が開催され、序論でも述べた様に、フルシチョフは報告の中で、共産主義への移行に際して発展した物質的・技術的土台のみならず、社会の全ての市民の高度な意識水準も必要である旨主張して、意識の重要性を強調した<sup>64</sup>。当節においては党指導部のこの見解を受けてソヴィエト哲学界がどのような反応を示したのか検証する。

### (1) 哲学教科書『マルクス＝レーニン主義の基礎』での意識論

同年オットー・クーシネン<sup>65</sup>の監修による哲学教科書『マルクス＝レーニン主義の基礎』(Основы марксизма-ленинизма) (1959) が教科参考書(учебное пособие)として出版された。この教科書はプロレタリアート独裁から全人民的国家への移行に言及した最初の教科書であるが<sup>66</sup>、フョードル・ブルラツキー(1927年生まれ)やイーゴリ・コーン(1928-2011)といった「60年代人」が執筆に加わったという点においても最初の教科書であった。だが、社会的意識に関する箇所に関して言えば、目新しい記述は、社会的存在は均質なものではなく、進歩的革命的な現象や傾向と同時に、古く反動的な現象や傾向をも含んでおり、それが社会的意識に反映される<sup>67</sup>、という一点のみである。

### (2) 世論研究の登場

世論に関する研究がソヴィエト哲学界で初めて登場したのは第21回党大会が開催された年であった。当大会においてフルシチョフは、ソヴィエト社会には社会秩序の破壊の事実が存在する事実を認め、ソヴィエト社会は世論の力で社会主義的法秩序の破壊者を取り締まることができることを述べて、その担い手であるべき社会団体に警察や裁判所、検事局の諸機関と同等の可能性と手段と力を持たせることを課題として提起した<sup>68</sup>。こうして党指導者によって法秩序の維持における世論の力の重要性が認識され、世論を研究する必要性が生じた。

同年の『哲学の諸問題』誌第3号にアレクサンドル・ウレドフ<sup>69</sup>の論文「社会学の研究対象としての世論」が掲載された。彼は先ず世界の世論がかつて無い程積極化している事実を挙げ、それが自陣営にとってプラスに機能し得ることを指摘し、その重要性を訴えた。彼が世論が果たす役割として注目するのが道徳の分野においてであり、十月革命の時期にレーニンが世論を積極化する必要を指摘して「世論はソヴィエトの法と道徳の規範を破壊する人々に対して、決定的闘争を行わなければならない」と語ったことを以って、自分の主張の正しさを証明している。加えて彼は、世論の役割の増大と社会主義の下での人民大衆の役割の増大とを結び付けている<sup>70</sup>。

更にウレドフは外国の社会学者ウィルヘルム・ヘニスによる世論の定義「人格化されて考えられる人民の意見、すなわち、国家の意見ではなく、その本質から見て、力の場、張力の場、又は、何等かの流れの場、にずっと近い、ある複合現象」を紹介し、これに対して次の様に自分なりの定義付けを試みた。「世論は社会意識の一定範囲である。社会意識は、周知の様に、社会心理とイデオロギーとに分けられ、政治的イデオロギー、法的イデオロギー、道徳、科学、哲学、宗教の形態を取って現れる。世論の本性を定義する際の困難さは、我々の考えでは、それが単にイデオロギーにも、また単に社会心理にも帰着せず、しかも上述の諸形態と異なるあるものとして、それらと並んで存在するものでもない、という点に在る<sup>71</sup>。」翌年の1960年再

び世論に関する彼の論考が『哲学の諸問題』誌に掲載され、その中で彼は前回の定義を少し修正して「世論は社会意識を表現する一種の形態である<sup>72)</sup>」と定義している。

論文の最後に彼は、ソ連で世論研究所が開設されたという進展が見られたことを報告している<sup>73)</sup>。この研究所の開設に尽力し、67年に閉鎖されるまで指導に当たったのは、ソ連の社会学者兼ジャーナリスト、ボリス・グルシン<sup>74)</sup>である。コムソモールの機関紙（日刊）の『コムソモルスカヤ・プラヴダ』の1960年5月19日付にこの新聞の付属研究所として世論研究所（Институт общественного мнения «Комсомольской правды» (ИОМ «КП»）が創設されたことが報じられた。この研究所は世論を研究するソ連初の専門的な組織であり、米国の世論調査機関を模したものであった。

### (3) アレクサンドル・スピルキンによる意識の起源・本質論

ここでは1960年から70年にかけて出版された全5巻の『哲学事典』で意識の項目の執筆を担当した、中間的世代に属するアレクサンドル・スピルキン<sup>75)</sup>の意識論を概観し、彼がこの時期に果たした役割を検証する。彼は意識の本性について等の著作を幾つか1960年代前後に発表しており、また近年では1998年に哲学の教科書を出版し、その中でも意識について一つの章を割いている。

彼は1960年に単著『意識の起源』を出版し、また、その翌年には『哲学の諸問題』誌に彼の「意識の本性について」という論文が掲載されている。彼はその両方において先ず意識を次の様に定義する。「意識とは、頭脳の高度の、人間にのみ固有の機能であって、その本質は、外界の諸対象の客観的な性質と関係の目的志向的反映に、諸活動を前もって思考によって構成し、その結果を予見することに、人間と社会及び自然の現実との相互関係の正しい調整と自己制御とに在る<sup>76)</sup>」。意識の本質に関するこの叙述には明らかにルビンシュテインの意識の生成と道徳との関係に関する見解の影響が見て取れる。また彼は、自己意識の現出の歴史的必然性について言及した箇所、「自分の行動を調節し、これらの行動の結果を予見することによって、自己意識的な人間はこれらの結果に対する全責任を引き受ける」とも述べるが<sup>77)</sup>、これは、スターリンの死後、恐怖による統治に代わって共産主義道徳と法とを以って統治する方向へと党指導部が転換を図ったが、それを成功させる為には、国民の意識の変革が不可欠であったからである。

他方で彼は、意識と知識とを同一視する見解や、また、ルビンシュテインも述べていた「意識とは、常に、その外にある何物かについての知識である<sup>78)</sup>」という、意識を客観的なものと看做す見解を用心深く否定する。「意識の中に反映されている対象は、人間の歴史的に形成された欲求や関心を刺激し、人間の許に一定の情緒、評価、意志的鼓舞を呼び起こす。（中略）現実の反映であり、その変革の主体的前提でありながら、意識は、これとともに、人間によって反映される事物、過程の知識の規定者であり、人間の社会の欲求と関心に対する知識の関係の規定者である。」更に彼は意識の決定的な側面として、「人間の欲求と関心、世界の正しい反映から出てくる合理的な目的設定、未来の予見、客観的な出来事や作用の結果の予見」を挙げる<sup>79)</sup>。つまり彼は、「社会的存在に対する社会的意識の反作用」という公式テーゼを発展させて、意識の機能における受動性よりも主体性や能動性に重きを置くに留まらず、意識の、知識の様な客観的な側面よりも、感性の様な主観的側面を重要視したのであり、ここに彼の主張の革新性がある。

スピルキンがソヴィエト意識論の形成に貢献したもう一点は、意識は頭脳そのものによって規定されているのではない、という主張である。レーニンが意識を「人間の脳髄と呼ばれる、特に複雑な物質の塊の機能」と看做したのに対し、スピルキンは「頭脳は意識の源泉ではなく、意識の器官である<sup>80</sup>」と考え、意識化は人間と世界との相互作用の道程で生じるものであるから、意識を頭脳の中で行われている生理的過程と同一視すべきでない」と主張する<sup>81</sup>。彼は更に、「意識は、どんな場合でも、存在の反映、せいぜい近似的に正しい（適切な、理想的に正確な）その反映に過ぎない<sup>82</sup>」というレーニンの定式に異論を唱え、外界の事物は頭脳の中において目的志向的に改造される、と主張する。レーニンによる事物と事物の像との類似という二者間の区別を、「レーニンは、意識を客観的に世界の主観的な像であると定義した」と解釈することによって、スピルキンは「事物の像は、感性的、直観的であり得るが、また、観念的であり、それ故に類似が既に外的ではなく、内的な性格を帯びているということもあり得る<sup>83</sup>」と、意識における個人の主観的要素を指摘する。こうして彼は、レーニンの多様な見解の内、自分の見解と近似している彼の言説を利用して自己見解を展開させていくのである。

マルクス＝レーニン主義の古典における意識論を修正・補足しようとするスピルキンの試みは、マルクスとエンゲルスの意識論にも及ぶ。著書『意識の起源』で彼は、『ドイツ・イデオロギー』で触れられている、社会的意識の端初としての「群棲意識」や「部族意識」<sup>84</sup>のその発生、並びに、発展の条件と過程を詳述するのみならず、マルクス主義創始者達とは違って原始社会における人間の意識のレベルを軽視せず、また、群棲意識と部族意識とを段階的に異なるものとして区別する。彼は、群棲意識を高等動物から現代人への過渡期の意識と位置付け、共同作業を通じて発生したもので、高等動物の心理・精神状態とは質的に異なっていたと考える<sup>85</sup>。狩猟での罠の発明、つまり頭脳労働は人間の自然の力への屈服からの解放と自然界の素材を意識的な支配の下に置くことを意味し、これに伴う生産力の向上はより安定した人間の共同体の組織、つまり、部族社会への転化を可能にした、と彼は推察する<sup>86</sup>。加えて、『ドイツ・イデオロギー』での意識と言語との関係についての言及についても、理性的人間の意識が形成される条件として文節的音声言語の発生が不可欠であることを指摘する等、より詳しく考証している<sup>87</sup>

以上見てきた様に、スピルキンは、一方でルビンシュテインの道徳的意識論を引き継ぎ、他方で、マルクス＝レーニン主義の古典によって定式化された諸見解の幾つかに反論し、あるいは、それらを修正・補足することによって、来るべき 1960 年代の意識論の謂わば準備段階を構成した。

#### (4) 『ドイツ哲学雑誌』における意識論の登場

ソ連国外の東欧社会主義圏での有力哲学雑誌『ドイツ哲学雑誌』(*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*)をひも解けば、遅くとも 1957 年第 1 号には既に意識／自覚 (*Bewußtheit*) に関する論文が掲載されている。著者のヘルマン・シェラーは、経済学者アルネ・ベナリー (*Arne Benary*) が論文「過渡期の社会主義の政治経済の根本問題」で、それまで東独において適用されてきた経済指導の方法では、就業者達による創造的仕事の成長と国民経済の計画的指導の強化、並びに、完全性が十分に一致していないと問題提起をしたことを紹介し、国民経済の計画的且つ意識的指導の方法並びに形式における不足や欠点を明らかにするには、自発性と動機づけられた意識との合一に関する一般的哲学理論が不可欠であるとして、自発性と意識との関

係についての自己見解を展開させた<sup>88</sup>。

1959年第3号には同年4月24日から26日にかけてレーニンの著作『唯物論と経験批判論』刊行50周年を記念した会議がドイツ社会主義統一党（SED）中央委員会付属社会科学研究所の哲学講座で行われ、企業や各界並びに県のプロパガンダ担当者達、及び、東独の総合大学や単科大学の社会学者達、総勢150名が招待されたことの報告が掲載されている。この報告によれば、この会合は住民の社会主義的意識化、及び、西独のイデオロギーに対する闘争を目的としたもので、上述したシェラーが基調報告を行った<sup>89</sup>。彼は報告の中で、レーニンに倣って、ボグダーノフがした様な社会的存在と社会的意識との同一視や両者の不明確な線引きに反対する立場を表明し、ソ連の公式見解に追随した。

翌年にも、農村における農業生産協同組合（LPG<sup>90</sup>）の社会主義的意識についてであるとか<sup>91</sup>、社会主義の上部構造における社会主義的法意識の役割<sup>92</sup>、他に、社会主義的人間の自覚の発達について<sup>93</sup>等の論文が第8号に掲載される等、議論に発展がみられた。

### 第3節：第22回党大会でのフルシチョフ報告と新しい党綱領の意義

ソ連における意識論は前章で見てきた様に1950年代半ばから展開されてきたが、それは1961年10月に開催された第22回党大会でのフルシチョフ第一書記報告、及び、この大会で採択された党綱領に少なからず反映されている。

この党大会で、「ヒューマニズム」イデオロギーが核心的教義としてマルクス＝レーニン主義に新しく盛り込まれたことは、フルシチョフの演説や新綱領の文面から明瞭である。序論で述べた様に、この「ヒューマニズム」イデオロギーを形成する理論系列の構成単位の一つが、意識論である。この節では、先ず、フルシチョフ演説と党綱領における「意識」の比重を検証し、次に、この新しい公式路線をソヴィエト哲学界のイデオロギスト達はどの様に解釈したのかを分析することによって、ソヴィエト意識論史におけるこれら二つの意義を考察する。

#### (1) 第22回党大会でのフルシチョフ報告と新しい党綱領の内容

フルシチョフ第一書記の報告の中で「意識」という字句が出てくる箇所を探してみれば、それらは共産主義社会における「新しい人間」の育成と不可分であり、共産主義的徳徳、及び、各個人の個性の開花と緊密な関係にあることが分かる。社会の各構成員に共産主義社会の建設者としての自覚を持たせることが「米国に追いつき、追い越す」うえで不可欠であることを、彼は演説の中で強調している。例えば、「経済は、社会関係と人々の意識との変化の基礎であるが、社会関係の発展、人間の共産主義的思想、文化水準、積極性の向上は逆に経済的進歩に必要な条件となる<sup>94</sup>」という箇所は、上部構造に属する意識が土台である経済に変化をもたらす独立変数であることを認めており、彼がいかに国民の意識の変革を重視していたかを物語っている。前節で述べた様な、『唯物論と経験批判論』でのレーニンの定式に則った意識の静的・受動的な理解からは、国民に積極性を求める様な発想は生じ得ない。従って、日常生活の中で意識が実践を介して社会的存在に影響を与えるという、『哲学ノート』でのレーニンの見解、及び、1950年テーゼに即していると解すべきである。意識と生活とが相互に規定し合うという、1950年代以降展開された新たな意識理解に基づいてこそ、上述した様な発言が生じ得る。

また、共産主義社会を「自由な自覚ある勤労者<sup>95</sup>」によって構成される社会と定義付けることは、人間の自由な意識的行動と道徳的責任との関連付けなくしては有り得ない。ここで述べ



られている「自由」とは、絶対的自由ではなくて、まさにルビンシュテイン的解釈に基づく自由、すなわち、プレハーノフが『歴史における個人の役割』で述べた、「自由とは意識された必然」であるという命題を下敷きにした、客観的必然性の枠内での自由であることを前提としている。と同時に、「人間の自由な意識的行動はその生活の諸状況によって条件付けられている<sup>96</sup>」が故に、フルシチョフ報告ではソヴィエト国民の福祉向上と最高の生活水準の保障、市民権の保護を図ることが党の課題として掲げられている。また、「人間の自由は、自分の行動の路線を自ら決定し、この路線と両立し得ない凡ゆる解決を斥ける、という可能性の内にある」、逆を言えば、「人間に自分の行動の路線を自ら決定する権能が無いならば、この路線が人間の外で決定されるものであるならば、人間は自分の為すことに責任を負うことができない<sup>97</sup>」が故に、フルシチョフは、全ての市民に社会の業務の処理への参加を呼びかける。それは、1) 各勤労者のより良い物質的・文化的生活条件の創出、2) 人民代表制の形態とソヴィエト選挙制度の民主主義的諸原則との改善、3) 共産主義建設の重大問題やソヴィエト国家の法案を全国民で討議するという経験の普及、4) 権力機関と行政機関の活動に対する国民の監督の形態の最大限の拡大と、この監督効果の増幅、5) 指導機関の構成員の系統的更新、国家機関と社会団体における指導的働き手の選挙制度と責任制の原則の一層徹底した実施、加えて、この原則の国家機関、社会団体、及び、文化機関の全ての指導的働き手への波及<sup>98</sup>、という社会主義的民主主義の展開によって実現化される、と謳われた。こうした指導者による意見表明は、この党大会の頃には、党指導部の間で、国民の社会的意識の現状からの立ち遅れの問題が認識されていたことを裏書しており、こうした現状を改善する為にフルシチョフは全国民に共産主義社会建設への意識的・積極的参加を訴えるとともに、その為に必要な諸条件・環境を党側が準備することを約束したのであった<sup>99</sup>。

新しく採択された党綱領を紐解けば、共産主義的意識に関するまとまった記述が散見されることに気が付く。その中でも中核を成すのは、人々の意識と行動の中に存続している資本主義の旧弊の克服という課題である。「社会主義体制の勝利の後も、社会の前進運動を妨害する資本主義の残滓が人々の意識と行動の中に存続している<sup>100</sup>」という一文は、社会主義革命から約半世紀を経ても社会主義体制という社会的存在と人々の社会的意識との乖離が黙視できない程になっていることを暗示しており、指導部の危機感がこの文面に滲み出ている。この困難な課題を克服する為に党はこの綱領の中で主に以下の四つの手段を提起する。1) 社会の成員の自覚を高める為のイデオロギー活動<sup>101</sup>；2) 集団主義、勤勉、ヒューマニズムの精神へ人々の意識を変革させる為に社会の構成員を国家的・社会的事業の運営に日常的に参画させること<sup>102</sup>；3) 共産主義的生活を意識的に送ることができるようになる為の共産主義的精神に基づく教育<sup>103</sup>；4) 共産主義的な社会生活の基本的なルールを強化し、向上を図るうえで指導的な役割を果たす自覚的で自律的な市民の奨励<sup>104</sup>。以上を総括すれば、教育の現場や職場、日々の生活の中でのプロパガンダをより一層重視するとともに、国家・社会の全組織に亘って実質的な民主主義を浸透・定着させることによって、すなわち、社会的存在自体を真に民主化させることによって、国民の社会的意識と道徳的責任感の育成、勤労意欲や主体性の増進を図ろうとするものである。この四項目とフルシチョフが掲げた五項目とを併せ考えれば、こうした新しい路線への転換は、現体制が国民の欲求と関心に真に結びついた社会制度へと自己変革を遂げなければ、国民の社会的意識は変わらないことに指導部が遅ればせながら気付いたことの表れであり、世論がもたらす影響を重視する文面にそれが垣間見える<sup>105</sup>。しかし、後にフルシ

チョフが失脚させられると、こうした民主化路線は新指導部によって葬り去られてしまい、国民の意識も変わらぬまま 1980 年代後半を迎えることとなるが、それはこの論文の検証の対象外である。

## (2) 巻頭論文で示されたソヴィエト哲学界の課題

第 22 回党大会の翌月の 11 月に『哲学の諸問題』誌に「ソ連邦共産党第 22 回党大会とソヴィエト哲学の課題」と題した巻頭論文が掲載された。この中では哲学界・社会学界をプロパガンダ活動へ総動員するに当たって、哲学者や社会学者が解決すべき主要な諸課題が列挙されているが、その中でも、社会的存在からの社会的意識の立ち遅れの克服は最重要課題の一つと位置付けられている。曰く、「哲学及び他の社会諸科学の使命は、単に社会的存在の変化に基づいて起こる社会的意識の現象の変化を確認するだけでなく、存在からの意識の立ち遅れを取り戻し、ソヴィエト人の内面世界の進歩的变化を促し、労働と公共財産、集団に対する共産主義的態度を彼等の中に育成し、ソヴィエト社会の各市民の意識と行動の内に共産主義的規範を発達させる、その為の可能性と手段を打ち出すことである<sup>106</sup>」。ここで注目すべきことは、これまでになく社会生活における主観的要因や社会の成員の能動性に注意を払っていることである。すなわち、スピルキンが指摘した、意識における個人の、情緒、評価、意志的鼓舞といった主観的要因や、事物の像の内的な性格が着目され、人間に主体性を持たせることが重要視されるようになったのである。

またこの論文によれば、この意識育成という任務を遂行するうえで理論的基礎付けが必要であり、哲学者・社会学者に課せられた主要な課題として次の三つが挙げられている。1) 意識の本質を人間とその環境との相互作用の、社会的＝歴史的に決定付けられた様式と見る、全面的な、且つ、根拠の有る規定を仕上げること；2) 意識の形成と発展の基本的諸段階を、歴史的、個体発生学的な面から明らかにして、個人の能力を発達させるに最適の好条件を成す、時間的な面での外的及び内的性格付けの規定をすること；3) 目先の個人的要求によって直接制約されない、行為の動機の発生を分析すること<sup>107</sup>。これらの諸課題を概観すると、この中にこれまでの意識論が集約されていることが見て取れる。先ず、「意識の本質を人間とその環境との相互作用の、社会的＝歴史的に決定付けられた様式と見る」ことは、意識と生活が相互に規定しあうというルビンシュテインの見解や、意識化は人間と世界との相互作用の道程で生じるものであるというスピルキンの主張を反映しており、従来のマルクス＝レーニン主義的定式からの決別を意味している。次に、意識に段階性があることは先ずトゥガリノフによって指摘されたが、「歴史的、個体発生学的な面から明らかに」するという課題に関する最初の詳細な研究はスピルキンによって為されており、この巻頭論文はその後の更なる研究を要求している。最後に、行為の動機については、ルビンシュテインやスピルキンによって研究されてきた、倫理的見地からの意識論をベースにした課題提示である。

以上見てきた様に、1961 年の第 22 回党大会でのフルシチョフ報告、新しく採択された党綱領、及び、これらに基づいて書かれた巻頭論文のいずれもが、1950 年代半ば以降のソヴィエト意識論の、謂わば、一里塚であるとともに、今後の議論の方向を指し示す道先案内の役割を果たしている。こうして、その公式路線は、『哲学ノート』でのレーニンへの回帰であると同時に、スターリンが末期に打ち出した「社会的存在に対する社会的意識の反作用」テーゼであり、これらを基礎としたマルクス主義の修正・補足の路線となることが確定されたのである。

#### 第4節：第22回党大会後の1960年代前半における意識論の展開

前述した巻頭論文が『哲学の諸問題』誌1961年第11号に掲載された後、約一年余りの間意識論に関する論文が同誌に掲載されることは無く、論壇は、謂わば、沈思黙考の状態であった。1963年になってようやく口火を切ったのが、所謂「60年代人」のリュドミラ・ブーエヴァ<sup>108</sup>である。同年に中間的世代のケルレとコヴァリゾンが共著の形で社会的意識の諸形態に関する著書を発表し、スピルキンも物質と意識に関する論文を出す。ここでは、第22回党大会後からの1960年代前半に「60年代人」、及び、中間的世代によって展開された意識論を検証することによって、世代間の知的継承関係を明らかにするとともに、各世代の独自の寄与をも明らかにすることを目指す。

##### (1) リュドミラ・ブーエヴァによる社会学的見地からの個人意識論

*環境の変革と教育に関する唯物論の学説は、環境が人間によって変革され、  
教育者自身が教育されなければならないことを忘れている。  
マルクス、『フォイエエルバッハに関するテーゼ』(三) 109*

新しい党綱領や巻頭論文でイデオロギー活動の比重が増大したことに対し、ブーエヴァは、『哲学の諸問題』誌に掲載された論文「個人的意識とその形成の環境<sup>110</sup>」の中で、その様なイデオロギーよりも人々の生活・労働環境の改善こそが個々人の意識の変革に繋がるのであり、各個人を取り巻く環境の特性に配慮したアプローチが必要であることを、全体の立場ではなく社会を構成する一個人の立場から、社会学的な論拠に基づいて主張する。人々の意識と行動の中に存続している資本主義の旧弊を克服する為のプロパガンダ重視路線に対して、彼女は反発し、批判の矛先を現実の生活におけるコムソモールを含む共産党員の不作為に向け、また、個人的意識の水準やその形成の特殊性、及び、その発展方法が十分に考慮されていないことがイデオロギー活動やプロパガンダの効果を弱めていることを指弾する<sup>111</sup>。

この哲学者はソヴィエト文献における個人の意識形成の特質に関する研究の不在と従来の研究における土台、すなわち、経済面分析重視の傾向を指摘する。彼女は、この様な下部構造重視の先行研究とは一線を画して、個人の意識を形成しているところの環境の全てのシステムの顕示や、人間が生活したり働いたりする客観的な「ミクロな環境」の多様性の考慮に重点を置き<sup>112</sup>、相対的独立性を持った政治、法律、道徳、美学等といった上部構造が個人の諸々の見解や情緒、行動の習慣の形成に一時的に影響を与えると述べ、個人が存在するところの社会的繋がりや複雑なシステムに注意を向ける<sup>113</sup>。

ブーエヴァは先ず、これまで研究されてきた社会的意識と自身が研究対象とする個人的意識との関係性について、この二つを同一視すべきではなく、社会的意識には人類の全ての歴史的道程や、知識や見解、理論の総体が集約されており、その社会の諸個人の知識と見解の機械的な総和ではないと述べて、この二つの意識の相違点を明らかにする<sup>114</sup>。また、党が公的指針として国民に対して社会的意識の発展に何らかの寄与を求めることに反駁して、個人の精神的発達に影響を与える決定的要因として社会的存在と並んで社会的意識を描出し<sup>115</sup>、物事の順序が逆であることを指摘すると共に、個人の意識の内容は生来の素質でもなければ天性の本能でもなく、その形成と発達の条件と手段は社会に在ると述べて<sup>116</sup>、国民の世界観や道徳的意

識、行為における社会側の責任を追及する。

次に彼女は社会の教育活動が個人の意識発達に果たす指導的役割に読者の注意を向ける。「社会の教育活動は常に一定の社会的環境の中で行われ」、「各人は社会や家族によって、また、生活や仕事等の過程での人々との交流を通じて教育される」と述べて、多様な領域で社会環境が個人の意識形成に及ぼす影響を指摘し、人間と客体的環境とが、社会や階級、その人の周囲の意識に媒介されて、選択的に相互に作用した結果として個人の意識が形成されると、ブーエヴァは主張する<sup>117</sup>。彼女のこの相互作用説は従来の社会的意識と存在との相互作用に関する論説を個人的意識に援用し、掘り下げたものであると言える。また彼女は、ソヴィエト意識論において社会的意識の文脈で展開されてきた脱レーニンの反映論を個人的意識に導入して、それは常に、社会環境の所産でもある自己意識や、自我の反映、世界の中の自分の居場所、そして世界への自分の態度として現出すると述べ、また、自己認識は個人の活動や実践、他の人々との交際といった個人の主体的な意識的行動の過程で生成されるとも主張する<sup>118</sup>。こうした社会環境やそれに対する個人の能動的働きかけが個人の意識形成において持つ重要性とともに、この哲学者は、各個人の活動力や適性、関心が自己教育として社会教育の過程において果たす役割にも言及する<sup>119</sup>。

次にブーエヴァが着目する論点は革命から約半世紀を経てもなおソヴィエト社会に厳然と存在する国民間の意識の水準の差異の原因である。勤労者の階級的意識をその本性によって、社会的・政治的に意識ある人々と、政治に無関心であったり、意識が低い人々との二段階に区別する必要性をトゥガリノフが指摘したことは前述したが、ブーエヴァはその意識の段階性を更に詳しく分析したうえで、個人的差異の主因は労働環境にあると見る。労働への態度の差異の原因として、当局が各人の職場を選ぶ際に当たってのその人の適性無視や、重労働や単調な労働では勤労者は自己能力を十分に発揮することができないこと、及び、教育手段の多様性の欠如を挙げ、これらの故に労働者は自分の労働を通して喜びや満足を感じることができないのであって、意識に残存する過去の体制の残滓が問題なのではない、と主張する<sup>120</sup>。

ブーエヴァは、社会学的調査によって得られた結果を元に、労働環境や社会設備の不備、また、上層部の管理能力や勤務態度といった主観的要因が勤労者の労働意欲を減退させ、個人の集団主義的意識形成を阻害する要因にもなっていることを突き止める。彼女によれば、モスクワの或る工場の労働者と技術従業者達の圧倒的多数が、「あなた方が自分達の力と才能を十分に発揮して働くのを妨げているのは何ですか」という質問に対し、当生産施設での労働の組織の不十分さ、調達的確な組織の欠如、協同組合企業間の義務不履行、及び、それが原因で設備が度々休止しており、遅れを取り戻す為の突貫作業があること等を挙げ、彼女はそこから労働生産性の向上は技術進歩ではなくて労働者の労働強化に立脚しているという事実を提示し、この様な事実は個々の労働者の労働への態度や、規律尊重の精神、団結、労働生産性に悪影響を与え、ひいては、若者や、学童、生産施設での生産実習にまで影響を及ぼすという懸念を表明する<sup>121</sup>。ブーエヴァは、都市住民のみならず、村落での農家の生活にも焦点を当て、彼等が直面している機械化や社会的設備のレベルの差が意識の形成にもたらす影響について考察する。この哲学者は、コルホーズ毎の社会的設備の発達度合いの差が人々に貧富の差をもたらし、宅地付属地や個人経済によって生活を賄っている様な貧しい所帯では集団主義の心理は形成され得ず、集団財産が個人と全体の利害を結び付ける唯一のかすがいとなっているという<sup>122</sup>、共産主義的理想とはかけ離れた厳しい現実を読者に突きつける。こうして、第一次、第

二次産業の双方において勤労者の共産主義的意識を形成する為の前提条件である生活・労働環境の改善、幹部の管理能力の向上の方こそがイデオロギー活動よりも急務であるという事実を彼女は明らかにした。

ブーエヴァは最後に党末端組織の分子の実生活での怠慢や不干渉といった態度を告発した。彼女は、生産施設で公共事業に従事している多くの共産主義者やコムソモールが実生活で多くの人々との交流を避け、自分の家でも共産主義的啓蒙活動をすることも無く、人々の中の生活や慣習に見受けられる欠点に対しても素知らぬ態度を取るという、党にとって不都合な事実を明示し、更に、新聞『プラウダ』に掲載された、「生産施設での七時間だけ共産主義者である」という、パート・タイム共産主義者の声を紹介し<sup>123</sup>、いかに党員ら自身の共産主義的個人的意識が不徹底であり、彼等に「教育者」としての資格や能力等無いかを暴露した。

ブーエヴァは、個人の意識が形成される際に個人的特質の独自の基礎を成すものとして、その人の私的生活と人生経験を挙げる。彼女は、瑣末な個人的特徴は同様の事柄に対する解釈の相違、価値観の差、等となって表出するという現象を呈示し、その一例として彼女は、一人一人の宗教的信仰心の個人的理由や特質を挙げる<sup>124</sup>。

ブーエヴァは以上の様に、ミクロの視点から、ソヴィエト国民一人一人の実生活に即した生活・労働環境の改善・充実や、共産党員自身、特に幹部の意識の変革、土台から独立した上部構造の諸要素間の相互作用による発展、各人の個人的体験の特殊性に即した個人的意識の形成の研究の重要性を訴えたのである。これまで殆んど扱われてこなかった個人的意識と個人を取り巻く環境の相互作用という研究は先駆的業績と言ってよいものの、後続の研究は意識論の分野では彼女自身の著作以外現れることは無く、寧ろ、人格 (*личность*) 論の分野で発展を見ることとなる。

## (2) スピルキンによる物質・意識関係論

1963年には「60年代人」とともに、中間的世代に属するスピルキンが再び意識論の議論に参加した。彼は1960年代前後に意識の起源と本質に関する著作を出版し、その中で、意識の機能の主体性、反映論における脳髄器官説の否定、意識における個人の主観的要素の強調、等といった、謂わば、「脱レーニン・テーゼ」を展開して、ソヴィエト意識論に足跡を残した。1963年秋、『哲学の諸問題』誌に、エンゲルスが「哲学の根本問題」と看做した物質と意識との関係に関するスピルキンの論文が掲載された。ここでは、これまでの意識論の進展を受けて、彼がどの点でこの論議に寄与したのか、また、彼の主張の特異性はどこにあるのかを検証する。

エンゲルスは晩年の著作『ルートヴィヒ・フォイエルバッハと独古典哲学の終焉』(通称『フォイエルバッハ論』)で物質と精神、存在と思惟との関係に関する問題を哲学の根本問題と看做し、何が本源的なものか、精神かそれとも自然かという問題にどう答えるかによって、哲学者達を観念論と唯物論という二陣営に大別した。スピルキンは物質と意識というこの対置を念頭に置いて議論を展開するわけであるが、議論を始めるに当たって、第一次的なものは物質か精神かを判定しないデカルトの二元論や、ヒュームやカントによる不可知論といった、エンゲルスによる二分法には収まらない考え方の存在を先ず紹介するが<sup>125</sup>、これは冒頭で述べた、1989年に出版された教科書『哲学入門』での存在と意識という二項対立の図式への疑問視が既にこの時点で生じつつあったことを暗示している。

また、マルクスによる『経済学批判』序言での「意識がその存在を規定するのではなくて、

逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する<sup>126</sup>」というテーゼに対し、スピルキンは「意識は社会によって条件付けられた現象である<sup>127</sup>」と一方で認めながらも、他方で、意識が外界へ働きかける面を強調して次のように述べる。「五感や知覚、観念、概念、並びに、意識は全体として労働における外界への人間の活発な実践的影響の過程で形成され発展させられる。

(中略)意識は実践活動によって形成されるが、意識自体もまた同様に実践活動を決定したり、調整したりしてこれに影響を及ぼす<sup>128</sup>」。このように、彼は、人が生活し養育される精神的雰囲気に応じて形成された意識とその人の外界とが相互に影響を及ぼしあう図式を提示する。外界を規定する意識の能動的機能に関して、彼は、かつてルビンシュテインが『存在と意識』で「意識の中心的な現象」と看做した、「まだ実在化されていない現実が、それによって現実が実在化されるところの諸行動を決定する」という「通常の依存関係の転倒」という考えを受け継ぎ、更に発展させる。「知的行為の助けを借りて人は予期したり、自分の実践行為を見越したり、出来事を予測したりすることができる。人間は自分の頭の中で過去、現在、未来のモデルを作り出すことができる<sup>129</sup>」。

スピルキンが意識の本質について考察する際に重視しているのは、知識と言語、及び、目的である。マルクス主義に倣って、人間の終極の目的は実践活動を通じた世界の変革にあるという見地に立つとするならば、彼によれば、「目的が発生する時点で外界が決定的な役割を果たすのであるが、それは、自分のみならず他人の過去の行為、考え、並びに、感情の複雑な網を通して、人々の行為を直接ないし間接的に条件付ける<sup>130</sup>」。また、意識化の過程は全人類による世界の認識によって全面的に条件付けられているわけだが、これを可能にしているのは言語であると彼は説く。「ある人々の考えは言語の媒介によってその人の個人的な財産から公共財産へ、全社会の精神的富へと転化する。我々の知識の大部分が人間の知識の共通の宝庫から会得した結果として我々によって得られたものである<sup>131</sup>」。つまり、言語によって客観的世界で直接ないし間接的に知覚された経験の蓄積、すなわち、知識を吸収し、これに条件付けられた意識が先の行動を決するというのが、主旨である。

こうした彼の考えの進展を反映しているのが、彼はこの論文での意識の再定義である。「意識とは、頭脳の高度な、人間にのみ固有の、言語と結び付いた機能であり、その本質は、現実が普遍化され目的志向化された反映に、諸活動を前もって思考により構成し、その結果を予見することに、人間の行動の理性的調整と自己制御とにある<sup>132</sup>」。これを 1961 年時の定義と比較すれば、言語の機能に着目している点、行動を司る理性としての意識という観点に新しさがあるが、これは『意識の起源』で理性的人間の意識の形成条件として文節の音声言語の形成という要因を挙げ、そこから更に考えをまとめていった結果であろうし、現実の普遍化という新しい発想も言語の機能への着目から生じたものと考えられる。

以上見てきた様に、第 22 回党大会後の 60 年代前半におけるソヴィエト意識論では、新世代である「60 年代人」の参与によって、個人の意識の実態が社会学的手法によって示された。また、中間的世代は所謂「哲学の根本問題」を弁証法的唯物論に基づいて解決するという形式を取って自分の見解を総括した。この二つの世代の共通点として、多少なりとも個人の意識を取り上げる、上部構造の諸要素間の相互作用を分析する、存在を意識が逆に規定するというテーゼの確認、という新しい方向性が挙げられる。

## おわりに

以上、フルシチョフ期のソヴィエト意識論の形成過程を旧世代から新世代への知的継承という観点から概観してきた。「ソヴィエト哲学者」という十把一絡げの括り方ではなく、世代という分析手段を用いることによって、1950年代後半において、先ず旧世代のトゥガリノフによって意識のカテゴリーが整理され、教育学者兼倫理学者のシシュキンによって、意識と道徳とが関係付けられ、更に、心理学者兼哲学者のルビンシュテインによって意識の発生と言語、並びに、意識的行動と道徳的責任との関係が提示されたことによって、ソヴィエト意識論の礎が築かれ、それが中間的世代のスピルキンに継承されて、彼によって原始社会での意識の起源と言語との関係が検証されるとともに、意識と理性との関係が定義されるという経緯が明らかになった。前述した様に、このスピルキンが1960年から70年にかけて出版された全5巻の『哲学事典』での意識の項目の執筆担当者であったことを鑑みれば、この中間的世代がその後若手の哲学者達に与えた影響は大であろう。

また、所謂「60年代人」の一人、ブーエヴァによる個人的意識論に関する先駆的業績も旧世代によるこうした基礎付けが無ければ不可能であったことは明白である。ソヴィエト意識論史を検証するに際して、「グルジアのソクラテス」の異名を持つ世界的に著名な哲学者、メラブ・ママルダシュヴィリによる意識論に本来であれば言及すべきであるが、意識に関する彼の最初<sup>133</sup>の論文「マルクスの著作における意識の分析<sup>134</sup>」が世に出るのは1968年のことであるから、彼の意識論の検証は今後の研究課題とする。

<sup>1</sup> ローゼンターリ・エム、ペ・ユージン 監修（ソヴェト研究者協会 訳）『哲学事典』1954年版、1956年、11頁。

<sup>2</sup> Сознание, *Философский словарь*, под ред. Розенталя М.М. и П.Ф. Юдина, М., 1963, стр. 414.

<sup>3</sup> Ignatow, Assen, „Perestrojka der Philosophie?“ , *Studies in Soviet Thought*, Vol. 40., 1990, SS. 27 – 29.

<sup>4</sup> Михайлов Ф.Т., Сознание, *Философский словарь*, под. ред.

<sup>5</sup> 田畑稔『マルクスと哲学 – 方法としてのマルクス再読』新泉社、2004年、83頁。

<sup>6</sup> この項目の執筆担当者、フェリクス・ミハイロフ（Феликс Т. Михайлов）は1930年生まれの所謂「60年代人」世代に属している。参照：Кудрявцев Владимир, ПАМЯТИ Ф.Т. МИХАЙЛОВА Личная страничка Феликса Трофимовича Михайлова: <http://www.tovievich.ru/book/20/269/1.htm> (2012/11/01)

<sup>7</sup> 『哲学の諸問題』誌 1955年第2号巻頭論文には「レーニンの偉大な哲学的遺産」という論文が掲載されており、特筆されているレーニンの著作は『唯物論と経験批判論』及び『哲学ノート』である。就中、後者に対しては「レーニンの哲学思想の最も豊富な源泉」という評価を与えており、「これは全世界のマルクス主義哲学者にとって、丸十年間の仕事の計画である」と主張している。

巻頭論文「偉大なレーニンの哲学的遺産」（箕浦達二 訳）、『現代ソヴェト哲学』1956年版、大月書店、34頁。

<sup>8</sup> マルクス=レーニン主義研究所 訳『レーニン全集』第14巻第6章「経験批判論と史的唯物論」、394頁。

<sup>9</sup> 『レーニン全集』第38巻、181頁。

<sup>10</sup> この論文を発表することによってスターリンは、当時、言語は上部構造に属するという有力説を唱えていたニコライ・マールに反論し、言語は土台にも上部構造にも属さないという見解を出した。フランスのロシア・ソヴィエト哲学史研究家ルネ・ザパタは、スターリンの意図はマール理論がその頃党上層部で漸くその重要性が認識され始めたサイバネティクスと情報科学の発展の妨げになるので、これを斥けることにあった、と分析している。参照：Zapata, René, *La philosophie russe et soviétique*, Presses Universitaires de France, Paris, 1988, p. 111.

<sup>11</sup> *Исторический материализм*, под общей редакцией Константинова Ф.В., М.: Госполитиздат, 1950, стр. 26.

<sup>12</sup> *Там же*, стр. 556, 558-559. ここでの「社会的意識」とは社会的思想や理論、政治的制度のことである。

<sup>13</sup> レーニンは次の様に述べている。「労働者は自分達の利害が今日の政治的・社会的体制全体と和解し得ない様に対立しているという意識、すなわち社会民主主義的意識を持っていなかったし、また持っている筈も無かった。こういう意味で、90年代のストライキは「一揆」に比べれば非常な進歩であったにもかかわらず、やはり純粹に自然発生的な運動の範囲を出なかったのである。」「(社会民主主義的)意識は外部からしかもたらし得ないものだった。労働者階級が全く自分の力だけでは、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争を行い、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布を勝ち取る等の事が必要だという確信しか作り上げないことは、全ての国の歴史の立証するところである。他方、社会主義の学説は、有産階級の教

養ある代表者であるインテリゲンツィアによって仕上げられた哲学・歴史学・経済学上の諸理論の内から、成長してきたものである。(中略)ロシアでも全く同様に、社会民主主義派の理論的学説は、労働運動の自然発生的成長とは全く独立に発生した。」

『レーニン全集』第5巻、「何を為すべきか」、394-395頁。

<sup>14</sup> 哲学教科書『史的唯物論』(コンスタンティノフ監修)では、「大衆の社会的意識は、共産党と社会主義国家の指導の下に、(中略)形成される」と、書かれている。また、ソヴィエト人の意識が社会の物質的生活の諸条件の発展に立ち遅れていることが指摘されている。参照：*Исторический материализм*. стр. 631, 654.

<sup>15</sup> 第126条：労働者階級、勤労農民、並びに、勤労的インテリゲンツィヤの中で、最も積極的に自覚した市民は、自由意思に基づいて共産主義社会を建設する為の闘争において勤労者の前衛であり、且つ、勤労者の全ての社会的および国家的な組織の指導的中核であるソヴィエト連邦共産党に統一される。参照：

КОНСТИТУЦИЯ (ОСНОВНОЙ ЗАКОН) СОЮЗА СОВЕТСКИХ СОЦИАЛИСТИЧЕСКИХ РЕСПУБЛИК,

Утверждена Чрезвычайным VIII съездом Советов Союза ССР, 5 декабря 1936 года:

<http://www.hist.msu.ru/ER/Text/cnst1936.htm> (2012/12/12)

<sup>16</sup> グレーゼルマン、ゲ・イエ(上田俊一 要約)「社会主義のもとでの意識性と自然発生性の相互関係」寺沢恒信・林礼二 編『現代ソヴェト哲学』第三集、1958年、359-366頁。

<sup>17</sup> ТУГАРИНОВ Василий Петрович (1898-1978) はトヴェリ州(現在はトヴェリ州)で聖職者の父と村の教師の母の子として生まれた。1925年にモスクワ大学社会科学学部を卒業。1936年に赤色教授大学大学院を修了。1937年に解職され党から除名される。翌年からカリーニン市で教職に就く。51年にソ連科学アカデミー哲学研究所で博士論文「法則と法則性に関する弁証法的唯物論」の審査をパス。同年からレニングラード大学哲学部に勤務。専門は形而上学、存在論、及び、価値論。

<sup>18</sup> Тугаринов, Василий, *Соотношение категорий диалектического материализма*, Л., зд-во Ленинградского ун-та., 1956, Стр. 71.

<sup>19</sup> КЕЛЛЕ Владислав Жанович (1920-) はヴァトカで生まれ、1945年にモスクワ大学哲学部を卒業。1964年に博士論文「社会的意識の構造と発達の特異性」の審査をパス。

<sup>20</sup> КОВАЛЬЗОН Магвей Яковлевич (1913-1992) はヴェリジに生まれ、1940年にモスクワ歴史・哲学・文学部哲学部を卒業し、1946年にモスクワ大学大学院哲学講座を修了。1964年に博士論文「史的唯物論の基礎的諸カテゴリーと諸法則」の審査をパス。

<sup>21</sup> 例えば、Келле, В.Ж., М.Я. Ковальзон, *Общественное сознание*. М.: Политиздат, 1966.

<sup>22</sup> ケルレ、ヴェ・ジェ、エム・ヤ・コヴァリゾン(多和田栄治 訳)「史的唯物論」、『現代ソヴェト哲学』第三集、87-88頁。

<sup>23</sup> 同上、98-99頁。

<sup>24</sup> 同上、100-101頁。

<sup>25</sup> シシキン、ア・エフ(林礼二 抄訳)「共産主義道徳の理論の幾つかの問題」『現代ソヴェト哲学』第三集、122-123頁。

<sup>26</sup> 同上、131頁。

<sup>27</sup> МАМАРДАШВИЛИ Мераб Константинович (1930-1990)：ママルダシュヴィリはグルジアのゴリ市で軍人の家庭に生まれた。戦時中父親は歩兵師団の委員であった。1954年モスクワ国立大学哲学部を卒業。1957年に同大学大学院を修了後、『哲学の諸問題』誌編集部勤務。1968-74年『哲学の諸問題』誌編集長代理(編集長はイワン・フロロフ)。

<sup>28</sup> 1989年、彼は、『哲学の諸問題』誌第7号に掲載された対談の中で、意識の問題は自由の問題とまさしく不可分であると述べるとともに、「意識」と「良心」が同じ語源に由来することから(因みに、フランス語では両方とも conscience である)、意識とは道徳現象(*моральное явление*)であるという見解を表明した。参照：Мамардашвили, Мераб К., *Сознание – это парадоксальность, к которой невозможно привыкнуть, Вопросы философии*, №. 7., 1989, с. 114.

<sup>29</sup> イオフチュク、エム・テ(多和田栄治 要約)「哲学史・社会思想史のいくつかの研究課題について」『現代ソヴェト哲学』第三集、354-355頁。

<sup>30</sup> ТУГАРИНОВ Василий Петрович (1898-1978)：トゥガリノフはトヴェリ州で聖職者の父と村の教師の母の子として生まれた。1925年にモスクワ大学社会科学学部を卒業。1936年に赤色教授大学大学院を終了。1937年に解職され党から除名される。翌年からカリーニン市で教職に就く。51年にソ連科学アカデミー哲学研究所で博士論文「法則と法則性に関する弁証法的唯物論」の審査をパス。同年からレニングラード大学哲学部に勤務。専門は形而上学、存在論、及び、価値論。

<sup>31</sup> トゥガリノフ、ヴェ・ペ(上田俊一 抄訳)「社会的存在」と「社会的意識」のカテゴリーについて『現代ソヴェト哲学』第四集、117頁。因みに、意識に段階が在ることは、既にハンガリーのマルクス主義者、ジョルジ・ルカーチが『歴史と階級意識』(初出1923年)の中で、プロレタリアートの階級意識に関する叙述の中で、既に言及していたことである。参照：Lukács, Georg, *Werke Band 2, „Geschichte und Klassenbewußtsein: Studien über marxistische Dialektik“*, Neuwied: Luchterhand Verlag 1968, 1983, SS. 166 – 167.

<sup>32</sup> Келле В. Ж., М. Я. Ковальзон, *формы общественного сознания*, М.: Госполитиздат, 1959.

<sup>33</sup> Келле, В., М. Ковальзон, *Общественное сознание и его формы*, М.: Политиздат, 1963, стр. 15.

<sup>34</sup> Там же, стр. 24.

<sup>35</sup> Там же, стр. 25.

<sup>36</sup> Там же, стр. 26.

<sup>37</sup> Там же, стр. 26-27.



<sup>38</sup> Там же, стр. 16.

<sup>39</sup> Там же, стр. 17.

<sup>40</sup> РУБИНШТЕЙН Сергей Леонидович (1889 – 1960) はオデッサ市に生まれ、1913年にマルブルグ大学哲学部を卒業し、その同年にドイツ語による博士論文「方法の問題に関する一考察」の審査をパス。1919年からオデッサ大学で哲学と心理学の教授。1930年から42年までレニングラード教育大学で心理学を教授。42年から49年までモスクワ大学心理学講座主任教授。56年から60年まで哲学研究所で心理学部門の主任。

<sup>41</sup> ヴォルコフ、ゲ・ア (寺沢恒信 訳) 「心理的なものの本性についての価値ある哲学的研究」『現代ソヴェト哲学』第五集、348頁。

<sup>42</sup> ルリヤ (天野清 訳) 『言語と意識』、1982年、17-18頁。

<sup>43</sup> この著作は既に1932年にモスクワの「マルクス・エンゲルス・レーニン研究所」によって刊行された『マルクス・エンゲルス全集』に収録されており、『経済学・哲学草稿』等の他の初期の著作とは違って、早くから閲覧することができた。

<sup>44</sup> この著作は既に1932年にモスクワの「マルクス・エンゲルス・レーニン研究所」によって刊行された『マルクス・エンゲルス全集』に収録されており、『経済学・哲学草稿』等の他の初期の著作とは違って、早くから閲覧することができた。

<sup>45</sup> 「言語は意識と同年である。言語は、実践的な、他の人間達にとっても実存する、それ故に私自身にとってもまた最初に実存する現実的な意識である。そして言語は、意識と同様、他の人間達との疎通に対する欲求と必要から、初めて生じる。」

マルクス/エンゲルス (廣松渉 編訳) 『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、2005年、56-57頁。

「意識とは意識された存在以外の何ものでもあり得ない。そして、人間の存在とは、彼等の現実的な生活過程のことである。」

同上、30頁。

<sup>46</sup> Рубинштейн, Сергей, *Бытие и сознание: о месте психического во всеобщей взаимосвязи явлений материального мира*, М., Изд-во Академии наук СССР, 1957, Стр. 274 – 275.

<sup>47</sup> Там же, стр. 280

<sup>48</sup> Там же, стр. 272.

<sup>49</sup> ルビンシュテイン (寺沢恒信 訳) 『存在と意識 下』 青木書店、1961年、30-31頁。

<sup>50</sup> 同上、373頁。

<sup>51</sup> そもそも、自己意識について言及するということが自体が画期的であった。マルクスは『経済学・哲学草稿』の「第三草稿」の中では社会主義としての社会主義は積極的な人間の自己意識であると、肯定的に述べていたが、その後、マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』の中で自己意識について極めて否定的で粗野な叙述を数箇所で行っているからである。そこでは自己意識は、「形而上学的な幽霊のからきし抽象的な事績」であり、大衆によって「街灯で吊るし首に」されるものであり、「妖怪、幽霊、妄念」と同列の「観念論的な戯言」であり、更には、ドストエフスキーの小説『二重人格』("Двойник") に登場する主人公ゴリヤートキンの分身よろしく、「一人の人物」として受肉させられてしまう有様である。

<sup>52</sup> ルビンシュテイン、『存在と意識 下』、102-103頁。

<sup>53</sup> Рубинштейн, Там же, стр. 281.

<sup>54</sup> Там же, стр. 281.

<sup>55</sup> ルビンシュテイン、『存在と意識 下』、386頁。

<sup>56</sup> 同上、392頁。

<sup>57</sup> 同上、388頁。

<sup>58</sup> 同上、394頁。

<sup>59</sup> マルクス/エンゲルス『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、31頁。

<sup>60</sup> ヴォルコフ「心理的なものの本性についての価値ある哲学的研究」、343、348頁。

<sup>61</sup> Ред. Павелкин П., Курбатова Г., *Основы марксистской философии*, М., Госполитиздат, 1958, Стр. 589.

<sup>62</sup> Там же, стр. 591.

<sup>63</sup> Там же, стр. 591 – 592.

<sup>64</sup> 日本共産党宣伝教育部訳編『ソ連邦共産党第21回大会 第一分冊』合同出版社、1959年、70頁。

<sup>65</sup> КУУСИНИЕН Отто Вильгельмович (1881 – 1964) : クーシネンは当時ロシア帝国領であったフィンランドのユヴェスキュレ市近郊で洋服職人の家庭に生まれた。1904年フィンランド社会民主党に入党し、その2年後党首に就任。1905年ヘルシンキ大学言語学部を卒業。1908年国会議員に当選。1918年内戦後ロシア社会主義共和国連邦に亡命してフィンランド共産党設立に参加。1921年コミンテルン執行委員会書記に就任。冬戦争(1939 – 1940)中フィンランド民主共和国人民政府首班を務め、その後カレロ=フィン・ソヴィエト社会主義共和国最高会議幹部会議長(1940 – 1956)。彼がユーリ・アンドロポフ(1914 – 1984)をカレロ=フィン共和国のコムソモール第一書記(1940 – 1944)に推挙した(アンドロポフはその後同共和国の党中央委員会第2書記に就任(1947 – 1951))。1952年から党中央委員会書記。1940年から58年までソヴィエト最高会議幹部会代議員。科学アカデミー会員。フォードル・ブルラツキーは回想録の中で、クーシネンが党の新綱領からプロレタリアート独裁を外すよう提言し、フルシチョフが賛同した、と述べている。参照 : Бурлацкий, Фёдор, *Новое мышление: Диалоги и суждения о технологической революции и наших реформах*, М.: Политиздат, 1989, стр. 290.

<sup>66</sup> この教科書の執筆者の一人であるブルラツキーは、党の新綱領の草案を作成するに当たり党と国家を民主化するうえで必要なプロレタリアート独裁から全人民国家への移行に論拠を与えることを自分に課していた

が、それに必要な議論は全て当教科書に記載されていたのでこの課題は困難なものではなかった、と回想している。

参照：Бурлацкий, Ф.М., *Никита Хрущев*, М.: РИПОЛ КЛАССИК, 2003. стр. 98 – 99. 因みに、社会主義的民主主義をフルシチョフは第 21 回党大会報告の中で「真の人民権力であり、勤労大衆の自主活動と積極性の全面的発展であり、彼らの自治」と定義した。参照：『ソ連邦共産党第 21 回大会 第一分冊』、143 頁。

<sup>67</sup> *Основы марксизма-ленинизма*, под глав. ред. Куусинена О.В., М.: Госполиздат, 1959. стр. 142.

<sup>68</sup> 『ソ連邦共産党第 21 回大会 第一分冊』、144 頁。

<sup>69</sup> УЛЕДОВ Александр Константинович (1920 – 1999) : ウレドフはアルハンゲリスク州に生まれ、大祖国戦争に出征。1948 年にモスクワ国立大学哲学部を卒業し、同大学院を 1951 年に修了。同年から 75 年までここに勤務。

<sup>70</sup> ウレドフ、ア・カ (西牟田 久雄 抄訳)「社会学の研究対象としての世論」『現代ソヴィエト哲学』第 5 集、合同出版社、1960 年、125 – 127 頁。

<sup>71</sup> 同上、129 – 130 頁。

<sup>72</sup> Уледов, А. К., Социализм и общественное мнение, *Вопросы философии*, 1960, № 6., стр. 31.

<sup>73</sup> Там же, стр. стр. 42.

<sup>74</sup> ГРУШИН Борис Андреевич (1929 – 2007) : グルシンは 1952 年にモスクワ国立大学哲学部を卒業。1955 年に同大学院を修了。1956 年から『コムソモルスカヤ・ブラヴダ』紙に勤務し、1960 年に同紙付属の研究所として世論研究所を創立し、1967 年に閉鎖されるまで同研究所を指導した。1962 年から 66 年まで『平和と社会主義の諸問題』誌の顧問を務めた。

<sup>75</sup> СПИРКИН Александр Георгиевич (1919 – 2004) : スピルキン は当時のサラトフ県 (現在は州) に生まれ、1941 年に特別支援教育大学を卒業。1941 年 7 月から 11 月まで前線で従軍。1941 年から 45 年まで政治犯として収監され、57 年に名誉回復。1946 年から 52 年までソ連科学アカデミー哲学研究所にて心理学と哲学の講師として勤務。1954 年から『ソヴェト百科事典』出版所に勤務。1960 年から『哲学事典』編集長。

<sup>76</sup> Спиркин, А., *Произведение сознания*, 1960, стр. 8. ; А・ゲ・スピルキン (寺沢恒信 訳)「意識の本性について」『現代ソヴェト哲学』第七集、26 頁。

<sup>77</sup> スピルキン「意識の本性について」、29 頁。

<sup>78</sup> ルビンシュテイン『存在と意識 下』、352 頁。

<sup>79</sup> スピルキン「意識の本性について」、26 頁。

<sup>80</sup> Спиркин, Там же, стр. 7. ; 同上、29 頁。

<sup>81</sup> 同上、29 頁。

<sup>82</sup> レーニン、「経験批判論と史的唯物論」、394 頁。

<sup>83</sup> スピルキン、「意識の本性について」、30 頁。

<sup>84</sup> 「意識は、勿論当初は、単に最も身近な感性的環境についての意識であり、自らを意識し始めた個人の外部に存在する他の人物・事物との、局限された連関の意識である。それは同時に自然についての意識である。この自然は人間達にとって、当初は全く疎遠な、全能で不可侵の威力として立ち現れ、人間達はこれに対して純粹に動物的に関係し、家畜の様に威服する。それ故に、この意識は純粹に動物的な自然の意識なのであるが (自然宗教)、しかし他面では、周囲の諸個人との結合関係に入らざるを得ない必然性の意識であって、個人はそもそも社会の中で生きているということについての社会的意識の端初である。この端初は、この段階の社会生活そのものと同程度に動物的である。それは単なる群棲意識であり、ここで人間が鬮羊から区別されるのは、ただ彼の意識が本能の代わりを担っていること、言い換えれば、彼の本能が意識的な本能であることによってでしかない。この鬮羊意識ないし部族意識は更なる発展と成熟を遂げていくが、それをもたらすのは、生産性の向上、欲求の増大、そしてこれらの根底を成す人口の増大である。」

マルクス／エンゲルス『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、57-58 頁。

<sup>85</sup> Там же, стр. 123.

<sup>86</sup> Там же, стр. 134-135.

<sup>87</sup> Там же, стр. 140-141.

<sup>88</sup> Scheler, Hermann, „Über das Verhältnis von Spontaneität und Bewußtheit“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 1. 1957, S. 16.

<sup>89</sup> Seidel-Höppner, Waltraud, „Konferenz zum 50. Jahrestag des Erscheinens von Lenins Werk „Materialismus und Empirio-kritizismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 3, 1959, S. 479.

<sup>90</sup> landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft の略

<sup>91</sup> Schmidt, Hans, „Das sozialistische Bewußtsein der Genossenschaftsbauern – Triebkraft zur Herausbildung des sozialistischen Dorfes“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 8, 1960, S. 918-934.

<sup>92</sup> Boguszak, Jiri, „Zur Rolle des sozialistischen Rechtsbewußtseins beim Aufbau des Sozialismus – Kommunismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, S. 941-945.

<sup>93</sup> Redeker, Horst, „Die künstlerische Selbstbetätigung der Werktätigen – Ausdruck und Mittel der Entwicklung der Bewußtheit des sozialistischen Menschen“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, S. 946-952.

<sup>94</sup> ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課、『ソ連共産党綱領についてのフルシチョフ第一書記の報告』、1961 年、92 頁。

<sup>95</sup> 同上、28、93 頁。

<sup>96</sup> ルビンシュテイン、『存在と意識 下』、394 頁。

- 
- <sup>97</sup> 同上、385-386 頁。
- <sup>98</sup> 『ソ連共産党綱領についてのフルシチョフ第一書記の報告』、102 頁。
- <sup>99</sup> 実際、1962 年に起草が始まった、所謂「フルシチョフ憲法草案」ではこれを反映した内容が盛り込まれた。
- <sup>100</sup> *Материалы XXII съезда КПСС*, 1961, стр. 408.
- <sup>101</sup> *Там же*, стр. 408.
- <sup>102</sup> *Там же*, стр. 409.
- <sup>103</sup> *Там же*, стр. 409.
- <sup>104</sup> *Там же*, стр. 410.
- <sup>105</sup> *Там же*, стр. 412.
- <sup>106</sup> 巻頭論文 (多和田栄治 訳) 「ソ連共産党第 22 回党大会とソヴィエト哲学の課題」『現代ソヴェト哲学』第七集、1962 年、17 頁。
- <sup>107</sup> 同上、17 頁。
- <sup>108</sup> БУЕВА Людмила Пантелеевна (1926 年生) はヴォロネジ県 (現在は州) に生まれ、1950 年にモスクワ国立大学哲学部を卒業し、1955 年に同大学院を修了した。その年から同大学の哲学部と人文学部、及び、ソ連科学アカデミー哲学研究所で講師として勤務。1968 年に博士論文「社会環境と人格」の審査をパス。
- <sup>109</sup> マルクス/エンゲルス『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』、234 頁。
- <sup>110</sup> Буева, Л.П., Индивидуальное сознание и условия его формирования, *Вопросы философии*, 1963, № 5, стр. 67-79.
- <sup>111</sup> *Там же*, С. 79.
- <sup>112</sup> *Там же*, С. 78.
- <sup>113</sup> *Там же*, С. 73.
- <sup>114</sup> *Там же*, С. 67.
- <sup>115</sup> *Там же*, С. 67-68.
- <sup>116</sup> *Там же*, С. 68.
- <sup>117</sup> *Там же*, С. 69.
- <sup>118</sup> *Там же*, С. 69.
- <sup>119</sup> *Там же*, С. 69.
- <sup>120</sup> *Там же*, С. 71.
- <sup>121</sup> *Там же*, С.71-72.
- <sup>122</sup> *Там же*, С. 72-73.
- <sup>123</sup> *Там же*, С. 76.
- <sup>124</sup> *Там же*, С. 76.
- <sup>125</sup> Спиркин, А. Г., Материя и сознание, *Вопросы философии*, 1963, № 10. стр. 137.
- <sup>126</sup> マルクス (武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦 訳)『経済学批判』、岩波書店、1956 年、13 頁。
- <sup>127</sup> Спиркин, Материя и сознание, стр. 143.
- <sup>128</sup> *Там же*, С. 138.
- <sup>129</sup> *Там же*, С. 138.
- <sup>130</sup> *Там же*, С. 147.
- <sup>131</sup> *Там же*, С. 144.
- <sup>132</sup> *Там же*, С. 139.
- <sup>133</sup> 尤も、彼は、その前年の 1967 年に公表された論文「現代社会におけるインテリゲンツィヤ」の中で、後半にイタリアの共産主義者アントニオ・グラムシによるインテリゲンツィヤと意識との関係に関する叙述に言及しつつ、自身の意識論を展開させている。参照：Мамардашвили, Мераб К., Интеллигенция в современном обществе, *Проблемы рабочего движения: Материалы междунаrod. науч. сессии 12 – 15 апр.1967 г. М.: «Мысль»*, 1968. стр. 421-430.
- <sup>134</sup> Мамардашвили, М.К., Анализ сознания в работах Маркса, *Вопросы философии*, № 6. 1968. стр. 14-25. 彼はこの論文の中で、現象学と精神分析の成果に立脚して、マルクスが政治経済理論の中で用いている分析方法を意識論に適用するという手法で、独自の意識論を展開した。

## 第4章：大衆の役割論と人格論

### 序論

1980年代後半ソヴィエト共産党書記長ミハイル・ゴルバチョフは普遍的な人間の価値を強調したデリー宣言に署名したり（1986年11月）、1988年5月に行われたソ米首脳会談で人権問題を議題の中心に据える等、新しい価値観に基づいた「新思考」でのヒューマンイズムの重要性を印象付ける努力を外交面でしていたが、国内でも同時にイデオロギーの刷新を図り、その任務を自分の補佐官の一人で、遺伝学の技術倫理の観点から一貫してルイセンコ主義と闘い続け、1970年代後半からは主に地球環境の保護と「新しい（真の）ヒューマンイズム」を唱道していたソヴィエト哲学者のイワン・フロロフ（1929 - 1999）に委ねていた<sup>1</sup>。彼は共産党理論誌『コムニスト』編集長（1986 - 1987）等を務める傍ら、新しい哲学教科書の編纂に携わり、その草稿案が1988年にソ連の主要な哲学誌『哲学の諸問題』9月号に掲載され、翌年に教科書『哲学入門』（*«Введение в философию»*）が刊行された。

この教科書の第18章に人格／個人（*личность*）に関するソヴィエト哲学界の公式見解が記述されており、この章の執筆担当者が実存主義やカント倫理学等に関する著作が多いエリッヒ・ソロヴィヨフ<sup>2</sup>であった。1988年の『コムニスト』誌第17号（11月）に「個人、個性、人格」（*Индивид, индивидуальность, личность*）と題した彼の論文が掲載された。この論文の中で彼は人間を社会的諸関係の所産であるだけでなく、主体でもあると定義している<sup>3</sup>。彼は社会的諸関係における人間のこの主体性を重視し、「個性と人格の概念は、所与の特定の間人が公的生活の活発な主体となることができることによる自己実現に主眼を置いたものである<sup>4</sup>」と述べている。この点においてソヴィエト・イデオロギーの中身を決定する役割を担っていたソヴィエト哲学は人間の本質に関して公的にマルクスのテーゼ<sup>5</sup>の解釈の枠から半歩踏み出したと言える。

また世代的に、フロロフと同様、「60年代人」（*шестидесятники*）に属するソロヴィヨフは、旧世代の著名なソヴィエト心理学者セルゲイ・ルビンシュテインによる個性と人格の概念に関する1950年代後半の解釈を優れたものとして引用している。「人間はその人に独自の、唯一無比の個性が実在することによって個性なのであり」、人間は、自分の個性を有している限りにおいて、また、一生で最も苦しい試練の只中に在ってもなお個性を失わない限りにおいて、人格である<sup>6</sup>。こうして、旧世代の中でも先進的な研究者によって展開された、世界観や価値観、研究成果が新世代に継承され、新しいイデオロギーに反映されているのである。

更に、ソロヴィヨフは個人の社会的役割に注目し、革命家や研究者、芸術家や教師、父といった社会的役割を個人は天命としてまた十字架として自分に課し、任意ではあるが進んでその役割に伴う責任も含めて全てを抱えている、とキリスト教的表現を用いて社会の一構成員がその人の地位や立場に応じて果たすべき役割について見解を表明している<sup>7</sup>。これは、彼が1970年代以降マルティン・ルター等のプロテスタント主義の研究を通じて得た天命（*Beruf*）という観念、及び、予定説によって無神論を標榜するマルクス主義を補填するという斬新、且つ、大胆な試みである。

この様に、1980年代末のソヴィエト哲学界の公式の人間観は、従来のマルクス＝レーニン主義から大きく外れ、それは旧世代の研究成果を継承すると共に、所謂「60年代人」自身がこの数十

年間に諸外国の古今の知識を吸収しながら累積してきた知識や世界観をも反映させたものとなっている。

この論文の前にポリティズダート出版の編集局長で哲学者のレオニード・グレコフ（1929年生まれ）が新教科書出版を祝福する文章を寄稿している。彼によれば、読者に近年の自国の哲学の創造的な進展の本質的な成果を最大限紹介すること、ソヴィエト哲学思想と社会的実践との有機的結び付き、更に、社会主義の刷新という課題を解決する批判的・建設的可能性の提示という難題が執筆者陣に課せられた。彼は、人格に関する考察こそが人間をテーマとした20世紀哲学の中でも特に中核的な問題表明であり、まさにそれ故に、人格が社会刷新戦略の中心に据えられているのであるから、人格に関する断章がこの教科書全体を代表している、と断言してソロヴィヨフによる人格に関する論文を紹介する<sup>8</sup>。

それでは、どの様な背景のもとで、いつから、どの様な人々によってこうした人民大衆の人格ないし個人と日本語に訳されている *личность* (*lichnost'*) の概念に関する議論がソ連において議論され、発展していったのであろうか。この哲学教科書『哲学入門』（第三版）によれば、1950年代後半から、特に1960年代に「人類学の転換」が生じた、つまり、ソヴィエト哲学は人間、及び、人間の諸問題に取り組み始めた。また、1950年代末から人間、及び、個性の問題が徐々に着実に注目される様になった<sup>9</sup>。一つはかなり普及しつつあった傾向は、階級闘争、革命、プロレタリアート独裁がまだマルクス主義の中で重視されていた時期に特徴的な伝統的なアプローチの中に人間に関するテーマを書き加えるというものであった、とこの教科書は伝えている<sup>10</sup>。1954年に出版されたマルク・ローゼンターリとパヴェル・ユージン監修による『哲学小辞典』第四増補訂正版には「歴史における個人」という項目はあるが、ここで言う個人とは歴史上傑出した人物の事を指すのであって、人民大衆一人一人の人格の発達に関する言及はまだ無く、一般人は大衆の形態としてのみ捉えられていた状態であり、且つ、個人ではなく人民大衆が歴史の主要な動力であるという主張が展開されていた<sup>11</sup>。近年のスターリン期歴史学・歴史教育界の研究で、独ソ戦を境に所謂「ジダーノフシチナ」と共に歴史上の指導的人物の役割と大衆の役割の比重が逆転し、大衆の役割論が再び重視されるようになったという指摘が為された<sup>12</sup>。

従って、この章では先ず、スターリン時代にまで遡って大衆の役割論の展開に注目し、それがフルシチョフ期にどの様に変遷していったのかを検証する。しかる後に、大衆の一個人/人格 (*личность*) 論が何故、フルシチョフ期のどの段階で、どの様な形成過程を経て「ヒューマニズム」イデオロギーという理論系列の補助仮説の一つとなり、それがどの世代によってどの様な過程を経て発展していったかを、当時の東独の人格論を紹介しながら、検証することを課題とする。

## 1. 前史としての大衆の役割論

### (1) スターリン期における「歴史における個人の役割」論と大衆の役割論の盛衰

序章でも紹介した様に、最近のスターリン期ソヴィエト歴史学・歴史教育学研究によれば、大テロル期に多数の革命家が逮捕・処刑され、彼らの代わりに国家統合の象徴的存在となる人物が必要となったこと、及び、「愛国主義的」国民史描写への要求の存在を背景として、1938年にはそれまで否定されていたゲオルギー・プレハーノフの『歴史における個人の役割の問題によせて』が再版され、歴史の発展に対する個人の影響力の重視を称賛する論文が、党の理論誌や学術雑誌

に多数掲載された<sup>13</sup>。ところが、第二次世界大戦後には、独ソ戦期の同盟国の影響力の拡大がソ連に変化を及ぼすという憶測の広まりや、作家やジャーナリスト達がソ連に対する米英の「勝利」を望む見解を表明する等といった内外の情勢を受けて、西欧「跪拝」に対する批判とマルクス＝レーニン主義のイデオロギー的原則への回帰の要求が公式決定や党指導部の演説に現れ、特に1946年8月14日に採択された全連邦党中央委員会決定が広報されて以降イデオロギー統制が強化され、西欧の研究への「跪拝」が批判の対象となり、その一環として、歴史上の人物を階級的評価無しに分析し、大衆の役割を過小評価したのは「ブルジョア歴史学」の影響下にあったという批判が一部の教師達によって為されるにまで至った<sup>14</sup>。

この様な路線のもとで1950年に出版されたフォードル・コンスタンティノフ監修の『史的唯物論』では、第13章が「歴史における人民大衆と個人との役割」に割り当てられている。そこには、「指導者、理論的代表者は、その指導によって大衆の組織性と意識性の成長を促したり、妨げたりする事ができる<sup>15</sup>」という記述があり、また、別の箇所では、「偉大な歴史的人物、進歩的な階級の代表者は、日程に上った歴史的任務を理解し、この任務の解決の条件、方法、及び手段を理解して、大衆を動員し、結集させ、大衆の闘争を指導するのである<sup>16</sup>」と述べられている。ここでは、大衆は指導者の意のままに操られる人形であり、動員、結集、指導される受身の対象であり、大衆の側の主体性は求められておらず、フリードリッヒ・ニーチェの群居動物と先導動物の喩え（『ツァラトゥストラはかく語りき』）を髣髴とさせる。まさに、ヨシフ・スターリンが1945年6月25日に戦勝観兵式の場で演説した様に、「普通のつつましい人々」はソヴィエト国家機構の「小ネジ」（*винтик*）と看做されていた<sup>17</sup>。確かに、「歴史を促進する可能性は、社会によって達成された経済的発達や、政治生活に積極的に参加している大衆の数や、大衆の組織性と意識性の程度や、自分の根本的利益に対する大衆の理解等の如何にかかっている<sup>18</sup>」という、大衆の積極性を認める叙述もあるが、しかし、大衆を動員し、組織し、彼等に階級闘争という意識を外部から注入するのは指導者であり、理論的指導者であるという立場を取っていることを鑑みれば、この様な記述は単なる建前に過ぎないことは明瞭である。

他方で、この教科書は、人民を歴史の主要な作用力と看做す19世紀ロシアの革命民主主義者、ニコライ・ドブロリューボフの見地や、人民を精神的価値の唯一の源泉と看做すソヴィエト作家マクシム・ゴーリキーの言説を紹介している。この章の執筆担当者は、「歴史的人物は、彼が成熟した要求に応えている一般的思想、一般的希望、及び、志向の、謂わば具現者である時にだけ、大衆を本当に引っ張っていくことができるのである」というドブロリューボフの言葉を引用し、「人民がいなければ、所謂偉人は王国や帝国を建てたり、戦争をしたり、歴史を創造したりすることはできない<sup>19</sup>」と述べて、無条件に人民を歴史の進歩にとって必要不可欠な機動力として特徴付けている。また、「人民の生活と人民の創造とが、真に偉大な全ての作家や詩人の智慧と靈感の源泉なのである」とも述べ、その根拠をゴーリキーの『文学評論集』（1937）の次の箇所に求めている。「人民は単に一切の物質的価値を創り出す力であるだけではない。人民は精神的価値の唯一の汲めども尽きぬ源泉であって、時間と美と創造の天才性という点で、第一の哲人と詩人であり、全ての偉大な史詩、全ての地上の悲劇、及びその中でも最も偉大なもの、すなわち、世界文化の歴史を創造した<sup>20</sup>」。こうした叙述は、一方では、独ソ戦後の西欧「跪拝」批判に伴う愛国主義的傾向を呈しているが、他方では、これまでの物質的価値の偏重から精神的価値の再評価へという、後のフルシチョフ期に湧き起こった新しい潮流のかすかな兆候を示している。

## (2) 1950年代半ばにおける大衆の役割論

スターリンが1953年に死去した後、個人の研究は、ヴラディーミル・レーニンに倣って、階級の行動の研究に還元された形で再開された<sup>21</sup>。レーニンは、階級闘争理論が、経済的社会構成体の各々の限界内での「生きた個人」の闘争を社会の発展を規定してきたところの諸階級の行動に、普遍化し、還元するのに貢献したと考え、マルクス主義社会学における没個人化を賞賛した<sup>22</sup>。階級の歴史的役割についてのレーニンの次の叙述が1950年代後半の民衆の役割論で度々引用されている。「ロシアでは、「労働の純粹観念」の担い手でないとナロードニキが考えている階級の歴史的役割は、特に大きい。(中略)彼等に対するマルクス主義者の側からの指摘は、(中略)無関心な「社会」が手から取り落とした、「民主主義の糸」を拾い上げるものであるし、その発展、強化、生活への接近を要求するものである<sup>23</sup>」。

レーニン死去30年に当たる1954年の『哲学の諸問題』誌第一号に、フルシチョフ期の代表的イデオログであると同時に、『哲学の諸問題』誌の庇護者でもあった<sup>24</sup>ピョートル・フェドセーエフ(1908 - 1990)は論文「ヴェ・イ・レーニンによる史的唯物論の発展」を寄稿し、その中でレーニンの諸著作における人民大衆の役割論を総括し、謂わば「ポスト・スターリン時代」という新時代を迎えるに当たってそれに適合した新規のイデオロギーの構成単位として提示した。彼は、社会生活における「英雄」、「優れた個人」の決定的役割という、1930年代末から1940年代半ばまで高い評価を受けていた個人の役割に関する理論を疑似科学と論難すると同時に、共産党は個人崇拜に反対していると述べることによって、スターリン時代と名実ともに決別し、こうした個人の役割と対照を成すものとして実際に歴史を創造する人民大衆の役割に焦点を当てた。「真の指導者は大衆と結合していることによって、大衆から学ぶことができることによって力があるとレーニンがいつも強調した<sup>25</sup>」と追記することによって、フェドセーエフはスターリンがこのレーニンの原則から逸脱し、大衆から遊離していたことを仄めかした。スターリン死後からフルシチョフ期までの移行期間に哲学界では、既に個人崇拜批判が行われるのと並行して、スターリン期末期から再び重視されていた大衆の役割論がまだ大きな比重を占めていた。

第20回党大会が開催される前年の1955年はレーニン生誕85周年に当たり、レーニンへの回帰のムードが醸成された。その様な折に、階級の歴史的役割論に関する論文「社会主義社会の発展における民衆の創造的役割」が『コムニスト』誌の第三号に掲載された。著者のグリゴリー・グレーゼルマン<sup>26</sup>はこの論文の中で、先ず、社会主義革命による教育の独占の廃止が民衆にもたらした様々な成果を賞賛した上で、大衆を共産主義の建設者たらしめ、役割を担わせるには、大衆の創意と積極性とを不断に高揚させる上での必要な物的、並びに、文化的条件の整備を党が果たさなければならないと述べて党の課題を挙げるとともに、大衆の創造的エネルギーの十分な発揮を阻む要因として、一部労働者の無気力と小成に安んずる気持ち、官僚主義的偏向、人々の生活様式や意識に残る資本主義的要素等を挙げた<sup>27</sup>。この様に、グレーゼルマンは、大衆が共産主義建設という歴史的役割を担う上での様々な課題を提示した。

また、この同じ年、『哲学の諸問題』誌編集長であるミハイル・カムマリ<sup>28</sup>は1905年革命50周年を記念し、革命における人民大衆が果たす役割について述べた論文を同誌に寄稿した。彼は、「まさに人民大衆の闘争こそが社会的発展の矛盾の全ての根源を実際に解決し、旧社会体制から新しく進歩的な体制への革命的転換を実行する」と述べて、革命の実行力としての人民大衆の役割を賛美したうえで、社会の発展に果たす人民大衆の役割の大きさは社会制度の進歩度、及び、

大衆の自覚や組織化の高さによって逐次変化していくものであるという見解を示した<sup>29</sup>。

1956年のまだ第20回党大会が開催される前、『コムニスト』誌第一号にカムマリによる人民大衆の役割をテーマにした論文が掲載されている。この中での注目すべき主張は次の三点である。先ず第一点は、現代はアリストテレスやレオナルド・ダ・ヴィンチの時代と違って全ての知識を一人の人間が把握するのは不可能であり、科学の発展には各分野に特化した専門家が必要であるという主張である。マルクスとエンゲルスは共著『ドイツ・イデオロギー』の中で「共産主義社会では、各人は排他的な活動領域というものを持たず、任意の諸部門で自分を磨くことができる。共産主義社会においては社会が生産の全般を規制しており、まさしくその故に可能になることなのだが、私は今日はこれを、明日はあれをし、朝は狩をし、午後は漁をし、夕刻になると家畜を追い、そして食後には批判をする、つまり、猟師、漁夫、牧人あるいは批判家になることはなく、私の好きな様にそうすることができるようになるのである」と述べて、共産主義社会では分業が廃止されると主張している<sup>30</sup>。これに対して、レーニンは上記の論文「ナロードニキ主義の経済学的内容」の中で、分業が「個人」の発展の為の諸条件を生み出したというストルーヴェの主張を修正し、分業ではなくロシア資本主義と言うべきであり、資本主義こそが「進歩の福祉」の物質的条件への個人の抗議を可能にする条件を作り出した、というロシアの特異な事情を指摘した<sup>31</sup>。従って、カムマリはマルクスやエンゲルスの西欧的な分業観を無視して、後進的なロシアで資本主義的な分業が持つ進歩性に配慮した見解を示したと言える。第二点は、世論への期待であり、文化・教育面で、また、哲学、道徳、科学等といった社会の精神生活の向上において世論が果たす役割への注目である<sup>32</sup>。第三点は人々の教育におけるヒューマンイズムの精神の復活である<sup>33</sup>。こうして、彼は一方では、マルクスが19世紀に行った主張を20世紀後半のソ連情勢に即して修正し、他方では、スターリン時代以前への復古を唱えたのである。

第20回党大会後最初に『哲学の諸問題』誌に掲載されたのは「60年代人」であるアナトリー・ブテンコ<sup>34</sup>による論文「社会的カテゴリーとしての人民」であった。彼は、「人民」という言葉を社会学的に整理した。彼によれば、「人民」概念は時代とともにその内容を変えていく歴史的な概念であり、「住民」や「国民」とは同一ではない。「人民」概念の内容は社会の社会構造の変化を反映しており、何よりも人民の生活の経済環境の変化と連動している<sup>35</sup>。その上で彼は人民を「所与の国家、所与の段階における進歩的、革命的発展の課題の解決に自己の客観的法規に従って共同で参加できる住民のあれこれの層や階級の一部を含む、人々の歴史的に移り変わり行く統一体<sup>36</sup>」と定義した。こうして、一階級としての「人民」研究の基礎付け作業に「60年代人」も50年代後半以降加わり始めた。

### (3) 1950年代末における人民大衆の役割論

1950年代末には二つの哲学教科書が公刊された。即ち、『マルクス主義哲学の基礎』（1958）と『マルクス＝レーニン主義の基礎』（1959）である。『史的唯物論』（1950）同様、両教科書で「歴史における人民大衆と個人の役割」という章（第18章、第6章）が設けられている。1950年版哲学教科書『史的唯物論』での記述と比較した場合、1958年版の最大の相違点は、第3節：革命運動における労働者階級の指導者の役割で、スターリンの言葉からの引用やスターリンを賛美する文言が全て削除され、代わりに、スターリンの個人崇拜をソ連共産党が克服したと宣言している点である。他方で、「党は、彼の生涯の後年に彼が犯し、党と人民に重大な損害をもたら



した深い誤りと歪曲した廉でスターリンを徹底的に非難した。この点にスターリンの悲劇がある。と言うのは、彼は主観的にはレーニン主義・労働者階級・人民に献身していたのだから<sup>37</sup>。」という弁護も挿入されている。志水速雄氏が第20回党大会でのフルシチョフの秘密報告を分析して指摘した様に、スターリンの生涯を二つに分け、その前半を肯定し、後半を否定する、また、彼の主観的意図は肯定するが、その客観的行為は否定するという、第20回党大会でのフルシチョフのテーゼ<sup>38</sup>がこの教科書に反映されている。他方、1959年版には、スターリンに関して病床のレーニンが1922年12月下旬から1923年1月初旬にかけて口述筆記させた手紙、就中、1923年1月4日付けの手紙の内容が反映されている<sup>39</sup>。すなわち、スターリンが「粗暴さ、他人の意見に対する不寛容、病的な疑り深さ、気まぐれ<sup>40</sup>」といった否定的な性格の持ち主であったことが記されている。また、「特別な中央集権化が必要」とされた時期にスターリンがそれを「極端にまで推進させて過度の権力が自分の掌中に集中するよう努めたが故に、共産党に固有な集団指導の原則に違反する事態になった。そうした情勢下では、彼の否定的な個人的特徴は彼の社会活動と党活動に、まさにその党と国家の生活にも多少の影響を示し始めた<sup>41</sup>」、等々とスターリンによる権力の私物化を批判し、それがいかに党と国家に悪影響を及ぼしたかを明示した。この様に、僅か1年の違いであるが、1959年版ではスターリン批判の度合いが増し、本格化している。

1958年版の教科書は、ブテンコが提起した人民概念を盛り込んで、「階級社会における人民は、異なった利害関係を持つ様々な階級や社会的集団から成り立って」おり、「経済的諸条件の変化に伴って人民大衆の階級的構成もまた変化する<sup>42</sup>」と、人民概念を説明している。1959年版でも、「人民大衆が具体的にどの様な階級と層から成っているかは、その時代と社会構造の特徴次第である」という記述がある。しかしそれよりもこの版で目立つのは冒頭に人民大衆の定義が為されている点である。すなわち、「人民大衆とは、先ず、社会的生産を動かし、自分自身の労働によって生きている階級、並びに、社会層、即ち、大衆労働者達である<sup>43</sup>。」この様に、1959年版での人民大衆の役割論は、それまでの成果を踏まえつつも、一層の進展を見せている。

1960年にはチェルヌィシェフスキーの人民大衆の役割理解に関する論文が二つ同誌に掲載された。一つ目はアレクサンドル・マスリン<sup>44</sup>による「歴史における人民大衆と個人の役割に関するチェルヌィシェフスキー学派」(第三号)で、二つ目はエミリヤ・ヴィレンスカヤ<sup>45</sup>による「解放闘争における人民大衆の役割に関するエヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーとア・イ・ゲルツェン」(第八号)である。

マスリンはレーニンが人民大衆をロシアにおける社会民主勢力として捉えていたことを紹介する一方で<sup>46</sup>、ヘーゲルが歴史における人民の役割をどう評価していたかを紹介した<sup>47</sup>。この論文の中で彼はチェルヌィシェフスキーの学派の中でも特にドミートリー・ピサレフ(1840 - 1868)の、社会生活における個人の役割についての見解に注目している。

他方、ヴィレンスカヤは、ゲルツェンとチェルヌィシェフスキーとが1861年から62年にかけて解放闘争における人民大衆の役割に関して書いた、「解放の餌食」(『コーロコル(鐘)』1862年1月1日)と「変異の始まりではないか」(『ソヴレメンニク(同時代人)』1861年11月号)、という従来余り触れられなかった二つの論文を取り上げて、この二人の革命と人民大衆の役割についての考え方を比較した<sup>48</sup>。

こうして、1950年代半ば以降ソヴィエト哲学界では、スターリン期末期に続き人民大衆の役割に比重が置かれ、「60年代人」がこの議論に参加して人民概念が明確化されるとともに、共産主義社会建設の為に人民大衆の積極性を引き出すことが爾後の課題として提起された。と同時に、

帝政ロシア末期における人民大衆の役割論に注目した研究も発表され、十月革命以前に展開されていた議論の内、スターリン期には紹介されていなかった箇所にも旧世代によってようやく光が当てられた。

## 第2節：1950年代後半における人格論の登場と展開

### (1) 道徳的観点からの人格論と心理学界における人格研究（人格心理学）

スターリン没後、第1章で紹介した中間的世代のマリヤ・ペトロシヤンによるヒューマニズム論での人格への言及に続いて人民大衆の一個人に着目した著作が現れたのは、管見の限りでは、『哲学の諸問題』誌1956年第4号に掲載された、教育学者であり倫理学者でもあるアレクサンドル・シシュキン<sup>49</sup>による「共産主義道徳の理論の幾つかの問題」という論文である。この論文の中で、旧世代の彼は、「義務、名誉と人格、良心、幸福の様な倫理学の諸カテゴリーの内容は、共産主義道徳の諸原則に照らして初めて理解することができる」と述べて、人格を倫理学の諸カテゴリーの一つとして名誉と共に挙げた。また彼は、「人間の名誉と人格についての共産主義的概念は、抑圧と奴隷制度に対する憎悪、個人を創造的な社会的力として確立する為の積極的な闘争を前提としている。ソヴィエト人や、どんな国であれ、共産主義を目指している戦士の名誉と人格は、諸特権・富・免状によってではなくて、彼が社会的義務をどの様に遂行するかによって判定される」とも述べ、名誉と人格とを社会的義務の遂行の仕方と結び付けて、人民一人一人の社会的役割を提示した<sup>50</sup>。こうして、先ずは倫理学の分野において人民大衆の一個人の人格（личность）が研究の対象として登場した。このことは、人格論が倫理学と密接に結びついた形で補助仮説としてその第一歩を踏み出したことを意味している。

しかしながら、1950年代半ば頃人格理論に関する議論がより活発に交わされたのは寧ろ心理学の分野においてであった。ポーランド出身でスイスのフリブール大学教授でソヴィエト哲学研究の先駆者であるヨセフ・ボヘンスキーは、著書『ソヴィエト・ロシア弁証法的唯物論』の中で1950年代前半の段階でソヴィエト人文科学が置かれていた状況を分析して「人間学は心理学によってのみ支持されているが、この心理学は共産主義者の許で長年に亘って危機にあるものである」との認識を示した<sup>51</sup>。しかし、芝田進午氏の著作『人間性と人格の理論』によれば、1955年に創刊された『心理学の諸問題』誌を中心として科学としての人格理論ないし人格心理学の確立を巡り、活発な議論が行われ、1956年5月から6月にかけて全国規模の「人格心理学に関する会議」が開催されたりもした<sup>52</sup>。ソヴィエト心理学の研究者であるロバート・ペインは、ソヴィエト心理学にとって人格とは、外的衝動の屈折を介した内的諸条件の統合された複合体であると分析した<sup>53</sup>。

こうした心理学の分野における人格研究の成果を哲学の分野の人々に知らしめる役割を果たしたと思われるのが、序論で既述した心理学者であると同時に哲学者でもあるセルゲイ・ルビンシュテインの著書『存在と意識』である。彼は、人格は心理学の分野に入らないという見解を斥け、心理学無しには人格の全面的研究は不可能であると反論し、人間の活動が心理学にとって何故基本的な意義を持つのか次の様に説明している。「人格は人間と周囲の世界との相互作用の中で形成される。人間は相互作用の中で、その遂行する活動の中で、現れるのみならず形成される<sup>54</sup>。」この見解をマルクスの「フォイエールバッハ・テーゼ」第六、すなわち、人間の本質とは社会的諸関係の総体（アンサンブル）であるという定式と比較すれば、人間が周囲の世界に与

える影響も考慮されている点において、つまり、人間を周囲の世界との関係において主体的に働きかける意識的存在と看做している点において、彼がマルクスやエンゲルスよりも人間をより能動的な存在として捉えていたことがここから伺える。この観点は人間の個性と人格との関係を整理した、「人間は、独特で、個別的で、無比の個性を有するが故に個人である。人間は環境への自己の態度を意識的に規定するが故に個性である。人間は自分自身の個性を持っている限りにおいて人格である<sup>55</sup>」という叙述からも見て取れる。

尤も、ペインが指摘した様に、ルビンシュテインは人格を個性的な特殊性に帰せしめて理解していたわけではなく、人類が系統発生の過程で獲得し、全人類に共通する、一般的で不変の性格をも人格の一部として理解していた<sup>56</sup>。このソヴィエト心理学者は人格が持つ個別性と普遍性について次の様に述べている。「人格は、人格において行われる個人的屈折の中に普遍的なものがより多く与えられれば与えられる程、より幅広いものになる<sup>57</sup>」。

人格は人間と周囲の世界との相互作用の中で形成され、意識的に周囲に対する自己の態度を決定するとともに、個性と普遍性とを併せ持つものである、というルビンシュテインの人格観は、未だ人格 (*личность*) 論が歴史上の人物 (*личность*) 論に留まっていたソヴィエト哲学界に議論の基礎を提供した。また、彼は「人間という主題は、世界観的な面での、そして何よりも先ず、倫理的な次元での、大きな主題である<sup>58</sup>」と述べて、この主題の倫理的局面に光を当てて人格論と倫理学とをリンクさせるとともに、「個人としての人間にとっては意識が、知識としてばかりでなく、態度としてもまた、基本的な意義を持っているのである。意識無しには、意識的に一定の立場を取る能力無しには、人格は存在しない<sup>59</sup>」とも述べて、人格論と意識論をも結びつけた。こうして、旧世代のソヴィエト心理学者ルビンシュテインによって、人格論と倫理学、並びに、意識論とは、相互に密接に関連しあう補助仮説として発展していく理論的基礎を得たのである。

## (2) プレハーノフの再復権

プレハーノフの歴史における個人の役割論が 1930 年代末に脚光を浴び始めたことは既に述べた通りである。第 20 回党大会後ソヴィエト哲学界では更にプレハーノフの復権を推し進めようとする動きが見られた。同年の 1956 年に開催されたソヴィエト科学アカデミー経済学・哲学・法学部会の総会で、ミハイル・イオフチュク<sup>60</sup>は社会思想史の研究プランに関する報告を行い、レーニンがプレハーノフの著作を高く評価したことに聴衆の注意を喚起するとともに、これまで彼の誤謬の方が誇張されてきた経緯を明示し、プレハーノフがロシアにおけるマルクス主義思想において果たした役割に関する研究と著作の出版の必要性を力説した<sup>61</sup>。実際、1954 年の『歴史の諸問題』誌では、プレハーノフは、マルクス主義的観点から歴史過程の法則性を立証し、ナロードニキに論駁するマルクス主義者としての評価を受けてはいるものの、この論者はこのマルクス主義理論家のメンシェヴィキとしての限界、すなわち、「ロシアのブルジョアジーにロシアにおける革命運動の決定的な力の一つを見出した」という、謂わば、負の側面も同時に詳細に論述している。更にこの著者は、プレハーノフに「は歴史的現象を含めマルクス主義を創造的に高め応用する能力が欠如していた」とあるとか、プレハーノフは絶対君主制の時代における人民の役割を矮小化し、メンシェヴィキ的図式の見地からピョートル一世時代の意義を貴族階級の「解放」に帰せしめた、といった批判すべき点の方に重点を置いている<sup>62</sup>。この様に、厳しい批評に晒されていたプレハーノフの再評価が始まったのは第 20 回党大会後のことであった。

イオフチュクによる報告の後プレハーノフの『文学遺稿集』全4巻が出版に向けて準備され、ソ連科学アカデミー哲学研究所は彼の哲学作品集全5巻出版の準備に着手する等、ソヴィエト哲学界はプレハーノフの更なる復権に向かいつつあった。その他に、1957年第2号の『ソ連科学アカデミー通報』には、アカデミー会員アブラム・デボーリン<sup>63</sup>が「歴史における個人の役割に関するプレハーノフ」という題目の報告の中で、歴史における個人の役割に関する問題という、マルクスとエンゲルスによって詳細に分析されなかったマルクス主義哲学の重要な諸問題の一つを解明したというプレハーノフの実績を高く評価したことが記されている<sup>64</sup>。

### (3) 第21回党大会（1959）後のソヴィエト哲学界における人格論

1959年1月から2月にかけて開催された第21回党大会で第一書記ニキータ・フルシチョフが数回にわたって人間の個性の全面的な発展に言及して以降ソヴィエト哲学の論壇では人格に関する著作が突如として発表され始めた<sup>65</sup>。こうした国内事情のみを見れば、ソヴィエト哲学は教条的に拘束された思惟であり、外部すなわち哲学に疎遠な権威から、単にその限界だけでなく、その積極的な基礎をも受け取る思惟であると指摘したボヘンスキーの分析は正鵠を得ていると言えよう<sup>66</sup>。

だが、同時に国外の人格論に目を転ずれば、『ドイツ哲学雑誌』1959年第2号の論評記事によれば、東独では前年の1958年12月19日イェーナにあるフリードリヒ・シラー大学哲学研究所で「社会主義的人格の育成についての若干の問題」という議題で討論の場がもたれ、若手研究者全員が招待に応じて参加し、活発な意見交換の場となった。この討論会では何よりも先ず社会主義的人格の育成をめぐる意見が交換されたが、教育現場の人々は誰一人として発言の許可を求めなかった。この討論会では幾度となく理論と実践、及び、哲学と政治とのマルクス主義的結びつきの一例として、1958年7月中旬にベルリンで開催された独社会主義統一党第5回党大会（フルシチョフが来賓として出席）が挙げられ、第一書記ヴァルター・ウルブリヒトによって文書化され、この党大会で採択された「社会主義の道徳と倫理の十戒」の全面的実現こそが、社会主義的人格の規準であるとされた<sup>67</sup>。

こうした社会主義的労働倫理の教育といった労働への意識的關係が討論の多くを占めていたが、他方で出席者の一人ラインホルト・ミラーは報告の中で、「社会主義的人格」という概念がその理性的構成要素のみ言及されて一面的に理解されているのではないかという疑いを提示し、社会主義的人格には自発性、楽観主義、敵に対する健全な憎悪、及び、人類並びに自分が属する階級に対する愛着といった感情的要素も含まれると主張した<sup>68</sup>。彼は翌年の1960年に刊行された著作『社会主義的人間の生成』の中で、社会主義的人格とはその人の社会的地位とは無関係であり、意識的、創造的活動において社会主義的上部構造のもとで全力を尽くす人であり、社会主義的特性により優れている人であると論述した<sup>69</sup>。この様に東ドイツの哲学界では新しい道徳律の採択を契機としてソ連よりも一年早く人格論に関心が寄せられており、こうした国外の論壇のソ連哲学界への影響は否定できない。

第21回党大会の直後に『哲学の科学』誌に倫理学者のアナトリー・ハルチュエフ<sup>70</sup>による論文「社会主義の下での個人の道徳教育の問題」が掲載された。彼は「フォイエルバッハ・テーゼ」第六を人格理解の基本的テーゼとして認めながらも、社会的諸関係は生産のみならず、政治的諸関係としても人格の中に反映され現出するし、また、文化も人格形成の中で大きな役割を果たす

と述べて、マルクスの考えを補足する。その上で、社会が人格に及ぼす影響の諸側面の一つとして道徳教育を特に取り上げた<sup>71</sup>。

党大会が開催されたこの年には、哲学教科書『マルクス＝レーニン主義の基礎』が出版され、教科書としては初めて人民大衆とは別に人格／個人 (*личность*) についての独立した節が設けられた。この節は第5篇に収められており、「執筆者達から」と題された前書きによれば、当篇は、「社会主義社会及び共産主義社会の建設に関する学説に当てられた<sup>72</sup>」ものである。当該個所では社会主義社会ないし共産主義社会にあって個人がいかに社会との関係を取り結ぶべきかが記されており、ここでは人格論、倫理学、意識論が相互補完関係にある。次の一文はその一例である。

「人民大衆の社会主義的自覚が成長するにつれて、人々の行動の中では道徳的刺激が益々大きな役割を果たし始め、社会的な事柄についての配慮が各人の個人的な事柄となる<sup>73</sup>。」また、共産主義社会における個性の開花、及び、人格の全面的発達について詳細に予言している箇所では、共産主義的人間は強制されずとも自分の道徳的責務を自覚して行動できるものであると予定されている<sup>74</sup>。

また、この党大会以降人格の全面的発達をテーマとした論文が雑誌に掲載されるようになった。例えば、「共産主義建設と人格の全面的発達」が1959年に『コムニスト』誌第12号に掲載された。著者グリゴリー・ガーク<sup>75</sup>は人格の全面的発達は人間の：a) 労働者として、b) 消費者として、c) 市民且つ社会的活動家として、d) 道徳的且つ文化的個人として、という四つの側面を含むと主張した<sup>76</sup>。

翌年1960年の『コムニスト』誌第18号に、この年にソヴィエト哲学史上初の価値論に関する単著『生活と文化の諸価値について』を出版した、ヴァシーリー・トゥガリノフによる論文「社会主義社会と個人」が掲載された。彼はこの論文の中でヒューマニズム、自由の感覚の発達、生活への建設的アプローチ、個人的発意、創造性、全てこれらは労働者が搾取者との闘争で培ってきた品性であると主張した<sup>77</sup>。

こうして、人格論は1950年代後半以降、倫理学、及び、意識論と相互に密接に結合しつつ、「ヒューマニズム」イデオロギーの理論系列の補助仮説として、主として旧世代と中間的世代とによって基礎付けられ、発展させられていったのであり、それを推進させる役割を果たしたのが、第21回党大会でのフルシチョフの演説であった。また、同時期に形成されていった東独の人格論がソ連の論壇に多少とも影響を及ぼしたことも考えられる。いずれにせよ、第22回党大会で採択される予定の新綱領で新規に核として取り込まれるべき「ヒューマニズム」イデオロギーの補助仮説として人格論は1960年の時点で既にその理論的基礎をほぼ形成し終えていたのである。

### 第3節：1960年代前半における人格論の発展

#### (1) 第22回党大会（1961）と党の新綱領

1961年1月にその年に開催される予定の第22回党大会の内容を決める党中央委員会総会での党大会の方針決定を受けて、ソヴィエト社会学学会議長を務めていたユーリー・フランツェフ<sup>78</sup>は「社会主義集団主義と人格形成」と題した論文を『哲学の諸問題』誌に寄稿した。この論文の中で彼は、基本的には第21回党大会での決定に沿って、道徳的意識の育成や義務感等、社会主義社会における人格形成や精神の発展のあり方について論じた<sup>79</sup>。

他方で、所謂「60年代人」の哲学者の中には、党指導部による国民の「人格の全面的発達」化推進政策を官僚主義的な「類型化（没個性化）」と看做して婉曲的にこれを批判する者が現れた。『哲学の諸問題』誌第4号にユーリー・ザモシュキン<sup>80</sup>による「ブルジョア社会の官僚主義化と個人の運命」が掲載された。この著作は前年の第6号に掲載された論文「現代資本主義と個人の精神生活」<sup>81</sup>での官僚主義批判を更に発展させたものとなっており、官僚主義がいかに人間の人格に悪影響を与えるかについて述べた、イデオロギー批判となっている。官僚主義の特徴として没人格化を挙げるとともに、官僚主義による疎外というエリッヒ・フロムの見解を紹介するに留まらず、ゲオルギー・マンハイム、マックス・ウェーバー等といった欧米の社会学者達による官僚主義批判を肯定的に評価している<sup>82</sup>。ソロヴィヨフは、人間に関するテーマの確立は現代外国哲学の研究を通じて間接的・婉曲的に行われ、その際に重要な役割を果たしたのが、ザモシュキンによる、アメリカの社会的な批評の文献に基づいて個人主義や大勢順応主義への反対を叙述した著作物の発表であった、と回想している<sup>83</sup>。別の「60年代人」ヴラディーミル・イラリノヴィチ・シンカルク（1928年生まれ）は、「個人（индивид）や人格（личность）は社会の目的の実現化の手段ではあり得ず、逆に、社会や国家が人格の創造的な自己実現を援助し、権利や自由を保障しなければならない。この様なアプローチが「60年代人」の理想的世界観の基本的な流れとなった」、と回想している<sup>84</sup>。この様に、公的解釈とは異なる独自の人格観を持つ「60年代人」達が、ゴルバチョフ期の「新思考」の基礎となる研究を積み、著作を公表し始めていたのである。しかしこうした批判は、間接的な手段を用いているにせよ、例外的であり、大半はフルシチョフ指導部のディスクールである「全面的に発達した人格」の解釈を巡る無難な議論に終始していた。

2年前の1959年に開催された第21回党大会でのフルシチョフ演説の中で軽く言及され方向付けを与えられたソ連における人格論の発展に弾みをつけたのが、1961年10月に開催された第22回党大会における同氏の演説であり、また、その党大会で採択された新しい党綱領であった。第一書記はこの演説で何度も人間の個性の全面的な発展が社会主義から共産主義への移行に際して必要不可欠であることを訴えた<sup>85</sup>。尤も、フルシチョフは大衆の役割について全く触れなかったわけではない。「搾取者達が個性の無い無気力な大衆として鼻であしらってきた労働者と農民は、社会主義の条件の下では真に限りない創造能力、驚くべき英雄精神、非凡な勇敢さ、巨人の様な力を発揮した」と彼は述べて、大衆の貢献を称えた。だが、重点は明らかに大衆から個人へ、新しい人間<sup>86</sup>の形成へとシフトした。また同時に、ウレドフが指摘してきた世論の重要性もまた公的に認知され、道徳とセットになって第一書記の演説の中に盛り込まれた<sup>87</sup>。この様に、個人の人格の発展は党のイデオロギーに新しく導入された「ヒューマニズム<sup>88</sup>」の不可欠な要素として捉えられたのである。すなわち、これをMSRPで表現すれば、人格論は倫理学や意識論と連続性によって結びついた形で、新規に「理論系列の中で一貫して守られる部分」となった理論系列の一構成単位となったのである。

第22回党大会で採択された党の新綱領は、党のイデオロギー活動上の課題として、全労働者を、高いイデオロギー性、共産主義への献身、労働、並びに、社会経済への共産主義的態度、といった精神の持ち主に教育すること、及び、ブルジョア的諸見解や習慣の完全な克服とともに、人格の全面的・調和的発達を挙げている<sup>89</sup>。また、これは共産主義的自覚の育成の分野の一つとしても挙げられており、共産主義への移行期には精神的豊かさ、道徳的誠実さ、肉体的完全さを調和的に兼ね備えた新しい人間を育成する可能性が増大すると予言している<sup>90</sup>。

## (2) 1960年代前半における人格論の発展

この党大会の翌月の11月には『哲学の諸問題』誌に「ソ連邦共産党第22回党大会とソヴィエト哲学の課題」という巻頭論文が掲載された。この論文から伺えるのは、イデオログは共産主義的意識の育成や道德規範の確立を当面の最も重要な課題と看做し、人格の全面的発達はそのそれを補完する二次的意義しか持たされていないということである。このことは、新綱領の中での人格に関する記述が共産主義的意識に関する叙述の中の一部であることを反映している。すなわち、人格論は新綱領にあっては意識論という補助仮説の一部という扱いを受けたのである。

他方、この11月号にはアナトリー・クリリョフ<sup>91</sup>の「共産主義下における個性の全面的発達について」という、人格理論に関する論文が掲載された。この中で彼は、搾取階級が一扫されて無階級社会となっても大衆の多様なニーズに応えるには分業が必要であり、人間の幸福な暮らしはその人の専門の社会的意義や、社会主義社会の物質的・文化的価値の創造の過程におけるその専門の位置に拠っていると主張する<sup>92</sup>。こういった、現実を直視し、共産主義社会における分業の必要性を認める主張は前述したカムマリのそれと同一であり、マルクスが夢想した共産主義社会における分業の止揚を非現実的なものとして再び斥けている。

当雑誌の編集部によれば、この論文への読者からの反響に答えるべく、その翌年の1962年10月に個人の全面的発達に際しての分業の役割についての問題について討論が組織された。その論文のタイトルは以下の通りであるが、参加者はいずれも無名の人物である。クリリョフ「社会主義から共産主義への移行期における分業と個人の全面的発達」、エリメエフ В.Я. (1928生, レニングラード国立大学)「個人の全面的発達は人々の間の分業廃止を予測する」、マスロフ П.П.「頭脳労働と肉体労働との正しい結合が個人の全面的発達の条件である」、マネヴィッチ Е.Л.「共産主義下での個人の全面的発達の社会・経済的基盤」、クラコフ И.Г.「全面的に発達した人間は最も成果をあげる労働者である」、アンドレエフ А.В./ティモシュコフ Я.В.「共産主義下における分業と社会グループ」、ボブネヴァ М.И.「労働の《知的化》の諸問題」。尤も、分業の必要性を主張するカンパニアは、マルクスの非科学的な主張に従って分業の止揚を目指す、共産主義を標榜するソ連社会において分業体制がいまだ厳然と存在し、必要とされているという、矛盾を正当化する為の手段という側面もある。

時間が前後するが、この年の6月に同雑誌にトゥガリノフの論文「共産主義と人格」が掲載された。彼はこの論文の中で幾つかの言葉の定義付けを試みている。先ず、幸福についての定義付けを試みるとともに、個人の幸福を社会的な状況に還元しようとする党の方針に対して反発している。「党の新綱領は現実的且つ計画に則って人々の幸福の問題の解決しようとするが、幸福は社会的状態であるのみならず、疑いなく個人的な気分でもある<sup>93</sup>」。また、この人格論で最も重要な概念である人間(человек)と人格/個性(личность)とを明確に区別しようとして次の様な定義付けを行っている。「人間は人格/個性に特徴付けられる素質の担い手であるのに対し、人格(личность)は人間の個性(свойство)である<sup>94</sup>」。更に「全面的」と「調和的」との違いを説明して、調和的発達とは人格の様々な側面が相互に立ち遅れることなく呼応して発達することを言い、それに対して全面的とは、専門分野において優れているのみならず言葉の広義において全ての面において教養があり、新綱領に拠れば、尚且つ道德、並びに、身体面においても発達していることを意味している<sup>95</sup>、と彼は述べる。こうしてこの旧世代の哲学者によってマルクス＝レーニン主義特有の人格論にとって重要な用語が整理されたのである。

またこの年には、ユーリ・ダヴィドフ<sup>96</sup>の著作『労働と自由』が出版された。この中で彼は党綱領の中に盛り込まれた「人格の全面的発達」とは何か、という問いを立て、その答えは新しい社会的諸条件の具体的研究の内に在るのであり、これらの諸条件から生じてくる客観的な諸々の必要、要求とそして「実在的に存在している」人格との具体的比較の内に在ると述べている。またこの全面的に形成された人格という問題と自由の概念との関わりを洞察し、之が古代の全体性と異なるのは、消極的に、全面的発展を色々と制限するもの「からの自由」としてではなく、「積極的に」、人格の全面的な表明、全面的な実現「の為の自由」として定式化する場合である、と主張する<sup>97</sup>。彼はまさに『資本論』第3部における「自由の王国」の思想をここに導入している。

彼のこの著作はザモシユキンの官僚主義批判を経済分野へと援用し、経済への国家の過度の介入が大衆の人格にもたらす悪影響を分析している。その悪弊の一つとして彼が挙げるのが、所謂「マス化」、すなわち、社会的意見及び社会的振る舞いの規格化であって、その結果、これらの部面で人間の自立性の喪失が生じると分析している。第二に、犯罪の増大である。それは個人の自由が抑圧され、人格の創造的展開の為の諸々の可能性が欠けていることに対する全く否定的な反作用、反自然的に歪められた反応作用の増大である<sup>98</sup>。こうした彼の分析は、事後的に見れば、1970年代後半から1980年代にかけてのソ連経済・社会の「停滞」を予測したものになっていると言える。

ソヴィエト哲学研究者ジェイムス・オールルケは、ソヴィエト哲学界の状況を分析して、論壇では1960年代半ばまで人間の問題に関する著作は殆ど無く、せいぜいトゥガリノフの著作や、慣例的にヒューマンズムを論じたマリヤ・ペトロシヤンやシシュキンによる著作、共著の中の数本の論文ぐらいであったと断じているが<sup>99</sup>、1950年代末から1960年代初頭にかけて人格に関する論文や著書が既に少なからず発表されていたことが以上から明らかになった。

第22回党大会を経て1963年に出版された哲学辞書では人格(личность)という項目が新たに設けられ、次の様に定義付けられている。人格とは「社会的に条件付けられ、個人的に描写される、自らの資質(知性や感性、意志の強さ)を備えた人間である。人格の科学的理解は人間の本質を社会的諸関係の総体と捉えるマルクス主義的定義に立脚している。(中略)共産主義の物質的、技術的基礎の創出、共産主義的社会的諸関係の発達、及び、文化革命の実現に基づいて、精神的な豊かさや道徳的誠実さ、身体的完全さが調和的に組み合わせられることで、人間的な新しい人格が形成される。(中略)(体験、意識、欲求といった)個人の中の主観的なものは人間とその人を取り巻く現実との間で形成される客観的諸関係と不可分である。<sup>100</sup>」この定義は、この議論がそもそもソヴィエト国民に労働倫理を身に付けさせることによって生産力を高めると同時に、資本主義陣営に対して共産主義陣営の多方面にわたる優位性を誇示するという、「アメリカを追い抜き、追い越す」と豪語したフルシチョフ指導部の狙いから出発していることを物語っている。まさにそれ故、ザモシユキンら少数の哲学者達は、こうした、国民の人格を「社会の目的の実現化の手段」と看做す、党の指導による国民の人格の官僚主義的統制に対して反発し、人格を社会的諸関係の主体と看做す新たな理論、即ち、ゴルバチョフ期の「新思考」の補助仮説構築へと進んだ、と考えられる。

### (3) 第13回国際哲学会議(1963)とソヴィエト哲学界への影響

人格をはじめとした人間を中心的なテーマとした議論の輪は、その頃ソヴィエト・ブロックに



留まらず、世界的な広がりを見せていた。現象学の提唱者エドムント・フッサールは既に1930年代に欧州的人間性の危機を訴える講演を行った。イタリア共産党の創始者の一人であるアントニオ・グラムシも同じ頃人間とは何かを哲学の第一の根本問題であると看做し、マルクスの「フォイエルバッハ・テーゼ」第六が形成という観念を含んでおり人間は社会的諸関係の変化とともに絶えず自らを形成し、且つ変化させると解釈し、人間を一連の能動的諸関係（の一つの過程）として捉えるべきであると考えた。彼はこの観点から、個性が、各個人が部分となる諸関係の総体であるとすれば、「一個の人格たることは、これらの諸関係について意識することであり、人格を変革するとは、これらの諸関係の総体を変革することを意味する」と述べた<sup>101</sup>。

他方でグラムシが生活の規範として受容できないと批判していたカトリックの司祭でもあったピエール・ティヤール・ド・シャルダンもまた、人間の問題に関して名著『現象としての人間』の中で「我々が科学の人間時代に向かっているなら、その時代はとりわけ人間科学の時代であろうと予言することができる。専門家は遂には「認識の対象」としての人間こそ自然科学全分野の鍵であることに気付くだろう<sup>102</sup>」と述べている。更に、ティヤール・ド・シャルダンの主たる考えを弾劾したローマ教皇庁でさえキリスト教社会主義が次第に影響を持つようになり、教皇ヨハネ23世は二つの回勅<sup>103</sup>の中で人権等といった此岸における人間の問題に触れている。

こうした党派を超えた世界的な思潮として人間学が勃興する中、1963年9月にメキシコ・シティで第13回国際哲学会議が開催され、ソヴィエト哲学者達も出席した。その一人のテオドル・オイゼルマンによれば、「人間の問題」というのが議事日程の主要点であった。ソ連の出席者計18名はコンスタンティノフ、ミーティン、フェドセーエフといったソヴィエト哲学界の重鎮達に率いられていた。「60年代人」の一人、レフ・ミトローヒン<sup>104</sup>は会議での報告に向けて、この「人間の問題」という観点から労働が人格形成に及ぼす影響について取り上げ、実存主義と個人主義の人間の「自由」概念を単なるブルジョア階級にとってのみ意味あるものとして斥けた。また彼は、人格の真の自由は、社会が人に仕事での専門と職業の選択を任せる事実上の可能性如何にかかっていると主張した、前述したダヴィドフの著作を高く評価し、これこそが人間の自由の現出であるという旨の論文を会議開催者に提出した<sup>105</sup>。

1965年に出版されたトゥガリノフの著書『個人と社会』の序文を読むと、彼は、この会議での議論を通じて、人格、及び、個人と社会との関係の深遠な研究がソ連の論壇に欠けているという危機感を覚え、それが彼にこの著作を書かせた大きな動機となっていることが伺える。彼は外国の哲学との論争に勝つには、党の新綱領の規定は不十分であると訴え、1962年の論文「共産主義と人格」の中で行った定義付けをこの著書の中で更に詳細なものにした。彼は個人／人格（*личность*）と人間（*человек*）とを次の様に区別した。「個人／人格の概念は人の個性（*свойство*）を指し示しているのに対し、人間はこの個性の持ち主である」から「これらの概念は個性と本質という様に異なっている。」また、「人間という概念は自然界的概念であるのに対し、人格の概念は社会的概念である、つまり、それは人間の身体的存在と関係があるのでなく、その人の特定の社会的特性と関係がある、という相違が人間と人格の概念との間に在るのである。人格とは社会との相互関係の中でその人の中で出来上がっていく個性ないし資質の総体を獲得する人間である<sup>106</sup>」という様に、彼は人間と人格との概念の相違、及び、相互関係を明確にした。更にこの老ソヴィエト哲学者は、最後に人物（*личность*）を「理性と社会に対する責任を負っており、自己の内的資質に応じて或る一定の権利と自由を享受し（あるいは享受することができ）、自分個人の活動を社会の発展への貢献、及び、その人が属する時代や階級の理念に即した指導的な生活

様式に寄与する人間の事である<sup>107</sup>」と定義した。21世紀になって出版された、彼の業績を評価する論集によれば、旧世代のトゥガリノフによるこうした人格や個性といった概念整理はその後のソヴィエト哲学界の人格論にとって貴重な寄与となった<sup>108</sup>。

## まとめ、及び、その後のソヴィエト人格論の展開

以上みてきた様に、ソヴィエト哲学界においては、第2次世界大戦後に再び勃興した愛国主義的「大衆の役割論」がスターリン死後も引き続き議論の中心であり続けていたが、一個人を国家機構の「小ネジ」と看做す見解は消失し、スターリンを暗示する「優れた個人」の決定的役割を論難すると共に、個人崇拜に反対する見解さえ提示された。人民大衆が社会建設において創造的役割を果たす為の諸条件の考察や、人民概念の研究といった、旧世代によって基礎付けられた大衆の役割論は新世代に継承され、その成果は1950年代末に刊行された哲学教科書に盛り込まれた。

その一方で、一個人の研究は先ず旧世代のソヴィエト心理学者、ルビンシュテインが単著『存在と意識』（1957）で展開した人格論によってその理論的基礎を得た。その後、1950年代末より哲学界において旧世代を中心に人格論が興り、それは倫理学や意識論と相互に密接に結び付きつつ1960年代初頭に活発さを増していった。1961年に開催された第22回党大会では、意識論は理論系列の核として採用された「ヒューマンイズム」イデオロギーの一構成単位となった。1961年当時の党の公的認識では人格は意識に準じる位置付けではあったが、ソヴィエト哲学界においては人格の問題は一次的重要性を帯びていった。と同時に、ソヴィエト哲学界の中で人民への注視の傾向から人民一人一人の人格及び個性、特にその主体性を重視する潮流が、1950年代後半から始まり、また国際的な潮流に合流する形で興った。後にゴルバチョフ期にフルシチョフ期の「ヒューマンイズム」イデオロギーの新版として採用された、「新しい（真の）ヒューマンイズム」イデオロギーの一構成単位となるこの非公式の人格論は、この1960年代から補助仮説として少しずつ形成されていった。

この傾向はその後ソヴィエト哲学界のみならず社会学界にも波及し、例えば、哲学者兼社会学者で、1960年代に全五巻で出版された『哲学辞典』の編集者であるイーゴリ・コーンは1964年にレニングラード物理学部の学生達に『人格の社会学』と題打って特別講義をしていた内容を改訂して3年後の1967年に同じ題で著書を出版した。コーンはこの著作の中で人格の概念は多義的であるとして以下の様な見解を提示している。「一面では、人格の概念は、その人の個人的な諸々の特徴（個別的なもの）と彼の社会的役割（一般的なもの）とが統一されている活動の主体としての具体的な個人（人物）を示している。他面では、人格は個人の社会的特性として、つまり、当人と他の人々との直接ないし間接の相互作用の過程で形成され、また今度はその人を労働、認識、並びに、交流の主体とする所の社会的に有意義な諸々の特徴の中に統合された総体として理解されている<sup>109</sup>」。

1966年にはソ連科学アカデミー哲学研究所が主催したシンポジウム「社会主義社会と資本主義社会における人間」が開催され、本章で紹介したミトローヒンやトゥガリノフ、イオフチュクを初めとして、著名なソヴィエト倫理学者達等も討論に参加した。その2年後の1968年にこのシンポジウムの資料に基づいた『社会主義の許での人格』という著書が出版されるに至った。こうしてソヴィエト哲学界では1960年代後半には人格に関する全国的シンポジウムが開催される程、人民大衆の一個人の人格に関する研究が隆盛したのであった。

- 1 Горбачёв, Михаил, *Жизнь и реформы*, кн. 1, М.: Новости, 1995;  
[http://www.gorby.ru/gorbachev/zhizn\\_i\\_reformy1/page\\_12/](http://www.gorby.ru/gorbachev/zhizn_i_reformy1/page_12/) (2012/06/27)
- 2 СОЛОВЬЕВ Эрих Юрьевич (1934) : ソロヴィヨフは1957年にモスクワ大学哲学部を卒業。1958年から1968年まで『哲学の諸問題』誌現代外国哲学部門副主任を務めた。専門は西欧哲学史。
- 3 Соловьев, Э.Ю., Индивид, индивидуальность, личность, *Коммунист*, 1988, № 17., стр.
- 4 Там же, стр. 52.
- 5 Маркус・レーニン主義の古典であるカール・マルクスの『フョイエルバッハ・テーゼ』第六によれば、「人間の本质とは、この個人の内部に宿る抽象物なのではない。それは、その現実の在り方においては、社会的諸関係の総体(アンサンブル)なのである」。
- マルクス, エンゲルス, 新編輯版(廣松 渉 編訳, 小林 昌人 補訳)『ドイツ・イデオロギー』岩波書店, 2005年, 237頁。
- 6 Соловьев, там же, стр. 53.
- 7 Там же, стр. 55.
- 8 Греков, Л., Представляем новый учебник по философии, *Коммунист*, № 17, 1988, стр. 49.
- 9 グレコフも、50年代末からソヴィエト哲学で発達した、個々の現象としての人格及び人間へ関心が高まるという傾向は、第20回党大会ソ連共産党大会後独特な恣意的解釈を受け、哲学的分析の路線はそれ故にスターリンの個人崇拜の暴露から人間や人格のテーマに関するもっと急を要する問題へと移行した、と述べている。
- Там же., стр. 50.
- 10 Фролов И. и др., *Введение в философию*, Глава 6 Марксистская философия (XX век):  
[http://www.gumer.info/bogoslov\\_Buks/Philos/frol/08.php](http://www.gumer.info/bogoslov_Buks/Philos/frol/08.php) (2007/5/31)
- 11 ローゼンタール・エム, ペ・ユージン監修, ソ同盟科学院哲学研究所編(ソヴェト研究者協会訳)『哲学辞典』岩崎書店, 1956年, 550-551頁。
- 12 立石 洋子『国民統合と歴史学: スターリン期ソ連における『国民史』論争』学術叢書, 2011年。
- 13 立石, 同上, 122頁。
- 14 同上, 240, 241頁。
- 15 ソヴェト同盟科学アカデミー哲学研究所著編, エフ・ヴェ・コンスタンチーノフ監修, ソヴェト研究者協会訳『史的唯物論 下巻』, 大月書店, 1952, 168頁。
- 16 同上, 169頁。
- 17 Сталин, И.В., Выступление на приеме в Кремле в честь участников, *Сочинения*, Т. 15, М.: Издательство «Писатель», 1997, стр. 232.
- 18 ソヴェト同盟科学アカデミー哲学研究所著編, 『史的唯物論 下巻』, 168頁。
- 19 同上, 171頁。
- 20 同上, 175頁。
- 21 これは、石堂清倫氏が述べた様に、労働者階級と勤労農民大衆の歴史的創造の能力に対する不信が、上からの行政指導、更には、官僚主義の固定として現れたことに対する反省、及び、人民の様々な能動的な活動によってのみ指導者達は形成され出現することができ、民衆もこの意味において十分にそれぞれの個人として歴史の前進の為不可欠な存在を成しているという認識に基づくと思われる。
- 石堂清倫「個人崇拜」『現代マルクス-レーニン主義事典』上, 1980年, 643頁。
- 22 レーニンは論文「ナロードニキ主義の経済学的内容」で次の様に述べた。「階級闘争の理論が社会科学の素晴らしい成果であるという理由は、それが余す所なく精密に、且つ、明確に個人的なものを社会的なものに還元するという、この方法を設定したことにこそある」。
- Ленин, В.И., Экономическое содержание народничества и критика его в книге г. Струве:  
<http://www.marxists.org/russkij/lenin/1894/12/struve.htm> (2012/8/27)
- 訳文は『レーニン全集』第1巻、ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所編、マルクス=レーニン主義研究所訳、大月書店、1962年、442頁を参照した。
- 23 同上, 456頁。
- 24 Митрохин Л.Н., «Докладная записка» – 74, *Философия не кончается... Из истории отечественной философии. XX век: В 2-х кн.*, Под ред. Лекторского, В.А., Кн. II. 60 – 80-е годы., М., РОССПЭН, 1999, стр. 120.
- 25 フェドセーエフ, ペ・エヌ(林 礼二 訳)「ヴェ・イ・レーニンによる史的唯物論の発展」、寺沢恒信・林礼二編『現代ソヴェト哲学』1955年版、大月書店、1956年、164頁。
- 26 ГЛЕЗЕРМАН Григорий Ерухимович (1907 – 1980) : グレーゼルマンはトヴェリで医者家庭に生まれ、1930年にモスクワ国民経済大学(ブレハーノフ大学)経済学部を卒業。1949年に出版された著書『ソ連における搾取階級根絶と階級間の差異の克服』で1951年にスターリン賞を受賞。
- 27 グレーゼルマン、(川上正夫 要約)、「社会主義社会の発展における民衆の創造的役割」、『現代ソヴェト哲学』, 167, 168頁。
- 28 КАММАРИ Михаил Давидович (1898 – 1965) : Камマリ は1921 – 1927年 の間党の仕事に従事。1931年赤色大学を卒業。1949 – 1954年『コムニスト』誌の編集員。1954 – 1959年『哲学の諸問題』誌編集長。
- 29 Каммари, М.Д., О роли народных масс в революции 1905 года, *Вопросы философии*, № 5, стр. 16.
- 30 Маркус/Энгелс『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』, 66-67頁。
- 31 『レーニン全集』第1巻, 445 – 447頁。
- 32 Каммари, Там же., стр., 33.
- 33 Там же, стр. 35.

- <sup>34</sup> БУТЕНКО Анагорий Павлович (1923 -) : ブテンコ はウクライナ共和国のポルターヴァ州ハーデャチ市に生まれ、大祖国戦争に従軍し、1950年にモスクワ国立大学哲学部を卒業し、53年に大学院を修了し、講師として勤務。1959年から64年までジャーナリズムにも従事。
- <sup>35</sup> Бутенко, А. П., Народ как социологическая категория, *Вопросы философии*, 1957, № 1, стр. 182.
- <sup>36</sup> Там же, стр. 185.
- <sup>37</sup> Ред. Павелкин П., Курбатова Г., *Основы марксистской философии*, М.: Госполиздат, 1958. стр. 632.
- <sup>38</sup> 志水速雄『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」全訳解説』講談社、1977年、195、198頁。
- <sup>39</sup> 大会への手紙の中でレーニンは「スターリンは粗暴過ぎる。そしてこの欠点は、我々共産主義者の間や彼等の相互の交際では十分我慢できるものであるが、書記長の職務にあつては我慢できないものとなる。だからスターリンをこの地位から他に移して、全ての点でただ一つの長所によって同志スターリンに優っている別の人物、即ち、もっと忠実で、もっと丁重で、同志に対してもっと思いやりがあり、彼ほど気まぐれでない、等々の人物を、この地位に任命するという方法をよく考えてみるよう、同志諸君に提案する。」参照： Ленин, В.И., *Полное собрание сочинений*, изд. 5-е. том. 45. 1982. стр. 346
- <sup>40</sup> Ред. Куусинен, О.В., *Основы марксизма-ленинизма: учебное пособие*, М.: Госполиздат, 1959, стр. 193.
- <sup>41</sup> Там же, стр. 193.
- <sup>42</sup> *Основы марксистской философии*, стр. 615.
- <sup>43</sup> *Основы марксизма-ленинизма*, стр. 182.
- <sup>44</sup> МАСЛИН Александр Никифорович (1906 - 1970) : Маслинはシンビルスク県クヴァキノに生まれ、1929年カザン教育大学社会・経済科を卒業し、モスクワ歴史・哲学・文学大学大学院を修了。1951年から科学アカデミー哲学研究所で勤務し、1960年から70年まで同研究所の副所長。
- <sup>45</sup> ВИЛЕНСКАЯ Эмилия Самойловна (1909 - 1988) : ヴィレンスカヤはモスクワ歴史・哲学・文学大学に就学。1938年に逮捕。1941年に釈放。1946年にモスクワ国立大学を卒業。1954年から科学アカデミー歴史学研究所に勤務。1965年に名誉回復。
- <sup>46</sup> Маслин А. Н., Школа Н. Г. Чернышевского о роли народных масс и личности в истории, *Вопросы философии*, 1960, № 3, стр. 108.
- <sup>47</sup> Там же, стр. 110.
- <sup>48</sup> ヴィレンスカヤ、エ・エス (多和田栄治 訳)「解放闘争における人民大衆の役割に関するエヌ・ゲ・チェルヌイシェフスキーとア・イ・ゲルツェン」『現代ソヴェト哲学』第六集、合同出版社、1961年、188-189頁。この1861年から62年にかけてのゲルツェンとチェルヌイシェフスキーの論文については石川郁男氏が著書『ゲルツェンとチェルヌイシェフスキー：ロシア急進主義の世代論争』（未来社、1988年）の第3章で詳細に分析しているので、当論文ではヴィレンスカヤ論文の簡単な紹介に留める。
- <sup>49</sup> ШИШКИН Александр Федорович (1902 - 1977) : シシュキン は1921年にペトログラード校外教育大学に入学し、26年に卒業してから32年まで同大学で教鞭をとるとともに、28年から32年までレニングラード教育大学大学院で教育を受ける。1932年にヴォログダ教育大学の学長に就任し、哲学講座の主任教授代行を務める。1949年から1977年までモスクワ国立国際関係大学で哲学講座主任教授を務める。倫理学に関する著作を多数刊行。
- <sup>50</sup> シシキン, А・Эф (林 礼二 抄訳)、「共産主義道徳の理論の幾つかの問題」『現代ソヴィエト哲学』第三集、合同出版社、1958年、130頁。
- <sup>51</sup> Bochenski, I.M., *Der Sowjetrussische dialektische Materialismus (Diamat)*, Dritte Auflage 1960,
- <sup>52</sup> 芝田進午『人間性と人格の理論』、青木書店、1961年、
- <sup>53</sup> Payne, T.R., *S. L. Rubinshtejn and the philosophical foundations of Soviet psychology*, D. Reidel, 1968, p. 137.
- <sup>54</sup> Рубинштейн, С.Л., *Бытие и сознание: о месте психического во всеобщей взаимосвязи явлений материального мира*, М.: Изд-во Академии наук СССР, 1957, стр. 311.
- <sup>55</sup> Там же, стр. 312.
- <sup>56</sup> Payne, *Ibid.*, p. 137.
- <sup>57</sup> Рубинштейн, С.Л., Теоретические вопросы психологии и проблемы личности, *Вопросы психологии*, 1957, № 3, стр. 32.
- <sup>58</sup> Рубинштейн, *Бытие и сознание*, стр. 307.
- <sup>59</sup> Там же, стр. 312.
- <sup>60</sup> ИОВЧУК Михаил Трифионович (1908 - 1990) : イオフチュクはブレスト州に生まれ、共産主義教育アカデミー哲学部を1931年に卒業し、社会科学教育共産主義大学大学院を1933年に終了。1933年から36年まで、及び、39年から49年まで『コミンテルン』誌の出版等といった党中央委員会の仕事に従事。1936年から諸大学の哲学講座の指導に当たる。1943年から49年までロシア哲学史講座主任。1946年に博士論文「18世紀から19世紀にかけてのロシアの唯物論哲学史」の公開審査をパスし、科学アカデミー会員候補となる。1953年からモスクワ大学哲学部教授。1958年にマルクス＝レーニン主義哲学史講座が開設されてから63年まで最初の教官となる。同時に1958年からソ連科学アカデミー哲学研究所所長をも務める。
- <sup>61</sup> イオフチュク、エム・テ (多和田 栄治 要約)「哲学史・社会思想史のいくつかの研究課題について」『現代ソヴェト哲学』第三集、349 - 350頁。
- <sup>62</sup> Полевой, Ю.З., Об исторических взглядах Плеханова, *Вопросы истории*, Август 1954, Изд. Правда, стр. 49 - 63.
- <sup>63</sup> ДЕБОРИН Абрам Моисеевич (1881 - 1963) : デボーリンはコヴェン県 (現リトアニア) に生まれ、スイスのベルン大学哲学部を1908年に卒業。1922年に『マルクス主義の旗の下に』誌編集員となり、26年から30年代にかけて編集長を務め、その後編集員に降格。1924年から1931年まで哲学研究所の校長を務める。1928年に全連邦共産党に入党。1929年にアカデミー会員となる。
- <sup>64</sup> Мануйлова, Л.Н., Заседание, посвященное Г. В. Плеханову, *Вестник АН СССР*, № 2, 1957., стр. 128.

<sup>65</sup> 「ここでは人民の共通の幸福についての配慮、人間が互いに敵でなくて兄弟であり、友である様な集団の諸条件のもとでの、人間の個性の全面的な発展についての配慮が、何よりも先ず重視されている」。

「共産主義建設は、経済、科学、文化の未曾有の発展を前提にしているばかりではなく、人間の凡ゆる想像力と才能とを最も完全且つ全面的に明らかにし發揮させる、かつて無い広々とした見通しを開いている」。

人間の全面的な発達とともに、労働力は、益々生活の第一義的欲求となっていくであろう」。

ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課編『ソビエト連邦共産党の綱領について ソ連共産党第22回大会でのエヌ・エス・フルシチョフ同志の報告』ソビエト社会主義共和国連邦大使館、1961年、71、80、134頁。

<sup>66</sup> Bochenski, *Ibidem*, S. 150.

<sup>67</sup> Müller-Claud, W., Diskussion über die sozialistische Persönlichkeit, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Heft 2, 7 Jahrg. 1959, SS. 319 – 321.

<sup>68</sup> *Ibidem*, S. 320.

<sup>69</sup> Miller, Reinhold, *Vom Werden des sozialistischen Menschen : der Kampf des Neuen gegen das Alte auf dem Gebiet der Moral*, Berlin, Dietz, 1960, S. 217.

<sup>70</sup> ХАРЧЕВ Анаголий Георгиевич (1921 – 1987) : ハルチェフはカリーニン州（現トヴェリ州）の農家の家に生まれ、1939年にモスクワ大学哲学部に入学するも、大祖国戦争に従軍。1946年復学し、1949年に卒業。その後ソヴィエト科学アカデミー哲学研究所に進学。1952年から69年までソヴィエト科学アカデミーレニングラード支部哲学講座代表主任。1964年に博士論文の公開審査をパス。

<sup>71</sup> Харчев, А.Г., Проблема нравственного воспитания личности при социализме, *Философские науки*, 1959, № 1., стр. 73 – 75.

<sup>72</sup> *Основы марксизма-ленинизма*, стр. 3.

<sup>73</sup> *Там же.*, стр. 649 – 650.

<sup>74</sup> *Там же.*, стр. 745.

<sup>75</sup> ГАК Григорий Моисеевич (1893 – 1971) : ガークは1917年にペトログラードにて精神神経大学を卒業。内戦に参加。1925年からモスクワの高等教育施設で哲学の講師を務める。1930年代初頭から『プロパガンディスト』誌、『扇動者のスパートニク』の責任編集者を務める。1945年から49年まで『ボルシェヴィク』誌哲学部門の主任編集員。1954年から党中央委員会付属アカデミー・マルクス＝レーニン主義哲学講座教授。

<sup>76</sup> Гак, К., Строительство коммунизма и всестороннее развитие личности, *Коммунист*, 1959, № 12., стр. 34.

<sup>77</sup> Тугаринов, В., Социалистическое общество и личность, *Коммунист*, 1960, № 18, стр. 36.

<sup>78</sup> Юрий Павлович Францев (1903 – 1969) : フランツェフは1927年にレニングラード大学を卒業し、1949年から外務省と『プラヴダ』に勤務。1958年から65年まで社会学科学アカデミーの科学共産主義講座主任を務め、社会学協会を設立し、その初代会長となった。彼は、ニーナ・ナウモワ等、「60年代人」の社会学者を育成するとともに、同国における社会学発展の環境整備に尽力し、更には、1961年には、後のユーロ・コミュニズムの中核となるフランス・イタリアの共産主義思想を紹介する共著を出版した。

<sup>79</sup> Францев, Ю.П., Социалистический коллективизм и формирование личности, *Вопросы философии*, 1961, № 5, стр. 36 – 41.

<sup>80</sup> ЗАМОШКИН Юрий Александрович (1927 – 1993) : ザモシュキンは1950年にモスクワ国立国際関係大学を卒業。1952年から1967年まで同大学の教授。

<sup>81</sup> Замошкин, Ю.А., Современный капитализм и духовная жизнь личности, *Вопросы философии*, 1960, № 6., стр. 50 – 56.

<sup>82</sup> ザモシュキン、ユ・ア（長沼 真澄 訳）「ブルジョア社会の官僚主義化と個人の運命」『現代ソヴェト哲学』第七集、合同出版社、1962年、292頁。

<sup>83</sup> Соловьев, Э.Ю., Философский журнализм шестидесятых: завоевания, обольщения, недоделанные дела, *Философия не кончается... Из истории отечественной философии: XX век*, кн. II, М.: РОССПЭН, 1998, стр. 114 – 115.

<sup>84</sup> Шинкарук, В.И., «Хрущевская оттепель». Новые тенденции в исследованиях института философии АН Украины в 60-х годах, *Философия не кончается...*, кн. 2, стр. 426.

<sup>85</sup> 「この綱領では、国民の物質的福祉と文化を一層高める問題、人間の個性を開花させる問題が、最も重視されている」。「共産主義とは、（中略）階級の無い社会制度の事である。そこでは、人間の全面的な発展に伴って、（中略）『各人は能力に応じて働き、必要に応じて受け取る』という偉大な原則が実現される」。「共産主義とは人類愛と人間の個性との最高の開花である」。

<sup>86</sup> この「新しい人間」という概念は共産主義やマルクス主義特有のものではない。古くは新約聖書の「マタイによる福音書」、「コリントの信徒への手紙」、「エフェソの信徒への手紙」、「コロサイの信徒への手紙」に遡る。ドイツの神学者、カール・バルトによれば、キリスト教での「新しい人」とは、「義」と「聖」の人であり、「慈悲の心、仁慈、謙遜、柔和、寛容」の衣を着る。また、「新しい人」は第二のアダムの人格における第一のアダムの回復である。このキリスト教の定義は第22回党大会で採択された道徳的規範で示されたソヴィエト型「新しい人間」の理想像とかなり重複する所がある。

バルト・カール、（成瀬治 訳）、「新しき人の現実」『ヒューマンイズム』、1951年。

<sup>87</sup> 「人々の行為に対して世論の注意と要望を高める必要が有る。何故なら、不道徳な行為をしている者は、殆どがあれこれの集団の一員であり、あれこれの組織の一人であり、労働組合員、青年共産同盟員、コルホーズ員、文化・教育団体の一員であり、時には我が党員ですらあるからである。社会主義的共同生活の基準と規則を乱すものとの闘争で、世論の道徳的重みと権威を益々積極的に利用していかなければならない」。

ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課編『ソビエト連邦共産党の綱領について ソ連共産党第22回大会でのエヌ・エス・フルシチョフ同志の報告』、113頁。

<sup>88</sup> フルシチョフは報告の中で綱領草案を「真の共産主義的ヒューマンイズムの文書」と形容している。参照：

---

Материалы XXII съезда КПСС, М., Госполитиздат, 1961, стр. 137.

<sup>89</sup> Там же, стр. 408.

<sup>90</sup> Там же, стр. 411.

<sup>91</sup> КУРЫЛЕВ Анатолий Константинович (1909) : クルイリヨフは 1928 年に入党。1950 年にソ連共産党中央委員会付属党高等学校 (ВППШ) を卒業。1954 年から 1961 年までモスクワ大学付属社会科学講師技能向上大学副学長。1963 年から同大学の科学共産主義講座主任。

<sup>92</sup> Курылев, А. К., О всестороннем развитии личности при коммунизме, *Вопросы философии*, 1961, № 11, стр. 31.

<sup>93</sup> Тугаринов, В. П., Коммунизм и личность, *Вопросы философии*, 1962, № 6, стр. 14.

<sup>94</sup> Там же, стр. 16.

<sup>95</sup> Там же, стр. 20 – 21.

<sup>96</sup> ДАВЫДОВ Юрий Николаевич (1929) : ダヴィドフはウクライナに生まれ、1952 年にサラトフ大学歴史学部を卒業し、1958 年にソヴィエト科学アカデミー哲学研究所で論文「19 世紀から 20 世紀にかけての西欧哲学におけるヘーゲルの『精神の現象学』をめぐる闘争」の審査をパスして修了。1959 年から 62 年まで『ソヴィエト百科事典』の出版社編集部勤務。同時期にモスクワ国立大学哲学部で講師として勤務。

<sup>97</sup> Давыдов, Ю.Н., *Труд и свобода*, М.: Высшая школа, 1962, стр. 79 – 80.

<sup>98</sup> Там же, стр. 100-101

<sup>99</sup> O'Rourke, James J., Soviet Philosophical Anthropology and the Foundations of the Human Sciences, Ed. by James J. O'Rourke, Thomas J. Blakeley, and Friedrich J. Rapp, *Contemporary Marxism : essays in honor of J.M. Bocheński*, Boston : D. Reidel, 1984, p. 168.

<sup>100</sup> Личность, *Философский словарь*, под редакцией Розенталя М. М., и П. Ф. Юдина, 1963, М., 234 – 235.

<sup>101</sup> グラムシ, アントニオ, (芝田 進午 訳)「人間とは何か」『唯物論研究』七号、1961、116 – 119 頁。

<sup>102</sup> テイヤール・ド・シャルダン, ピエール (美田 実 訳)『現象としての人間』みすず書房、339 頁。

<sup>103</sup> ローマ教皇ヨハネ 23 世(在位 1958.10 – 1963.6)は 1961 年 5 月に『マーテル・エト・マジストラ』(母、且つ、教師)を、1963 年 4 月に『地上の平和』(Pacem in Terris)を發布した。

<sup>104</sup> МИТРОХИН Лев Николаевич (1930 – 2005) : ミトローヒンは 1953 年にモスクワ国立大学哲学部を卒業し、56 年に同大学院を修了。1958 年からソヴィエト科学アカデミー哲学研究所に勤務。

<sup>105</sup> Митрохин, Л.Н. Проблема человека в марксистском освещении, *Вопросы философии*, № 8, 1963, стр. 16 – 20.

<sup>106</sup> Тугаринов, В.П., *Личность и общество*, М.: Мысль, 1965, стр. 42 – 43.

<sup>107</sup> Там же, стр. 88.

<sup>108</sup> Отв. ред. Перов Ю.В., *Тугариновские чтения. Материалы научной сессии*, СПб.: Санкт-Петербургское философское общество, 2008.

<sup>109</sup> Кон, И.С., *Социология личности*, М.: Политиздат, 1967, стр. 7.

## 結語、及び、「フルシチョフ後」の展開

以上、当論文で、主にマンハイムの理論とラカトシュの MSRP を以って、フルシチョフ期の新規イデオロギー「ヒューマニズム」の理論系列の構成単位の一部である倫理学、意識論、人格論が、帝政ロシア時代を知る旧世代、10月革命前後に生まれた中間的世代、及び、レーニン没後に生まれた新世代のインテリゲンツィヤ、すなわち、「60年代人」達によって、基礎付けられ、発展させられてきた過程を概観してきた。

当論文は「60年代人」(*шестидесятники*: *shestidesyatniki*) を、1920年代半ばから1930年代半ばの間に出生した人々の中でも、1950年代半ばから1960年代にかけて反スターリン主義的な見解を形成し、(社会主義的)民主主義を信念として共有するインテリゲンツィヤと定義する。また、彼等が自分達の軌跡を振り返る際に度々言及する用語で、まだ和文献にあまり登場していない *shestidesyatnichestvo* (*шестидесятничество*) を「60年代人」によって醸成され、共有された集合意識、つまり、彼等の共同体を統合する力として作用した「ヒューマニズム」等といった信念や道徳的態度であると同時に、その意識が1950年代後半以降もたらした知的運動である、と定義し、「60年代人の集合意識・知的運動」と訳す。

ソヴィエト・インテリゲンツィヤのこの世代ほどの様に経験を層化させていったのかについて、社会学者サカロフは次の様に分析した。彼等は個人の形成と世代の抬頭を1956年から1968年までに体験した。その端緒はスターリン個人崇拜を批判した第20回党大会であり、その最後は「プラハの春」の武力鎮圧であった。この世代は70年代から80年代にかけて成熟期を迎え、20世紀最後の10年間に凋落した<sup>1</sup>。浦雅春も同様のことを述べている。すなわち、80年代後半のペレストロイカを担った所謂「60年代人」は、フルシチョフの秘密報告によって口火を切られた非スターリン化のうねりと、その挫折を若い時代に身をもって体験した。ゴルバチョフ改革の基本線は挫折した「雪解け」の完成であり、60年代イデオロギーの実現に他ならなかった。且つ、同氏が象徴的な事実として挙げているのが、1991年8月を境にこれら60年代人の殆どが第一線から退いたことである。その具体例として彼はペレストロイカとグラスノスチの急先鋒であった三大活字メディア、すなわち、週刊誌『アガニョーク』(ヴィタリー・コロティッチ: 1936年生)、『文学新聞』(ブルラツキー: 1927-2014)、『モスクワ・ニュース』(エゴール・ヤコヴレフ 1930-2005)の編集長が全て入れ替わったことを挙げている<sup>2</sup>。確かに、こうした流れは1990年代初頭に部分的にあったものの、ロシア連邦初代大統領ボリス・エリツィン(1931-2007)やプリマコフ元首相(1929)、グルジア共和国初代大統領エドワルド・シェヴァルナゼ(1928-2014)、サンクトペテルブルグ前市長アナトリー・サブチャーク(1937-2000)といった、1990年代に政界の第一線にいた人達もまた「第20回党大会の子供達」であることを鑑みれば、寧ろ、ロシア経済が破綻をきたし始め、ロシア共産党が再び勢力を増してきた1990年代半ばが、この世代の影響力減退期の始まりと看做すべきであろう。

所謂「雪解け」の時代にソ連社会は外に開かれ、1957年にモスクワで開催された第6回世界青年学生祭で国外の人々・文化との交流を持つ機会を得た。こうした外部世界へのソ連の開放の一環として、研究者達は外国の研究機関や研究者達との交流を始めた。1958年にはプラハに本部を置く『平和と社会主義の諸問題』誌が創刊され、「60年代人」の一部はそこに勤務し

た。開明的な編集長、アレクセイ・ルミャンツェフの許、彼等は諸外国、特に欧州のマルクス主義者達との交流・議論を通じて、非ボルシェヴィキ的思想潮流に接し、それに感化されていた。この所謂「プラハ派」の多くを当時党中央委員会書記であったユーリ・アンドロポフが自身の顧問として雇い、それにその他の「60年代人」数人が加わり、「アンドロポフ顧問団」が結成された（後にアンドロポフが書記長に就任した際にこの顧問団の多くが再結集し、ゴルバチョフは書記長就任後アンドロポフの後継者としてこのグループを自身のブレンとした）。

スターリン時代には「ヒューマニズム」という言葉を用いる際には必ずスターリンの発言に依拠していた（尤も、スターリン自身は「ヒューマニズム」という言葉を使っていない）。フルシチョフ期において先ず為されたのは、旧世代や中間的世代のうち、非教条主義的な哲学者達による「ヒューマニズム」概念の非スターリン化であった。

第20回党大会以降、ロシア版マルクス主義、すなわち、マルクス＝レーニン主義の、MSRPで表現する所の「核」が、非スターリン主義がフルシチョフ指導部の許で進行する過程で軟化していった。その流れの中で、プレハーノフの完全な復権等といった、ロシア哲学史を含む20世紀初頭までの哲学史の研究が開始されるという新しい動きが生じ、1957年から1961年にかけて5巻から成る『哲学史』がソ連科学アカデミー哲学研究所によって刊行された。こうして非マルクス主義の古典へのアクセスが可能となったことによって、ソヴィエト哲学者達はマルクス＝レーニン主義の空隙を非マルクス主義の古典によって補填することが可能となり、核の代替候補である「ヒューマニズム」イデオロギーの理論系列を築き上げていった。フルシチョフ等党指導部が理解する「ヒューマニズム」は、共産主義社会を建設するという目標の為の道具的性格を帯びていたが、各世代のリベラルなインテリゲンツィヤ達は、党の意向に沿って理論系列の構築作業に加わったが、寧ろ、西洋哲学の伝統に基づいた普遍主義的な「ヒューマニズム」を追求した。

新たに核の一部となるべく準備された「ヒューマニズム」イデオロギーの理論系列は複数の構成単位から成っており、その一部が密接な相互依存関係にあった倫理学、意識論、並びに、人格論である。これらの連続性によって緊密に結びついている理論系列の形成・発展に寄与したソヴィエト哲学者達は、一つの構成単位について論じながらも、常にそれを他の構成単位の理論と関連付けて論じたのであった。

先ず、倫理学に関しては、ロシア倫理学者ナザーロフは前述した時期区分の試みの中で、この1960年代を含む第3期を、倫理学の形成及び体系化の過程でのカントの諸原則への隠れた回帰（「倫理学におけるカント批判主義」現象）と特徴づけているが<sup>3</sup>、その様な一般化には疑問がある。確かに、例えば、シシュキン<sup>4</sup>は党の意向を受けた仕事をする傍ら、カントやチェルヌィシェフスキー等の国内外の古典や黄金律への回帰の道の露払いの役割をも果たしてきたし<sup>4</sup>、ドゥロブニツキーの様な新世代もカント研究に進んだ。しかし、既述した様に、主だったソ連倫理学者達はカントのみならず、例えば、ミルネル＝イリーニンはネオ・スピノザ主義を標榜していた様に、その他の西欧哲学の古典や現代の外国の倫理学を研究していた。

更に、ピョートル・フェドーソフが「60年代人」を、「第20回党大会後、ヒューマニズムへと向かう変化を欲していたとともにその必要性を様々な形で表明した人々である」と形容した通り、彼等は、倫理学、意識論、人格論のそれぞれにおいて、その発展に寄与するとともに、彼ら独自の見解を形成し始め、後のゴルバチョフ期の「新思考」のイデオロギーであった「新しい（真の）ヒューマニズム」の基礎を築き始めていた。



例えば、意識論では、ソヴィエト哲学者で「プラハ派」の一人、ママルダシュヴィリは、1968年に『哲学の諸問題』誌に掲載された「マルクスの著作における意識の分析」という論文の中で、マルクスが政治経済理論の中で用いている分析方法を意識論に適用するという手法で、独自の意識論を展開した。後のインタビューの中で、彼は1950年代から60年代にかけての哲学上の個人的な自己決定の道について述べながら、次の様に断言した。「私はマルクス主義を通過する替わりに、私の中に痕跡を残したマルクス個人の思想、つまり、意識の現象に関する明確な解釈を通過したのだ。」この論文の中で現象学と精神分析の成果に立脚してマルクスの経済理論を意識の独自の理論として読解するという試みが為されている。

ママルダシュヴィリとモスクワ大学哲学部と大学院で同級生だったヴラディーミル・スミルノフは、この論文と同じ年に出版されたママルダシュヴィリの単著『思考の形式と内容』の中で、ヘーゲル哲学における人間を超越した非精神分析的意識解釈がマルクスの意識哲学の解釈にヒントを与えたことが強調されていることを指摘している。こうして、この著名な哲学者は、現象学と実存主義と同じく、ヘーゲルの弁証法的現象学に呼応して、マルクスが『資本論』で用いた論理学を利用しつつ、意識論を展開することと相成った。スミルノフは、意識に関するママルダシュヴィリによるマルクスの理論のこうした理解は何よりも先ずソヴィエト哲学にとってはとりわけ否定的な扱いを受けていた現象学、実存主義、フロイド主義への新しい態度を培った、とかつての同期の仲間の功績を評価する。カナダのソヴィエト思想史研究家ダニエル・レニールは、ママルダシュヴィリをデカルトとカントの思想的継承者と看做し、このソヴィエト哲学者があるインタビューの中で意識と良識との根源が同じであることを理由に、意識と自由、倫理学とを結び付けて考えていた点を指摘する<sup>5</sup>。

人格論に関して言えば、1965年、トゥガリノフの単著『個人と社会』が出版された。その序文の中で、彼は1963年9月にメキシコ・シティで開催された第13回国際哲学会議に言及している。序論を読むと、この会議では、「人間の問題」というのが議事日程の主要点となっていて、彼は、そこでの議論を通じて、人格、及び、個人と社会との関係の深遠な研究がソ連の論壇に欠けているという危機感が彼がこの著作を書いた大きな動機となっていることが伺える。彼は、実存主義や哲学的人間学といった「ブルジョア哲学」との論争に勝つには、新しい党の綱領の規定は不十分であると訴え、自ら、理性や責任、自由、個人の尊厳、社会的・政治的諸価値等の定義付けを試みている。

その同じ年の1965年に、ソ連科学アカデミー哲学研究所が主催するシンポジウム「社会主義社会と資本主義社会における人間」が催され、そこでの報告を基に1968年に『社会主義のもとでの人格（個人）』が出版された。計16名の哲学者や社会学者達が哲学や社会学、心理学等の観点から、その内の数名は明らかに党の公式的考えから離れて、人格についての自説を展開している。

「プラハ派」の一人で、アンドロポフ顧問団の一人でもあるゲオルギー・シャフナザーロフ<sup>6</sup>(1924 - 2001)は、第20回党大会以後同国における社会学の発展に寄与し、1974年に出版された社会学の教科書を監修した。また、その翌年にはソ連政治学会会長に就任した。1978年5月に同学会の新規約が採択され、同学会の目的は、民主主義・ヒューマニズム・社会進歩の精神に則って、「政治学」の発展を図る事等とされた。彼は世界政治学会（IPSA）副会長に就任し、1979年には第11回大会がモスクワでソヴィエト政治学会主催で開催され、ブレジネフが『プラヴダ』に祝辞を寄せた。中央委員会国際部副部長であったシャフナザーロフは、1988

年初頭にゴルバチョフの、対社会主義諸国関係及び国内民主化推進を担当する補佐官となり、「階級的価値」に対する「全人類的価値」の優位を『プラヴダ』紙上で主張し、この立場はその年の6月に開催された第19回党協議会でソ連の対外政策の「説明原理」として公式に採用された<sup>7</sup>。

また、「プラハ派」の一人で哲学者のイワン・フロロフが著作活動の中で力点を置いてきたテーマは科学技術と倫理との関係であった。また、地球規模での生態系変化や環境汚染に注目し、早くも‘70年代後半には、これらの問題に早急に取り組むべきだと警鐘を鳴らし始め、「新しい（真の）ヒューマニズム」を提唱し始めた。更に、‘80年代に入ってから西側陣営との新冷戦状態に突入すると、核戦争の危機に面した人類の生存問題に関する論文も、所謂「プラハ派」の一人であるザグラディンに協力を仰いで、公表し始めた<sup>8</sup>。彼も1988年9月に英国のブライトンで開催された第18回全世界哲学会議で「ペレストロイカ：哲学の意義と人類の使命」と題した報告を行い、地球規模で生態系に変化が起きている時代における「新思考」：«Новое мышление» (*Novoe myshlenie*)と「新しい（真の）ヒューマニズム」の必要性を訴え、ゴルバチョフ政権が6月に新たに打ち出したテーゼ「階級的価値に対する全人類的価値の優位」が時代に即したものであることを主張したのである<sup>9</sup>。その後、この原則が新しい党綱領に盛り込まれるべく、ゴルバチョフは、1991年7月に開かれる党中央委員会総会に向けて、1991年同月に党綱領草案を『独立新聞』で公表した。

こうして、ゴルバチョフ期という、ソ連体制存続の危機を迎えそれを1960年代の精神を以って乗り切ろうとした時期に、再び「防御されるべき核」が軟化して可変的となり、「核」の一部が「60年代人」達によってマルクス＝レーニン主義の諸原則以外の欧米の様々な価値体系と取り換えられることとなったのである。しかし、同世代のより急進的な西欧派達、すなわちゴルバチョフ陣営からエリツィン陣営へと移った人々<sup>10</sup>は、1991年の「血の日曜日」事件後、もはや「核」の部分修正ではなく大幅な刷新を主張し、同年8月のクーデター後は彼らが主導権を握ってソ連を崩壊させた。段階的な変革を試みた同年代のゴルバチョフ陣営は「絶対権力の試練をくぐり抜け、社会を新たな状態の環境へ移したが、そこには居場所がない改革派<sup>11</sup>」となってしまった。エリツィンを頭目に担いだ急進西欧派は欧米の価値体系と制度を新生ロシアに直接導入したが、1990年代のロシアは周知の通り無秩序状態に陥って彼らの試みは決定的な失敗に終わり、それはロシア連邦の国民に民主主義への不信感を植え付ける結果となった。

<sup>1</sup> Соколов, Аркадий, «Два поколения советской интеллигенции: шестидесятники и восьмидесятники», Мир России, 2007, № 3, стр. 79.

<sup>2</sup> 浦雅春「ペレストロイカと「雪解け」」『ロシア研究』第18号（1994年4月）、74-75頁。

<sup>3</sup> Назаров, «Опыт хронологии русской этики XX в.: первый период (1900-1922)», стр. 110.

<sup>4</sup> 例えば、ヴラディミール・ブリュムキン（1931-1990）は論文「人間の価値（尊厳）」の中で、「「あなたが人々からその様に扱われたいと欲する様に、あなたは那些人々を扱いなさい」という様な、所謂「黄金律」には、宗教的及びブルジョア的なモラルに、一手販売権を与える様な、いかなる根拠もない。（中略）この規則は、我々の社会で、それに従ってそれぞれの人間が自分の行為を点検する諸規則の中の一つとして役立ち得るし、また、役立つべきである。」と、かなり勇気を必要とする様な記述をしているが、その最後にシシュキンの著作から参照したことが付記されている。

参照：ブリュムキン・ヴェ・ア（西牟田、笠井訳）「人間の価値（尊厳）」、ソ連科学アカデミー哲学研究所編『社会主義と個人』勁草書房、1970年、315-316ページ。

<sup>5</sup> Reginer, Daniel, Consciousness and Conscience: Mamardašvili on the Common Point of Departure for Epistemological and Moral Reflection, *Studies in East European Thought*, 2006 (Vol. 58), Issue 3, pp. 141-160.

<sup>6</sup> 第2次世界大戦に従軍した後、アゼルバイジャン国立大学を卒業し、進学して法学博士を取得。ゴルバチョフ期以降、ソ連崩壊後も同氏の側近であり続けた。

<sup>7</sup> 岩下、『「ソビエト外交パラダイム」の研究』、199-200頁。

<sup>8</sup> Гаримберги, П., Там же., стр. 341-342.

---

<sup>9</sup> Фролов, И. В., «Перестройка: философский смысл и человеческое предназначение», Академик Иван Тимофеевич Фролов, очерки. воспоминания. материалы., М., 2001, стр. 533-537.

<sup>10</sup> 作家・評論家のアレクサンドル・アダモフ・ヴィッチ(1927-1994)、歴史学者のユーリ・アフアナシエフ (1934-2012)、社会評論家のユーリー・カリーキン、経済学者のガヴリール・ポポフ(1936-)、等。

<sup>11</sup> チェルニャーエフ、アナトリー、『ゴルバチョフと運命を共にした 2000 日』潮出版社、1994 年、277 頁。

## 【参考文献一覧】

### 【和文献】

1. イオフチュク, エム・テ (多和田栄治 要約) 「哲学史・社会思想史のいくつかの研究課題について」『現代ソヴェト哲学』第三集、1957年
2. 石川郁男『ゲルツェンとチェルヌィシェフスキー:ロシア急進主義の世代論争』未来社、1988年
3. 岩下明裕『「ソビエト外交パラダイム」の研究』国際書院、1999年
4. ヴァリツキ, A. (今井義夫 訳)『ロシア社会思想とスラヴ主義』未来社、1979年
5. ヴィレンスカヤ, エ・エス (多和田栄治 訳) 「解放闘争における人民大衆の役割に関するエヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーとア・イ・ゲルツェン」寺沢恒信・林礼二 編『現代ソヴェト哲学』第六集、合同出版社、1961年
6. ヴォルコフ, ゲ・ア (寺沢恒信 訳) 「心理的なものの本姓についての価値ある哲学的研究」『現代ソヴェト哲学』第五集、1960年
7. 梅本克己『唯物史観と道徳』こぶし文庫、1995年
8. 浦雅春「ペレストロイカと「雪解け」」『ロシア研究』第18号 (1994年4月)
9. ウレドフ, ア・カ (西牟田久雄 抄訳) 「社会学の研究対象としての世論」『現代ソヴェト哲学』第五集、1960年
10. エフィモフ, ヴェ・テ、(林礼二 訳) 「マルクス＝レーニン主義倫理学の諸問題に関する学術会議」、「大学・専門学校の為の「マルクス主義倫理学原理」課程の教授要目草案」『現代ソヴェト哲学』第五集、1960年
11. エレンブルグ, イリヤ (木村浩 訳)『わが回想 人間・歳月・生活』第六部、朝日新聞社、1968年
12. 大井正『唯物史観における個人概念の探究』未来社、1970年
13. 金子幸彦・細谷新治他 編著『チェルヌィシェフスキイの生涯と思想:ロシア解放思想の先駆者』社会思想社、1981年
14. カレル＝ダンコース, H. (石崎晴己 訳)『ソ連邦の歴史: I レーニン革命と権力』新評論、1985年
15. 川野辺敏『ソビエト教育の構造』新読書社、1978年
16. カント, エマニュエル (宇都宮芳明 訳注)『道徳形而上学の基礎付け』以文社、1989年
17. グラムシ, アントニオ (芝田進午 訳) 「人間とは何か」『唯物論研究』七号、1961年
18. クルツ, ポール (大塚稔 訳) 「反宗教的ヒューマニズム宣言: 民主的かつ反宗教的なヒューマニズム協議会1980年宣言」『宮崎女子短期大学紀要』第29巻、2003年3月
19. グレーゼルマン, ゲ・イエ (川上正夫 要約) 「社会主義社会の発展における民衆の創造的役割」『現代ソヴェト哲学』第三集、1957年
20. グレーゼルマン (上田俊一 要約) 「社会主義のもとでの意識性と自然発生性の相互関係」寺沢恒信・林礼二 編『現代ソヴェト哲学』第三集、合同出版社、1958年
21. クロチコフ, ヴェ・エム (多和田栄治 抄訳) 「エル・フォイエルバッハとエヌ・ゲ・チェルヌィシェフスキーの倫理観における類似と相違」『ソヴェト哲学』第4集、合同出版、1959年
22. ケールディシ・V 「新しい人間についての概念」ベーラヤ編『ゴーリキイと現代: 論文集』(堀江信二 訳) モスクワ: ラドガ出版所、1985年
23. ゴーリキイ (中村白葉 訳)『どん底』、岩波文庫、1997年
24. 佐藤正則『ボリシェヴィズムと〈新しい人間〉: 20世紀ロシアの宇宙進化論』水声社、2000年
25. ザモシュキン, ユ・ア (長沼真澄 訳) 「ブルジョア社会の官僚主義化と個人の運命」『現代ソヴェト哲学』第七集、1962年
26. 塩川伸明「現代ソ連の思想状況 - ネオ西欧派とネオ・スラヴ派」『ソ連研究』第9号 (1989年)
27. シシュキン, ア・エフ 「共産主義の建設とマルクス主義倫理学の若干の諸問題」『現代ソヴェト哲学 第5集』合同出版、1960年
28. 芝田進午『人間性と人格の理論』青木書店、1964年
29. 芝田進午「カントと社会科学の問題」『唯物論』汐文社、1974年第3号

30. 志水速雄『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」全訳解説』講談社、1977年
31. シラー、フリードリヒ（小栗孝則 訳）『人間の美的教育について』法政大学出版局、2003年
32. スターリン、ヨシフ（石堂清倫 訳）「マルクス主義と言語学の諸問題」『弁証法的唯物論と史的唯物論：他二篇』、大月書店、1953年
33. スピノザ（畠中尚志 訳）『エチカ：倫理学』岩波書店、2006年
34. ソコロフ、ヴェ・ヴェ「スピノザの倫理学的および社会学的見解」（笠井忠 訳）『現代ソヴェト哲学』1956年版、大月書店
35. ソビエト社会主義共和国連邦大使館広報課 編『ソビエト連邦共産党の綱領について ソ連共産党第22回大会でのエヌ・エス・フルシチョフ同志の報告』ソビエト社会主義共和国連邦大使館、1961年
36. ソヴェト同盟科学アカデミー哲学研究所 著編（ソヴェト研究者協会 訳）『史的唯物論』下巻、大月書店、1952年
37. ソ連科学アカデミー哲学研究所 編（西牟田久雄、笠井忠 訳）『社会主義と個人』勁草書房、1970年
38. 高田和夫『ロシア帝国論 - 19世紀ロシアの国家・民族・歴史』平凡社、2012年
39. 高橋憲一「科学史家にとってリサーチ・プログラム論とは何か」『比較社会文化』第5巻、1999年
40. 立石洋子『国民統合と歴史学：スターリン期ソ連における『国民史』論争』学術叢書、2011年
41. 田畑稔『マルクスと哲学 - 方法としてのマルクス再読』新泉社、2004年
42. チェルニャーエフ、アナトーリー・S（中澤孝之 訳）『ゴルバチョフと運命をともにした2000日』潮出版社、1994年
43. テイヤール・ド・シャルダン、ピエール（美田実 訳）『現象としての人間』みすず書房、1969年
44. デュルケーム・E.（田原音和 訳）『社会分業論』復刻版、青木書店、2007年
45. 寺谷弘壬「第8章：社会科学の限界と政治学の台頭」西村文夫・辻村明 編『現代ソ連論第3巻 - 現代ソ連の社会と文化』日本国際問題研究所、1980年
46. トゥガリノフ、ヴェ・ペ（上田俊一 抄訳）「社会的存在」と「社会的意識」のカテゴリーについて」『現代ソヴェト哲学』第四集、1959年
47. 中野徹三「ソヴェト・マルクス主義における新動向の展開とその史的意義」『スラヴ研究』第5号、1961年
48. 日本共産党中央委員会宣伝教育部訳編『ソ連共産党第二一回大会』合同出版社、1959年
49. 沼田稲次郎『社会主義とヒューマニズム：ソ連について考えること』労働旬報社、1987年
50. パーソンズ、タルコット（土屋淳二、杉本昌昭 訳）『知識社会学と思想史』学文社、2003年
51. バルト、カール（成瀬治 訳）「新しき人の現実」『ヒューマニズム』新教出版社、1951年
52. 廣岡正久「現代ソ連のイデオロギー危機と宗教の再生」『ソ連研究』第9号、1989年、53-70頁
53. フェドセーエフ、ペ・エヌ（林礼二 訳）「ヴェ・イ・レーニンによる史的唯物論の発展」『現代ソヴェト哲学』1955年版、大月書店、1956年
54. 藤野渉『史的唯物論と倫理学』新日本出版社、1972年
55. プリマコフ、エフゲニー（鈴木康雄 訳）『クレムリンの5000日 プリマコフ政治外交秘録』、NTT出版、2002年
56. ブラツキー・エフ、シャフナザーロフ・ゲー「社会科学と生活」『思想』No. 385 (1956.7)
57. ボヘンスキー、ヨーゼフ（小林 珍雄 訳）『共産主義と人間』京都：ヴェリタス書院、1956年
58. マカレンコ、ア・エス、藤井敏彦、岩崎正吾『科学的訓育論の基礎—人間形成の道』明治図書、1988年
59. 馬淵浩二「支配的イデオロギー論の構造」東北大学文学会編『文化』第62巻3・4号、1999年
60. マルクス／エンゲルス（廣松渉 編訳）『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』岩波書店、2005年
61. 務台理作『現代のヒューマニズム』岩波書店、1961年
62. ヤコヴレフ・ア「ソヴェト社会の新しい質的狀態の達成と社会科学」『世界経済と国際関係』国際関係研究所訳編、第80集、1988年

63. ラカトシュ, イムレ (村上陽一郎、井山弘幸、小林博司、横山輝雄 共訳) 『方法の擁護』新曜社、1986年
64. ルリヤ (天野清 訳) 『言語と意識』金子書房、1982年

### 【ロシア語文献】

1. Перестройка и нравственность (Материалы «Круглого стола»), *Вопросы философии*, 1990, №.7.
2. Арбагов, Георгий, *Человек СИСТЕМЫ*, М.: 2002.
3. Архангельский Л.М., Сущность этических категорий, *Философские науки*, 1961, №. 3.
4. *Актуальные проблемы марксистской этики*, под ред. Бандзеладзе, Г.Д., Тбилиси : Изд-во Тбил. ун-та, 1967.
5. Буева, Л.П., Индивидуальное сознание и условия его формирования, *Вопросы философии*, 1963, № 5.
6. Буева, Л.П., *Формирование индивидуального сознания в процессе перехода к коммунизму*, М., Изд-во Московского ун-та, 1965.
7. Бурлацкий, Федор, *Новое мышление: Диалоги и суждения о технологической революции и наших реформах.*, М.: Политиздат, 1989.
8. Бурлацкий, Ф.М, *Никита Хрущев*, М.: Рипол классик, 2003.
9. Бутенко, А.П., Народ как социологическая категория, *Вопросы Философии*, 1957, № 1.
10. Ванюков, Дмитрий Александрович, *Хрущевская оттепель*, М.: Мир книги, 2007.
11. Гак, К., Строительство коммунизма и всестороннее развитие личности, *Коммунист*, 1959, № 12.
12. Горбачёв, Михаил С., *Перестройка и новое мышление для нашей страны и для всего мира*, М.: ИПЛ, 1987.
13. Горбачёв, Михаил, *Жизнь и реформы*, кн. 1, М.: Новости, 1995.
14. Греков, Л., Представляем новый учебник по философии, *Коммунист*, 1988, № 17.
15. Гумницкий, Г.К., Смысл жизни, счастье, мораль, *Вопросы философии*, 1967, №. 5.
16. Гусейнов, А.А., Марксистские традиции в этике. 2000, *Оправдание морали*. М.; Тюмень, 2000.
17. Гусейнов, А.А., *История этических учений: Учебник.*, Москва: Гардарики, 2003.
18. Давыдов, Ю.Н., *Труд и свобода*, М., Высшая школа, 1962.
19. Дробницкий, О.Г., К вопросу о категории долга в марксистской этике, *Философские науки*, 1960, № 3.
20. Егидес, Пётр М., Проблема смысла жизни в марксистской этике, *Вопросы философии*, 1963, № 8.
21. Замошкин, Ю.А., Современный капитализм и духовная жизнь личности, *Вопросы философии*, 1960, № 6.
22. Земляной, Сергей Н., История, сознание, диалектика. Философско-политическая мысль молодого Лукача в контекстах XXI века, предисловие к книге Лукача, Георга, История и классовое сознание, М.: Логос-Альтера, 2003.
23. Иванов, К.В., Наука после Сталина: Реформа академии 1954-1961 гг., *Науковедение*, 2000, № 1.
24. Игитханян М. Х., Н. В. Новиков, На философском семинаре VI Всемирного фестиваля молодежи и студентов, *Вопросы философии*, 1957, №. 6.
25. Иовчук, М.Т., Об исторических этапах становления и развития социалистического сознания в СССР, *Вопросы философии*, 1965, № 2.
26. Каммари, М., Роль народных масс в развитии духовной жизни общества, *Коммунист*, 1956, №. 1.
27. Капица, П.Л., Пять писем Н.С. Хрущеву, *Знамя*, 1989 г., № 5.
28. Карякин, Юрий, Перемена убеждений, *Знамя*, 2007, № 11
29. *Философия в российской провинции. Нижний Новгород XX век.* под ред. Касьяна А.А., М.: Наука, 2003.
30. Келле, В., М. Ковальзон, *Общественное сознание и его формы*, М., Изд-во полит. лит-ры,

- 1963.
31. Келле, В.Ж., М.Я. Ковальзон, *Общественное сознание*. М.: Политиздат, 1966.
  32. Кон, И.С., «Марксистская этика и проблема долга», *Вопросы философии*, 1954, № 3.
  33. Кон, И.С., *Социология личности*, М.: Политиздат, 1967.
  34. *Исторический материализм*, под общей ред. проф. Константинова Ф.В., Госполитиздат, 1950.
  35. КПСС, *Материалы XXII съезда КПСС*, М., Госполитиздат, 1961.
  36. Курьлев, А.К., О всестороннем развитии личности при коммунизме, *Вопросы философии*, 1961, № 11.
  37. *Основы марксизма-ленинизма*, под глав. ред. Куусинена О.В., М.: Госполитиздат, 1959.
  38. *Иван Тимофеевич Фролов*, под ред. Лекторского, В.А., М.: РОССПЭН, 2010.
  39. *Философия не кончается... Из истории отечественной философии: XX век: В 2-х кн.. Кн. II. 60 – 80-е годы.*, под ред. Лекторского, В.А.М.: РОССПЭН, 1999.
  40. *В.И. Ленин: полное собрание сочинений*, Изд. 5-е. М.: Издательство политической литературы, 1958-1980.
  41. Мамардашвили, Мераб К., Интеллигенция в современном обществе, *Проблемы рабочего движения: Материалы междунаро. науч. сессии 12 – 15 апр. 1967 г.* М.: «Мысль», 1968.
  42. Мамардашвили, М.К., Анализ сознания в работах Маркса, *Вопросы философии*, 1968, № 6..
  43. Мамардашвили, Мераб К., Сознание – это парадоксальность, к которой невозможно привыкнуть, *Вопросы философии*, 1989, № 7..
  44. Мамардашвили, Мераб, *Сознание и цивилизация. Тексты и беседы*, М.: Логос, 2004.
  45. Мануйлова, Л.Н., Заседание, посвященное Г. В. Плеханову, *Вестник АН СССР*, 1957, № 2.
  46. Маслин А.Н., Школа Н. Г. Чернышевского о роли народных масс и личности в истории, *Вопросы философии*, 1960, № 3.
  47. Мильнер-Иринин, Я.А., Этика, или принципы истинной человечности, *Актуальные проблемы марксистской этики*, Ред. Г.Д. Бандзеладзе. - Тбилиси : Изд-во Тбил. ун-та, 1967.
  48. Митрохин, Л.Н., Проблема человека в марксистском освещении, *Вопросы философии*, 1963, № 8.
  49. Митрохин, Л.Н., *Мои философские собеседники*, СПб.: РХГА, 2005.
  50. Мотрошилова, Н.В., *Н. В. Мотрошилова. Работы разных лет*, М.: Феноменология-Герменевтика, 2005.
  51. Назаров, В.Н., Опыт хронологии русской этики XX в.: первый период (1900-1922), *Этическая мысль*. – Ежегодник, Москва: ИФ РАН. 2000.
  52. Назаров, Опыт хронологии русской этики XX в.: второй период (1923-1959), *Этическая мысль*. – Ежегодник, Москва: ИФ РАН. 2001.
  53. Назаров, Опыт хронологии русской этики XX в.: третий период (1960-1990), *Этическая мысль*, Вып. 4. М.: ИФ РАН. 2003.
  54. Наумова, Н.Ф. *Философия и социология личности*, М.: «КАНОН» РООИ «Реабилитация», 2006.
  55. *Основы марксистской философии*, Ред. Павелкин П., Курбатова Г., М.: Госполитиздат, 1958.
  56. Отв. ред. Перов Ю.В., *Тугариновские чтения. Материалы научной сессии*, СПб.: Санкт-Петербургское философское общество, 2008.
  57. Передовая, Великое ленинское философское наследие, *Вопросы философии*, 1955. № 2.
  58. Передовая, XXII съезд КПСС и задачи советской философии, *Вопросы философии*, 1961. № 11.
  59. Перов Ю.В. (Отв. ред.) *Тугариновские чтения. Материалы научной сессии*, СПб.: Санкт-Петербургское философское общество, 2008.
  60. Петросян, М.И., Марксизм и гуманизм, *Вопросы философии*, 1955, № 3. стр. 45–58.
  61. Полевой, Ю.З., Об исторических взглядах Плеханова, *Вопросы истории*, Август 1954, Изд. Правда.
  62. Попов, С.И., *Политика, экономика, мораль*, М.: Политиздат, 1989.
  63. Примаков, Евгений М., *Годы в большой политике*, М.: Совершенно секретно, 1999.
  64. *Российская философия продолжается : из XX века в XXI*, под ред., Пружинина, Б.И., Москва,

- 2010.
65. Рассадин, Станислав, *Время Окуджавы?*, *Новая газета*, № 2, 14 января 2002 г.
  66. Рассадин, *ВРЕМЯ СТИХОВ И ВРЕМЯ ПОЭТОВ*, *Арион*, 1996, № 4.
  67. Рассадин, Мы, Я, и Евтушенко, *Новая газета*, № 72, 02 октября 2000 г.
  68. Рассадин, ПРОФЕССИЯ – РАССАДИН. Беседа с обозревателем, *Литературной газеты* Славой Тарощиной, *Литературная газета*, 1 марта 1995 г.
  69. Рассадин, Шестидесятники – книги о молодом современнике, *Юность*, 1960, № 12.
  70. Рубинштейн, С.Л., *Бытие и сознание: о месте психического во всеобщей взаимосвязи явлений материального мира*, М., Изд-во Академии наук СССР, 1957.
  71. Рубинштейн, С.Л., Теоретические вопросы психологии и проблемы личности, *Вопросы психологии*, 1957, № 3.
  72. Соколов, А.В., Два поколения советской интеллигенции: шестидесятники и восьмидесятники, *Мир России*, 2007, № 3.
  73. Соколов, Аркадий, Демифологизация русской интеллигенции, *Нева*, 2007, № 8.
  74. Соловьев, Э.Ю., Индивид, индивидуальность, личность, *Коммунист*, 1988, № 17.
  75. Спиркин, А.Г., Материя и сознание, *Вопросы философии*, 1963, № 10.
  76. Спиркин, А., *Происхождение сознания*, М., Изд-во Полит. лит-ры, 1960.
  77. Сталин, И.В., Выступление на приеме в Кремле в честь участников, *Сочинения*, Т. 15, М.: Издательство «Писатель», 1997.
  78. Под ред. Тольстых, В.И., *Эвальд Васильевич Ильенков*, М.: РОССПЭН, 2009.
  79. Тугаринов, В., Социалистическое общество и личность, *Коммунист*, 1960, № 18.
  80. Тугаринов, В.П., Коммунизм и личность, *Вопросы философии*, 1962, № 6.
  81. Тугаринов, В.П., *Личность и общество*, М.: Мысль, 1965.
  82. Уледов, А.К., Социализм и общественное мнение, *Вопросы философии*, 1960, № 6.
  83. Францев, Ю.П., Социалистический коллективизм и формирование личности, *Вопросы философии*, 1961, № 5.
  84. Фролов, И.В., *Перестройка: философский смысл и человеческое предназначение*, Академик Иван Тимофеевич Фролов, очерки. воспоминания. материалы., М., 2001.
  85. Фролов И.Т. (Отв. ред.), *Введение в философию (учеб. пособие для вузов)*, Авт. колл.: Фролов И.Т. и др. - 3-е изд., перераб. и доп. - М.: Республика, 2003.
  86. Академик Иван Тимофеевич Фролов. *Очерки. Воспоминания. Материалы*, М.: Наука, 2001.
  87. Гл. ред. Фурсенко, А.А., *Президиум ЦК КПСС. 1954-1964. Черновые протокольные записи заседаний. Стенограммы. Постановления. Том 1*, М.: РОССПЭН, 2004.
  88. Харчев, А.Г., Проблема нравственного воспитания личности при социализме, *Философские науки*, 1959, № 1.
  89. Харчев, А.Г., К итогам дискуссии о категориях этики, *Философские науки*, 1965, № 2.
  90. Под редакцией Харчева, А.Г. и др., *Проблема ценности в философии*, М.: Изд-во Наука, 1966.
  91. Цанн-Кай-си, Фёдор, Евгений Плеханов, Гуманизм как философско-антропологическая проблема, *Здоровый смысл*, Лето 2005, №3 (36).
  92. Сост. Черняев, А., Вебер А., Медведев В., *В Политбюро ЦК КПСС: По записям Анатолия Черняева, Вадима Медведева, Георгия Шахназарова (1985-1991)*, М.: Горбачев-Фонд, 2008.
  93. Чижов, П.Г., Дух гуманизма в философии И. Канта, *Кантовские чтения в КРСУ*, под общ. ред. Ивановой, И.И., Бишкек, 2004.
  94. Шария, П.А., *О некоторых вопросах коммунистической морали*, М.: Госполитиздат, 1951.
  95. Шахназаров, Георгий, *С вождами и без них*, М.: Вагрис, 2001.
  96. Шишкин, А. Ф. *Основы коммунистической морали*, Москва, Госполитиздат, 1955.
  97. Шишкин, А.Ф., *Основы марксистской этики*, М.: ИМО, 1961.
  98. Шишкин, Александр, Некоторые вопросы теории коммунистической морали, *Вопросы философии*, 1956. № 4.



## 【洋文献】

1. Alexeyeva, Ludmilla & Paul Goldberg, *The Thaw Generation Coming of Age in the Post-Stalin Era*, Pittsburgh, University of Pittsburgh Press, 1990.
2. B., J., "Soviet Philosophers at the Thirteenth International Congress of Philosophy", *Studies in Soviet Thought*, Vol. 3, No. 4, 1963.
3. Baranovsky, Vladimir, "Back to Europe?", *The Old Continent and the New Policy in Moscow, In from the cold : Germany, Russia, and the future of Europe* Ed. by Baranovsky V. and Spanger, Hans-Joachim, Boulder (Colorado): Westview Press, 1992.
4. Bell, Daniel, *The End of Ideology : on the exhaustion of political ideas in the fifties*, Free Press of Glencoe, 1960.
5. Bell, D., "The "End of Ideology" in the Soviet Union?", *Marxist Ideology in the Contemporary World - Its Aspects and Paradoxes*, Ed. by Milorad M. Drachkovitch, Hoover Institution Publishers, N. Y., 1966.
6. Bochenski, I.M., *Der sowjetrussische dialektische Materialismus (Diamat)*, Dritte Auflage 1960.
7. Boguszak, Jiri, „Zur Rolle des sozialistischen Rechtsbewußtseins beim Aufbau des Sozialismus – Kommunismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 8, 1960.
8. Brickman, William W, John T. Zepper, *Russian and Soviet education, 1731-1989 : a multilingual annotated bibliography*, N.Y., Garland Pub., 1992.
9. Brown, Archie, *The Gorbachev Factor*, Oxford, 1996.
10. Brown, Archie, *Seven Years that Changed the World: perestroika in perspective*, Oxford: Oxford University Press, 2007.
11. Chernyaev, Anatoly, *My Six Years with Gorbachev*, Pennsylvania, 2000.
12. De George, Richard T., "Bibliography of Soviet Ethics", *Studies in Soviet Thought*, March 1963, Vol.3, 1.
13. De George, R. T., "Soviet Ethics and Soviet Society", *Studies in Soviet Thought*, September 1964, Volume 4, Issue 4.
14. De George, R.T., "V. P. Tugarinov – A Reminiscence", *Studies in Soviet Thought*, 28 (1984).
15. Dilthey, Wilhelm, „Abhandlungen zur Grundlegung der Geisteswissenschaften“, *Gesammelte Schriften. Bd. 5; Die geistige Welt; Hälfte 1*, Stuttgart : Teubner, 1990.
16. Eagleton, Terry, *Ideology: an introduction*, Verso, 1991.
17. "From the Editorial Board", *World Marxist Review*, London, September 1958, Vol. 1, No. 1.
18. English, Robert D., *Russia and the Idea of the West: Gorbachev, Intellectuals, and the End of the Cold War*, New York: Columbia University Press, 2000.
19. F., H., "On Man", *Studies in Soviet Thought*, Vol. 3, No. 4, 1963..
20. Gulian, C.J., „Über den Sinn der Menschenkenntnis in der neuen Ethik“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 5. 1957
21. Gusejnov, Abduslam, „Zur Geschichte und aktuellen Situation der Ethik in der Sowjetunion“, *Studies in Soviet Thought*, Vol. 42, No. 1, 1991, pp. 195 – 206.
22. Scheler, Hermann, „Über das Verhältnis von Spontaneität und Bewußtheit“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 1. 1957.
23. Hill, Ronald J., *Soviet Politics, Political Science and Reform*, Oxford, 1980.
24. Seidel-Höppner, Waltraud, „Konferenz zum 50. Jahrestag des Erscheinens von Lenins Werk „Materialismus und Empirio-kritizismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 3.1959.
25. Ignatow, Assen, Perestrojka der philosophie?, *Studies in Soviet Thought*, Vol. 40, 1990.
26. Kamenka, Eugene, *Marxism and Ethics*, London, Macmillan, 1969.
27. Karyakin, Y., An Episode in the Battle of Ideas, *World Marxist Review*, Vol. 7, 1964, No. 9.
28. Kline, George L., "Soviet Philosophers at the Thirteenth International Philosophy Congress", *The Journal of Philosophy*, Vol. 60, No. 23., 1963.
29. Kline, George L., *Spinoza in Soviet philosophy : a series of essays, selected and translated, and with an introduction*, London, 1952.
30. Kovalev S., "Communist Humanism and Revolutionary Coercion", *World Marxist Review*, Vol. 7, 1964, No. 5.
31. Kuhn, Thomas S., *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: University of Chicago Press,

- 1962.
32. Lakatos, Imre, ; ed. by John Worrall and Gregory Currie, *The Methodology of scientific research programmes* Vol. 1, Cambridge University Press, 1978.
  33. Legvold, Robert, “The Revolution in Soviet Foreign Policy,” *Foreign Affairs* 1988/89, Vol. 68.
  34. Lindsay, Jack, “Lenin and Humanism”, *World Marxist Review*, Vol. 3. No. 7, July 1960.
  35. Loewenstein, Karl E., “Re-emergence of Public Opinion in the Soviet Union: Khrushchev and Responses to the Secret Speech”, *Europe-Asia Studies*, Vol. 58, No. 8, December 2006.
  36. Lukács, Georg, *Werke Band 2, „Geschichte und Klassenbewußtsein: Studien über marxistische Dialektik“*, Neuwied: Luchterhand Verlag 1968, 1983.
  37. MacIntyre, Alasdair, *A Short History of Ethics*, N.Y.: Macmillan, 1966.
  38. Mannheim, Karl, ; edited by Paul Kecskemeti, *Essays on Sociology of Knowledge*, London : Routledge & K. Paul, 1952.
  39. Marcuse, Herbert, *Soviet Marxism : a critical analysis*, N.Y., Vintage Books, 1961.
  40. Markwick, Roger D.; foreword by Donald J. Raleigh, *Rewriting history in Soviet Russia : the politics of revisionist historiography, 1956-1974*, Houndmills, Basingstoke : Palgrave, 2001.
  41. Marx, Karl, Frederick Engels, *Collected Works*, M.: Progress, 1975-.
  42. Mikoyan A. I., *Speech at the 20th Congress of the C.P.S.U.*, M., Foreign Languages Publishing House, 1956.
  43. Miller, Reinhold, *Vom Werden des sozialistischen Menschen : der Kampf des Neuen gegen das Alte auf dem Gebiet der Moral*, Berlin, Dietz, 1960.
  44. Müller-Claud, W., Diskussion über die sozialistische Persönlichkeit, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Heft 2, 7 Jahrg. 1959.
  45. Ed. by O'Rourke, James J., Thomas J. Blakeley, and Friedrich J. Rapp, *Contemporary Marxism : essays in honour of J.M. Bocheński*, Dordrecht, Holland, 1984.
  46. Payne, T.R., *S.L. Rubinštejn and Soviet Psychology*, Dordrecht, D. Reidel , 1968.
  47. Peunova, Maria, “From dissidents to collaborations: the resurgence and demise of the Russian critical intelligentsia since 1968”, *Studies of East European Thought*, 2008 (Vol. 60), Issue 3, 20.
  48. Redeker, Horst, „Die künstlerische Selbstbetätigung der Werktätigen – Ausdruck und Mittel der Entwicklung der Bewußtheit des sozialistischen Menschen“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 8, 1960.
  49. Reginer, Daniel, Consciousness and Conscience: Mamardašvili on the Common Point of Departure for Epistemological and Moral Reflection, *Studies in East European Thought*, 2006 (Vol. 58), Issue 3.
  50. Sartre, Jean-Paul, (tr. Mairet, Philip) *Existentialism and Humanism*, London: Methuen, 1948.
  51. Scheler, Hermann, „Über das Verhältnis von Spontaneität und Bewußtheit“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 1. 1957.
  52. Schmidt, Hans, „Das sozialistische Bewußtsein der Genossenschaftsbauern – Triebkraft zur Herausbildung des sozialistischen Dorfes“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 8, 1960.
  53. Seidel-Höppner, Waltraud, „Konferenz zum 50. Jahrestag des Erscheinens von Lenins Werk „Materialismus und Empirioskritizismus“, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, H. 3. 1959.
  54. Serebriany, Sergei, “On the ‘Soviet Paradigm’ (Remarks of an Indologist)”, *Studies in East European Thought*, 2005.
  55. van der Zweerde, Evert, „Die Rolle der Philosophiegeschichte im „neuen philosophischen Denken“ in der UdSSR“, *Studies in Soviet Thought*; Vol. 40, 1990.
  56. Zapata, René, *La philosophie russe et soviétique*, Presses Universitaires de France, Paris, 1988.

#### 【辞書・辞典】

1. ウィーナー, フィリップ・P.編『西洋思想大事典』Vol.4, 平凡社、1990年
2. 岡崎次郎 編集代表『現代マルクス - レーニン主義事典』上・下、社会思想社、1980年
3. 樋口陽一, 吉田善明 編『解説世界憲法集』第4版, 三省堂, 2001年
4. ローゼンターリ, エム、ペ・ユージン 監修 (ソヴェト研究者協会 訳)『哲学事典』1954年版、1956年
5. Алексеев, П.В., *Философы России XIX – XX столетий. Биографии, идеи, труды.* – 4-е изд.

- перераб. и доп. – М.: Академический Проект, 2002.
6. *Немецко-русский и русско-немецкий философский словарь*, Зайцева, З.Н., МГУ, 1998.
  7. *Философский словарь*, под ред. Розенталя, М. М., П. Ф. Юдина, М., Политиздат, 1963.
  8. *Философский словарь*, под ред. Розенталя, М.М., М.: Изд-во политической литературы, 1975.
  9. *Толковый словарь русского языка начала XXI века. Актуальная лексика*, Под ред. Скляревской, Г.Н., М.: Эксмо, 2007.
  10. *Философский словарь*, под ред. Фролова, И.Т., М.: Изд-во политической лит-ры, 1980.
  11. *Философский словарь. Изд. 8-е, доработанное и дополненное*, под ред. Фролова, И.Т., М., 2009.
  12. *Новейший философский словарь*, под. общ. ред. Ярешенко, А.П., Ростов н/Д.: Феникс, 2005.

### 【公文書館資料】

1. Призрачная газета «Фестиваль» при VI всемирном фестивале молодежи и студентов в 1957 г. в Москве. РГАНИ Фонд №5 Опись № 28 Дд. № 28 Дд. № 454..
2. Шахназаров Г., Новая книга о правах человека. О книге В.М. Чхиквадзе «Гуманизм, мир, личность». (1981 г.), № карточки 20710., Архив Горбачев-Фонда.

### 【新聞】

1. “Evolution in Europe; With Nonreaders Gone, Marxism's Journal Fails”, *The New York Times*, 3 July, 1990.

### 【インターネット上の資料】

1. Конференция «Поколение Горбачева: шестидесятники в жизни страны»: [http://www.gorby.ru/activity/conference/show\\_844/](http://www.gorby.ru/activity/conference/show_844/) (2011/05/29)
2. «Мы все время вели войны за свой предмет» , *Relga*, (№ 2 [92] 11.05.2004) : <http://www.relga.ru/Environ/WebObjects/tgu-www.woa/wa/Main?textid=97&level1=main&level2=articles> (2012/09/28).
3. Шестидесятники призывают покончить с культом личности и безличности (фоторепортаж): <http://www.regnum.ru/news/600597.html> (2008/08/05)
4. Бондаренко, Л.И., В.Ю. Перов, Марксистская этика в СССР, Русская и европейская философия: пути схождения. Сборник материалов конференции.: [http://www.anthropology.ru/ru/texts/perov\\_v/ruseur\\_01.html](http://www.anthropology.ru/ru/texts/perov_v/ruseur_01.html) (2010/11/18)
5. Капустин, Борис, Идеи Канта в России звучат уже два века, *Русский журнал*, Июнь, 2009: <http://russ.ru/Mirovaya-povestka/Idei-Kanta-v-Rossii-zvuchat-uzhe-dva-veka> (2010/05/06)
6. Konashev, Mikhail B., Humanism in Post-Soviet Russia. Some Aspects of Theory, History and Actuality.: <http://humanizm.free.ngo.pl/russia.htm> (2009/10/06)
7. Конституция (Основной закон) Союза Советских Социалистических Республик, Утверждена Чрезвычайным VIII съездом Советов Союза ССР, 5 декабря 1936 года: <http://www.hist.msu.ru/ER/Etext/cnst1936.htm> (2012/12/12)
8. Кувакин, В.А., Что такое Российское гуманистическое общество.: <http://www.atheismru.narod.ru/humanism/about.htm> (2008/06/28)
9. Кудрявцев, Владимир, ПАМЯТИ Ф.Т. МИХАЙЛОВА Личная страничка Феликса Трофимовича Михайлова: <http://www.tovievich.ru/book/20/269/1.htm> (2012/11/01)
10. Линчевский, Игорь, Интервью со Львом Аннинским, «Настоящий талант должен раздражать»: <http://www.ozon.ru/context/detail/id/200612> (2008/08/13)
11. Луначарский, Анатолий В., Мораль и свобода.: <http://magister.msk.ru/library/politica/lunachar/lunaa008.htm> (2009/11/07)
12. Судьба дала мне шанс (Беседа глав. ред. журнала “Российский адвокат” Р. А. Звягельского с Ф. М. Бурлацким), *Российский адвокат*, № 5, 2007.: <http://gra.ros-adv.ru/magazine.php?m=60&a=3> (2012-12-18)

## 論文要旨

ソヴィエト連邦最後の書記長、及び、初代大統領ミハイル・ゴルバチョフは在任中に内政・外交に抜本の変革をもたらし、「ペレストロイカ」、「グラスノスチ」はその当時世界語となった。これらの諸改革に対し「説明原理」を与えようとした、彼と同世代の所謂「60年代人」(шестидесятники : *shestidesyatniki*)、あるいは、「第20回党大会の子供達」と呼称される人々は何故その様な「新思考」を身に付けることができたのか。また、その「新思考」はいつ、どの様に形成されたのであろうか。そのルーツを辿れば、スターリン死後の所謂「雪解け」期にあることが判明する。「60年代人」を覚醒させることとなった環境を作り出した1950年代半ばにソ連の新しい指導者となったニキータ・フルシチョフと彼の盟友アナスタス・ミコヤンは、1956年に開催された第20回党大会以降公式イデオロギーにおいて新しい方向性を打ち出し始め、最終的には1961年10月に開催された第22回党大会において、従来ブルジョアの観念とされてきた「ヒューマニズム」を初めてソ連共産党の公式的なイデオロギーの一つとして組み込んだ。フルシチョフ政権下では「ヒューマニズム」は「人間の尊厳への敬意、人々の福祉への配慮、彼等の全面的発達、人間にとって好条件の社会生活の環境整備を表す諸見解の総体」と定義されている。このフルシチョフ期の「ヒューマニズム」イデオロギーは、一旦、ブレジネフ期(1965~1982)に党指導部によって形骸化されていたが、その間も一部の学識者達によって信奉され続け、その後「第20回党大会の子供」であるゴルバチョフが指導者になった際に、彼のイデオロギー担当補佐官イワン・フロロフによって「新しい(真の)ヒューマニズム」という標語となって、内外諸政策の「説明原理」として実質的に復活することとなった。

当論文ではアプローチとして、科学史家のイムレ・ラカトシュが提唱した「科学的研究プログラムの方法論」(The methodology of scientific research programmes: MSRP)の、同じく科学史家、高橋憲一による修正版、並びに、社会学者カール・マンハイムの世代論をソヴィエト人文・社会科学史に援用する。パラダイム論は旧パラダイムから新パラダイムへの移行の説明に適するのに対し、MSRPは変則性に対する耐久性、並びに、同一パラダイムを守る為に科学者達がいかに試行錯誤するかの説明、及び、併存する複数のパラダイム間の競争という外在的観点という点において優れているからである。MSRPの要点は次の4つである。

1) 分析の対象は、単一の理論ではなく、構成単位が通常著しい連続性によって結び付いている理論系列(a series of theories)であり、このまとまりを研究プログラムと呼ぶ。2) この理論系列は「理論系列の中で一貫して守られる部分」と「理論系列の中で修正される部分」とに区分される。前者を「堅い核(Hard Core)」、後者を「防御帯(Protective Belt)」と呼ぶ。3) 中心に「堅い核」があり、その周囲に「補助仮説(auxiliary hypotheses)」によって形成されている「防御帯」が張り巡らされ、部分的に修正・廃棄・拡張されながら、段々と厚みを増していく。4) 自然科学以外の分野への応用を批判されているパラダイムとは異なって、MSRPは発案者であるラカトシュ自身によってマルクス主義やフロイト主義といった自然科学以外への適用も想定されている。但し、高橋は理論系列の中で一貫して守られてきた部分は事後的にしか規定しようがない為に、ラカトシュの議論は歴史的に逆立ちしていると指摘し、後続理論との関係で核の一部が入れ替わり得るばかりでなく、同一理論

の内部でも「防御帯」との関係で「核」は可変的であると想定すべきであり、「堅い核」に代えて「柔らかい核」を想定することを提案し、「柔らかい核」が「堅くなっていく」過程に理論展開のダイナミクスがあると述べる。

当論文では、同時に、或る新しい世代動向の最も本質的な萌芽が旧世代に属し、その旧世代内で孤立している先駆者によって最初展開され、実践されるという事は頻発している事態であり、また、新旧世代間の接触は「中間的世代」によって介在されるというカール・マンハイムによる、世代間の知識の継承・発展の観点を導入する。加えて、彼が注目した、同一世代間に統一性を齎すところの経験の層化現象が、「60年代人」ではどの様に生じたのかを検証する。

当論文が検証の対象とする時期は、ヨシフ・スターリン死去の一年後、哲学者アレクサンドロフが文化相に就任した1954年3月から、フルシチョフが失脚した1964年10月までである。また、対象とするのは、「60年代人」、及び、「ヒューマニズム」イデオロギーの構成要素の一部であった倫理学、意識論、並びに、人格論である。当論文の意義は、ソ連崩壊後、日本では殆ど顧みられることも研究されることもなかった後期ソヴィエト人文・社会科学史を、20世紀末以降ロシア哲学界で出版され始めた20世紀後半のソヴィエト哲学史研究文献や彼ら自身の回顧録を手掛かりに、再構築することにある。また、同時に、彼ら「60年代人」の研究にしても、従来は「反体制派」の動向に重点を置くものが多く、ゴルバチョフ期のイデオロギー「新しい（真の）ヒューマニズム」形成に携わった「体制内異端派」は、海外の若干の著作を除き、注目されてこなかった。当論文はこの「60年代人」内の「体制内異端派」形成過程に着目した特異な研究である。

党指導部によるスターリン批判に触発されたソヴィエト哲学者達は、「ヒューマニズム」という、スターリン時代にはスターリンの文言と結びつけなければ「ブルジョア的」と看做されていたイデオロギーを、脱スターリン化したうえで自陣営の公式イデオロギーの一部とすべく努めた。その新規のイデオロギーの構成単位の一部が倫理学、意識論、及び、人格論であった。来るべき「ヒューマニズム的」共産主義社会を建設する「新しい人間」を育成するには、共産主義的道徳、高度な意識・自覚、及び、各個人の個性の開花が必要である、という考えが共有されていたからである。1950年代半ば以降これらが次々と勃興していき、進歩的旧世代から新世代へと知の継承が成されていった。この様な流れの中で、防護される核自体の構成要素の内、「ヒューマニズム」が新しく採択される党綱領の中で謳われることとなった。かくして、1950年代後半以降、謂わば、「フルシチョフ＝ミコヤン体制」による支持と後援を得て、創意工夫を重ねて、防御帯との関係で可変的な核の周囲をめぐる「ヒューマニズム」の防御帯を形成すべく、補助仮説を練り上げたり創造したりさえする、という新しい学術的方向性が「第20回党大会の子供達」の上の世代、すなわち、10月革命以前の社会で中等教育以上を受け、1920年代から30年代にかけて研究に従事し始めた少数の老年層の旧世代、及び、1900年代末～20年代初頭出生で、30年代から40年代にかけて研究活動に従事し始めた、マンハイムの用語で言うところの、「中間的世代」によって実際に形作られていったのである。

「60年代人」を育成したのは先ずその環境であった。所謂「雪解け」によってソ連社会が外部世界へ解放され、外国人を招待したり、あるいは、外国で開催された学術会議に参加したりすることが比較的容易になった。例えば、1957年夏には第6回世界青年学生祭が

モスクワで開催された。数多く開催された催し物の一つとしてモスクワ大学で哲学ゼミナールが開催され、ソヴィエト哲学者の若手が数人参加し、社会の発展の客観的法則と科学的予見の可能性について、外国の若手哲学者達と討議した。また、後に所謂「プラハ派」として主に1970年代から1980年代にかけて、来るべきゴルバチョフ期の内政、及び、外交政策の理論的基礎を築いていくこととなる人々は、「体制内異端派」を育成した開明的な旧世代のアレクセイ・ルミャンツェフ（1905 - 1993）が編集長を務める、『平和と社会主義の諸問題』誌の本部があるプラハで、その後ユーロコムニズムの指導者となる人々と日々接触して討議する可能性を持った。こうした人的ネットワークと外部世界へのソ連の開放がソヴィエト学界全体に知的刷新を与えた。所謂「プラハ派」以外にもソ連の学者は西側の思想に接する機会に大いに恵まれ、ソヴィエト研究機関は、外国の類似の研究機関と書籍や雑誌を交換し、西側の文献を購入する適度の資金を持っていた。また西側諸国との文化交流を通じて若干の社会学者は長期間西側の研究機関で過ごし、西側の学者と共に仕事をし、資料を購入し、図書館を利用していた。

学術界の新世代である「60年代人」(*shestidesyatniki*)を定義すれば、彼等は、1920年代前半から1930年代後半の間に出生した人々の中でも、1950年代半ばから1960年代の間にかけて反スターリン主義的な見解を形成し、(社会主義的)民主主義を信念として共有するインテリゲンツィヤである。また、度々この「60年代人」がテーマになる際に語られる用語«шестидесятичество» (*shestidesyanichestvo*)を、当論文では、この用語を巡る様々な諸見解を総括して、「60年代人」によって醸成され、共有された集合意識、つまり、彼等の共同体を統合する力として作用した「ヒューマニズム」等といった信念や道徳的態度であると同時に、その意識が1950年代後半以降もたらした知的運動」と定義し、「60年代人の集合意識・知的運動」と訳すことを提起する。

モスクワのソヴィエト哲学界では、まだ公式プロパガンダに反することを表だって口にすることができなかった1950年代前半から半ばにかけて、中間的世代と新世代とが「モスクワ論理学サークル」(後に「モスクワ方法論サークル」と改名する)といった内輪だけの勉強会を創設し、そこでの議論を通じて、また、進歩的旧世代に勇気づけられつつ、従来の教条主義的な見解とは異なる、自分達独自の世界観を形成していった。

ソヴィエト倫理学に関して言えば、レーニンは、道徳は不要であるという風潮が強かった1920年に、従来の道徳・倫理とは異なる共産主義道徳なるものが存在することを強調し、また、文筆家で初代教育大臣アナトリー・ルナチャルスキー(1875 - 1933)はその頃既にカント等の古典に拠る道徳論の見直しを提言していた。教育者アントン・マカレンコ(1888 - 1939)は、1930年代に「人間に対する最大の要求と人間に対する最大の尊敬」という己の教育学的信念に基づいて、集団主義的倫理の必要性を主張した。その後、1950年にスターリンが論文『マルクス主義と言語学の諸問題』で、国家だけに止まらず道徳を含む上部構造一般が土台にもたらず能動的な機能についての見解を出したのが、ソヴィエト倫理学形成の契機となった。マルクス主義倫理学に関する著作でその後のソ連倫理学界に何らかの寄与をした著作が世に出たのは、スターリン死後の1954年のことで、教育学者兼倫理学者であったアレクサンドル・シシュキン(1902 - 1977)によるソ連初の道徳教科書が出版されたのは、更にその翌年のことであった。1950年代末にはソ連国内では党の指導の下でソヴィエト倫理学が大きく進展する為の下地が着々と作られていき、1961年に開催された第22回党大会

では新しい党綱領と共に 12 項目の道德規範が採択された。

1950 年代から 60 年代にかけてのソ連倫理学界においてシシュキン等の革命世代とヤコブ・ミルネル＝イリーニン（1911 - 1989）等の「中間的世代」が、次世代である、所謂 20 世紀の「60 年代人」（例えば、アブドゥスラム・グセイノフやオレグ・ドゥロブニツキー）、にとって研究の基礎となる土台を形作った。彼等は先ず主に倫理学のカテゴリーについて議論を闘わせ始めた。この革命世代や中間的世代はカントやスピノザ等といった、全人類的で形而上学的な古典への回帰、あるいは同時代の新思潮を参照するという方向付けを与えたのである。次世代の「60 年代人」の多くは先達の路線を踏襲し、旧世代と共にマルクス主義の空隙を、カントを含む欧米の多種多様な道德法則で補填することによってソヴィエト倫理学に多様性と重厚性を与えようと試みたが、彼らの間でどの思想潮流と調和させるかで見解が一致することはなかった。

意識論においては、1950 年代半ばに「レーニンへの回帰」ムードが高まる中で、哲学界では彼の『唯物論と経験批判論』及び『哲学ノート』への関心が高まった。レーニンは前者の中で、アレクサンドル・ボグダーノフによるマルクスの『経済学批判』序文の理解に対して批判した文脈の中で、社会的存在と社会的意識とを同一視すべきでないと言及し、社会的意識は社会的存在の反映であり、社会的存在は社会的意識から独立していると主張した。加えて彼は、「史的唯物論は、社会的存在を人類の社会的意識から独立したものと認める。意識は、どんな場合でも、存在の反映、せいぜい近似的に正しい（適切な、理想的に正確な）その反映に過ぎない」と、意識と存在との関係を史的唯物論の観点から定式化した。レーニンはその後『哲学ノート』の中のヘーゲルの『論理学』の摘要に「人間の意識は客観的世界を反映するだけでなく、それを創造しもある」と書き込み、以前の自身の反映論を修正し、存在に対する意識の能動的な機能を認めた。スターリンは、前述した論文の中で、道德等の社会的意識を含む上部構造一般が土台にもたらす能動的な機能についての見解を出した。その後、「社会的存在に対して社会的意識が反作用をもたらす」という新しいテーゼが公式見解としてソヴィエト哲学界に提示された。このテーゼは 1956 年のスターリン個人崇拜批判後も哲学界で公式見解として継承され続け、それを理論的根拠として意識の主体性の重要性がフルシチョフ期に議論されることとなった。

1950 年代後半にはソヴィエト人文・社会科学学会では社会的意識に関する研究の不在と緊要性についての認識が共有されつつあり、また、既に着手されつつあったが、同時に思考の幅に限界があった。こうした哲学界での意識論の基礎付け・方向付け作業が第 20 回党大会直後から為され、先ずそのカテゴリーの整理が旧世代のヴァシリー・トゥガリノフ（1898 - 1978）によって為され、また、倫理学者のシシュキンは良心と意識とを関係付け、倫理学と意識論をリンクさせた。しかし、1950 年代半ばまでの意識論は一般的に社会的意識の分析に偏り過ぎるきらいがあった。この理論の発展にとって大きな役割を果たしたのは心理学者で旧世代に属するセルゲイ・ルビンシュテインであった。彼は晩年に著した『存在と意識』（1957）で、意識発生の必要条件としての言語の分析に基づいて意識化を定義するとともに、人間の自由な意識的行動と道德的責任との関係性や自由と客観的必然性との関係について提言した。心理学を専門とし、哲学の素養もあるルビンシュテインによって心理学的現象と哲学的問題とが初めて本格的に融合されたことはその後のソヴィエト意識論の発展にとって重要な一歩であった。

「中間的世代」に属するアレクサンドル・スピルキン（1919 – 2004）は意識の、知識の様な客観的な側面よりも、感性の様な主観的側面を重要視し、且つ、意識の機能における受動性よりも、寧ろ、主体性や能動性に重きを置き、『唯物論と経験批判論』でのレーニンの見解よりも『哲学ノート』でのそれに正当性があることを主張した。またレーニンは、意識を「人間の脳髄と呼ばれる、特に複雑な物質の塊の機能」と看做したのに対し、スピルキンは「頭脳は意識の源泉ではなく、意識の器官である」と考え、意識化は人間と世界との相互作用の道程で生じるものであるから、意識を頭脳の中で行われている生理的過程と同一視すべきでないことを主張した。この彼の見解はマルクスとエンゲルスの共著である『ドイツ・イデオロギー』における意識の端初規定、即ち、「自分を取り囲んでいるものに対する自分の関係が自分自身に対して関係として現存するという在り方」に近似している。更に、マルクス＝レーニン主義の古典における意識論を修正・補足しようとするスピルキンの試みは、『ドイツ・イデオロギー』での「群棲意識」と「部族意識」の規定や、意識と言語との関係についての見解にも及んだ。こうして彼は、一方でルビンシュテインの道徳的意識論を引き継ぐとともに、マルクス＝レーニン主義の古典によって定式化された諸見解の幾つかに反論し、あるいは、それらを修正・補足することによって、来るべき 1960 年代の意識論の、謂わば、準備段階を構成した。

また、第 21 回党大会でフルシチョフが、ソヴィエト社会における世論の力の重要性を指摘したことを受けて、世論に関する研究が「中間的世代」に属するアレクサンドル・ウレドフ（1920 – 1999）によって、外国の社会学を参考にしつつ、始められた。また、1960 年には「60 年代人」の社会学者兼ジャーナリストであり、後に所謂「プラハ派」の一人となるボリス・グルシンによってソ連初の世論研究所が日刊紙の附属機関として米国の世論調査機関を模して設立された。

第 22 回党大会で採択された新しい党綱領では共産主義を「自由な自覚ある勤労者」によって構成される社会と定義づけており、その目的を達成する為に、社会的存在自体の真の民主化によって、「ヒューマニズム」精神に基づく国民の社会的意識と道徳的責任感の育成、勤労意欲や主体性の増進を図ることが謳われ、またそれと同じ目的で、世論の重要性にも着目された。

「60 年代人」のリュドミーラ・ブーエヴァ（1926 – ）は、ミクロの視点から、ソヴィエト国民一人一人の実生活に即した生活・労働環境の改善・充実や、共産黨員自身、特に幹部の意識の変革、各人の個人的体験の特殊性に即した個人的意識の形成の研究の重要性を訴えた。これまで殆んど扱われてこなかった個人的意識と個人を取り巻く環境の相互作用という研究は先駆的業績と言ってよいものである。

こうして、第 22 回党大会後の 60 年代前半におけるソヴィエト意識論には、新世代である「60 年代人」の参与によって、個人の意識という新しい視角が導入されるとともに、現実を無視したイデオロギー強化路線に対する批判的見解が社会学的実証という新形式によって示された。また、中間的世代はこれまでの自己の見解を発展させて、社会的意識の形態に着目してこれを分析したり、所謂「哲学の根本問題」を弁証法的唯物論に基づいて解決するという形式を取って自分の脱マルクス＝レーニン主義的見解を総括したりしたのである。この二つの世代の共通点として、多少なりとも個人の意識を取り上げる、上部構造の諸要素間の相互作用を分析する、存在を意識が逆に規定するというテーゼの発展、という新しい方



向性が挙げられる。

第 22 回党大会がソヴィエト思想史にとって画期的な点は「新しい人間の形成」の為に 12 項目にわたる道徳的規範が採択されたことと共に、最重要課題の一つとして、「全てを人間の為に、人間の幸福の為に」という党のスローガンのもと、人間の個性の開花が謳われ、社会主義から共産主義への段階的移行に際して人間を全面的に発展させることが目指されたことである。

こうした個人の人格 (*личность: lichnost'*) に関する議論は、漸く 1950 年代末から人間、及び、個性の問題が徐々に着実に注目される様になったことで始まった。1950 年代半ばまでの一つのかかなり普及しつつあった傾向は、階級闘争、革命、プロレタリアート独裁がいまだマルクス主義の中で重視されていた時期に特徴的な、伝統的なアプローチの中に人間に関するテーマを書き加えるというものであった。それまでは歴史における人民大衆と個人（傑出した人物）の役割のどちらかを強調する議論に終始していた。第 20 回党大会後、「人民」概念の内容が「60 年代人」のアナトリー・ブテンコ（1923 - ）によって整理され、「所与の国家、所与の段階における進歩的、革命的発展の課題の解決に自己の客観的法規に従って共同で参加できる住民のあれこれの層や階級の一部を含む、人々の歴史的に移り変わり行く統一体」と定義されるという進展もあった。また哲学界では、共産主義社会建設の為に人民大衆の積極性を引き出すことが今後の課題として提起されるとともに、帝政ロシア末期における人民大衆の役割論の内、スターリン期には紹介されていなかった箇所が旧世代によって光が当てられる等の動きがあった。

1950 年代後半での心理学会での人格研究の成果が、前述した『存在と意識』によって、いまだ人格論が歴史上の人物論に留まっていたソヴィエト哲学界に議論の基礎として提供され、これによって、ソヴィエト哲学界での人格論は倫理学・意識論との抱き合わせで議論されていくこととなり、倫理学者が道徳教育が人格に及ぼす影響を重視する論文を発表した。フルシチョフが人格/個性 (*личность*) の全面的発達に言及した第 21 回党大会後に、歴史上の著名人ではない一般的な個人に着目した著作が現れ、これ以降ようやく人格の全面的発達というテーマで人民の一個人にも関心が向けられることとなり、新綱領では倫理学や意識論と並んで人格論が「ヒューマニズム」イデオロギーの一角を成した。こうして主に党指導部が主体的に人格論の形成に挺入れていったのだが、こうした党指導部による国民の人格管理政策に対して、世代を問わず一部の哲学者達はこれを官僚主義的な「類型化(没個人化)」であるとして反発した。ソ連国外では、フッサールやグラムシ、ド・シャルダンといった面々によって、人格等、人間を中心的なテーマとした議論が全世界的な広がりを見せており、1963 年に開催された国際哲学会議でも「人間の問題」が議事日程の主要点であった。この会議がソヴィエト哲学界の人格論に刺激を与え、旧世代のトゥガリノフは著作で人格論の発展に必要な様々な用語の定義付けを試みる等、学術的な人格論の基礎付けをした。その後人格論は 1966 年にはシンポジウムが開催される程にまで発展していった。

こうして、フルシチョフ期にソヴィエト社会が国外へ開放された結果、非マルクス主義の知識へのアクセスが容易となり、マルクス＝レーニン主義の空隙を他の知識体系によって補填することが可能となった。各世代のリベラルなインテリゲンツィヤは、党の意向に沿って「ヒューマニズム」理論系列の構築作業に加わるも、寧ろ、主に西洋哲学の伝統に基づいた普遍主義的なヒューマニズムを追求するようになったのである。